

流れ医師の流れ星

幻想の投影物

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人のありふれたポケモンドクターが伝説と出会ったお話。

進歩は大体活動報告に書いてあります

※本作はリハビリついでに習作として書き出した自己満足小説です。至らぬ点やご指摘、批評、感想等ありましたら是非ともドシドシ書いてご協力をお願いします。

目次

流れ星のクレーター	1
天秤の傾き	12
二律の半胎動	23
夜空と大地	35
旅の第二歩 ドクターとは何か	47
裏表のある世界	59
徒花揺れる先	72
事の顛末	83
嵐のような	95
寿に訪れた命	107
暗闇で光るガラス片	120
真実のイト	132
道征く者達	143
その心滾るままに 前	157
その心滾るままに 中	168
猛き闘争の果てに 後	181
支度は済ませた？	195
恐怖の渦中	205
標的の行く末	218
森の洋館 前	231
森の洋館 後	243
迅雷風烈！ ひみつの研究所	255
長耳と勇氣	268
伸ばした手の周りには	280

お前が選んだ	292
谷底に咲く	306
大口開けた闇の穴	317
彼と彼女の温度差	329
帳を捲る	342
熱冷めやらず	354
水底をたゆたう 前	365
水底をたゆたう 後	375
陰り明るい放牧の空	387
休息とは必須なもの	399
iは○○だから	410
君とともに	422
分岐点の手前で	431
休息?	439

流れ星のクレーター

ホウエン地方は自然豊かな土地である。

海との交流が盛んなムロタウン。機械を使わずに完成させたカナシダトンネル。降り積もる火山灰を利用して作られたビードロ。ツリーハウスばかりの町並みを持つヒマワキ。

これらはホウエンに住むものたちの宝であり、ポケモンたちの家であり、荒らされること無く共存するべきものである。少なくとも、ホウエンの住人は皆そう考えている。都市開発もあるだろう。確かに、その豊かな資源を搾取せずには居られないだろう。だからこそ、覚えるべき節度を彼らは大事にし、存続のために何をすべきかの研究をしている。

そして、その自然保護に動く者達の中に彼らが居る。

「ファウンス地質調査団」と呼ばれた彼らは、このホウエン地方随一の窪地であり、石塔が積み重なる神秘的な光景の広がる土地、——ファウンスを存続させるために立ち上がった者達である。

ファウンスは数年前、突如出現した正体不明の巨大な怪物によって荒らし尽くされた。石塔は崩れ落ち、自然は枯れ果てて、その一帯は赤茶色に変質した死んだ土地を晒してしまった。これを再生させるために立ち上がったある人物が団体を結成、そうして出来上がったうちの一つがこの地質調査団。このデータを研究者に渡し、死んだ土地を前のような気候に戻すための活動を続けている。

そんな彼らは屈強な男がメンバーとなっている。当然、地質調査とはいえファウンスはそれなり以上に厳しい土地だ。断崖絶壁をロープ一本で伝ったり、ポケモンの手を借りているとは言え巨大な未知の空洞を征くときもある。探検家のように厳しい土地を踏破する姿は勇ましく、彼らを知る子どもたちは調査団に憧れるものも多い。

しかし、しかしだ。今回語られるべきは彼らではなく、彼らの傍らにいる人物。

彼らの中で唯一白衣をまとい、巨大なバックパックを背負った青年。

ショートカットの青い髪、四角いメガネと三白眼。
相棒をキュウコンとする、彼が紡ぐ物語を、我々は知ることになる
のだ。

「よし、ここいらで今日はテントを張ろう。さあ皆、準備にとりかかるぞー！」

「「ういーっす」」

青年、ハマゴは今年で18になる少年だ。

彼は地質調査団である父親についてきただけの立場であり、厳密には調査団メンバーではない。そんな彼が何故、父親がいるとはいえこんな自然保護区に立ち入ることができているのか？ それには歴とした理由がある。

「ハマゴー！」

さっそく彼の仕事が終わってきたようだ。ハマゴに近づく一人の男性が声をかけた。

「おっちゃんか。今日はどうしたつつうんだ」

「ワリイが、こいつを頼む。俺をかばってキノガッサの胞子を浴びちまってるなあ」

そう言っ手渡されたのはモンスターボールだった。

ハマゴと呼ばれた青年はため息を吐きつつも、その目を更に鋭くして受け取ったボールの開閉スイッチを押す。すると、傷ついたポケモンがハマゴの目の前のシートに寝かされた。

「ヤルキモノか…オマエも懲りねえなあ」

まったく、と毒づいた様子を隠そうともしないハマゴ。ヤルキモノは面目ないと言わんばかりの渋面を見せるが、まるでいつもの事のようにハマゴは一蹴し、バックパックを漁り始めた。

「簡単な毒状態だな。モモンを使ってるがちよいと苦めの飲み薬だ。我慢して飲めよ」

仕方ないな、と言わんばかりの表情を隠そうともせず、取り出したのは薄いピンク色の粉末だった。それをヤルキモノの口に入れると、

横においてあったボトルを傾けてヤルキモノに飲み込ませる。毒で蝕まれていたヤルキモノは険しい表情を崩し、眉間の皺を少しずつほぐして行く。

これで終わりだと指を弾いて、彼はヤルキモノの主人に向き直った。

「これでよし、と」

「ヤルキモノ！ ああ…助かったよ」

「おっちゃんも毒消しくらいは常備してくれ。持ち物が厳しいのはわかるけどよお、こればかりは譲れねえ。早めに消してやんねえと瀕死になっちまうだろ。そこんところわかってんのか？ ああ？」

ハマゴの剣幕に気圧されて、面目ないとヤルキモノそっくりの渋面で謝ってみせる団員に、ハマゴは次が無いよう気をつけなど肩を叩いてやった。

「同じ症状で俺の前に来てみる。次はぶん殴ってやる」

「お、おまえ医者だろ？」

「ポケモン専門医だ。人間は管轄外だよバーカ」

以上の様子を見て分かる通り、彼はポケモン専門医……つまりはポケモンドクターとしての腕を持っている。だからこそ、この危険が潜む調査に付き合うことを許されている。

ポケモン医を目指したのは、こうした調査団など、危険な仕事をこなす父親の仕事の力になりたいと思ったが故、そして成人していなくとも医者免許は発行されるからというのが理由。手取り早く力になりたいと思っていたが、今となってはポケモンを治せることに誇りを持っているし、命を預かる仕事だからこそより一層頑張れる。道は辛かったが、こうした専門の薬を煎じる事も許可されるほどの腕を持った。

済まなそうにする調査団メンバーの謝罪に、呆れながらも次は無いと切り捨てる厳しい態度のハマゴだが、それは彼なりの励みでした。それをさぞ可笑しそうに彼の父親は笑って、そしてハマゴを褒める。それに少しだけ恥ずかしがりながらも、彼はさっさとテントの準備を進めると照れ隠し。温かな空気に包まれて、彼らは眠りにつこうとテン

トに入っていた。

これも、ハマゴが調査団メンバーになってからは珍しくはない光景だった。これからも、変わらない日々が続いて、いつかこの土地が復興した時にはハマゴも自分の拠点を構えて、独立したポケモンドクターとして活動する。そんな夢をかなえるつもりだ。

だけどそれは、あくまで夢に過ぎない。彼を異変へと導く見えない道標は、確かに動き始めている。その胎動は彼の予想を遥かに超えた形で、今まさに起こらんとしていた。

「……どうした?」

深夜、皆が寝静まった頃にハマゴの相棒であるキュウコンがハマゴを起こした。キュウコンは何も言わずに耳を立てて、とある方向に顔を向ける。その様子を訝しんで、ハマゴもまたそちらの方向に調査団の使っているソナーを起動させた。

だが、思ったよりも事態は深刻らしい。ハマゴは歯を食いしばって怒りを露わにしてみせる。ソナーには幾つもの波紋と光点が現れている。つまり、このファウンス特別保護区に侵入した——犯罪者集団だ。

ギリツ、と歯を噛んだハマゴはすぐさま顔を上げる。

キュウコンと向き合った彼は急ぎ行動を起こした。

「キュウコン、皆を起こしてきてくれ! 俺は先に行つて様子を見る」

怒りで眠気を吹き飛ばしたハマゴはいつもの道具を手に取りと一目散に走り出す。彼は医者としての側面を見せているときは冷静だが、普段は情に厚く、自身の感情を第一として動く人物であった。

腕につけたソナーの光点は近い。幸いにも、この辺りは過去の調査中に何度か訪れた場所だ。調査団専用の目印を頼りにしながら、後に続く父親たちの導になるように細工を施しつつ進んでいく。

そして彼は、フードやバイザーで顔を隠した連中が一段となって駆けまわっている目撃する。慌ただしい声と、響き渡る怒号。近づいた際の足音は驚き飛び立つ野生ポケモンたちの羽音で隠されたが、ハマゴの思っていた以上に侵入者の数は多かった。

(十、二十……やべえな、少なくとも四十人前後か。何が目的で忍び込んだ…？ いや、それよりもこれだけいるとなると、ちと厳しいか) 何かを探しているような集団は、しかし用心深いのか離ればなれになるようなことはなかった。探しものという点において非効率的是はあるが、彼らは犯罪者だ。犯罪者である以上、ある程度自己中心的であるだろうし、捕まるリスクは避けたい。そのためには一丸となつて行動し、いざとなればポケモンを囿にして一斉攻撃・一斉逃走という事も容易だろう。

ハマゴが息を殺して潜みつつも、彼らの会話が聞き取れる位置に移動する。そして白衣の内側から取り出したボイスレコーダーの集音先を向けると、イヤホンに彼らの会話が聞こえてきた。

「クソっ！ 取り逃がすとは何を考えているんだ!？」

「煩い！ 想像以上にアイツが抵抗しやがったから痛めつけただけだ!! 俺は悪く無いだろう!？」

「そんなのどうでもいいから早く探しましょうよ。グズグズしてる」と調査団の奴らが出張つて面倒になるじゃん。それに、一斉に攻撃したんだしそんな遠くにはいけないって」

「……やむを得ん。十人ほどで別れて周囲を探すぞ。調査団のテントは今のところ動きはないようだ。ガキが一人暗がりに行つたが、どうせシヨンベンだろう。見つけたら口封じにしてやればいい」

「オツケー。じゃあさっさと探しましょ」

どうやら、ハマゴの行動は既に監視されていたらしい。だが音声までは伝わっていないのが幸いか、とハマゴは胸をなでおろす。だが次の瞬間に響く「散開!」という号令とともに足音が近づいてきたのを感じて、彼は茂みの中に身を隠した。

「……ん？」

「どうした、何かいたのか？」

「ああいや……」

手に持ったライトがハマゴのいる辺りを映したが、そこに彼の姿はない。

「気のせいだ。ただのチルツトだった」

「チツ、まあいいや。さっさと行くぞ」

十数人の人影はそれを最後にどこかへ行ったが、まだその気配は近い。

これだけの大人数ともなると流石に初めてだが、この区域にポケモン密漁のために入ってきた犯罪者は珍しくはない。すぐさま通信機を取り出したハマゴは、テントの方で待機している父親へと連絡した。

「……親父、聞こえるか？」

《ああ、どうやら見張られているらしいな……》

草のさざめき程度の小声だが、ハマゴが独断専行するのも珍しくはない。キュウコンに起こされ、事態を把握した調査団メンバーはこの事態に既に取り掛かっているようだった。

「敵の数は四十人前後だった。それに、そっちのテントの様子も見られている。そっちはどんな状況だ？」

《テントの外の様子は分らんが、いつでも動けるぞ》

「奴らはいま十人程度で手分けしてやがる。だが、ポチエナやグラエナ。ドンメルが主流だ。親父のポケモンなら蹴散らせると思うが」

《わかってるさ。水遊びと泥遊びをしてから一気に畳み掛ける。

密猟者共はどっちに行ったかわかるか？》

「おおよその散らばった方向はそっちに……転送した。俺はあいつらが襲っていたポケモンを保護する。後は頼んだ」

《荒事はこっちの仕事だな。了解した》

「……さて」

通信を切ったハマゴ。彼は周囲に目を配ると、先程まで密猟者と思しき集団が屯していた当たりに移動を始めた。抜き足差し足忍び足。しつかりと音を立てずに辿り着いた彼は、傷つけられたポケモンの捜索を開始。とはいっても、石塔と茂み、隠れるところはどこにでもある。多少広場になっているとはいえ、そんなポケモンが隠れるところなんてこの辺りにあっただろうか？

しかし観察を続けると、側の大樹には石塔の隙間とはまた違う、木のウロがあることに気がついた。茂みや枝が交差しているが、よく見

れば枝が折られてカモフラージュになっているだけ。近くで見れば粗末だが、こうも暗いと立派な隠蔽ができています。

「周囲には……いないな」

あれだけの人数だ。囲い込める距離から探して、中心に追い詰めるつもりでもあったのだろうか。どちらにせよ、ソナーを見る限り光点は先程よりも激しい波紋を放っている。つまり、父親を含めた調査団メンバーとバトルが始まったと見るべきだろう。

時間的にまだ余裕があるとはいえ、しびれを切らした者がこっちに来ないとも限らない。そう思ったハマゴは木のウコの枝を払って中を覗き込み——絶句する。

「……お、い。何だこのポケモン……？」

このファウンスに住むポケモン全てを知っているとは言わない。だが、ホウエン地方でこんなポケモンは見たことがなかった。そして、彼はドクターであるからこそ、様々なポケモンを把握しつつも、このポケモンだけは知らなかった。

それもそのはず。彼が見つけたポケモンは、頭がまるで星形の帽子のようになった、短冊と羽衣にも見える部位を持つポケモン——ジラーチであったからだ。

ジラーチ。千年に一度だけ目覚めると言われたポケモン。それは彗星がやってくると同時に、その彗星の気配に充てられて目を覚ます。だが今の夜空には彗星は無く、数年前にジラーチは目覚め、とんでもない騒動の爪あとを残してまた眠りについた。尤も、ハマゴはその真実を知らないが。

「クソツタレ共が……！」

ともかくにも、これが幻だとか、珍しいポケモンであることは間違いない。そして何らかの価値があるからこそ、あの大量の人数でジラーチを襲撃したのだろう。

そう思うと、怒りが余計に体の中を巡り巡って爆発しそうになる。グツと握りしめた手のひらに、爪が食い込んで痛みを訴えかけてくる。

だが、怒りに囚われている暇はない。すぐさま彼の顔はドクターと

したの冷静な表情に切り替わった。想像以上に目の前のポケモンが死にかけていたのだ。

「ヤベエな。高熱と衰弱……それに、心音が早い？ このポケモンが強い力を持っているとすれば、エネルギーの暴走か……？ いや、安全な場所に移動しながら外傷だけでも治しておかねえと」

いざとなれば決断は早い。すぐさまジラーチを抱き抱えたハマゴは、持ち歩いていた布巾をボトルの水に浸すと、それで包みながらジラーチの外傷がある場所を丁寧に拭きとっていった。当然、走りながらテントまで戻るのも忘れない。

（一斉攻撃ってこういうことかよ、クソっ。まあいい、俺は俺の仕事を
するだけだ）

テントの近くまで戻つてくると、臭いを嗅ぎつけたのか、キュウコンが出迎えてくれていた。何も言わずに左手でジラーチを抱え直して、キュウコンの首に捕まったハマゴは走りだしたキュウコンの尻尾に抑えられながらも、彼の背中にまたがった。

そしてキュウコンは急加速。バトルを繰り広げているテントの襲撃者たちを飛び越える。決してジラーチを取り落とすこと無く、それでいて優しく抱きかかえた彼はふわりとした浮遊感を味わった。

直後、ズダンツ、と着地しつつも流星はキュウコン。完全に搭乗者への負担をなくしてから、すつと地面に降ろしてみせる。ハマゴはキュウコンに次の指示を出すと、ヤルキモノを寝かせた先ほどのシートの上にジラーチを寝かせた。

「戻ったか！ って、何だそのポケモン!？」

「んなことより状況報告!」

「既に二人は捕まえたが、他の奴らは逃げ出そうとしてるな。ポケモンに戦わせて置き去りだ」

「ああ、だからトレーナーが居なかつたのか……舐め腐りやがつて」
そうは言いつつも、ジラーチの汚れをを綺麗に拭き取るハマゴ。手を止めないのは流星といったところか。

キュウコンも、作ったお湯を「じんつうりき」で上手く運び、ハマゴの隣に置く。ハマゴの父親も、これから彼のする治療のためにハマ

ゴがいつも背負っている巨大なバックパックの口を開け、中から必要なアイテムを取り出し始めていた。

「何にしてもまずは体力回復からだな…。キユウコン！ オボンのみ絞っといてくれ！ 親父もありがとよ、後はあいつらの方に向かってくれ」

「分かった。しくじるなよ」

「つたりめーだ馬鹿野郎！」

三白眼を更に鋭くしながら、テキパキと彼の施す治療は続けられていく。

ある程度の処置が終わる頃には、キユウコンによってオボンから抽出されたエキスが、彼の手によって回復薬に昇華する。まだ実の果物臭さが残る急造の薬液をジラーチの全身に塗りたくると、特に傷が酷かった部位に薬液を浸した包帯を巻く。包帯そのものにも何らかの役割があるのか、ほんのりと鼻を突く薬品臭さがあった。

「……か…？ いや、こうだな」

丁寧な手つきでジラーチの態勢を整える。未だ目を覚まさないジラーチの気道が確保できるよう、観察を続けながら適切であろう姿勢にして寝かしつけた。荒い息は収まっているようだが、まだ油断は出来ない。

初めて見るポケモンだからこそ、より一層気を引き締める必要がある。鋭くなった彼の三白眼は、まだ緩まっていなかった。

「キユウコン」

呼ばれたキユウコンは、薬品や果汁の匂いもキツイだろうに、嫌な顔をせずにジラーチに寄り添った。炎タイプのポケモンが得意とする、体を温めるための指示だ。

ここまでで、人間とはまったく違う処置だろう。しかし、とにかくポケモン相手に必要なのはポケモン自身の活力を無理やりにも取り戻すこと。そうすれば、強靱な体を持つ彼らは、自己治療によってある程度の症状なら勝手に直してしまう。今回はそのための治療だった。

分かりやすいように言えば、我々で言うところのHPを全快にす

る。ドクターはその後、状態異常を何らかの手段を用いて治す。あとはポケモン自身の活力が全てを元に戻してくれる。我々が知るゲームと違うのは、それでも治らない場合にドクターとして専門の知識を用いて全力を尽くすところだろうか。

もつとも、今回はあまり時間も知識も無かった。いわゆる瀕死の状態から2日も放置すればポケモンは死んでしまう。だから、ポケモンバトルではそこまでいかないよう、「戦闘不能」のラインを審判が見極める。

今回は瀕死よりも更に酷い状態だった。だが、ジラーチを知っている彼ら犯罪者にしてみればその能力を發揮してもらえれば、あとはジラーチが死んでいようが生きていようが関係ないのだろう。

加えて初めて見るポケモン。医者としての知識を総動員させても、ジラーチというポケモンを彼が知っているわけもない。これまでに施した処置が果たして本当に効果があるものだったのだろうか。

ハマゴは、唇を噛んで難しげな表情を作る。

外の騒動も治まってきたのだろう。彼の父親がいつもより苛立っているようなハマゴに話しかけてきた。

「どうだ？」

「……わからねえよ。ここまで酷いのは初めて診た。それに、こいつはこいつ自身のパワーが内側から苦しめてたのもある。見たところ、早朝あたりに山場が来るかもな」

「なんてこった」

頭に手を当て、ハマゴの父親は驚いてみせる。

ただ、包帯やガーゼに包まれた痛々しいザマのジラーチを見ればそんな行動を取ってもおかしくはない。

「とにかく、こいつらを引き渡すのもある。調査は打ち切ってフェンに戻るぞ、ハマゴ」

「ああ……」

最善を尽くしたつもりではあるが、ハマゴにとっては初めての経験。ここまで「死にかけた」ポケモンを相手に、一旦息が落ち着いた程度の治療がどれほど効果があるのかもわからない。本当なら絶対

安静にするべきだろうが、今の環境で最善の治療を施したのだ。ぶり返した時、何も出来ずに死なせてしまう可能性のほうが高い。

ドクターとしての側面では久しく覚えなかった焦りという感情。それがハマゴの胸中を巡り始める。嫌な汗が垂れ落ちるのも無視して、彼は戻ってきた調査団のメンバーに呼びかけた。

「一足先にポケモンセンターに運ぶ。今回のメンバーにテレポート使える奴はいるか？」

「ハマゴさん、ウチのケーシイなら飛ばせます」

名乗りを上げたのは1週間前に入団したばかりの新人。

だが、ハマゴにとっては藁にもすがる思いだ。入念な質問を浴びせかけていく。

「力量は？ 転移後が荒っぽいとかだつたら張り倒すぞ」

「ご安心を！ ブレずバツチリ。子供一人とポケモン2体なら大丈夫です。そのために鍛えて入団したんですから！」

「そうか……頼む」

シュンツ、と空間を切り裂く音がして、彼らの姿は調査団の前から消えた。

そうしてハマゴたちは、ジラーチを連れて一足先にフエンタウンのポケモンセンターにたどり着いた。そこからはトントントン拍子に話が進み、センターに備え付けられた最新の医療機器によってジラーチの状態が安静のまま解明されていく。

とはいえ、未知の部分が多い。解析しても他のポケモンのデータと照らし合わせるしかない現状に、頭を悩ませながらもハマゴはジョーイさんの手を借りつつもジラーチのデータを取っていった。

そうして夜が明ける頃、ハマゴの予想通りの事態が起こる。

ジラーチの容体が急変したのだ。

天秤の傾き

「……なんでだ」

ダンッ、と机に拳を振り下ろす。衝撃で跳ねたペンが転がった。

「クソツタレ、何が起きてやがる」

「ハマゴさん落ち着いてくださいー！」

「落ち着いてる。だから今必死に考えてるんだよ……！」

ジョーイに諫められながらも、ハマゴは視線を動かした。

その先にあるのは、苦しみうめき声を漏らすジラーチの姿。ハマゴの想像した以上に、ジラーチの中に渦巻くパワーはジラーチ自身を苦しめているのである。医療というよりも、そのポケモンの特異性が働いた現象に、今のところポケモンセンター側は為す術を全て失っているのが現状であった。

爪を噛んで、怒りと焦りを紛らわす。握りしめたバインダーが軋みを上げているのは多めに見るべきか。

ハマゴは考える。

身体的に問題はないのだ。既に怪我らしきものはハマゴの処置で癒え、最新機器の検査結果では暴走しているパワー以外は全て正常を示している。だが、何故かは知らないが攻撃のためでもなければ、特技のためでもない。よくわからないパワーがジラーチの中から外に出ようとして、しかし行き場を失ってジラーチの中をぐるぐると循環している。

そしてその総量は徐々に増えている。つまり、このまま放っておけばジラーチは辺り一帯を巻き込んで爆発。ジラーチ自身が死ぬのは当たり前として、ポケモンセンターの周辺にも被害が及ぶだろう。チリひとつ残さず消し飛ぶという被害が。

「ジラーチ、たしかにそう言ったな」

睨みつけるような気迫に気圧されつつも、ジョーイもよどみなく答えた。

「は、はい。実際に目にしたことがあるバトラーさんも確かにそうだと思います」

バトラー。話に出てきたこの人物は、数年前にファウンスで騒動を起こした張本人である。そして、地質調査団を結成した人物でもある。調査団の顔役としてリーダーが会っているのは知っていたが、ハマゴ自身は会ったことはなく、騒動の中心人物だったことも知らない。

だが、今ハマゴが今必要なのはバトラーの真実ではなく、そこから導き出された「ジラーチ」というポケモンの治療法だった。エネルギーを貯めこんで爆発するポケモンといえば、ドガースを初めとした「だいはくはつ」「じばく」を覚えるポケモンがいるが、それとはまた別だというのだから手の施しようがない。

この場へ実際にバトラーを呼ぼうとしたが、彼は多忙の身。通信を取ろうにも、よりによって今日はバトラーの罪にも関わる、絶対に外せない予定がちょうどこの時間にあるため、呼び出して伺うことも出来ない。そして何より、バトラー自身からジラーチについてハウエンでは広めるなど釘を差された。

だったらどうする？

ハマゴは考えながら、ジラーチの特徴について白紙の紙を埋めていく。

ながればし、彗星。ファウンス、千年に一度。カリカリとペンの走る音、計器の放つ電子音。そして別のポケモンが運び込まれたため、そちらへ向かったジョーイの慌ただしく走り回る音。

室内がシン、と静まった瞬間、ハマゴは頭のなかで浮かんだ言葉をつなげていった。

(ジラーチ、彗星と共に現れて千年の周期で目覚めを繰り返すポケモン。星……まさか、くだらねえ、なんて言ってられねえな。悔しいが、試すしかねえ)

ここで少しばかり話を変えよう。ポケモンに関わるアイテムというのは、案外わかりやすい形で存在している。例えば、サイドンというポケモンがいる。このポケモンは進化するために「プロテクター」という、人の手で造られたアイテムを必要とし、進化したドサイドンはプロテクターを取り込み、体に生やした生命として誕生する。

「ジョーイさん、開けてくれ」

行動に移すしかない。

自爆寸前のジラーチをちらりと見たハマゴは、命をかける覚悟で頼み込んだ。

「なにか思いついたんですか!?!」

「ダメでもともとだ! 気が狂ったとでも言えればいいさ。ジョーイさん、先に避難を」

流石に自分の命には代えられないのか、それとも最後の望みをハマゴに託したのか、ジョーイが他の人間やポケモンを避難させながら、しっかりとした歩調でセンターから離れていく姿を見届けた。

彼は額から流れ落ちる汗を無視してバックパックを漁り始め、目的であったとあるアイテムを取り出した。指でつまめるほどの小さなそれに希望を賭ける。自分の馬鹿らしさと、何より賭けまがいという自分の信条を無視した行為に苛立ちがあるが、感情なんかにかまっていない暇はない。

治療室に入った彼は、今にもはちきれんとする光を放つジラーチの傍に立つと、まばゆいばかりに自爆の一步手前のジラーチを見据えた。

「こいつが命賭けてんだ! だったら俺も賭けてやろうじゃねえか!!」

バツ、とその右手に握りしめたアイテムをジラーチの胸元に掲げる。

目が潰れそうにもなる光芒の中、それでも目を離さないハマゴは確かに見た。ジラーチを包む光が、光量を弱めた瞬間を。

(……イケるっ!)

ハマゴの中を占める気持ちは、安堵が半分、不甲斐なさがそれ以上。だが、これで抑えることが可能だと確信したハマゴは「それ」をジラーチの隣に置くと、またバックパックの元に戻った。そして「それ」をありったけかき集めると、その全てをジラーチの隣に積み上げていった。

十数個はあるだろうか。銀色に少しだけきらめいた綺麗な結晶。

通称、「すいせいのかげら」と呼ばれているそれは、その手のマニアには高く買い取られるだけの、装飾以外で用途はない地球外の鉱石の欠片だ。

だが、ジラーチにとっては意味のある物であった。ファウンスに落ちているこの欠片は、ジラーチが目覚めるための導となり、7日間だけ夜空に現れる「千年彗星」の欠片だ。なぜ目覚めたのかは分からない。そして、なぜこの欠片で落ち着いたのかも詳しくはわかっていない。

それでも、今救うことができている。ならば現状を維持して全快まで持つていく事が必要だ。ハマゴはそう判断して、外の人間たちへと連絡を繋ぎながらに思う。忙しくなるだろう。だがやりがいがある。何より全身全霊を掛けるこの緊張感は嫌いじゃない、と。胸のうちに抱いた想いのままに彼は奔走し始めた。

「ハマゴさん、起きてください」

「……ん、あ？」

翌日、ハマゴはポケモンセンターの机の上で目を覚ました。

ジラーチの爆発騒ぎが収まってからは、すぐさまハマゴはフエンの職人たちに頼んで「すいせいのかげら」をネックレス状にしてもらうよう依頼を入れる。大きさやカットの美しさよりも、素早さと削る量の少なさを求められたために、職人にとって不満はあったようだが、ポケモンの命がかかっていると真剣に応じてくれた。

そこからはジラーチへ彗星のネックレスを着用させつつも、また元気になるように体内で傷ついてしまったところがないかの検査、そして元気になれるようファウンスの薬草を主にした原始的な治療を施した。そしてこれらは功をなし、翌日にでもジラーチは元気を取り戻すだろうとの診断結果がでた。

これら全てを終えた頃にはどっぷりと夜は漬かっっていて、ジョーイさんに交代を頼みながらもハマゴは意識を手放していたというわけである。

「ジラーチちゃんの中で渦巻いていたパワーですが、落ち着いていま

す。一度だけネックレスを離してみました。一時的なものだったようですね」

その時の映像をジョーイさんは用意していたらしい。

確かに、その中では彗星のネックレスを外してもエネルギー暴発の兆候が無いジラーチの安らかな寝顔が映っていた。

「これに頼らなくても大丈夫です。お疲れ様でした、ハマゴさん」

「……はあっ！ ったく、驚かせやがってこんにやろ」

安らかに眠りにつくジラーチを見て、ハマゴはここで初めて嬉しそうな笑みを浮かべてみせた。中々見られない貴重な彼の笑顔は凶悪なものだったのか、ジョーイさんの顔は引きつっていたが。

同時に、彼が心の裏側で思ったのは昨夜の犯罪者集団のことだ。確か、調査団が捕らえたのは二人と聞いていたが、まあその裁定はあちらで決めることだ。ジラーチを傷つけたという事に強い怒りはあるが、それを直接的にぶつけに行くほど子供ではない。大人しく法に裁かれやがれ、ザマーミロと彼は嗤ってみせた。

そんなハマゴの様子に乾いた笑みを浮かべつつも、ジョーイは言葉を紡ぎ始めた。

「それで、ジラーチはどうするんですか？」

「本当ならファウンスに帰してやるのが一番だが……無理だろうな」

ジラーチというポケモンについて、空いた時間を使って調べればすぐに解った。ジラーチは願い事を叶えることの出来るポケモンだ。その程度の差がどれほどか、残念ながら千年語り継がれた資料に詳細は無かったが、それだけのネームバリューを持つ伝説・幻のポケモンは普通の人間は愚か、ハンターや密猟者にとつては金のなる木。狙わない道理はない。

ファウンスに戻したところで、また密猟者が……いや、もつと組織的な犯行が行われるのは火を見るより明らか。今度こそ、使い捨てられたうえで殺されるか剥製、生き殺しに違いない。見た目ほどヤワじやないのがポケモンの常識とはいえ、既にあれだけの暴行を受けているのだ。

さて、どうするべきだろうか？ 経験は浅いとはいえ、ドクターと

しての知識はあれどそうした伝説のポケモンの取り扱いについてはわかったもんじやない。ホウエン地方ではそうしたポケモンを所持することを禁じられては居ないが、保護してくれる組織もない。

ハマゴが引き取って眠るまで面倒を見るといふ選択肢も浮かぶ。そんな時、センターの自動ドアをくぐり抜けてきた人物がいた。

「そのことに関して、一ついいかな？」

「……あんたは？」

紫の髪を短くまとめた、白スーツのマジシャンといった風貌の男だった。

「バトラーさん、いらしてたんですね」

「バトラー、あんたが？」

無礼なものいいに苦笑しつつも、彼は演劇のように両手を広げて言った。

「そう、私がバトラーだ。ジラーチが再び現れたと聞いて急いで駆けつけたのだが、ジラーチはもう、大丈夫なのか？」

「何とかな……あんたがこいつの事知っててくれて良かった」

その男、バトラーは苦しい様子もなく、すやすやと眠るジラーチを見て懐かしんでいるようだった。そして、ハマゴも彼のことを資料で調べているうちに数年前のファウンス事件の当事者だったということを知っていた。

「つもる話もあるようですね。私は退席していますから、後はよろしくお願いしますね。ハマゴさん」

「わかった。ジョーイさんもありがたうよ」

ジョーイさんが部屋を出たのを見送ってハマゴは考えこむ。

元犯罪者。私利私欲のために、同じようにジラーチというポケモンを傷つけたことのある人物。そんなことは抜きにして、ハマゴとしては聞きたいこともあった。だから、実際に会えた今、バトラーの表情を見た上で思う。それは、彼なりの問いかけだった。

「なあ、バトラーさんよ。こいつはあんたの知ってるジラーチか？」

純粹な疑問というよりは、何かを含んだ物言い。

そんな不思議な感覚に、バトラーは首を傾げながらも尋ね返す。

「…？ どうしてそんなことを」

「たったひとつの言葉と表情。」

「そこから読み取った彼は息をついた。」

「いや、違ってみてえだな」

「…そうだ、確かに違う。私の見たジラーチは、あの緑の短冊に文字は書かれていなかった。何より、私の覚えているジラーチより少しだけ羽衣の部分が長い。ガラス越しでも分かるくらいにはね」

「ポケモンの個体差が分かるほどに、バトラーがジラーチを見ていたのだろう。妄執からなのか、それとも罪悪感からなのか、彼の心にこびりついたジラーチという存在に心を惹かれながらも、ハマゴは言葉を続けた。」

「もしも、アンタの会ったことのあるジラーチなら…」

「なんだい？」

「謝って欲しかった。そんだけだよ」

「そう、か…そうだね」

「出来ることなら、きちんとした形で謝罪をあの少年にも言わなければならぬ。小声で呟いたその言葉に、昔のことだろうとハマゴが聞き耳を立てていれば、バトラーが真剣な表情で見ていることに気がついた。」

「ああ、そういえば何か言いたかったか」

「ああ。このジラーチは君が引き取ったほうがいいよ。絶対にね」

「ほお？ やっぱそうなるか」

「返ってきたバトラーの言葉に、ハマゴはやはりと納得を示してみせた。危険と隣合わせの調査団のメンバーといっしょにする訳にもいかないし、このフエンに預ければ、今度はここが犯罪者たちに狙われる。あの四十人あまりの集団は過激なのは身にしみてわかっている。それに故郷を荒らされたくはない。」

「だったら、随分と前にしたためていた案を現実にする時が来たのかもしれない。苦笑交じりに、彼は返した。」

「そうかよ、まあ俺も悔しかったんだ。旅に出て、腕を更に磨いてやるとするか」

「悔しかった？」

「ああ。すいせいのかけら。正直あれは賭けだった」

だからこそだ、と彼は語る。

「賭けなんぞに頼りたくはねえ。俺は、俺自身の実力で確実に治してやりてえ。俺の知識で危険なく治療してやりてえんだ。だからよ、こんな未熟さでの後悔は最後に出来るよう、伝説のポケモンだって俺の腕一つで治してやれるようになってみせる」

拳を突き上げて、右腕の力こぶをパツと左手で抑えてみせた。

「大きく出たね。だけど、いい夢だ。ジラーチを共にすればその道はさらに険しくなるだろうけど、覚悟はあるのかな？」

試すように言ったバトラーに、ハツと笑い返してみせるハマゴ。彼はそうだな、と曖昧な呟きで返しつつ、待ち受ける未来にいくらでも挑戦してやる。そんな顔をしていた。

「過去、ファウンスをそちらさんがぶっ壊したよ。でもな、遠回りにみれば俺がこの道を選んだのはバトラーさん、あんたのおかげだ。数年前、この地質調査団を立ち上げたから、親父を助けたいと思って育った今の俺がいる。そして誰でもないあんた自身に言われた。だったら」

バツと顔の前に持ってきた拳をもう片方の手のひらに打ち付ける。

ドクターというよりは喧嘩師のように、彼は宣言した。

「これこそが俺の進むべき道だ。そう受け取ったって良いだろう？」

「そうだね、私も負けないように必ずファウンスの自然を元に戻すでしょうか」

男二人は、そのまま自然と差し出した手を握り合った。

その時だ。ガラスの向こうで寝かされていたジラーチがピクリと動いて、その目を瞬かせる。起き上がって、自分の体についていたはずの傷が綺麗さっぱり無くなっている様子を見て驚いているようだ。「目を覚ましたか…ッ」

すまん、とことわってからバトラーの前を通り過ぎた彼はジラーチの元に急行。とはいえ、患者を驚かせるほどでもない。壊れ物を扱うかのようにジラーチに近づいた彼は、しきりに大丈夫か？ と呼びか

けてジラーチ自身に異常が無いかを確認する。

そして機械の情報も読み取った結果、すっかり元気になってみせたジラーチにほっとした息を吐いた。心の底から安堵した様子のハマゴが面白かったのか、バトラーは口元に手を当てて笑っていた。

「全快か。良かった」

「ああ、だけどこれからする話にアイツが納得するかどうか……せめてあと5日。あいつが眠るであろう日々を守らないとな」

「そうだね、これでもジラーチについてはそれなりに研究しているし、データもある。もしものときのために連絡先を交換しておかないかい?」

「ソイツはぜひともお願いしたいね、ポケナビでいいか」

番号の交換をしたハマゴとバトラーは、まるで密約を交わす共犯者のようである。

「それから……」

キョロキョロと周囲を見回したバトラーは、誰の目も耳も立てられていないことを確認し始めた。訝しげに思ったハマゴが行動に移る前に、言っておきたいことがある、と真剣な表情であるものを差し出された。

それは腕章。だがハウエンに住む人間にとって忘れられないマークが記されている。

「ジラーチを襲った連中は、この腕章をつけていたんだ」

目を見開いて息を呑む。ここでハマゴは取り乱すように言葉を吐いた。

「これは……おい、これってマグマ団のじゃねえか!」

「しーっ。…壊滅したはずだったけど、どうやら残党が活動していたらしい。ジラーチを使って何をする気かは知らないが、ハウエン地方で旅するのは危険が残る。だから、君は別の地方の定期船に乗ったほうが良い。最悪、航行中にジラーチが眠りについたら往復する形になるけど、行き先が不明なら奴らも行動を起こせないだろうからね」

「……忠告受け取っとく。でもなんで人の目を気にしたんだ?」

犯罪者っぽいのは自覚している。と、元犯罪者なために妙な説得力

のある返事に続けてバトラーは言う。

「この会話が聞かれていけば、定期船の港で数日間は見張りが付くかもしれない。そうなれば追いつめられる可能性が高いからね。数の力は侮れないよ」

「それもそうか、厄介な奴らだ。全くよ」

言いたいことはこれが全てだと最後まで注意を払って、バトラーは身を翻す。彼の予定も詰まっているのだろう、いつまでも会話に興じられるわけではないらしい。

「気をつけてくれ」

「ああ」

お互いにやるべきことがある。それ故に短い言葉の応酬だったが、彼らにとっては十分だ。それつきり、バトラーはポケモンセンターを出て迎えの車に乗って離れていった。入れ替わりにやってきたジョーイさんにジラーチの事を報告したハマゴは、後遺症や異常がまだ現れないか再検査のためにジラーチに説明を始める。

検査が続く中、巨悪が渦巻く問題を抱えている事に思いを馳せる。だが、それもまた上等だとハマゴは誓ってみせた。必ず、ジラーチを守りぬいてやるのだと。

「オダマキ博士、先日はありがとうございました」

「こちらとしても実りある時間だった。いやあ、おかげで研究が捗るよ」

ジラーチが目覚めて4日目の昼。ポケモン関係者や多くの私服警官や護衛が集まる中、ハマゴはオダマキ博士との握手を交わしていた。

ハマゴの傍らにはキュウコンが控えており、ボールの中に収められたジラーチが腰にいる。モンスターボールでの捕獲程度でジラーチの眠りが妨げられることはないだろうが、いざ抱えて逃げるよりも、転送や持ち運びの便利なボールに入れたほうが良いとの判断でこうなっていた。

「向こうについたらシロナという人物が出迎えてくれる。航行中、無

事に眠りについたら彼女に渡してくれ。それから自由の旅をする
といい。君が立派なドクターになれることを祈らせてもらおうよ」

オダマキ博士に礼を言った彼は、最後にひとしきり握手をした後客
船に乗り込んだ。タラップが回収され、ハマゴたちを乗せた船はシン
オウ地方への航路を取り始める。港で手を振る一団の中で、ひときわ
体格の大きな父親へ小さく右手を上げて返したハマゴ。

早々に部屋に戻った彼は、これから待ち受ける未知の世界へと期待
を膨らませながらも、そのボールに収まった大いなる運命との船出を
祝うのであった。

二律の半胎動

「ん、3と6のツーペア」

船旅は実に快適なものだった。マグマ団残党が現れることもなく、こうしてハマゴがポーカーに興じられるくらいには平和が保たれている。というのも、護衛としてついてきてくれていている3人のベテラントレーナーがいるおかげもあるだろう。

「こつちはハートのフラッシュユダ」

「また負けかよ?! くっそ、もってけドロボー!」

しかしこのハマゴ医師、異様なまでに運が無い。ツーペアですら揃えるのも稀であり、今のところ同じく定期船に乗っている暇人相手に、100円だけ賭けた小遣い程度のポーカー勝負を仕掛けているが全て負け越している。

むしろ、幸運を他人に渡しているのだろうか。ルールをよく知らない子供相手が5枚全部を入れ替えた時も、相手が3カードでハマゴはノーペア。冗談だろうと左頬を引きつらせながら100円を小さな掌に渡した時もあった。

「店じまいだ終わり終わりっ! これ以上は財布がすっからかんなつちまわあ」

「何なら寄付してくれても良いんだぜ?」

「船乗りのあんちゃんよお、そりゃキツイぜ」

ガツハツハ、と豪快に笑って背中を叩く船乗り。

甘んじて受け入れるハマゴはとことん運のない自分に打ちひしがれていた。

そんな何気ない日々が続いて数日。

今日の夜、ジラーチが眠りにつく最後の日になるだろう。だからこそ、危険がないとわかったうえでジラーチには船の外から見られない範囲なら自由に動いていいとの許可を出してある。

その際、船長に言われて一緒にとったキュウコン・ハマゴ・ジラーチの順に並んで撮った写真がある。キュウコンはいつものすまし顔、ハマゴは三白眼とにやけた口元の悪人面、ジラーチは彗星のネックレ

スを両手で触りながら、満面の笑みを浮かべている。三者三様の個性があふれる楽しそうな集合写真だ。

(悪くねえな、こういうのもよ)

それを見つめてクハッと笑ったハマゴは、スリーブに入れた写真を白衣の内側に仕舞った。口も悪いし人相も悪い。だが、彼はこう思った思い出何かを大切に作るタイプだった。

「なあジラーチ。バトラーが会った方は喋るんだって？ 出来ることなら色々聞いてみたかったもんだが」

どうしたの？ 首を傾げたジラーチ。屈託のない笑みを浮かべ、撫でて欲しいと擦り寄るポケモンの姿を見て、ハマゴはこの無邪気な生き物に疑問を投げかけるのも馬鹿らしくなってしまう。

よしよしよし、と撫でる中にフツと笑みが溢れる。

「ま、いいや」

その隣ではキュウコンが窓の外を眺めて黄昏れていた。ハマゴの仕事を手伝うとき以外は何を考えているのかよくわからないのがこのキュウコンだった。視線の先は海よりも、先を見ているようにも見える。

彼女とはロコンの頃からの付き合いで、ハマゴは何となくその内面を察することはできる。しかしそれでもキュウコンはいざという時に最高のパートナーであるということ以外、あまり内面を外に出そうとはしない性格だった。

ある意味でいつもどおり。そんな相棒の様子から目を離して、また自由に自室を飛び回るジラーチを見ていると少しばかり別れが名残惜しくなる。

ポケモンドクターをやっていたら、一期一会というのも多い。ファウンスの奥地で傷ついていたチルタリス。歳なのか、自分の目の前で子孫の様子を見守りながら息を引き取ったフライゴン。そして数年前、ポケモンドクターの道を歩もうと言うきっかけになったジグザグマの子供。

あの頃に出会ったポケモンたちに思いを馳せていけば、ジラーチとの別れもそういうものなんだろうと踏ん切りが付く。いつまでも

駄々をこねていれば誰かが解決してくれる、なんて歳はとうの昔に去ったのだ。

「初めての海はどうだ？ 楽しかったか？」

彼の問いかけに、もちろんだとジラーチは頷いてみせる。

迷いのない瞳の奥では何を考えているのだろうか。千年の眠りとは、初めて見る景色とはどういった思いなのだろうか。好奇心？ それとも寂しさ？ スケールの違いすぎる相手だが、最後までいいは楽しく笑って見送ってやりたいものだ。

日は紅く染まり、水平線の向こう側に半円が溶け込んでいく。トツプリと沈むまばゆい光に長い影を伸ばして、ハマゴは立ち上がった。「キユウコン、お湯作つとけ。戻った時にココアでも振る舞うからよ」了解だ、と鳴いて見せた相棒を置いてハマゴは二匹のポケモンを残して護衛にポケモン達を頼む。入れ替わりに護衛の一人とすれ違った彼は、船頭へと移動して手すりに両手を置く。

ほとんどなし崩しに旅に出してしまった感があるが、ドクターがいなくなつた後の調査団は何をしているのだろうか？ そして両親はどういう気持で送り出してきたんだろうか？ 胸のうちに過ぎる景色は、故郷で暮らしていた思い出を次々と浮かび上がらせてくる。

「……ガラにもなくホームシックか。俺もダメセエなあ」

白衣を棚引かせて、沈む夕日を見届ける。

ハマゴの瞳は潤み、目元はいつもように張り詰めていない。自分自身で気づくことはなかったが、こうして離れてみると実感したのだろう。既にほぼ自立して暮らせるような生活を送っていたとはいえ、親しい人たち、馴染み深い土地から離れる感情があふれだす。

今のうちだけだから。そうしてハマゴは、海のしよっぱさに貢献した。

「……んんん？」

ぐねりと90度近く頭をひねるハマゴ。

「あー、んん？ おいおいおいおい、こりやどういうこつた」

いつもの渋面に、余計に眉間の皺が増えた。

心底から信じられないといったように絞り出した声は、空っぽでわざとらしいセリフばかり。ハマゴの飄々としたいつもの態度からは感じられない、素直な驚愕に染められていることが分かる。

彼の視線の先。そこにはふよふよと浮かび、羽衣を振りながらハマゴのジロジロした視線にあたふたするジラーチの姿があるのだから。「……」

無言で窓の外を見る。日が昇りはじめた早朝。つまりは千年の眠りについていなければならぬはずの時間帯だった。

ジラーチが目覚めてから「8日目」の朝が今まさに訪れようとしている。これは、一体どういうことなのか？ 彗星のネックレスを一度取っ払ってみた時もあったが、ジラーチは眠る様子を見せなかった。そよりもネックレスを名残惜しそうに抱きしめていたからすぐに返してやったが、それはまあ良いだろう。

護衛の人たちに顔を向けても、焦ったようにブンブンと頭を横にふるばかり。当然ながら彼らがこんな特殊な例を知るわけもない。

しゃーない、と頭をガシガシと掻きむしったハマゴ。彼はポケナビを取り出してすぐさま連絡帳を開き、そこにある番号をタップする。

《も——》

「あいつ起きたまま何だがどうなってるんだ？ もう168時間は当たり前に過ぎてるんだが一向に眠る様子がねえぞ!？」

急ぎバトラーに連絡を取ったハマゴは、何コールかして出たバトラーがもしもしと尋ねる前に言葉のマシンガンを浴びせかける。電話の向こうではキイインとハウリングと音割れを起こした叫びをモロに食らったバトラーが耳を抑えて座り込んでいるのだが、ハマゴには知ったことではない。

《ちよ、ちよと待ってくれないか!》

そこから矢継ぎ早に混乱したハマゴから繰り出される言葉という名の弾丸を退けたバトラーは、とにかく! と話を断ち切ることに成功した。

《ジラーチは願いを叶えるポケモンだ。それに、七夕伝説にも酷似した伝説をあやかったポケモンでもある。既に書かれてしまってい

る短冊の文字に、もしかしたら今回の目覚めについての謎が書かれて
いるかもしれない」

「解読するまで時間をくれってか？　だがその間、どうするってんだ」
《…これは私の予想だが、願いを叶える力は失われているのかもしれないね。どちらにしても、そろそろシンオウに到着する頃だろうか？
》

その言葉に、窓の外を見る。水平線や無人島しか見えなかった外の
景色には、確かに近づく大陸の姿が見え始めていた。

「ああ、昼にもなれば着くだろうが」

《とりあえず、マグマ団がそちらを追っていないかぎりシンオウで
ホウエンの幻のポケモンがどんなものか何てわかりっこないさ。君
の旅の予定にポケモンが一体増えるだけだと思って、なんとかして欲
しい》

「投げやりだなあ、オイ。……まあいいさ」

それから一言二言の言葉をかわして、通話を切る。

さあて、とジラーチに向き合ったハマゴ。彼はおどおどと、困った
ような視線で見上げているジラーチに気がついた。

「つたく…」

大丈夫だ、捨てる気はない。一緒にいるから安心しろ。ありきたり
だが、ジラーチが求めているような言葉で取り繕った彼は、安心して
抱きついてくるかわいらしい生物を撫でながらこれからの未来に思
いを馳せた。自分の旅は、思った以上に騒動や混乱に満ち溢れている
かもしれないと。それが現実にならないよう祈りながら。

そうして正午の少し前、ハマゴたちを載せた船は無事にシンオウへ
とタラップを降ろした。新天地であったり、故郷への帰還であったり、
様々な思いを胸にシンオウの大地へ足を下ろす人々と共に曇りが
かった空を見上げるハマゴ。

ふと首筋を通った風にゾワリと背筋を撫でられた。少し寒気が強
いこの土地は、ハマゴが居たホウエンの土地よりもずっと北の側に位
置している。近くの店でマフラーでも買っておこうかと思案する彼
に、近づく人影があった。

「ちよつといいかしら?」

「ん?」

海の方を向いていたハマゴは、声の聞こえた方向に振り返った。

そこに居たのは、全身を黒い衣服で身を包んだ金髪の美女。だが頭の特徴的な髪飾りや、風貌に聞き覚えのあつた彼は「ああ」と言葉をこぼして納得する。このタイミングで声をかけてくる人物など一人しか居ない。

「アンタがシロナって人か」

その問いかけに、女性は満足そうに頷いた。

「ハマゴくんで間違いないようね」

いかにも大人の女性、と言った風貌だ。

とはいえ顔が隠れていることや、快活な女性というのが年齢を少しばかり有耶無耶にしている。そのために正確には分からないが、雰囲気からは確実にハマゴより5以上は年上であることは分かる。

信頼できるだろうか。という彼なりの判断をしている中、そんなジロジロと観察するような視線に気づいたのか、シロナは微笑みを返してみせた。

「あら、そんなに私の体に興味があるの?」

「ん、まあ年齢盛ってそうだなと思つてよ」

「……報告の通り口が悪いわね、まあ本人確認が取れたから良しとします」

ぐつと何かを堪えるように言うが、髪で隠れた額には青筋が浮かんでいることだろう。そこを表に出さないのは流石シンオウのチャンピオン・シロナといったところか。

「とにかく! 近くのお店に移動しましょう。つもる話はそこで」

「了解だ。ああ、それと予定外の事が起こったからな、あんましビビんなよ」

「え? ええ、それじゃ楽しみにさせてもらうわ」

そうして近くの喫茶店に移動したハマゴは、目の前にいる女性がこのシンオウ地方のチャンピオンという事もあつてここまで護衛をしてくれた人たちに礼を述べ、彼女と二人きりになった。

ちりんちりん、とおしやれさを醸し出す喫茶店のベルを耳にしながら、奥の席に座った二人は早速今後の事について話し始めた。まず口を開いたのはハマゴの方だ。

「まず言つとくが、ジラーチが眠ること無く活動している。千年の周期、なんてのはあんまりアテにならなかつたかもな」

「ジラーチが？ でも変ね、こちらでもジラーチの伝説について調べていたけど、過去に何件か目覚めたジラーチは8日目以降の活動を確認されていないわ」

「これが真実に違いない、と言い切ったシロナにハマゴは目を見開いた。

「シンオウの人がホウエンの事を調べられんのか？」

「まあ、私は歴史と神話の研究者でもあるのよ。それに、色々あつてね。神様みたいな存在とか、ツテは多いの」

「へえ？」

シンオウ地方は神話、という形でポケモンたちの伝説が色濃く残っている土地。だからこそシンオウなりの表現なのか、それをハマゴは判断できなかったが、チャンピオンともなれば冗談も壮大なのだろうとハマゴは判断した。

「まあ、女性は謎の多いほうが神秘的つてやつで納得しとくか」

「ありがとう。あんまり詮索されるような話題じゃないのよ」

社交辞令はこんなものでいいでしょう。と、締めくくった彼女が本題に切り込む。

「ジラーチだけど、私以外そうそう知っている輩も居ないわ。シンオウで旅をするのなら、隠すこと無く連れ歩いて大丈夫よ」

「そりゃ良かった。コイツもギユウギユウ詰めのレストランの中じゃ窮屈だろうからな。運動不足は健康に悪い」

「そうね。本当なら、結晶化したジラーチを私が引き取って、時が来たらファウンスに返すつもりだったのだけれど……そうなっている以上、あなたと一緒に過ごしたほうが」

大丈夫そうね、と続けられるはずの言葉はそこで遮られた。

店のガラスがビリビリと震えるほどの爆発音が鳴り響いたのだ。

「まさか!？」

ガタツ、と椅子を弾いてシロナが立ち上がる。

彼女はそのまま会計を伝票ごとカウンターに叩きつけ、お釣りはいらないから! と叫んで退店してしまう。どうにも、自分と話している暇すらない緊急事態なのだ判断したハマゴはシロナにつづいて急ぎ外に出る。

喫茶店のドアを過ぎた向こう側の景色。そこには、煙を上げて施設の一部が崩壊したポケモンセンターの姿が見える。

「ひでえこしやがって…!」

菌の奥をギリリツと噛み締めたハマゴはセンターに急行した。先に走っていったシロナの姿は見えないが、恐らく一足先にあれの中に飛び込んでいったのだろうか。

ハマゴはドクターとしての思考スイッチに切り替え、一匹でも多くのポケモンを、一人でも多くの人間に怪我をさせないためにもセンター内部へと突撃する。割れてしまった自動ドアの欠片が散乱したエントランスを抜けると、避難誘導に尽力するシロナやジョーイの姿がある。

こうなれば、やることは決まっている。ハマゴは腰のベルトに手を回した。

「出てきやがれキュウコン!」

モンスターボールを放り投げ、長年の相棒であるキュウコンが美しい所作で降り立った。

彼女はボールの中で既に事態を把握していたらしいキュウコンは、ハマゴに向かって頷くと、炎が燃え盛る場所に向かって飛び込んでいく。指示を出さずともこういう時にはどうすれば良いのか、両者が共に理解しているのだ。

ベストパートナーが救助民を見つけに行つたのを見届けて、ハマゴはあらかたの人を逃し終わったシンオウのチャンピオンに声をかけた。

「シロナ!」

「ハマゴくん、あなたも来たの!？」

おおよその避難誘導が終わって、トリトドンのわざで消火活動中のシロナに話しかける。一人堂々と立っている彼女に、煙を吸い過ぎるなどハンカチを渡して態勢を低くする。ここの火元は収まってきているが、エントランス内の物品はあまり散乱していない。つまり、爆発の中心部——黒煙の元はもつと奥のほうだということが分かる。「あなた、バトルはできる?」

センターの奥を睨みつけながら、シロナが問う。

「いや、からっきしだ。だがやれることならなんだってやってやるぜ」「そう……わかったわ、時間がないから手短に話すわね」

本当なら巻き込みたくはないが、というシロナの思いもある。だが今は一人でも混乱せずに事態にあたることのできる人物が必要だった。拳を握りしめ、意を決した彼女は言った。

「あなたはこのエントランスを中心に、逃げ遅れた人やポケモンが居ないか探してほしいの。トリトドンをつけるから、火が残っていた場合はこの子に頼んで。私は原因の排除に向かうわ」

原因、という言葉に面食らうがどこにいても人は存外変わらないものだ。過去の記憶を思い起こしたハマゴには、マグマ団のような人間たちの姿を幻視する。おおよその事態は察して、彼は片眉を釣り上げ笑った。

「おうよ。あんま無理すんな」

「こちらのセリフ。一般人なんだからハマゴくんも程々にね」

それじゃあ、とシロナは煙がモクモクと吹き出すセンターの奥へと走っていく。ハマゴも自分の仕事を任された以上、それに尽力するために立ち上がり、そしてこちらに向かつてくるキュウコンに気がついた。

「どうだった?」

手短な質問に、キュウコンは顔をエントランスのとある点に向ける。つまり、逃げ遅れた誰かがそこにいるということだろう。だがキュウコンの力だけでは助け出せないほど火が強いのか、それとも何か別の要因があるのか。

しかし、悩む暇すら惜しいと疑問を振り払い、ハマゴはトリトドン

についてこいと指示を出して現場へ急行した。場所は、シロナが向かっていった部屋の近くの壁際。まだ消化しきれていない炎が壁となり、爆心地に近いのか、落ちてきた瓦礫が退路を覆っている。

だが、確かに見えた。炎の揺らめきの向こう側に小さな人影がそこにあることを。

「助けて！ 誰か助けてえええ!! ——が、死ん——う！」

少年の方も、炎の向こうにいるハマゴたちに気が付いたのだろう。突然声を張り上げて助けを求め始めた。

その声から察するに幼い少年が取り残されているのかもしれない。後に続いた言葉はパチパチと弾ける日の音や瓦礫の崩れる音で掻き消されたが、要救助者が2人以上いるのは確かだった。

「聞こえてんな?! 今からそつちに俺のポケモンが行く！ 地面に伏せて動くなよガキんちよ！」

黒煙を吸い込むのもやむなしと、声を張り上げたハマゴはトリトドンに頼んで瓦礫を吹き飛ばしてもらった。高い練度で鍛えられた、トリトドンの「いわくだけ」は向こう側へ余分な衝撃を与えることもなく、瓦礫を粉々に砕いて崩す。さすがの技量にハマゴも息を巻いた。

まだ障害として炎が残っているが、ここからはキュウコンの領分だ。「もらいび」がハマゴのキュウコンの特性。つまり、このような火事の炎をも己の力として変えてしまう。炎の壁を難なく通り抜けたキュウコンは、向こう側に辿り着くと同時に少年と、その傍らにいたフワンテを引っ掴んで、背中にのせる。

「あ、ありが」

少年が二の句を告げる前に、彼らが炎にあぶられないよう尻尾で蓋をしたキュウコンはハマゴたちの傍を通り過ぎ、ポケモンセンターの外にまで一気に離脱した。

去り際、確かに彼女が領いた姿を確認したハマゴは、もうこのセンター内、シロナから任せられたエントランス内には要救助者が残っていないことを確信する。バラバラと崩れ落ちる瓦礫に気をつけつつ、立ち上がった。

その瞬間、再びポケモンセンターが大きく揺れる。

「ッ!? やべえ、か」

ぎぎぎぎ、と軋む音が鼓膜を引き裂いて、エントランスで天井を支える太い柱の一つが崩落した。大黒柱、とまではいかずとも構造上は重要な役割を持つそれが折れた途端、天井から崩落する瓦礫の数が一気に増える。これ以上ここには危険だろう、とハマゴは判断を下してトリトドンに指示を向けようとし、

「トリトドン！ 俺らも脱出す……うん？」

しかし、脱出を促そうとした瞬間、彼は薄らぼんやりとだが人影を見た。

シロナが向かっていった奥のほうだ。流石に彼女ほどのポケモントレーナーともなればこの程度の非常事態、何も心配する必要はないのだが、まだあちらの方に職員などが逃げ遅れている可能性もある。

「キュウコンー！」

少年を外で待っていた家族に帰し、急ぎハマゴの元に戻ってきていたキュウコンは、彼の掛け声を聞いて隣に降り立つ。ハマゴがシロナのトリトドンに視線を移してみれば、大丈夫だとやる気に満ち溢れた様子を見せる。

「ワリいな、もう少し付き合えや」

トリトドンとキュウコン。両者ともに思惑は違えど、その道は同じ。ハマゴの言葉にしつかりと頷いて、彼らはシロナの向かった通路へと足を進め、奥へと続く通路へと踏み入れた。当然、誰か逃げ遅れた人が居ないのかと叫んで確認しながら、だ。

ここは天井も低く、作りも簡素かつ強靱なのかあまり損傷は見受けられない。しかし、彼がたどり着く頃にはそこに見えた人影は既になかった。ハマゴにしてみれば、なぜだ、と疑問を浮かべるほかはない。(非常口は……遠い。俺らも叫びながら来たんだ。職員だとしても、あのジョーイさんが連絡を取らないはずもねえな。さっきのあれは見間違いか？ いや、だが服は確かに見えた)

白い、ブーツを履いたような足が見えたのは確かだ。

「クソっ」

まさか、という思いとともに結論に達する。

シロナの焦りようと、先ほどの自分の考察。それが合っていれば、自分が見たのは救助が必要な人間なんかではない。この事態を引き起こしたクソツタレな犯人の一人ということに――

「あら？・綺麗なポケモン」

背後から、聞いたことのない女の声。

ゾワリ、と総毛立つ。

シンオウに降り立った時のただの寒さではない。

振り返るだけでは、マズイ。

「キュウコンッ！・やきつくす！」

「あら」

振り返ると同時、手刀の形にした手を向けた方向にキュウコンの「やきつくす」攻撃が殺到する。ハマゴは威力そのものよりも、今はとにかくひるませることを選んだ。そして彼の判断は功をなし、今にも飛びかからんとしていたゴルバットの牙は輝きを収めて飛び退いた。

「余裕が無いわね。それで良いの？」

「トリトドン！」

トリトドンが何を覚えているのかは分からない。だから単にバトルのために指示を出した。そしてゴルバットに向かって攻撃を繰り返すとして、トリトドンとは別に、キュウコンへ次の指示を出そうとして。

「ほら、がら空き」

先程から感じていた恐怖。その正体が目の前にいたからか。

背後のスカタンク。ソイツから吐き出された毒に気がつくことも出来なかった。

夜空と大地

「何体出てくるのよッ!？」

次々と繰り出されるのは7体目の手持ち。機械のように繰り出されたそれらは、しかし先程のポケモンとはまた違うタイプのポケモンだ。ポケモンではなく、シロナへと敵トレーナーの手が照準となって伸ばされた。

「ドーミラー、サイコウエーブ」

「「サイコウエーブ」」

「ミカルゲ受け止めて!」

とはいえ、それは完全な数の暴力であった。ギンガだんの下っ端は無機質なまでに直立し、ロボットのようにはたきポケモンへと指示を出す。その一体感のある隙間を無くした波状攻撃が、まるで織田信長の交代火縄銃戦法のようにシロナへ襲いかかっていた。

シロナはハマゴたちを置いて奥に向かった後、すぐさま火元となるような場所を発見。ミロカロスの水技ですぐさま消化しようとしたのだが、ある意味で彼女の予想通り、こうして過激派ギンガ団残党が物陰から突然出現し、炎に巻かれることも厭わず襲いかかってきたのだ。

一人ひとりの練度は低いが、塵も積もれば山となる。確実にダメージを叩き出す技を叩きこまれて、戦闘不能のポケモンこそ出していないものの、倒してもキリの無い現状に彼女は追い詰められているとも言えるだろう。

だが、シロナという人物はただのトレーナーではない。

「今のうちよー! こっちにきてミロカロス! そして、みずのはどう!!」

ただただ、トレーナーをも巻き込んだ攻撃を避けるばかりではない。この狭い室内を、しかしギンガ団の残党は直立ながらもシロナを追い詰めようと迫ってくる性質を利用して。どこか無機質な反応を示す彼らに、心理戦のたぐいは通用しないようだが、パターンのある相手なら幾らでもやりようがある。

その結果、いつの間にかギンガ団の残党は一箇所にまとめられ、彼らの手先であるドーミラーたちも互いの体をぶつけあうという隙が生まれる。狙っていた瞬間が訪れ、シロナは己のポケモンへと攻撃の指示を下した。

「ハイドロポンプで押し流して！」

ドーミラーは一気に押し流され、背後に集められたギンガ団の残党を巻き込みながら壁の向こうをぶち破って行った。ポケモンセンターの外へと放り出された以上、既に負った火傷はともかくこれ以上命の危険は無くなっただろう。

しかるべきところに裁かせるための、ギンガ団残党を相手にした時のいつもの手段ではあるが、彼らは前述のとおりどこか人間としてはおかしい。証拠も、また聞き出せないのだろうと多少の落胆を隠しきれず、彼女の口からは深いため息が零れた。

「とにかく、ここはもう……ダメね」

火消しのつもりで来たが、残党が現れてしまったせいで時間がなくなり、更には今の攻撃で崩落を早めてしまった。ここが動力室である以上、センターの主要な機器はすべて機能を停止しているに違いない。

シロナはそのまま、吹き飛ばした残党たちの行った穴をくぐって脱出しようとしたが、ふと三白眼の青髪ドクター……早い話がハマゴのことを思い出す。エントランスはだいたい崩落していたため、もしかしたら取り残されているかも知れない。

「お願い、ルカリオ！」

そうと決まればシロナの行動は早かった。ミカルゲとミロカロスをボールに戻し、狭い通路や極所での活動が得意なルカリオを繰り出す。ブルツ、とひと鳴きしたルカリオは通路の方に目を向けると、そのままシロナに目配せした。

「まだいる、っていうことね。じゃあいきましよう！」

そうしてシロナは来た通路を戻り始めた。

だが、ルカリオの様子はどこかおかしい。いつもの冷静さの中に焦りが見えている事に気がついて、彼女自身にも少しばかり嫌な予感が

よぎり始めた。

そしてその予感は一時的に的中してしまう。

「ッ!? あれは……!」

見覚えのある女性と、それに相対するハマゴ。そして彼の背後には今にも攻撃を繰り返そうとしているスカタンクの姿があったのだ。ハマゴと相対する女性の口は邪悪に歪められ、人とは思えぬ非道な指示がくだされてしまう。

「ほら、がら空き」

まったく気がついていない彼は、背中を見せたままだが、件の女の言葉で肩をビクリと震わせた。ようやく狙いに気づいたようだが、彼一人ではこれへの対処は荷が重い。焦燥する心を押さえつけながらも、シロナは走りながらルカリオへと指示を下した。

「ルカリオ! ボーンラツシュ!」

「うおおっ!」

飛び込む青い影がスカタンクとハマゴの間に入って、スカタンクから撃ちだされた「アシッドボム」がバチンッ! と弾き飛ばされる。ハマゴへ直接襲いかかった非道の一撃が決まらなかったことに、ハマゴと相対していた女性は舌打ちで苛立ちを表していた。

だがシロナもここで容赦するつもりはない。視界の奥にみえた自分のポケモンへと次なる攻撃指示を発する。

「トリトドン、みずのはどう!」

背後に注意をそらされ、更に戦い慣れしていない無防備なキュウゴンに襲いかかるゴルバットには、トリトドンの一撃が決まった。シロナのポケモンがよほどの手練なのか、それとも偶然か、ゴルバットは混乱状態に陥ってしまった。

ハマゴを襲っていた女は、近くの壁に体をぶつけながら飛び回るゴルバットをモンスターボールに戻して、シロナに憎々しげな視線を投げかける。だが、旧知の相手に対して先に言葉を投げかけたのはシロナだった。

「さあ、追い詰めたわよジュピター! こんなことをしでかした理由を教えてくださいわ!」

ジュピターと呼ばれた女は、フンツと鼻を鳴らして言った。

「全てはアカギさまのため。それだけで十分じゃない？」

多くを語るつもりはないということだろう。

謎を貫くスタンスを崩さずに彼女は言い切った。

「その、減らず口も詰め所の中で発揮してもらおうわ」

「さすがはチャンピオン。強い言葉を使うわね……でも、流石にあの数を相手に無傷とはいかなかったようだけど」

チラリと、ジュピターがシロナの手の甲を見る。

一本だけだが、深く赤い線が刻まれてしまった傷を、シロナは隠すように一歩踏み出した。

「ま、どつちにしても旗色が悪くなったことには違いないわ。これ以上、私もここにいる理由はないの。それじゃあねー」

「まちなさっ」

ひらひらと手を振ったジュピターは、スカタンクの吐き出した「くろいきり」にまぎれて姿を消した。この場に残るのは、ハマゴとシロナ。そして燃え盛るポケモンセンターだけだった。いかなる早業か、それとも「あなぬけのヒモ」のような道具があったのか？ 真実は「くろいきり」が晴れても明かされなかったが、ジュピターが逃げおおせたという事実だけはそこに残っていた。

だがひとまずの窮地は去ったといえよう。シロナは緊張の糸を解いてハマゴに向き直ると、怒ったように言い放つ。

「エントランスを任せたはずだけよ、あなたは どうしてこっちに入ってきたの！」

「こっちに人影があつたんだよ！ あのアバズレじゃなくて救助者だったら助けねえわけにもいかねえだろ？ ……まあ、助かったよー！ ってテメエその傷！」

怒られたことよりも、ハマゴは馬鹿野郎、と罵り返しながらもシロナに詰め寄った。いつものバックパックはないが、白衣の内側から取り出された一式の器具が踊るようにシロナの手を包んでいった。なれた手つきで進められ、彼女が我に返るほんの数秒でシロナの手の甲に刻まれた傷は覆い隠された。

「下手に残ったらどうすんだっての。ほらよっ」

最後、傷の上にはガーゼが貼られ、先程よりも明らかに痛みの引いた手の傷を見たのも一瞬、建物全体から響いたズズ、という重苦しい音に跳びはねる両者。真っ先に我に返ったシロナは上を見上げて冷や汗を垂らした。

「…言いたいことはあるけど——」

更にズズ：バラバラ：と重い轟音が鳴り響く。同時に罅が入り始める通路。ついにポケモンセンター全体の完全な崩落が始まったのだ。これ以上此処に居れば、二人の命が危険にさらされてしまうのは自明の理。

頷きあつた両者は、ダツと服をはためかせて走りだした。

「今は脱出が先決よ！ ミロカロス！」

「キュウコンー！」

途中、各々がポケモンにのつて、ポケモンセンターのエントランス側出入り口目指して必死の脱出を始める。既に大きな瓦礫が道を塞いでいたが、人間ならともかくポケモンの身体能力の前には小石も同然。

水のヴェールで熱さを無効化するミロカロスと、そもその炎を喰らい吸収するキュウコンが駆け抜け、崩落の中から飛び出した瞬間に動力炉に火が回ったのか、天井の一部から大きな火柱を立ててポケモンセンターは完全に崩落してしまった。

しかし、間一髪のところまで崩落の衝撃から逃れた両パートナーは近づいていた野次馬を牽制しながら離れさせ、けが一人出させやしないと言わんばかりの仕事に戻る。すぐさまやってきたジュンサーたちがKEEP OUTのテープとポールを置いていく中、消防作業用のポケモンたちが「みずでっぽう」の指示とともに本格的な消火活動へ。

シロナは参考人としてジュンサーの下に案内され、ハマゴは先程の火事に巻き込まれたポケモンや人間の青空診察のためにその場に残る。港の街にあるポケモンセンターを襲った突発的な事件は、こうしてひとまずの幕を降ろしたのだった。

「ん、やつと開放されたわね。お疲れ様、ハマゴくん」

「大陸わたって早々にこれかよ、先行き不安だったらありやしねえや」

あれから翌日。

事件の捜査協力のため、事情聴取から開放された二名は初めて会った時と同じ喫茶店で席を同じくしていた。シロナの下にはアイスティーが。そしてハマゴの前には特大のパフェが置かれ、パフェ独特の細いスプーンの先はジラーチの口に運ばれている。

かと思えば、彼自身もしっかりとパフェを口にしている辺り、三白眼にいかつい顔・尖った口調とはおおよそ似つかないハマゴの趣味が伺える一場面であった。

尤も、ここに集まったのは慰労会を開くためではない。あのジュピターという女性が起こした事件、そしてシロナからの話の続きのためだ。彼女もチャンピオンかつ歴史学者という立場から、暇な時間ばかりというわけではない。呼び寄せられる時は呼ばれる立場の人間であるのだ。

「昼には講演のために奔走たあ、随分とお忙しいこって」

「まあ、それが私の選んだ道だから不満はないわ」

「それよか、聞きてえことがある。あのジュピターって女は……何だ？」

「ギンガ団、って聞いたことあるかしら」

その言葉に、ハマゴは記憶の隅にあるCMを思い出して頷いた。

「確か、ラルースの方に来たニュースに覚えはあるぜ。あそこで現れたデオキシスのデータを求めて、ロンド博士と代表者の……サターンだったか？ が握手してたっけか」

ふらふらとパフェのスプーンを揺らして答えた彼に、シロナはうなずきを返す。しかし、次に彼女の口から出た事実、ホウエン地方で暮らしていたハマゴにとっては初めて耳にすることだった。

「ジュピターはそのギンガ団の元幹部よ。そしていまは、ギンガ団がまだアカギという男がトップだった時に活動していた過激派を引き連れて各地でポケモンの強奪、破壊活動をしているわ」

「んだと…?」

ガタツ、と身を乗り出したハマゴ。彼は曲がりなりにも気高いドクターの一人だ。だからこそ、無理やりパートナーと引き離された際の物理的な傷から、精神的な傷も、全て負わないほうが良いのだと、そうした考えを持っている。

そうして、眉間に寄せたシワが一層深く刻まれた彼の剣幕の前に、落ち着きなさいとシロナは一喝した。

「これに対して、今のギンガ団穏健派は過激派がこれ以上問題を起さないよう私達に協力しているわ。でも、いつもそうした監視の目がかいくぐって、あのポケモンセンターみたいにメリツトが殆ど感じられない場所が破壊されている。そして、まんまとポケモンを強奪されているわ。……今回は、守り抜けたけど」

詳しく聞けば、シロナは過激派の下っ端13人を相手に大立ち回りを繰り広げてみせたらしい。今もなお、隠すように反対の手を置いている手の甲の傷は、その時のズバツトが繰り出した大量の「エアカッター」を捌ききれずに付けられてしまったらしい。

周囲が極限の状況だったこと、黒煙を少しばかり吸い込んでむせてしまったこと。それで指示が遅れて、不覚を取ってしまったということも彼女自身の口から語られた。

そして、このギンガ団過激派の手口はこれが常らしい。10人前後の少数精鋭で迅速に事を起こし、一時的な混乱に乗じてポケモンを強奪する。手早い犯行はジュンサーを始めとした警察組織がたどり着く頃には終わってしまう。だから、フットワークの軽いシロナのような実力者や、現ギンガ団でも実力のある人間がこのシンオウを騒がせている事件の解決のために尽力しているのだとか。

「物騒な時に来ちゃったな……」

「ごめんなさい。本当なら、あなたを巻き込むつもりはなかった」

「いや、まあちょうどいいさ。不謹慎だが、怪我人が出ちゃってるならしょうがねえ。俺が各地を回って治療して、俺自身も腕を上げてやる。現地で治せる怪我は現地で治すに越したことはねえからな。そのくらいは喜んで取り組んでやろうじゃねえか」

「…ありがとうハマゴくん。でも気をつけなさい」

「わかっている。万が一だつてあるだろうが、ジラーチは絶対に渡さねえ。いざとなつたら全力で逃げて、犯人をシロナの前に持つてきてやるさ」

自分の実力がトレーナーとしては低いからこそ、自分の相応の場所——つまりはドクターとして戦うとハマゴは宣言する。無茶をする人物ではないとわかつてホツとしたシロナだったが、あの火事の中の怒りを露わにした姿を思い出して、苦笑が漏れた。結局暴走してしまふのだろうかあと、ハマゴの性格はこの短時間でもシロナに伝わっているようだ。

「あ、そうそう」

アイステイーを口にした後、思い出したように彼女は人差し指を立てた。

「シン^{こっ}オウのポケモン研究の権威、ナナカマド博士にハマゴくんの事を紹介しておくわね。ジラーチについて話せば何か協力を得られるかもしれないし、何より研究所はシンオウについて触れられるいい場所よ。ドクターとして現地の情報はきつと役に立つと思うわ」

「いいのか?」

「借りの内にも入らないから、受け取っておきなさい。私の予感だと、あなたとはこれから長い付き合いになりそうだしね」

そんな予感がするのだと、締めくくった彼女はカップを置いた。

「そろそろ時間ね。それじゃあ、またお互い無事に会えることを祈つて」

「今度は溶岩の上で再会だったりしてな」

「その時は雰囲気に合わせて全力でお相手しようかしら?」

「冗談キツイぜ。あのトリトドンあたりにじしんでも食らつて終了だろうよ」

「ふふ、じゃあ、次はもっと強くなっておくわ」

ひとしきりに別れの挨拶を交わして、二人は席を立った。二度目の退店はゆつたりとしたものだったが、出入り口を出て見えるのは全焼したポケモンセンターと慌ただしく動きまわる警察関係者の姿。

和やかな雰囲気は一変し、両者は厳しい表情でそれらを見つめていた。

「もう、こんなことが無いように……強くならないとね」

「だな。ジュピターだったか、今度会ったらただじゃおかねえ」

ジュピターにとっては、シロナに助けられた一般人の一人という認識だっただろう。だがハマゴにしてみれば、無差別の被害をもたらすばかりか、自分を襲った因縁の相手だ。何もぶん殴ったり、傷をつけるといったドクターの名に反する愚行はしない。もつと別の方法でしつかりととつちめてやると固く心に誓って、ハマゴは彼の道を歩みだした。

「じゃあな」

「ええ、また」

立ち止まっていたシロナは彼の背中が消えていくのを見届けた後、彼女のすべきことのために歩みをすすめる。分かれ始めたこの二人の道も、いつかまた重なる日は訪れるだろう。そしてその日は、案外近いのかもしれない。

それから数時間後、ハマゴはついにシンオウ地方への「旅」を開始した。

視界の中でゆらゆらと揺れる景色。港の街から、ナナカマド博士のいるマサゴタウンをひとまずの目的地としたハマゴはひとまず、街をですぐの街道を歩いていった。

彼が調査団にいたところからの道具などを詰めたバックパックの上には、どこかで聞いたことのある鼻歌を歌うジラーチの姿がある。

自分の頭ひとつ分、高い位置が出来るほどのバックパック。そして白衣と鋭い三白眼。快活そうな青のショートヘアに、メガネをかけた青年。色々と不釣り合いな要素が重なった中に、更にジラーチという可愛らしいポケモンを乗せて歩く男の姿は、それはもう道行く人々に注目される組み合わせだろう。

しかし彼は視線を意に介さず、自分のことを決めるのは自分だと言

わんばかりの歩みを続ける。そんな中で、彼はふと思った疑問をジラーチへとぶつけることにした。

「ジラーチ、テメエはここにこれて楽しいか？」

もちろんだと伝えるべく、元気な返事をしたジラーチはこれまでのおつぴらに過ごせなかつた事が溜まっていたのか、目に映る景色全てを物珍しげに見つめていた。

旅の滑り出しこそ混乱を極めていたものの、今こうして過ごす時間はのんびりとしたものだ。ジラーチが楽しい時間を過ごせていることが嬉しくて、つつい悪人に見間違えそうな笑顔を浮かべるハマゴ。

ちぐはぐな両者であるが、共に抱える思いは同じだ。

「そりゃあよかつた」

本当に、と続ける彼の表情には少しばかり陰が差していた。

一方その頃――

某所、宇宙をモチーフとしたデザインの部屋。

我々にとつても見覚えのある女性が、苛立つようにかつかつとヒールを鳴らして歩き回っていた。ぶつぶつとつぶやきをこぼす彼女の言葉が、ようやく聞き取れる大きさになって聞こえてくる。

「やっぱり思考の方向性を考えないとダメね。成果もゼロ。はあ、夢が遠くて嫌になっちゃう」

ジュピター、彼女の中で、今回の作戦に対する結論はこうした形で出たようだ。

彼女の周りには、直立不動で立つギンガ団の下っ端がずらりと立ち並び、その目の奥には怪しい青色の光が渦巻いている。まるで銀河系を内包したかのような瞳を見る限り、この一団はジュピターを除いて何かしらの非人道的な処置を施されているのは一目瞭然だろう。

そんな彼らを一瞥した彼女は、ところどころ配線が飛び出ている怪しげなマシンのレバーを軽めに降ろした。「ALL」という表記から「DEEP」という表記で止まったレバーに反応し、ゴウンゴウンと胎

動するように装置が動き、下つ端達の頭上からパツと光を下す。

「ふうん、今回はいい感じ。さすがの調整ね、プルート」

「……ふん」

姿は見えないが、しわがれた老人のような声がどこからか響き渡る。

それつきり彼女らの会話は交わされなのまま、ジュピターは木箱に座って新たな思考形態にするための洗脳を施されていく下つ端を見つめていた。しかし、その目に正気の光はなく、目の前のそれらを人間ではなく物のように見つめている。

視神経とレンズの間に、狂気というフィルターを通してしているのだろうか。彼女に一応の形で協力しているプルートですら、ジュピターの思考を理解することはできていなかった。

（化物女め……それに従うワシも落ちぶれておるがな……）

プルート。かつてギンガ団の研究者として名を轟かせ、アカギの「赤い鎖」を作る際にも関わった彼は、ただただ、大金を得て老後を面白おかしく暮らすためだけにその才能を振るっていた。

しかしギンガ団のリーダー・アカギが消えた後、いざこざが重なった結果がこれだ。自由に動くこともままならず、「生きる」という事を交換条件にしてジュピターに従っている。ジュピターに傷つけられたわけではないが、元々が高齢であったことや様々な要因が重なって彼は今の位置に落ち着いている。

そして、プルートはこうしてジュピターのために働く兵隊を作るための仕事に就いた。本当なら、ポケモンをメインとした研究者だったが背に腹は代えられない。研究者としても食指の沸かない人間の洗脳と、統一化。それを日々の研究としながらゆるやかに寿命をすり減らす毎日。

「……」

モニターに映されるポツポツとした文字の羅列。そして上下するグラフを同時に観測しながら、出力を調整するダイヤルとスイッチを切り替えていく。

そして更新は終わった。ジュピターの意向に従う兵隊の最終調整

が完了して、彼はこのギンガ団残党内で使われるタブレット端末を手
に取る。

いつものような提示連絡で終わるはずの一日は、しかし、考え方す
ら変化しつつある彼の望まない形で邪魔されることになる。

「……着信じゃと？」

彼が知りえぬ番号だった。そして何より、誰も知らないはずの番
号だ。

プルート自身が創り出したタブレット端末は、既存のポケナビや電
話のように、番号で端末同士をつなげている。だが、世界のどの番号
とも違う暗号化された番号と周波数を用いたはずのそれに、不明着
信。

だが、今生に疲れ果てたプルートは警戒しながらも思うのだ。もし
かしたら、この暮らしを終わらせ、今度こそ……全ての罪から逃れら
れるような静かな暮らしが出来るのではないかと。

世捨て人のような考えから、それに応じることにした。

「……もしも？ この天才、プルート様に何の用じゃ」

彼の望む日常とはかけ離れる片道切符へと。

《我々は新生マグマ団。落ちぶれたギンガ団よ、朗報を渡してや
る。だから手を組もうではないか》

ここに、夜空と大地は交差した。

旅の第二步　ドクターとは何か

マサゴタウンのポケモン研究所。そこをひとまずの目標としたハマゴたちは、最寄りの大きな街を探していた。その理由というのが、ハマゴ自身が持つきのみや医療器具のストックを補填するためである。

彼のバックパックには多種多様なきのみ、漢方、薬剤といった消費の激しいアイテムが多く詰まっていたのだが、先のポケモンセンター襲撃で傷ついたポケモン達の治療のため、そのストックのほとんどを使いきってしまったのだ。

「ん、こんだけ軽いのは久しぶりだな」

大きな分、スペースもあるように思えるが彼が所属していた5〜6人の調査団をギリギリで診察出来る程度を想定した内容量だった。それに、ある意味で一人旅だったこともあって初っ端から事件で消費するなんて想定できるわけがない。ある意味仕方ないとも言える。

何にしても、まず彼は彼のベースとして使う「きのみ」を補填するためのルートを通っていた。野生で生えているものは大抵縄張りがあるため、ふと横切っても手を出せない。野生の暮らしに無理な干渉をしないためにも、人間が育てたきのみを購入したほうがいいのだ。

「ここから近いのは、ソノオタウンか」

彼が乗る船は、本来ならミオシティ着の予定だったらしいのだが、シロナとの待ち合わせもあるということで港町ミオではなく、あまり名の知られていない港の方へ辿り着いた。その結果がハクタイの森手前の小さな町からの出発である。

着いてそうそう森を抜けなければならないルートじゃなくてよかった、と見知らぬ土地に安堵を吐きつつ南下する。とはいえ、徒歩ともなればいくつか小さな集落を経由して数日は掛かるだろう。シンオウ地方は離島の大陸とはいえ、それなり以上に広いのだから。

「ま、難しいことは後で考えっか」

そんな長い旅路も、ふわふわと浮かぶ新しい旅の仲間が居れば大丈夫だろうとハマゴは思う。悪い予感も何もかも、取っ払ってくれるよ

うなジラーチの笑顔は、複雑な道のりを明るく照らすには余りあるものだ。

少々人見知りの気があるのだろうか。町中と違い、ハマゴと二人っきりの現在は自分の興味の赴くままフラフラ飛んではハマゴのところに戻ってアレは何だと聞きに行く。モモンの果実が実を結んでいれば、それを手に取ろうとしてハマゴに怒られたりすることもあるが、ジラーチは終始笑顔を浮かべて楽しんでた。

7日間という縛りがなくなり、普通に睡眠を取って起きる明日があるというのはジラーチにとってよほどのことらしい。最初から最後までハイテンションだった船旅よりは落ち着いてきたが、それでもジラーチ自身の快活に飛び回る姿は変わらない。

こんな伝説があつていいのかね、と苦笑を浮かべてはジラーチを諷めるのがハマゴの役目とかしてきた日常は、港のポケモンセンター襲撃という暗い事件をひっくり返すには十分な要素だった。

「あんまり遠く行きすぎんなよー」

わかっている、と形だけは手を振って返してみせるジラーチ。それに対し、ハマゴがまったく仕方ないやつめ、と吐いた息は何度目だろうか？ なんにしても、楽しい道中であることは確かだろう。

そうする二人を見かねたか。ごそり、と動いたキュウコンのモンスターボール。ハマゴ自身もはしやぎすぎていることを諷めるように揺れたそれに、そうだなと湧き上がった心を落ち着かせる。なんせ、ジラーチを狙う輩が消えたわけではないのだから。

はしやぐジラーチにつられて歩調を早めつつも、楽しい時間はぐさま過ぎ去っていく。彼らが歩みを止める頃にはどっぷりと日が暮れて、ハマゴたちの頭上には満点の夜空が煌めきだした。

見る場所が違っても、夜空は変わらない。ホウエン地方に残してきた様々なものが頭のなかをよぎらせながらも、ハマゴは湯気が立ち上る鍋が炎にあぶられる姿を見つめていた。

この炎を吐いたキュウコン自身は、ハマゴが飯の支度をしている間

に着々とサイコパワーや尻尾を器用に使ってテントを貼っていく。調査団にいた時と変わらない、テキパキとした野宿の準備が終わった頃。鍋から湯気と一緒に香ばしい匂いが溢れてきた。

ハマゴは鍋から掬ったスープを小皿に垂らすと、自分で味見したあとジラーチの方にも差し出した。

「ほらよ」

ポケモンフーズも持ち合わせていないため、これから暫くは人間の食事をともにする事になるだろう。ある意味で千年前と同じく食卓を囲むわけだが、ジラーチとしては気に入ったばかりのフーズの代わりに差し出されたスープだ。

見たことのない赤色のそれを警戒するように舐めて、そのピリツと来た刺激に飛び上がって味を表現してみせた。どうやら、意図的に「辛くしたものを」を食べるのは初めてだったらしい。

「ハツハツハ！ いやあ、面白いもんが見れた。こりやあ永久保存だな」

赤いスープは、マトマの実をベースにしたリゾットの材料だ。シンオウ地方はハウエンよりもずっと北に位置しているため、夜は冷えるだろうと見越してのレシピである。実際のところはハマゴが思ったよりも寒さは無かったのだが、せっかく用意したのだから造らないわけにもいくまい。

とろり、と米に垂らしてリゾットを完成させたハマゴの側に、テントを貼り終えたキュウコンが戻ってくる。腕のレーダーを見て「よし」と言葉を発したハマゴは、キュウコンの方にも皿を渡して置いた。「いただきます、つと」

最初のほうこそ警戒していたジラーチだったが、ほかほかとした暖かそうな外見と空腹を訴える腹には勝てなかったようで、しぶしぶといったように一口目を口に放り入れていた。

しかし、結局のところジラーチもまたメシの顔を晒す事になる。簡素な材料ではあったが、しっかりと手間を賭けたマトマスープは他の具材と相まった美味しさを演出。たちまちにジラーチを味の虜にしてしまったのだ。

「ほら、まだまだあるからな」

ほくほくとした表情でほうばって、おかわりと皿を差し出した食欲ポケモンに気をよくしたハマゴはおかわりを注いで差し出した。すると、最初よりも勢いは落ちたが、今度は味わいながら食べるジラーチ。二杯目ということでお腹もそれなりに膨れているのだが、それよりも名残惜しさがあるのだろうか。

キュウコンの方はこのくらいいつもの事だと言わんばかりにノーリアクションで食べている……ようにも見える。だが実際のところは多くの尾をゆさゆさ揺らしたご機嫌アピールが出てしまっているのだからご愛嬌である。

ハマゴとしてはそれを指摘し、ウエルダンに成りかけた過去をもつためあえてスルー。それでも、自分のポケモンが喜んでくれているというのはハマゴ自身の喜びでもある。

だからこそ——ぶち壊したくなるのだ。

「さて、食生活はバランスだ。こっちも食いやがれ」

ドン、とジラーチの前に積み上げられたのは野菜だった。

実はこのねがいごとポケモン、大の野菜嫌いであることがシンオウまでの船旅で判明している。だからこそ栄養が一緒に取れるお菓子感覚のポケモンフーズに逃げたわけだが、生憎とその逃げ道は今此処にはない。

水で綺麗に洗った生野菜が徐々に迫りつつある中、笑顔のジラーチに冷や汗が流れ始め、ついには笑顔を解いて逃げ出そうとしたのだが

「おおっと、知ってるか？」

ハマゴに、はごろもをムンズと掴まれ逃走を阻止される。

もうお腹いっぱい。だから食べなくていいよね？ と懇願するジラーチであるが、そんなものに聞く耳もたないハマゴは言い放つのだ。「ほろびのねがい」よりもジラーチにふさわしい破滅を。

「お残しはゆるしまへんでええええええ!!」

ポケモンドクターハマゴ。

彼の幼いころの聖典バイブルは忍者のタマゴアニメであった。

天から落ちる野菜の大群が目の前に降り立った。

スタツ、と華麗な五体投地を決めたそれらは、自分の周りを取り囲む。そして側面から細長い手足を生やして包囲網を敷いたのだ。このままでは逃げられない。そうしてジラーチは目に涙を貯める。

だが無情かな。ジラーチのねがいごとは自分には届かない。天ノ川も聞き入れることはしなかったようで、徐々にその野菜たちに追いつめられてしまう。

「おい」

緑黄色野菜の苦さ代表の野菜が言った。

その腕には苦い野菜の大量に詰まったバスケットが掛けられている。

掴みとった棒状の野菜が、ジラーチの口に無理やり詰め込まれる。

ほみよ、ふみや、と鳴き声にならない声が漏れ出るが、すっかり噛み締めろと言わんばかりに押し込まれた野菜が邪魔をする。今度こそ、鳴き始めたジラーチであったが野菜たちは無慈悲であった。

「お野菜食べろツツツ!!」

熱血の赤い鉢巻が見えたような気がして、ジラーチはほみやあああ
と声にならない悲鳴をあげた。

——夢のなかで。

「……なんでコイツうなされてんだ？」

時は早朝。ねぼすけジラーチがむにやむにやと悪夢にうなされる中、頭上に疑問符を掲げたハマゴが唸る。すっかり野宿セットを片付けたキュウコンに礼を言うと、彼女をボールに戻した後、悪夢の中で艶めかしい声を上げるジラーチを俵担ぎで拾い上げた。

羽衣のような部分を体に巻き付け、セルフ寝袋状態のジラーチは持ち運びやすいことこの上ないとはいえ、ポケモンに対してあんまりではないだろうか。この辺り、とても医者とは思えないのがハマゴがハマゴたる所以ではあるのだが。

「お」

外的な衝撃でようやく目を覚ましたのか、ハマゴがそれなりの距離を歩いて辺りでジラーチの目は覚めた。——途端、ハマゴの腕から逃れ、戦闘態勢に入るがジラーチの夢にでた手足のついた野菜はいないし、混乱を極める中で更にハマゴからのチョップがジラーチの頭部に突き刺さる。

夢は覚めたかと、エネコの首根つこを持つように諭されたジラーチは放り投げられ、この旅の始まりからすっかり定位置になったバックパックの頭頂部でキャッチされた。

ちよつと、聞いてよ！　と言わんばかりに頭をべしべし叩いてくるジラーチに、ハマゴの反応といえばくたびれきったオヤジのように「へいへい」と聞き流すばかり。どうせくだらない夢でも見たんだろう、と彼が言つて見せれば、グツと言葉に詰まったジラーチが固まった。

なんともくだらない光景である。だが、ジラーチ自身にしてみれば野菜トラウマ事件の第一歩どころか全力疾走中だ。尤も、夢の内容を知らないハマゴにしてみれば、これからも野菜……とくにこちらの世界という茄子のような物を積極的に食わせていこう！　と目論んでいるわけだが。

「……………ん？」

——……………だ！　れ……………よ！

ふと、ハマゴは気がついた。街道の向こうから、何やら喧騒が聞こえてくる。

そんな疑問の種も、少し歩けば見えてきた。

「だから、もういいって言ってるだろ!？」

足にすがりつくポケモンと、怒ったように怒鳴り散らす人間の組み合わせだ。正直な所、ハマゴ自身見たことがないといえれば嘘になる、見たくもない光景だった。

「オマエはもう、いらないんだよっ!!」

少年が足を振り上げて、すがりついたポケモン——スポミーを振り払った。

その勢いのまま、近くの茂みに頭から突っ込んだポケモン。悲しそ

うな声を隠そうともせず反論をするが、言葉ではなく鳴き声である以上真意は伝わらない。

ポケモンと人間のコミュニケーションは難しいものだ。何度か蹴り飛ばされたこともあったのか、生傷が見られるスポミーと、無傷で上から物を言う少年を見ながらにハマゴは思う。

同時に、額に浮かんだ「井」の形をした青筋をブツ切りながら、ハマゴはその組み合わせに近づいていった。それはもう、ゆつくりとした歩みで。

「よお坊主、こんな人気のない場所でなにしてやがんだ？」

「んだよ!? ——ひいつ」

正直、白衣がなければインテリ系ヤクザと見まごうばかりの外見がハマゴだ。ただの一般的な少年にしてみれば、このハマゴの怒り狂う姿には恐怖しか覚えないだろう。

「見たところそのスポミー、捨てたようだが」

「あ、ああ……うわああああああ!!? なんだっていいだろ!!? 俺に構うなよつ! ソイツが欲しいなら持つて行けよおおお!!!」

「あ、おい待て糞ガキ!」

とつさに手を伸ばすが、逃げ出した名も知らぬ少年の姿は既にない。今ここに居るのはハマゴ一行と、取り残されたことではよんぼりと途方にくれているスポミーだけであった。

「……はあ。ちよつと話聞いてやろうと思ったただけなのによお? なんで逃げるんだろうな、わっかんねえよなあ? ジラーチよお」

まだまだ修羅の表情が落ち着いていない中での問いかけに、ジラーチはビクビクと怯えて全力で首を縦に振った。直後、バックパックの中にシュバツと隠れてしまったが。

とにかく、近くに小さな集落があることは確認済みだ。あの少年も、ちよつと今日の夜を過ごそうと思っていた所の住人だろうとハマゴは当たりをつける。

「まずは手当か。おいそこの弱虫、いつまでも茂みに埋まってないでこつち来い」

あまりひどくはないとはいえ、スポミーの手当もしておいたほうが

いいだろう。ポケモンがいかに頑丈な生き物といえども、心身ともに未熟なポケモンは非常に傷つきやすい。その裏にちゃんとした愛情があれば、苦境とて乗り越えて成長できるのだが……

軽い診察をしたハマゴは首を横に振って言う。

「こりやひでえ。蕾の中が傷だらけじゃねえか」

ハマゴの第一声がこれである。結局、診察の際は茂みから身動きが取れなかったスポミーを自分で引き寄せたのだが、彼の想像以上に残酷な仕打ちを受けている。眉間にシワを寄せ、怒りを露わにするには十分過ぎるほどボロボロな姿だった。

未熟なトレーナーが、苛立ちなんかのはけ口に使っている手段の中でも最悪の部類だ。ポケモンを傷つけていく中、どうしてもポケモンがかばう「ダメ」な場所というのがある。進化のために必要だったり、それがなければ生きられなかったり。パラセクトの背中キノコや、フシギダネ系統の背中植物だ。

そういった場所を傷つけると、大概のポケモンは絶叫とともに悲痛な叫びを上げる。その声を聞いて嗜虐心を満たし、それが常套化してしまう。それが原因でポケモンが死ぬこともあるというのに。

「……手持ちの分じゃ治療は無理だな」

バツクバツクの中身を思い出しながら、彼は立ち上がった。

まだ取り返しはつく。ひとまずは全身の生傷の治療からだろう。先程からぐったりし始めていることもあり、トレーナーだった少年がいなくなったことで気力すら尽き始めたのだろうか。ジラーチに引き続き、また死にかけのポケモンばかり診察するハメになるとは。

ジラーチの時のように、ある程度の薬液を塗ったスポミーに植物由来の緑色の包帯モドキを巻く。抱え上げると、彼は右手を腰のベルトに伸ばしてあるものを掴んだ。

「キュウコン、頼むー」

長旅は、自分の足で、歩いてこそ。(字余り)というのが彼の信条だ。故に急ぐ旅でもなかったが、このような急患は別。すぐさまドクターとしての意識に切り替える。あの少年に対する怒りよりも優先するべき命だ。

投げたボールから出てきたキュウコンの背にまたがり、ハマゴは少年がいるであろう集落の方へと歩を早めるのであった。

「おっさん、ツリはいらねえ！」

「おいおい！ お医者さん!？」

最寄りの集落にたどり着いたハマゴは、すぐさま幾つかのアクションを起こした後、行商人の元を訪れて幾つかの材料や木材、薬の元を購入した。驚いたように引き止める行商人の言葉から逃げ出すように走り、スポミーを寝かせてある、間借りした畑の一部に到着した。

スポミーは草タイプの中でも植物がモチーフのポケモン。こうした栄養の行き届いた地面で足を埋め、ある程度自己再生させるのが一番である。もつとも、あの少年はそれすらもさせていなかったのか、スポミーの体表に見られるはずの若々しいツヤは、見る影も無いほどガサガサになっていたが。

ハマゴは土で汚れることも気にせず、その場にドツカと座ってバックパックを開いた。中に入っていたジラーチを放り投げると、バックパックの奥底にある煎薬の道具一式を取り出して組み立てる。

そして先ほど行商人から購入した薬剤の元をすり鉢に入れて、ゴリゴリと回し始めた。

「ん、気になるか?」

バックパックから放り出されたジラーチも、修羅の顔から一転していつものハマゴに戻っていたことから、今度は何をしているんだと首を傾げてその様子を覗きこむ。作業のジャマにならないよう、ふわふわと自分で浮いているあたり、モラルはあるようだ。

「＼ちからのこな＼って知ってるか?」

「?」

疑問符を掲げるジラーチに、そうだよなとハマゴは笑い返す。

「まあ、とくんでもなく苦^{にげ}え薬だ。漢方薬の一つなんだがな、人間にも効くし、ポケモンにはその効果が即時に現れるつつう薬だ。積み重なった人間の技術が産んだ秘宝の一つだな……そら、できたぜ」

幾つかの植物や怪しい根っこがすり潰され、まとめて粉塵となったそれを、水の入ったボトルに流しこむハマゴ。どちらかと言うと病院の医者というより、薬剤師の仕事だろう。だが、ポケモンドクターは多くを求められる職なのだ。

「これが本家本元のぼつちゃんが作った『ちからのこな』なら飲み薬にして使うんだが：俺が煎じたこいつの場合は一味違うってもんだ」
サラサラと注ぎ込まれる「ちからのこな」は、水と混ざり合うが溶けることはない。だがハマゴはボトルの口から、さらに緑色の溶液を加えると、沈殿していた漢方薬はすっかり水に溶けて、緑色の薬液に変化した。

最後に、キャップの代わりに注射針の先のような物体をつけると、それをくるくる回してボトルの口に固定させた。

もうおわかりだろう。彼が作った「薬」は、よくプランターの土なんかに刺さっている栄養剤である。

「こいつを組み合わせるんだ……つと」

説明混じりに手を進めていけば、ジラーチが口元に指を加えながらそわそわとしている様子が見える。まったく、とハマゴは息を吐きながら笑ってみせる。

「手伝えや、ジラーチ。この辺の土集めときな」

パツと顔を輝かせて、ひとしきり頷いたジラーチは畑の土を自らの手で運び始めた。サイコパワーを使わないため、その小さな体格が集められる量には限りがあるが、ジラーチとしてはそんなことはどうでもいいのだろう。

ずっとスポミーの看病をしていたキュウコンも、やれやれと言わんばかりに口元を歪ませている。初めて出来た後輩に対して、思うところが無いわけでもないらしい。

「こいつは、新しい助手の誕生かもな」

伝説のネームバリューがつか盛大な病院でも作ってやろうか。ナース服を来たジラーチと、ナース帽を被って赤十字模様のスカーフを巻いたキュウコンのいる病院。そんな他愛の無いことを考えながらも、ハマゴは先ほど購入した木材を箱型に組み合わせ、スポミーだ

けの「ベッド」を作成する。

白衣の男がカンカンカン、とトンカチを振るう。凹凸が嵌めこまれた、鉄を一切使わない「ベッド」が完成した。

「ジラーチ、集まったか？」

振り向いたハマゴは、こんもりと丁度いいぐらいの量の土の上で、泥だらけになったジラーチの姿を確認する。彼の視線に気づいたジラーチも、指を立ててバツチリと反応を返してみせた。

ハマゴは、土を両手で掬うと「ベッド」の中に土を入れていく。そしてスポミーの方をチラチラと見ながら作業は進み、真ん中に縦長の凹みがついたプランターベッドが完成する。

「んで、さっきのコイツだ」

ブスツ、と不釣り合いなボトルの先が地面に突き刺さり、コプンと気泡が立ち上っていった。ハマゴが何も言わないうちに、ずっとスポミーを見守っていたキュウコンが近づいてきて、その口に咥えたスポミーを優しく「ベッド」に寝かせる。

ハマゴはすっぽりと凹みに収まったスポミーの、小さな小さな足に土をかぶせていく。

「……ふう、やっぱこりや家庭菜園だろ」

常々思っていることを口に出すハマゴ。当然のように進められた手順だが、傍目ドクターとは程遠い光景である。

なんにしても、と息をつく。

すやすやと眠るスポミー自身。その体が癒えることを望んでいるのだろう。まるで「ねをはる」技が繰り出された時のように、急速に土の一部が乾いていくのが分かる。同時に、ボトルいっぱいに満たされた「薬」がごぼ……ごぼ……と気泡を立てて量を減らす。

「こんだけお膳立てしてやれば、あとはコイツの意志で回復できるだろうよ。あとはあの糞ガキとの話し合いだな……おっと、先に余分なもの取っとくか」

確かに蕾の中はボロボロになっていたが、同時にあの部分は大事な場所だからこそ再生が早い。十分な栄養と、ポケモンの体力を全快にさせる薬。そしてスポミーたちポケモンそのものが持つ驚異的な生

命力。これらが組み合わされば、よほどの外傷以外はキチンと治ってくれる。

ドクターの役割は、ポケモンを治し、ポケモン自身に治させるお膳立てをすること。ジラーチの時と何も変わらない。その手順が違うだけで、最後の「治療」は全てが一緒だ。

ペリペリと、植物由来の包帯モドキを剥がし終わって、力仕事で掻いた汗をタオルで拭う。この畑の一部を借りた時、一緒に借りたジヨウロに水を満たすためにハマゴは立ち上がった。

しかし、ペシペシと足を叩く感触が彼を引き止める。

「ん、やってくれんのか？」

むしろやらせて、と両手を突き出す泥だらけのジラーチだ。

本格的に、ドクターの助手として勉強でもさせてやろうかと考え始めたハマゴは、白衣が汚れることも厭わず、また土の上に腰を落ち着けた。

ほんのり湿った土の感触が布越しに染みこんでくるが、The 清潔という言葉とは無縁の、フィールドワークが主な調査団に所属していたハマゴだ。どこにいても変わらないな、と土をひとつまみしながら彼は笑ってみせる。

「おお…流石に難儀してやがんな」

コダツクじようろを両手で必死に抱えて、スボミーの収められた「ベッド」に水をやりすぎず、しかし少なすぎずの塩梅で掛けようと四苦八苦。ふんぬぬぬ、と人間なら踏ん張っている言葉が聞こえてきそう。なジラーチの姿に、ついにキュウコンの方は決壊したらしい。

「なっ、キュウコ…おまつ！ クツ、ハーハハハッ！」

鼻から漏れた空気が下品に音を立てるが、もう遅いというのに背中を震わせ必死に笑いをこらえている。クツフオ、クツフオ、と普段なら聞けないようなキュウコンの間抜けな姿にハマゴのダムも決壊する。

そんな面白おかしい彼らの様子を、困ったように見つめる畑の持ち主。

その隣には——鋭い視線の少年がいた。

裏表のある世界

ハマゴたちはとても旅の中とは思えない豪勢な食卓を前にしていた。

いただきます、と手を合わせる前に彼は言う。

「泊めてくれるなんてありがてえ。助かった」

「いえいえ、うちの子が大切にしているスポミーを助けてくださったお礼です。存分にくつろいでいてくださいね、ドクターさん」

「ありがとう、お兄ちゃん！」

スポミーは数日安静にすればすっかり治るだろう、と聞かされて喜ぶ少年の両親。元に戻った時には、前のように「仲睦まじく」過ごす日々が戻ってくるだろうと、少年の母親は言った。

「でも、まさかこの辺りでそんな凶悪なポケモンが出るなんて……この子から聞いた時はびっくりしました。でも、ふたりともちゃんと帰ってこられて本当に良かった」

どうやら、この両親の間ではこういうことになっているようだ。表面上は目を細めて笑ってみせるハマゴであったが、いけしやあしやあと嘘を信じ込ませている少年のやり方に内心では、腸煮えたぎっている。

当然、表に出すような真似はしない。あくまでハマゴも真実を隠したまま、にこやかな態度で少年の両親に接して話を進め、食事を楽しむふりを見せていた。

歳相応な少年らしい態度。そしてハマゴの時に見せた癩癩を起こした糞ガキとしての態度。当然、あの両親の話を聞く限りでは前者のほうかただの仮面であるのだろうか。

「俺らも明日には発つんだが、スポミーはまだ完治していませんから今夜は“つきつきり”で過ごさせてくれねえか。いかんせん、凶悪なポケモンのダメージが深い。最後に一手間加えてえからな」

「私共から言えることはありません。ぜひ、スポミーを元気にしてあげてください。ね、ユンジ」

母親の言葉に、少年——ユンジは満面の笑みで頷いた。

「任しときな」

両親の方もグルなのか、という疑問もあった。だがハマゴもこうした事態の遭遇は職業柄、それなりにある方だ。ここまでのやり取りで大体の事情を察してしまふ。どうしてユンジ少年があのようなことをしでかすようになったのか。

結局のところ、くだらない、「よくあること」だ。地方が違えど人間の営みは何一つとして変わらない。

その夜も更けた頃。すっかり集落の住人は寝静まっていた。

ジラーチもボールの中ですっかりと眠っているため、起きているのはハマゴと、助手のキュウコンくらいなものだ。

患者であるスポミーの様子を見ながら、カリカリとバインダーの用紙に経過を書き記すハマゴ。キュウコンはその近くで水を沸かしながら、スポミーのプランターベッドに突き刺さる栄養剤を差し替えている。器用な尻尾使いは普通のキュウコンとまた違った特技なのだろう。

「……まあ、こんなもんか」

一通りの内容を書き終わったのだろう。コト、と彼はペンを置いた。

その横から、キュウコンの「じんつうりき」で差し出されるコーヒー。まだまだ眠る訳にはいかない。感謝の言葉をキュウコンに告げ、その首をガシガシと撫でてやったハマゴはプランターベッドで眠るスポミーの様子を覗き込んだ。

「大体は治ってきたな。蓄の方は……1週間もありやあ大丈夫だろ」

ピラツと蓄を指で開いて、その隙間から中の様子を見る。当然、スポミーがそれで体調を悪化させるへまはしない。

「そういうことだ。よかつたな、サンドバツクが直つてよ」
「……」

「隠れてねえで出てこいや、糞ガキ」

突然、ハマゴは扉の方に声をかける。

本人としては隠れているつもりだったのだろうが、廊下からもれた

月明かりが、隠れている少年の影を映し出している。開けっ放しにしてある扉から見えたその影にハマゴは気づいたというわけだ。

「なんで、なんで黙ってたんだよ」

「さあてね、悲劇ヅラしてんじゃねえや」

声をかけるが、ハマゴは相変わらずそちらの方を見ようとはしない。ずっとスポミーの触診を続け、そして何事かを用紙に書き記すばかり。

だが、彼はその状態を崩さずに言葉だけを続ける。

「言つとくが、オマエみたいな糞ガキに傷つけられたポケモン。ソイツらを見るのは初めてじゃねえんだ。最初は戸惑ったさ。んで、次はブチ切れた。それから先は……そういうもんだと思った。4回めからはパターンが有ることを知った」

「……パターン？」

眉をひそめて問う少年ユンジ。

一定の距離を保つユンジは、どうしていいのかわからず立ち尽くしたままに答えを待った。

「オマエ、随分甘やかされて育つたろ。スポミーは両親からの贈り物だ」

「ッ!？」

「それで、最近は親すらうっとおしく思い始めてる。……違うか？」

ユンジはあからさまに動揺した。

面識はまるで無いはずだ。それに、両親もこんな相手と出会ったなんて事は聞いた覚えがない。なのに、自分の家庭環境どころか、今ユンジ自身が抱いている感情すらもピタリと当ててみせたのだ。驚かないはずがない。

「それは——」

「言わなくていい。黙って聞け糞ガキ」

反論しようとする彼を押しとどめて、ハマゴは言う。

少年ユンジは、彼がいつのまにか、手に持っていたバインダーとペンを置いて向き直っている事に気がついた。

「よくある話なんだ。子供が可愛くて可愛くてしょうがねえ。だか

ら、子供の外面ばかり見てもつと甘やかそうとする。ソイツが何を考えているのかわからずにな？　するとどうだ、子供は親が自分と目を合わせていない事に気がついちまう」

ハッ、と息を呑むユンジ。まさにそれが今の状況だ。先ほどだってそう。ユンジ、と問いかけた母親が見ていたのは目ではなくユンジという全体像に過ぎない。

「そしてガキのほうは、愛情らしきものをもらっているが、何か足りなくてイライラしちまう。どうにも割り出せないイライラの発散に、とにかく目についた物を使う。俺が見てきたのはポケモンにその発散先にされてきたパターンだ。じゃないとドクターがこんなこと知るわけもねえだろ？」

面白そうにニタニタと笑うハマゴ。

彼の背から照らす電灯が影を作り、覆う影が彼の口元以外を覆い隠す。

「ほら、良くある話だな？

そう問いかけるハマゴ。あくまでこれは特別なことではないのだと、諭すように言い切る彼に、ユンジは手を握りしめる。言いたいことは山ほどある。そして、それら全てが言い返せない罵倒であることも分かる。何より、このハマゴというドクターが恐ろしくて仕方がない。

だとしても、どうしても言いたいことがあった。

「だ、だったら……どうしろって言うんだよ!？」

「知るか」

「はあ!？」

必死に絞り出した叫びは一蹴される。ユンジにしてみれば信じられない悲鳴が反射的に口から飛び出てきた。

ハマゴはキィ、と椅子を回して視線をそらす。再びスポミーの方に向き直った彼は、バインダーと何かしらの薬を手に持ち直した。真面目な話はこれでおしまい、ということだろうか。

「俺はよ、テメェらに関わって一個一個問題を解決するほどお人好し

じやねえ。だが、あえて選択肢を上げるなら、二つだ」

ツヤが戻ってきたな、とスポミーを撫でてつぶやくハマゴ。

提案はしているものの、彼の意識は完全にユンジから外れている。「スポミーを道具にしたいなら逃がせ。現状を変えたいならオマエが変われ。そんだけだ。難しいことは言わねえ。どう変わるかもオマエ次第。だが、憂さ晴らしにポケモンを巻き込むのだけはやめろ。破壊するなら独りしろ」

救いの手の後には、容赦のない暴言が突き刺さる。

ボロボロと心が痛み、ユンジの目からは涙がこぼれ落ちる。

「ぐ、う、うううううう……」

「そんで泣きたいならおもいつきり喚け。鬱々と貯めこむよりはマシだ」

「う……」

「おっ？」

何もかもがハマゴの言うとおりであった。

だからこそ、ユンジは大人に「反抗」してやろうと思つて泣く声を飲み込んだ。無理に我慢したせいで、流れ出る涙も、暑くなつて垂れ落ちる鼻水も勢いを増してくる。それでも、声を上げて泣きわめくような真似をしたくは無かった。

「……ま、いい子であろうとするんなら、さっさと寝ろ」

シツシツ、と手を振り払うハマゴはどこまでも冷たかった。

のっそりと、背景の一部のように固まっていたキュウコンが動き出してユンジに詰め寄つて来た。上から見下ろすキュウコンは、少年の体液が掛からないよう首根つこの服をつまみ上げると、部屋の外まで放り投げる。

「これ以上は診療の邪魔だ。ポケモンに関しては一週間後までに決めろ、糞ガキ」

ボタン、と閉まった扉。

完全に閉めだされたユンジは服の裾で顔を拭う。ひとしきり、ハマゴがいるであろう方向を睨みつけた少年は逃げ出すようにして自分の部屋に走つていった。

バタバタ、と近所迷惑な足音が遠ざかる様子を聞き届けたキュウコン。彼女はハマゴの方に不安そうな顔を向ける。ハマゴと二人っきりの状況で、彼女はこうして感情を露わにすることもあった。

「相変わらず妙なところで発揮するな、オマエの面倒見の良さ」

こういった案件に最も関わってきたハマゴ。その隣にいたのはキュウコンだ。

看護師としての役割を果たしてきたキュウコンは、自然とその患者たちとの関わりも多い。悪人面のハマゴではないからこそ、黙って聞いてくれるキュウコンに弱みを打ち明ける患者も少なくはなかった。

ポケモンからも、トレーナーからも。その不安を聴き続けたキュウコンは不動とクールな外見とは裏腹に、その内側には慈愛と奉仕の心が渦巻いている。ドクターの助手として、これほどふさわしいポケモンもいないだろう。

「俺は生憎、きつくしか当たれねえからな。その辺はこれからも任せろ、相棒よお」

故に、ハマゴもキュウコンが相棒であることを誇らしく思う。

ポンポン、と身内以外には中々見せない笑みを向けたハマゴ。彼は手に持ったバインダーから紙を抜き取った。ここまでの観察結果だ。最後に、別の白紙の方になにやら手順を書き記すと、ボールペンの尻の部分がカチリと鳴らされる。

彼はそのまま、バインダーと一式のペンをバックパックに戻して、小型のジョウロから水をふりかけ始めた。ちよぼちよぼと降りしきる水の音が、夜のさらなる寒さを演出する。

「頻度もまあまあ低くなってる。最初に思った以上にコイツは早く治りそうだ。……さ、テメエもお休みの時間だ。戻りなキュウコン」

モンスターボールから光を伸ばして、キュウコンをボールに戻す。あと一通り水と栄養剤を取り替えれば、この夜は十分だろう。蕾部分の完治は時間がかかるが、スポミー自身がひとしきり動けるようになるには1日あれば十分だ。もっとも、その後はしっかりと蕾部分の修復にあたってもらいたい。

それから、予備の栄養剤を挿し直した彼は、最後に幾つかの栄養剤

を煎じた後、自身も眠りにつく準備を整える。メガネを外し、ベッドに潜り込んだ彼はぼうつと天井を見上げて目を瞑る。

すう、と呼吸を整えて数分後。彼も疲れていたのだろう。すんなりと夢の世界に入り込んだ。

彼は、夢を見た。幼いころの夢だ。ハウエンが未曾有の危機に襲われ、照らされる太陽と降りしきる豪雨がせめぎあったあの一日。手違いで迷い込んだ施設。囚われたロコン。光る実験施設。晴れ渡る青空。若き英雄の報道。幼心の決心。

断片的な情報が、彼の夢という形で流れていく。ああ、きつとこれは感傷だ。何も知らない幼子を見て思い出された、自分の原点オリジンなのだろう。だからこそ、ハマゴは夢見心地に誓い直すのだ。

——夢は夢のままに終わらせないのだと。

そして、朝日はまた昇る。

「さて、これで処置は終わりだ。あとは栄養剤を差し替えて、ある程度水をやれば問題ない。無理にポケモンフーズ食わせようとはすんなよ。まだ中身は完全に治ったわけじゃねえからな」

翌日、プランターベッドに眠るスポミーを受け渡すハマゴの姿があった。

両親の方は畑仕事と、本来の仕事に向かっているためユンジ少年一人での対面になった。昨夜、ボロクソに言われたハマゴとの対面に怯えないはずもなく、強がってはいるものの、ユンジの足は震えている。

「……………」

「それから、結果は一週間後に決めろつつたな」
「なんだよ」

ぶつきらぼうに答えたユンジに、ハマゴは視線を合わせた。足を曲げて腰を折り、わざわざ同じ視線で相手をする。

見下される恐怖がいくらか和らいだユンジに、ハマゴの口撃が投下

された。

「その一週間、イライラだとか抜きにしてコイツと向き合え。んで、コイツが応えられる範囲でしつかり話し合え。その結果、コイツがまた傷ついて死ぬハメになったら俺の見る目が無かったってことだ」

「見る目……?」

「言つたら。こんなもんはありふれてるってな。つまりだ」

おかしいのだと言わんばかりにハマゴは笑って、立ち上がった。

「そこから有名なトレーナーになったやつだっているんだぜ」

「……」

目を見開いて驚くユンジに、ハマゴは引き絞ったデコピンをかました。

身を乗り出す彼の額から、バチンと指があたる。あとは残らない。ただの痛いだけのデコピン。それに続いて、戒めるようにハマゴは言った。

「じやなきや犯罪者だ。それは嫌だろ?」

このご時世、まっとうな職に就くには下手な汚点があるだけで将来に関わる。ましてや、ポケモンを自分の嫌がらせで殺してしまったともなれば尚更だ。

「しつかり覚えやがれ、な?」

「……うん」

子供は現実味のないことを言っても聞かない。空返事で終わって繰り返すだけ。だから、やらせて現実を覚えさせてやる。それがハマゴなりの子どもとの接し方だ。あえて恐ろしい態度を見せるのも、脅すように言葉で責めるのも、叱る事のできる人間として立ち続けようとしているからだ。

それでも変わらないなら、そこから先は自分の役割ではない。赤の他人が出来るのはそこまでが限界だ。心の侵略者になれるのは、長らく連れ添った時間を持つ者だけ。

こうしてハマゴが幾つかの道を示した上で、そのどれ選ぶのかはユンジが決めること。また振り返ってきた涙と、熱い感情がユンジの中から溢れ出そうとしている。何度も何度も泣かせるほど、それだけ強

く記憶に根付く。しつかり泣いたユンジを見届けて、彼はわっしわっしと頭をひつつかんだ。

「決まったようでは何より。んじゃ、俺は行く。スポミーのことは任せただぞ、糞ガキ」

「ガキじゃない……!」

「黙^だつてろ。俺が言うからにはまだまだガキだ」

それつきり、背を向けたハマゴは片手を上げて去っていった。何も言わず、大股で歩く彼の背中ほんの短時間で消え去ってしまう。取り残された少年は、大事に治療されているポケモンを見つめて佇んだ。

こぼれ落ちた涙がスポミーに落ちる。

まだ、スポミーは目を覚まさない。

熱い鼓動は、確かに一度響いたが。

ポンポン、と二度叩く。凶悪なツラのポケモンドクターは満足気に呟いた。

「これこれ、この重みだ」

先日の行商人から、ありつたけの材料を買い漁ったハマゴはずつしりと重みを増したバツクパツクを満足気に撫でていた。彼の頭からは、既にあの少年のことは抜け落ちている。確かにムカつきはしたが、それは一時的な感情にすぎないからだ。

彼ら自身が選んだ結果に、ズルズルと関わるのは良くない。いざというとき、誰かがなんとかしてくれる何て覚えてしまうのは、少年自身の成長にも悪いのだから。

そんなことを思っていると、腰のモンスターボールがポンツと鳴った。出てきたのは、ふあああ、と間の抜けたあくびをするジラーチ。昨日の夜から眠りっぱなしのねぼすけは、初の肉体労働にエネルギーを費やしたのだろうか。

「やつと起きたかドアホウ」

なあに? と寝ぼけた頭で目をこするジラーチ。

重苦しい話題に何一つ関わらなかつたねがいごとポケモン。どこまでも脳天気でマイペースな性格に、すこしばかり張り詰めていたハマゴもクハツと息を吐く。余分に膨らんだ空気が抜けるように、ハマゴの歩調は早まった。

「オチ担当かよ。いいから起きろ」

無理やりに定位置（バックパックの上）に放り投げられ、ジラーチは眠気も覚めて慌てたようにしがみつく。そして文句の代わりにハマゴの頭をバシバシと叩き始めるのだが――

「あゝ？」

世にも恐ろしい地獄の悪鬼のような声。眉間にシワを寄せ、片目を吊り上げた鬼も逃げ出す凶悪フェイスにピタリとその手を止める。当然、恐怖に固まるジラーチ。それに対して、また新たなからかいネタができたと内心想いつつ、笑ってごまかすポケモンドクター。

中々に奇妙な組み合わせは、これから面白おかしい珍道中を歩くことになるのだろう。

彼らの運命が、新たな交差点に差し掛かるのは……ほんの少しだけ、先の話だ。

「…そう、わかつたわ。ありがとうバトラーさん」

《いや、正直な所、こちらもお手あげだ。だけど、かの神話の存在とつながりを持つチャンピオンと話を出来て光栄に思うよ》

「もう、お世辞が上手いんだから。恋人さんが怒る前にしつかりね」

ピツ、とポケギアの通話終了ボタンを押す。

御存知の通り、彼女はシロナ。シンオウ地方の無敗を誇るポケモンチャンピオンであり、高名な考古学者である。

ハマゴと別れたシロナは、今現在についている本来の仕事を遂行している。ギンガ団残党の後を追って、彼女自身が独立した権限を持ったうえでの調査と追跡をしているのだ。

もちろん、彼女の職業としての本分を忘れたわけではない。だが、四天王をくぐり抜ける猛者は此処最近現れていないこと。そして先

程のバトラーが言ったように、シロナ自身が「伝説・神話の存在」とコネクションがあること。この二点から、考古学者としても、チャンピオンとしても彼女は現在落ち着いた段階にあるのだ。

「さて、報告にあった基地に来てみたけど……空っぽね」

彼女がいる薄暗い部屋には、木箱と機械の何かしらの部品。ドリーラーのものと思われるフチの破片ぐらいいしか落ちていない。がらんだものもぬけの殻だ。

これまで彼女は、何度かギンガ団が拠点としていた場所を見つけ出すことに成功している。だがその度にギンガ団のほうがいち早く察知して、拠点のすべての荷物とともに移動してしまっているのだ。

もちろん、見つけた場所が潜伏場所のホームだとは思っていない。シロナはまず、ハクタイビルのように過激派ギンガ団の支部から襲撃し、断片的ながらも情報を集めていくつもりだった。

だが、こうも見事に逃げられては敵わない。これまで幾つか置き去りにされた痕跡は見つけることが出来たが、それが重要な情報に関わっていた事は一度もなかった。下っ端団員の一人ですら、見つからない。

「あの組織、アカギの頃よりも徹底してるわね……」

アカギのいた頃は、過激派が主導権を握ってはいたものの、その計画のおかげで人目に触れる場所に幹部や組織の一部が直々に出張っていたため追い詰めやすかった。だが、今回は違う。

どこまでも徹底された隠蔽と、センサーに引っかかることすら無いステルスフィッシュ。もしかしたら、自分が今釣り上げようとしているのは川底に引っかかった苔でしか無いのではないか。そんなイメージすら抱かせる。

「サターンさんは仕事で忙しいし、マーズさんはもう一般人……せめて、アカギを先に確保すればジュピターをおびき出せるのだけど、無理ね」

シロナは、あの「英雄」と共に居たから知っている。

「破れた世界」。あの上下も左右も環境も法則も、全てが集められて積み重なり、しかしあまりにも自然に存在できる世界。あの場所にい

たアカギは、世界の深くへと消えてしまっている。

あの世界の主は未だに「破れた世界」を泳ぎまわっているのだろう。呼び出し、頼むことができればこの事件は簡単にカタがつく。だが、彼女が交流を持つ「神話の存在」は、そんな簡単に人間の雑事に関わってくれるわけもない。

そもそも交流を持てた事自体が奇跡的なのだ。そして、最初に取り決めた規定を外れる真似をシロナがしてしまえば……それはシロナを通して「人間」を見るかの存在が怒りを見せないはずがない。シンオウ、世界の人間は今度こそ破滅に陥る。

故に、シロナはアカギの搜索は無理だと断じた。

逆に言えば、ジユピターがどうやってアカギを取り戻そうとしているのか。それが問題だ。狙いはわかっているが、方法がわからない。もしかしたら、あちらもまだわかっていないのかもしれない。

堂々巡りの考えは、シロナの握る拳の力を強めていく。

張り詰めっぱなしの考えは、しかし深みにハマるほど無駄でしか無いだらうと、彼女は深い深いため息を吐き出した。

「申し訳ありません。また、逃げられていたようです……はい……はい……そうです、またよろしく願います」

つなげた通信は、彼女に協力してくれているギンガ団のアジトを突き止めた三人衆。だが、情報収集と隠密に特化した彼らは、あまりバトルの腕は良くはない。バトルの腕を引き換えに、その驚異的なまでの諜報能力があるとも言えるが。

ちなみに、彼ら三人衆はシロナが個人的に雇った取引相手だ。交換条件として、このシンオウ地方の地下で取れる宝石、しかも上質なものを要求されたが、何度か地下に自らもぐって掘り出す彼女にとって、タダ同然のものだった。

「しらたま・こんごうだま・はつきんだま」。あのやぶれた世界が現出したのが原因だろうか。地下からは「はつきんだま」も採れるようになってきている。だから、本当にシロナにとってデメリットらしいデメリットも無かったのだ。

それがシロナには不気味に感じられる。

だが、その家業の人間の中でも更に大当たりの人種だろう。
三人衆の名を、彼女はポツリと呟いた。

「ダークトリニティ、か」

その名前は、薄暗い空き部屋の闇に溶けこんでいく。

徒花揺れる先

花咲き誇る町、ソノオタウン。自然に溢れた花だけにではなく、風力発電機という人工の白い花もが咲く美しい街である。景観をさほど壊すこと無く、ゆったりとした回転と共に溶けこむ発電機はごく最近に造られたものだ。谷間の発電所が規模を拡大し始め、その戦略の一環としてソノオタウンにも話が通った。つまりはそういうことだった。

「ほお……こりやすげえ」

その町に足を踏み入れるものがまた一人。青い短髪、青いメガネ、そして強烈な三白眼と凶悪な面構え。子供に夜に会ったら泣かれる男フエンNo.1の称号を持つ、旅のポケモンドクター・ハマゴである。

彼のバックパックの上にもまた一匹。道中から徐々に広大になりはじめた花壇や自生する花々が、しかし乱雑に咲くことはなく、美しいグラデーションを描く様子に酔いしれるポケモン。我らがうっかり者ジラーチである。

彼らが足を踏み入れたソノオタウンは、タウンというシテイには劣る規模でありながらも、その面積をふんだんに利用した一面の花畑と、開けた土の道路。人が住み着き、長らく開発されても失われぬ土地の魅力は、季節ごとに顔を変えてそこに在り続ける。

美しいのは町並みだけではなく、そうした形であり続けようとする住人の心もそうであるのだろう。花々を好むポケモンが集まり、しかし独占しようとしてもしきれない程膨大な蜜は、自然と争いをもなくして包み込む。

どこか牧歌的な雰囲気すら感じられるその町を往く。ハマゴは、まず宿屋で一部屋借りてから町へ繰り出した。

テクテクと歩く途中では、ジャバジャバと花壇に水をやる少女の姿。傍らにつくフワンは発電所の辺りから流れてきたのをゲットしたのでろうか。誰もがすすくと、健やかな暮らしをしている。

此処じゃあ相当なことがない限り、自分の仕事は回ってこないだろ

う。ポケモンセンターひとつで十分に対処できる。そんなことを考えたハマゴは、この機会だからちようどいいとジラーチに問いかけた。

「っし、なあジラーチ」

歩みとともに上下左右に、バックパックの上でゆらゆら揺れるジラーチはなあに？ とハマゴを見下ろした。

「俺の助手になる気はねえか？ これからもスポミーみたいなのを治したいなら、それが出来るように教えてやってもいいぜ」

ぱあ、と顔を明るくしたジラーチ。この反応を見るからに、このうっかり大気圏で燃え尽きそうな願い事ポケモンもやる気はあるようだ。何事もやる気から入らなければ、上達どころか継続も出来ない。気持ちの持ちようと言うのは大切だ。ハマゴはそう言った所から、ジラーチに助手としての第一歩を期待する。

「そうだな、このシンオウに慣れたら少しずつ教えてやるよ。それまでは見て盗んどきな」

今すぐ教えて欲しいのか、あからさまに不満な顔をするジラーチ。ハマゴはそれを、笑って許せと受け流す。自分から振った話ではあるが、その後が続いた言葉もまた真理。

勝手知ったる我が家とはいかないのだ。当然ながら、この地でしか蔓延しない微妙な細菌の差や、採れるきのみの効力の差。そういったものを自分の持つ知識と擦りあわせて、予想と結果がイコールになれるよう、ハマゴ自身も勉強していく必要がある。「モモンのみ」一つでも、解毒作用の程や栄養などが変わってくるのだから。

さて、そんな会話やくだらない雑談をしながら街をめぐるハマゴが何をし始めたかというと、ぐるりと街の中の店舗を巡っている。そして陳列されている木の実を手にとって、同じ種類や違うものを購入してバックパックに放り込む。

それを繰り返すうちにとんでもない重量になってきているが、彼にとってこの程度はまだまだと言える。スポミーの少年と出会った集落ではパンパンに膨らんでいたバックパックも、この数日の間に出会った野生のポケモンや、野良試合のトレーナーのポケモンを癒やし

たせいで在庫は空っぽ近くなっていたからだ。漢方薬系の素材が残っているはご愛嬌か。

「へえ、あそこのお姉さんもついにお店開けたのねえ！」

そうして木の実巡りをしているハマゴが、新たに見つけた「ラムのみ」を手にとつてジロジロ見ている時、ふと近くのご婦人が話していた内容が耳に入ってきた。

どうやら、ソノオタウン唯一であり、最大のフラワーショップ「いろとりどり」の一人娘が自分だけの店を持つらしい。話に耳を傾けてみれば、元々は「クラボのみ」など、自家栽培していた木の実を旅人や町民に無料で配っていたのだが、最近は木の実の種類が増えたことも相まって、ソノオタウンの新たな名所にするため珍しい木の実も取り揃えた店をオープンしたらしい。

それを聞いたハマゴの反応は早かった。ラムのみを商品の陳列棚に戻すと、陽気に包まれ眠り込んだジラーチをボールに入れる。そして彼の足は話を繰り返していたご婦人の方へと向いた。

「あーつと、話のところがちよつと失礼。その店つてのはどこか分かるか？」

「え、ええ。いろいろとりどりのすぐ隣よ」

「ありがとよ。邪魔して悪かったな」

自分の外見と言動から、普通の人には怯まれる対象でしかないと感じているため、そそくさとその場を駆け足で去るハマゴ。温和な表情が常の両親から、どうしてこんな顔になった、とも言われているが彼としては自分の身の程をわきまえやすいからと気に入っている。

とまあ、それはともかくだ。

彼は地図で探りながら、町中を歩きまわってフラワーショップ「いろとりどり」へ到着する。その横に、小さいながらも真新しい店舗が建っていた。恐らくこれが、話に出てきた木の実を取り扱う店なのだろう。

ガヤガヤと人だかりは多く、オープンしたばかりなのにこれということは、よほど人徳があるのか、それとも自分のように目新しい木の実を探して此処に来たか。どちらにせよ、ここで傍観するハマゴでは

ない。

「つしや、出てこいキュウゴン！」

ボールから出てきたキュウゴンといえば、やれやれといったような表情だ。このようなことは過去に何度かあったのだろう。場所が変われど行動は何も変わらない主の様子に、少しばかり安堵の息をつく。

そんなキュウゴンにバツクパツクとジラーチを押し付けたハマゴは、バチンと両手で頬を挟み、叫ぶ。

「突っ込むかア！」

掛け声一喝。直後、まるでバーゲンセールのおばちゃんをかき分ける勇者のように、人だかりの中にハマゴは飛び込んでいった。直後、人波に揉まれ、押されるハマゴであるが、細身ながらも調査団にいたことのでついた筋肉が彼をスイスイと目的の場所へ行くことを助けている。そうして、まるで息が詰まる海の中から海面に到着した時のように、プハツと息を吐いた彼は店の中を一望できるような場所にたどり着いた。

そこは彼にとって桃源郷の一種だった。

色とりどりの木の実は、彼がホウエンで手に入れることが苦労したものすら並べられている。そして見たことのない木の実や、事前に食べておく事で一度だけ弱点をなくすことの出来る効果がある木の実など、見ただけで彼は察した。煎じ方次第でこれまで厄介だった症状を治すための新たな手法があるだろう、と。

早速新しいそれらに、よくわからない彼なりのテンションのスイツチが入ったところで手当たり次第の木の実を2個ずつ手に入れようと思い至る。一つは実験用、一つは栽培用だ。とあるツテで数を増やしてもらおうとあくどい笑みを浮かべていた彼は、また新たに発見したオレンのみが合体したような見た目の木の実に手を伸ばして――誰かの手とぶつかった。

「痛っ!? ちよ、何すんのよ!?!」

「おっと、悪いな」

威勢のいい高い声。天辺で角のように固められた特徴的な赤髪の

女性がハマゴの手がぶつかつた人物であつた。

「変に爪とか刺さつてねえか？」

「へ？ うん。別に大丈夫だけどき……」

すぐさま手を引つ込めて謝罪をしたおかげで、相手方の気も収まつたようだ。変な言いがかりをつけてくるような相手でなくて良かった。お互いにそう思いながらも、軽く会釈を交わしてまた人の波の中に押し戻されていく。

それからというもの。特に大きなハプニングになるようなことなく、ハマゴは店内をぐるりと一周して戦利品をレジに並べてお買い上げ。レジの後ろがつかえていたため、そのままバックパックを展開することなく、彼は網袋に入ったままの木の実を両手で抱えたまま人の波から弾き出されるように店を後にした。

両手にあるてんこもりの木の実を見て、管理を考えていない買い方にキュウコンはまた一つの大きな息をつく。とはいえ、バックパックに入らない程でもない。ひとまずはこちらに全てを詰めてから、栽培用の方は最寄りの転送システムを使えばいいだろう。

あれこれと今後の予定を詰めていくハマゴは、上機嫌になりながら次々とバックパックをふくらませていく。柔らかい木の実は潰れないうちに包み、硬い木の実はそのまま積んでいく。そうするうちにすっかり網袋の中にあつた木の実は——まだ余つていた。

やっぱりこうなるつたか、と首をふるキュウコン。彼女はわかつていたようにハマゴのバックパックの外側に括りつけられた物を「じんつうりき」で浮かせると、そのまま自分の体に装着。そうしてキュウコンの背中から垂れ下がったのは、両端に大きな袋が着いた鞍であつた。

「……すまん」

こうなることは入れる前から気づけ、とは思いが「イケるー」と思つてしまうのはよくあることではないだろうか。見事その思考に陥つたハマゴを前足でベシリと叩いた彼女は、先ほどの様子とは打って変わって黙々と詰替え作業をする彼に息をついてみせる。

そんな完璧とは程遠い様子に、キュウコンが鼻から出した短い息。

先ほどとは違った感情が寄せられたそれは、空気の中に溶け込んでいくのであった。

「……ああ、そういうことだ。やっといってくれ」

最寄りの転送システムがある場所はソノオタウンのポケモンセンターだった。そこでシステムを用いたハマゴは、木の実を育ててくれるツテ——彼の母親との会話に花を咲かせていた。

最近どうだ、ジラーチは元気か、キュウコンに迷惑かけてないか、子供泣かせてないか、また人やポケモンをおちよくっていないか。そんなハマゴの悪癖がシンオウ地方でも発揮されているのを感じ取ったのか、聞いてくる母親の質問は的確にハマゴの心をえぐりつついく。

話す度に、その情け容赦のない母の愛に打ちのめされている彼であったが、同時にどこまで行っても親は変わること無く待ち続けているのが嬉しいとも感じる。どんなに大人びた態度で子供に接していても、彼もまた一人の人間。自分の親の情に飢えているのだろう。

《それから、少しこつちで調べてみたのだけれど》

「んだよ？」

そう続けた母親は、今度は打って変わって心配そうな声色に変化する。長らく一緒にいたからこそ、ハマゴは真剣な話に違いないのだと耳を傾け始めた。

《シンオウ地方では“ポケモンハンター”っていう犯罪組織があるそうよ。大きなポケモンの大会とか、珍しいポケモンが集まるところを狙っていたみたい》

「狙っていた？ 今はどうだつてんだよ」

《組織の使っていた飛空艇ごと湖に沈んだって話だけど、何にしてもそう言うやつほどしつこく生きてたりするわ。あなたはバトルが苦手だし、昔っから何かと事件に巻き込まれてるじゃない？ それに、今はジラーチを連れているからどうにも心配で……とにかく気を

つけなさい」

「わあった、こつちでも調べとく。いぎとなつたらチャンピオン殿に任せて逃げるから安心しろよ母ちゃん」

通信を切った彼は、久しぶりの親との会話で温まった頭を、急激に冷ましていく。

ポケモンハンター。響きからして相当に頭の悪いネーミングだが、名は体を表すとは昔からよく言ったものだ。それに、バトルの大会なんかは出場者や来賓が恐ろしく強かったりすることから、襲撃者が逆にブタ箱送りになることも珍しくはない。

だが、母の話聞く限り、湖に沈む以外では襲撃は成功させてきたような口ぶりだった。それがどれだけ異常なことか、この世界に住む人間なら容易に想像することが出来る。

「物騒な世の中になつちまったもんだ」

はあ、と深い深いため息が出たのは仕方がないだろう。彼を含め、ハマゴ一行は何かため息が友達であるようだった。最も、この未来にも何度も何度もお付き合ひしていくのではあるが。

そんなこんなで一通りの旅の準備を終えたハマゴは、ポケモンセンターを出て近くのフリースペースに腰を落ち着けていた。彼が座るテーブルには、ソノオタウンの地図が広げられている。

旅路の迂回路として、彼はシンオウ地方各所の観光も目論んでいる。道中で何か面白い植物が見つかったり、ちょっとしたハプニングに遭遇するのも彼にとっての楽しみであるからだ。

そうして鼻歌を刻みながら、地図の上を滑らせていた指がピタ、と止まった。ある一点を覗き込んだ彼は、その場所へ行くためのルートを探り始める。この辺りは都市とは違って自分の足一本で歩き続けなければならぬが、そうそう遠い場所でもないようだ。

彼が行くと決めたその場所は、「ソノオの花畑」と言う名称がつけられていた。

「確かここは……あったあった」

この名称にどこかで聞き覚えがあった彼は、記憶の隅から引っ張りだした情報を頼りにソノオの案内書を読み込んでいく。すると、「あ

まいミツ」という単語にヒットした。

このあまいミツはミツハニーが作り出す独特のミツだ。ポケモンならその多くが種類を問わず好物で、ミツが収められたビンを野生のポケモンがいる場所で開けようものなら、たちまちに匂いにつられて襲いかかられるという代物。

しかし、それだけ美味しいということもあつて人間の食料としても使いみちはある。当然、その中に秘められた栄養素は栄養食として。そして薬効もある。当然、ハマゴが食いつかないはずもなかった。

先程までの木の実大好きオーラもどこへやら。今度はハチミツハスターになりきった彼は決意を新たにひとりごちる。

「すつと、アレだ。まずは花畑の管理人とここ行くか」

嗚呼、ここにもまたハチミツに惹かれた者が一人。

「はあ、これで治ってくればいいけど」

一方、不安げな声を漏らしてトボトボと、ハマゴと同じくソノオの花畑に向かって歩みを進めているものがいた。彼女は例の店舗の中でハマゴから手をぶつけられていた女性である。両手で抱える網袋。その中に入ったモモンヤラムといった状態異常によく効く木の実たちを見つめているが、どうにも顔色はすぐれない。

「もう！ なんだってあたしがこんなこと！」

うがーっ！ と天に向かってのけぞり、天に向かって吠えたかと思えば、すぐさま俯いて、彼女はぽつりと言葉をこぼす。

「……やめよつ、あたしが喚いたところで変わんないしさ」

快活そうな印象を受ける、キャミソールとデニムで身を固めた見た目の女性。彼女の感情は浮いては沈んで、を繰り返しているようである。それもこれも、彼女の持つポケモン「ブニャット」が寝込んでしまったのが始まりであった。

彼女のポケモンは元々体も丈夫で、見た目通りタフな体力がある。とても病気になるような前兆すら感じられなかったのだが、別に不摂生な生活をしていただけでもなし、ブニャットは唐突に苦しむような

素振りを見せてダウンしてしまった。

近くにポケモンセンターはあるが、彼女はすこしばかり、過去の負い目があつてそういったところには顔を出しづらい。また、各地を点々と移動しながらここ数年を過ごしている。ソノオの花畑に向かつているのは、現在の彼女が住まわせてもらっている場所が花畑の管理人の家であるからだつた。

もちろん、過去に何かしらあつたとはいえ、今の彼女は完全な一般人。罪といえる罪も全て精算された上で、ポケモン協会にも認められて日々を健やかに過ごすことを許されている。だが、他でもない彼女自身が自分をまだ許せていないのだ。

何より、その脳裏に根付くある男の姿も関係している。これが頭の中から綺麗サツパリ消え去つて初めて、彼女は負い目を捨て去り日の当たる場所へ飛び込むのだと決めていた。

「はあく。なんだつて、あたしも強情よねえ」

心なし、肩を落として呟いた。上を見上げれば、多少の雲はかかっているものの、晴天といつて差し支えない青空がこちらを見下ろしている。どこまでも広く、地平線に吸い込まれないかぎり、いつまでも続く無限の景色。

ざりつ、ざりつ、とりボンがついたスニーカーが土を踏みしめる。

さんと降り注ぐ太陽光が、露出した両腕をジリジリと焼く熱さを感じる。

自分の歩く音以外は、何も聞こえてこない。

どこことなく、世界の大きさと自分の小ささを見ながら、それでも世界を手に入れようとしたあの男のことが、やはり忘れられずに思い浮かぶ。大きく、そして広い世界の全てを嫌い、自分だけの世界をつくりあげようとしたあの男。

まだまだ未熟で成人もしていなかったからか、それとも他に興味を持てなかったから、はたまたあの男そのものが少し弱った心に漬け込む天才だったから？ いろんな理由が浮かんでは消えていく。まるで密室のシャボンのように、割れた雫も同じ所に落ちて、また同じ液体からシャボンが生まれて浮かびゆく。

無限にも思える繰り返しの問答を繰り返していくうちに、自分が今世話になつているソノオの花畑の管理人の家に到着した。お邪魔しまゝす、とお気楽な言葉を玄関に置いて、彼女は自分が借りている部屋に向かう。

ドアを開けた先には、丸くなって脂汗を流すブニヤットの姿が転がっていた。

「大丈夫？　これ、食べれる？」

無理、だという意志を示すため、ゆったり横に振られたブニヤットの頭。彼女は気を落として、差し出した木の実も、手に持っていた袋の中身もゴロゴロと部屋の中にぶちまける。

ポケモンの回復も、異常も、その全ては他人任せだった。トレーナーとしての知識は一通りあるにせよ、こんなにも苦しむポケモンを治すすべは流石にない。なけなしの知識から、何とか治せそうな新鮮な木の実を買ってきたが、そもそも食べられないのでは効果の程も確認できない。

だからといって無理やり食べさせるのも、自分のかわいかわいポケモンが吐き出す姿を見たくないという感情など、いろんな気持ちのごちゃごちゃになって、中々これ以上のアクションを起こせなかった。

途方に暮れて、苦しむブニヤットを見続けるしか無い。背中を擦れば多少は気が楽になるのか、とにかくブニヤットの反応を見ながら看病を続けている中でふと思う。自分のこんな誓い何て放り出して、ポケモンセンターに素直に駆け込めばよかった、と。

「あんたのこと、ちゃんと治せるところ行けばよかったね。ごめんね……」

「……」

「ブニヤット？」

だが、そんなものは気の迷いであるのだと。苦しみながらも視線を投げかけたブニヤットが下から見上げていた。ブニヤット自身、自分の主人がどれほど自分たちをよく育ててくれているのかをよく知っている。だから、簡単に信念を曲げるようなことはしてほしくない、

という期待もあったのだ。

ある意味でポケモンとトレーナーの最高の関係があるとも言えるだろう。最も、その信頼関係がきちんとした結果に繋がっていれば、言うことなしだったのではあるが。

「ちよつと、ブニャット!?!」

その意志が事態を好転させることができれば良かった。だが、生憎とこの雄大な世界は優しくもない。ぶり返したように腹痛が主張し始め、ブニャットの顔は苦しそうに歪められる。キリキリと痛む腹痛の他、せり上がるような嘔吐感もこみ上げてきた。

「だ、誰か……助けなさいよ……! ブニャットを助けてよ!」

自分ではどうしようもなくなつたと、自然と理解できた。だからこそ、彼女はもう誰かに頼る叫びを上げるしか無い。哀れなものだと見守ることしか出来ないのかと思われた、その時であった。

彼女のいる部屋の扉が、バンツと音を立てて開かれる。

「どうした!?!」

その髪色や鋭い目つきから「あの男」を連想させるが、まるで違う声。

白衣を来たドクターとの邂逅であった。

事の顛末

「ここがソノオの花畑か……名に違わずってやつだなこりやあ」

後の言葉は感嘆の息に塗りつぶされた。

一面に広がる花は、太陽の光を一身に受けて色鮮やかなグラデーションを作り出している。ここが丘のように盛り上がっているからか、まるで花壇が地平線まで続いているようにも見えた。

この星の全てが花でうめつくされている。そんな錯覚を引き起こしてしまいそうなほど雄大な自然の景色を見つめっていると、視界の端には水を降らせるポケモンや、同じく花畑の整備をしている人間の姿があった。

「おっ」

ハマゴが見つけた人物は、いかにも温和そうな恰幅のある体型である。実際に近づいてみればわかるが、身長もかなりある方だったらしい。ハマゴがその人物のとなりに着する頃には、身長は完全に頭一つ分ハマゴのほうが見下される形になってしまった。

「やあ、いらっしやい。観光かい？」

「どっちかって言うミツを買いに来た客だよ。よろしく」

ハマゴが握手のために手を差し伸ばすと、土だらけになった手では申し訳ないと握手は拒まれた。まあ仕方ないか、と手を引つ込めたハマゴに対し、男はすつとある一点を指差した。

「見てくれ。ちょうどミツハニーが来たみたいだ」

セリフの直後、ぶふううん……と羽音をかき鳴らしながら頭上をミツハニーが飛んで行く。花畑のとある一角に止まったミツハニーは、何やらそこにいたピークインの胴体にこしょこしょとはなのミツを渡した後、また花畑のどこかへと飛び立っていった。

「ああやって集めたミツの一部をもらっているんだ」

見てご覧、という彼の言葉とともにハマゴが辺りを見渡すと、先ほどのピークインとはまた別の個体を見かける。ハマゴが確認したことに頷いて、この花畑の管理人は話を続けた。

「この広い花畑にピークインはもう何体かいてね、縄張り争いをする

こともなく、協力してミツを作ってもらっているんだよ。あつと、それを買いに来たんだったね！　まずは私の家に案内するよ」

「あー、はい」

ハマゴが二の句を告げる前に移動を始めた管理人に、彼もまたついていく。どうやら、随分とマイペースな御仁のようだ。その分他の人間を置き去りにしてしまうくらいがあるようだが、こうした牧歌的な雰囲気の中でこんこんとあまいミツづくりと花畑の管理人をやっているのだから、逆にちよつど良いのかもしれない。

彼の案内に従って暫く進むと、丘の向こうから一軒家が見えてきた。特に何があるわけでもなく、順当に玄関にたどり着いた管理人は、並べられた靴を見ておや、と声を漏らした。

「どうやら、ちよつと同居人が帰って来てたみたいだけど、あまりに気にしないでくれ。彼女もいろいろとあるようだからね。さ、あまいミツはこつちだよ」
「ういっす」

相手が話を広げてくれるなら、別に突つかかるひつようも無いだろう。ハマゴはそう判断して、部屋の奥へと案内される。よく整えられた廊下をくぐってたどり着いたのはありふれたリビング。

そのの大きめの椅子にどかりと腰を落ち着けた管理人は、さてと、と一息ついて話し始めた。ハマゴもまた、それに応じてあまいミツの取引を開始する。

それからある程度の時間が経ってから、女性の助けを求める声が響いた。

「ッ!?　ブニヤットだあ?」

「これって……ハマゴくんは、ドクターだったね。こつちの部屋にきてくれ」

商談も切り上げ、ハマゴは管理人の男に案内されてとある部屋にたどり着く。切羽詰っている様子の声を聞いて、彼は管理人の言葉を待つ前にその扉を勢い良く開いた。

「どうした!?!」

そこに飛び込んできたのは、どこかで見たような赤髪の女性がブ

ニヤットに対して必死に呼びかけている様子だった。心配なのか、揺さぶろうと手を伸ばしていたのだが、ハマゴはその手をはたき落として「安静にさせる！」と叫んで一喝。そして自分も思わず叫んでしまった未熟さに、バツの悪そうな表情で女性に向かって言葉を放った。

「……あー、とりあえず俺が診るから下手に騒ぐな。いいな？」
「わかった……」

よし、と意識のスイッチを切り替えたハマゴは、ブニヤットの状態を確かめるために幾つかの器具を取り出して、それを用いてはブニヤットの容体を一つ一つ明らかにしていく。その他にも、見た目の症状からある程度の様子を察した彼は、もう「アレ」だろうなど当たりをつけた上で診察を続けた。

その上で、彼は思ったよりも、というか、完全に気が抜けた様子で腰にあるボールをつかみ、その開閉スイッチを押しした。

「ジラーチ、リフレッシュュだ」

手に持ったボールから出てきたジラーチは、まだ眠気が残っているのかガシガシと手で目をこすっている。そんなジラーチにいつものようにデコピンをかました彼は、「リフレッシュュ」をブニヤットに掛けるように指示した。

普通なら自身にしか効果のないこの技だが、バトルと違って切羽詰まっていない状況なら、その効力は格段に落ちるにしても、他人に掛けることが可能だ。キラキラとした小さな星のシャワーがブニヤットに降り注ぎ、苦しんでいたその表情はいくらか和らいでいく。

効力が低いにも関わらず、この程度で緩和されたということとは、そこまで重大な病気でもない。油断してしまえば下手に大きくなるだろうが、このブニヤットを襲った病名は……。

あたりをつけたハマゴはすつと顔を上げて向き直る。視線の先には、まだまだ不安げなこのブニヤットのトレーナーであろう女性だ。どこかで見覚えがあると思えば、あの店内で顔を合わせた相手。

「どうなのよ……？」

「こいつは……」

すつ、と首を横に振るハマゴ。

しかし、彼は気が抜けたように次の言葉を繰り出した。

「食あたり、つてか拾い食いか？　しかもこの辺に自生してるチビツタケだな」

「しよつ…食あたりいゝ!?!」

「症状…あぁつと、腹痛はいつからだ」

ハマゴの問いに、赤髪の女性は呆れたように言い放つ。

「き、昨日からよ」

「2日くらいは苦しむが、腹の中からすつかり出ちまえば治るやつだ。つまり、今日クソして寝れば治る。よかったな、毒性の高いキノコじゃなくてよ」

やれやれだ、と聴診器を外したハマゴ。今回ばかりはもう、何もすることはないと立ち上がった。ジラーチは自分のお手柄だ！と胸を張っていたが、あまりにもあんまりな結果であったため、その体制のままボールに戻されたジラーチ。ボールごしにお疲れと一言労られたが、それだけであった。

症状が和らいだブニヤツトとはいえ、先程まで話していた主人との真剣な話はどこへやら。今度は冷や汗を垂らして視線を外す。完全に自己責任なブニヤツトのつまみ食いと拾い食いが判明したばかりか、食あたりというなんとも言えぬ結果に赤髪の女性はあーもうつ！とひととき大きな声で不満を漏らし、へなへなと座り込んだ。「このおバカツ！　あれほど拾い食いするなって言ってるのにやっちやうんだからもう！」

「まあまあそこまでにしとけよ。昼間のよしみで許してやってくれ」
「昼間のもつて…あーつ！　見覚えあると想ったら、あんたあたしにぶつかって来たやつじゃない！　なんで白衣かと思えば医者だったわけ!?!」

ハマゴが諫めてみれば、今度は女性のほうもハマゴのことを思い出したのか指を刺して叫ぶ。

「おふたりとも。とりあえず、一旦話を落ち着けてからにしようか。ハマゴくんは私との商談もあることだしね」

そのまま騒がしい言い合いに発展するかと思ったところで、両手で制した管理人が横から口を出してきた。彼のセリフに、それもそうかと納得したところで、二人はヒートアップしかけた感情を元に戻したのであった。

それから、改めて管理人との商談を終えた二人は「あとは若いお二人で」などという戯れ言を放たれながら花畑の一角に放り出された。ブニャットのほうも歩き出せるようになるまで回復したらしく、気まぐすそうにトレーナーの方に顔を向けてからすつと何処かへ走っていった。おそらく、一旦落ち着いたため廁あたりに向かったのだろう。ハマゴのいうことが正しければ、あとは寝るだけで綺麗さっぱり完治出来るだろう。

「チビツタケつてのはコイツだ。短小だが、噛みごたえがあつて形は崩れないし、何より甘い。ガムみてえな食感つてのもある」

「うちのブニャットちゃんが食べちゃうのも納得ね……。てか、こんなのとっから見つけ出してきたのよあの子は」

はあ、と頭を抱えて息を吐く。

「まあ、ビビるのも無理はねえ。チビツタケは食ったポケモンには重度の食あたりにも似た症状を出すけど、どういうわけか腹から出ちまえばすつかり症状が収まるわけの分からんキノコだ。タマゲタケのポケモンになる前の姿とも言われてるが……。ま、いいだろ」

これ以上の解説よりも、再発を防ぐためにトレーナー自身に覚えさせることができればそれでいい。ハマゴは話を切り上げて、ドサツと草むらの上に倒れこんだ。ひんやり冷たい地面とほんのり温かい日差しのサンドイッチ。全身を包み込む自然の感触に、今回の騒動で張り詰めた気を紛らわせようとしていた。

「そーいや、あんたの名前聞いてなかったね」

倒れこんだハマゴに小さくありがとう、と呟いた彼女はそういえばと手をポンと置き思い出す。仰向けの彼に、赤髪の彼女は自己紹介を始めた。

「あたしはマーズ。今は普通の女の子やってますー！」

「普通……？ ま、いいや。俺はハマゴだ。流れのポケモンドクター

やってんだ。よろしく」

「何かツッコつけてんの」

シユツと指を立てて自己紹介したハマゴに、マーズから鋭いツッコミが入る。

やっぱりもう少し工夫したほうが良いかとの思いを胸に秘めながら、ハマゴはふと気になったことを彼女に聞くことにした。それは、ある意味で彼女を中心から抉りぬく話題であった。

「ああ、そうだ。ギンガ団の元幹部がこんなトコで何やってんだ？」

「あんだ、あたしのこと知ってんの!？」

「ジユピターに襲われた後、ちよいとな」

この数日の旅の中で、情報収集を怠ったわけではない。母親からの進言がある前から、ポケモンハンターはともかくギンガ団については既に探りを入れていた。今はシロナの言うとおり、現社長サターン率いる穏健派が宇宙の新エネルギー発見・開発に着手している。だが、アカギ健在のころのギンガ団がもたらした被害に関しても大方、ハマゴは頭のなかに入れていた。

その際にマーズの名前を調べ、その後の一般人に至るまでの境遇など、逆にジユピターやプルートのいった幹部連中に関しても名前と顔は頭のなかに叩きこんである。元々、世界の作り直しという壮大かつ危険な思想を持った連中だ。願いを叶える可能性を持つジラーチを狙わないとも限らない。

「あの馬鹿……！ まだ引きずってんの!？」

「どういふことだ？」

「というか、ジユピターは今何してんのよ!? 知ってるなら教えなさいー!」

そして目の前のマーズは、その話題を聞くやいなや叫びだしたのはこれである。とりあえず、ハマゴはマーズの剣幕に押されてこれまでの一部始終を語って聴かせる。このシンオウに到着した直後、過激派がポケモンセンターを倒壊させるほどの破壊活動を行っていたこと。シロナの話では、人間味のない下っ端団員がいた事。そしてジユピターがアカギのために、といいつつその場に現れたこと。

マーズは、どうやら知らされていなかったらしい。各地を回る中でも、彼女は何かと人目につかないような点々とした生活を続けていたせいで世情には疎い。そこを改めてハマゴに聞かされたことで、最初は黙って聞いていた彼女も、その顔を悲痛に歪めながら歯を食いしばって自らの感情に耐えるようになっていく。

「……ちよつとくらい相談してくれたって良いじゃない……同じ幹部のよしみじゃないの!」

肩を震わせるマーズ。彼女が零した言葉は、ジュピターの凶行に何の関与もしていないことがよく分かるものであった。だが、それに反応するハマゴ。いつの間にか起き上がった彼は、鋭い目つきでマーズを見据えていた。

「で、テメエはあいつらの活動に加担するの?」

これは、被害者側としての意見でもある。なにより、ポケモンをこれからも率先して傷つけていくようならタダでは済ませないという、ドクターとしても意志のこもった言葉。だがマーズも悪の組織で人をまとめる立ち位置だった人物。その視線を正面から受け止めて、目を瞑る。

「しないわ」

首を振って、絶対にと付け加えたマーズが続ける。

「私だって、もうアカギさまがつけた軛から開放されたいの。ギンガ団とあたしを繋いだ軛からね。それに……あの人はきつと、もう何も見ていない。どこにもいない。だからジュピターがこれ以上馬鹿をしないためにも止めるわ」

「そうかい。なら、俺からは何も言うこたねえや」

どこまでが真実なのか、ハマゴに判断する術はない。もしかしたら、この場で面倒な質問をした部外者から、逃れるためについた嘘かもしれない。もしかしたら、こんなことを言っておいてすぐさま犯行に移るかもしれない。

I F、イフ、もしかして。そんな言葉を羅列する前に、ハマゴは彼女の握りしめられた拳を見て判断した。跡が残り、血がにじむまで握りこまれた拳は自分も何度か経験したことがある。きつと痛みは感

じていないのだろう。痛みなんかを忘れるほど、激情に駆られているのだろうから。

「よっぼど、そのアカギってのはギンガ団にとってデカかったみてえだな」

「そうよ。新世界を説く、熱意にあふれた素晴らしき。そればかりか、世界を創るとまで言い切ったカリスマ。どこを取っても素晴らしいお方だったわ。だから、皆がついていった。あの方に心を動かされ、誰もが思いのままに動いたわ」

でもね、と付け加える。

「だからこそ、事の顛末をあの子供に聞いて、アカギさまを初めて疑った。それを信じたくなって、破れた世界ってのを探して……矮小な人間が足掻いたところで、どうしたって行けない伝説の類だったことにようやく気づいた。そして、そんな世界から脱出せず、私たちに連絡すら送らないアカギさまは私たちのことなんてどうでも良いんだったと思った」

気づけば、マーズはべらべらと心の中の全てを明かし始めていた。悩んでいたところに現れたのは、昔の同僚の今を語る事のできる人物だったこと。なにより、目の前にいるハマゴがアカギと見た目としての特徴に似通った点が幾つか見受けられるからだろう。

だが、アカギほど髪の色は薄くない。アカギほど知識を携えていない。遠目からでも、いくつでも相違点は挙げられる。でも、だからこそ少しでもそのヴィジョンを重ねてすべてを吐き出すことに躊躇いは感じられなかった。

「……いつまで喋る気かは知らねえが、まあなんとも抱え込んでしまったんなあ」

話半分のつもりだったが、想像以上にマーズは気が滅入っていたのかも知れない。ハマゴが相槌を打ちながら聞いてやれば、ここ最近の悩みやら精神のどこかにちらつくアカギの幻影を振り払いたいという内なる望みの全てが、ぶちまけられていた。

キリがない。生産性がない。なにより、まだ行動に起こしていない。だから、マーズがこれ以上深みに嵌らないようにハマゴは此処で

待ったをかけた。

パン、と柏手かしわでを合わせたことで、マーズの口はピタリと止まる。あまりにも過ぎた一方的な態度を取り続けてしまったのが今更恥ずかしくなったのか、マーズはバツがわるそうにそっぽを向いた。

「とりあえず、だ。お涙頂戴の半生語りはここまでにしようや」

「お涙…ってあんたねえ！」

「問題はテメエが今から何をしたいかだろうが。黙って聞いてりや、破れた世界とやらを探さなくなつてからは逃げるようにして生きてきただけだ。過去の罪？ 自責の念？ アカギを振り払いたい？

悩むのは良いが、どうにも吹っ切れたようには聞こえねえ」

だから、と彼は方向を示す。

「何を、どうするんだ？ 年齢もしたのガキに聞かせる暇がありやあ、とにかくその罪だかアカギやらをいつぺんに振り払うための丁度いい事が今起きてんだらうが」

「ジユピター……」

「そう、ソイツだ。俺でも分かる。まずはお前自身の手でソイツを何とかすりやあ、今までテメエに乗つかつてた全部を取っ払えるんじやねえのか？ ……ま、テメエ自身がどう考えてるのかなんざわからねえがな」

「……」

おどけたように言った彼の言葉を吟味して、マーズは言葉にならない声の残骸をボトリとこぼす。

言われるまで、どうして気づかなかつたのか。このマーズ様が一つの支えを失つた程度で、こうも言い負かされるとはなんと情けないことか。あの子供に負けるのはまだいいとして、こんなの、プルートにバトルで負けるようなものではないか。

マーズは顔を上げて、ハマゴを見据えた。

彼に重ねていたアカギの顔はぼやけて消え去り、初めて彼の本当の顔が見えた。

深い青の短髪。アカギよりも鋭く尖った目つき。シワのない軽薄そうな笑みは、アカギのそれとは正反対であった。似ている？ 何を

馬鹿な。こんな奴は、あの男の足元にも及ばないだろう。

そして何より、ハマゴが一体何を考えているのか。手に取るように分かる。それだけでも、あの男とは全く違うことが分かる。アカギ様……アカギは、自分たちの心を見透かす割に、その心の一片すら読み解くことをさせなかった。

どこか、錆びついた赤い鎖が千切れる音がした。

鎖だったのだ。あの方が作り出したものは全て。神を縛る鎖、人間の心を縛る鎖。がんじがらめにして、動かなくするくせにその鎖を手を持つアカギだけは自由にすることが出来る。きつと、目指したのもそんな世界。心のない世界とは、そういうことだったのではないだろうか。

そんな世界に暮らしたいか？ 答えは、嫌だ。

そんな世界を創る男が戻ってきて欲しいか？ その答えも、嫌だ

「ねえあんた」

「ん？」

「あたしに発破掛けたこと後悔しないでよね」

「はあ？」

いきなり何を言い出すんだ、と続けられるはずの言葉は遮られる事になった。マーズが突然立ち上がり、座り混んでいるハマゴに向かってビシッと指を突きつけたのだ。

これまで話の主導権を握ろうとしていたハマゴは、そんな突然の行動に啞然として口を半開きにしたマヌケな姿を晒す。ハンと嗤ってみせたマーズは、更に続ける。

「決めた！ あんた何かと詳しそうだし、ジユピターに会えそうだからついていってやるから！」

「はああああ!? なんでいきなりそうなる!?!」

「だから後悔しないでよねって言ったじゃない！」

「テメツ、そこは単身ジユピターのヤロウが潜伏しそうな場所に突っ込んで手柄上げて返ってくるんじゃないかよ!?!」

「あの陰湿女が好みそうな場所なんて知らないわよ！」

「言い切りやがったよこの元同僚……」

突然の大声のやり取りに、ハマゴのモンスターボールの中で眠っていたジラーチが出てくる。眠い目をこすりながら登場した空気の読めないポケモンに、二人は気づくこと無く言い争いの応酬を続ける。

「だあつ！　と髪をかきむしってハマゴが言い返し始める。」

「だとしても俺についてくる理由とかねえだろ!？」

「何かと言ってあたしを決起させたのあんたじゃないの！　男なら責任取りなさいよね!？」

「男が誰でも女の責任取れるわけねえだろうが。勝手にやってる勝手に!？」

「サターンならあたしの不手際全部処理してくれたつてのに、気の利かないやつね!？」

「他人にどんだけ迷惑かけてんだこのアマツ!？」

「誰がアマよつ!？」

次第に、先ほどの話題も関係ない口汚いだけの罵り合いに発展していく二人。

おろおろと二人を止めようとジラーチは手を伸ばしてアピールするが、いかんせん背が低すぎることと、ハマゴとマーズが喧嘩する互いの姿しか見ていないせいで、視界の隅にちらつくことすらできていない。

「……?」

騒ぎを聞きつけたのか、主人のいつもの痲癩を止めに来たのか。草花をかき分けながらブニャットもその場に登場。だが、自分を治してくれた医者に罵倒をぶつけるどころか、いつのまにやら両手でつかみ合つての押し合いに発展している主人の姿を見てポカンと口を開けることしかできていない。

ぎやあぎやあと子育て中の鳥よりも煩い言い合いは、いつしかタダの罵倒と見た目から探り当てる悪口の応酬となっていた。最終的に、日が傾き始めても戻ってこない同居人と取引相手が心配になった管理人が探しに来たのだが、それでもまだ訳の分からないやり取りをしている。

「ちよ、ちよつとふたりとも！　もう夜になるからひとまずは——」

「だ・か・ら！ あんたについていったって良いでしょ!？」

「そもそもの目的が違うのにも邪魔にしかならねえってんだよ
！」

「……仕方ないね」

最終的に、彼らのやり取りは管理人のお玉によって鎮火される。

かくして、ハマゴの旅路には騒がしい赤毛の女性加わることにな
りそうだ――

嵐のような

あの後、我に返ったハマゴから謝ったことで一悶着は収まった。それから一晩という時間が過ぎて、花畑の管理人に見送られながらも、この二人はソノオタウンに通じる一本道を歩いているところだった。並んで山のような荷物を背負うハマゴ。その横、荷造りを終えたマーズの肩には、白地に赤いラインの入ったかばんが掛けられていた。

「んで、マジでついてくんのかよ」

「あつたりまえよ！ 何のために準備したと思ってるの」

ぎっぎっ、と交差した腕を伸ばしながら歩くマーズ。彼女の後ろからはトコトコとブニヤットがついてきており、呑気にあくびなんかをしている。先日の騒動の発端だったことはもう忘れたのか、それとも忘れないのか。あからさまな態度のブニヤットを露骨に無視しながらマーズはハマゴの隣を歩いていった。

やる気十分な彼女には悪いが、実際のところハマゴにとっては嬉しくない提案である。彼は自由気ままな一人旅に、自分だけの時間を費やして新薬の研究や土地病の調査などでドクターとしての腕を上げる予定だった。だが、あからさまに厄介事の種となる人物がついてくればそれらの時間が削られるどころか、過激派ギンガ団の騒動に巻き込まれることはほぼ確定するだろう。

何度も言うようだが、ハマゴのバトルの腕はからつきしだ。ここぞ、というタイミングで出すべき指示はわからないし、キュウコンも戦闘用の技は攻撃に使えるほどの出力を出せない。むしろ水を温めてお湯にする、瓦礫をどかすなど、器用な部分と大雑把な部分が明らかにバトルとは別ベクトルで存在している。

過去の事件からお墨付きの強いトレーナーがそばにいる、と思えばギンガ団以外の厄介事の際に頼れる存在かも知れないが、ハマゴはそもそもそういうトラブルを生み出さないように心がけた人物対処を行う。

そういう意味では、完全にマーズという存在はハマゴ一行の中では浮いた立ち位置になるだろう。

「で、あんたはどこ向かってんの？」

「……マサゴタウンだよ。ナナカマド博士んとこ尋ねるつもりだ」

「そ。じゃあ行きましよ」

「はあ……つたく」

そんな中でこの物言いである。完全にアウエーとして扱おうにも、話の主導権を握るのは常にマーズが先んじるだろう。強引な同行者になつくりと肩を落としながらも、ハマゴはしゃーねえか、とつぶやかざるをえない。

話は変わるが、それに対して嬉しいこともある。おおよそ一晚粘つた結果、実験・料理などにふんだんに使用できる量のあまいミツが元来の価格の4割引きで入手することが出来たのである。

今後の研究次第では大量購入することを検討した上での初期価格といったところだ。管理人の方も元手がほぼタダであることなどから商売をする気はなかったようで、むしろどんどん食えと言わんばかりに寄越してきた。一晚に渡る交渉は、ハマゴから「もっと高く売れ」と、見ている方が心配になりそうなほど利益を求めない管理人に値上げを薦めるためのものであった……というのは余談だろう。

ともかく、そんな調子で始まったギスギスな二人の旅路は、ソノオタウンから離れることで第一歩が踏み出された。

ナナカマド博士の研究所があるマサゴタウンまではまだ遠く、間にシンオウの大都市コトブキシティと、幾つかの街を経由する必要がある。ハクタイの大森林程でもないが、小さな森や丘が数多く点在する厳しい道のりだ。

「さつて、遅れないでよねブニヤット」

気分もノリノリなマーズを一瞥して、地図を眺めたハマゴは、とりあえずは無料で宿泊することが可能なポケモンセンターをなるべく多めに経由するルートを探し始める。ハマゴとしては野宿を多用する最短ルートでも全く構わないが、同行することになったマーズは「それらしい」女性である。そういった所で悟らせない配慮をしていく辺り、こうした相手の扱いにも慣れてきているのだろう。ドクターというのは本当に様々な人種、ポケモンと出会う仕事なのだから。

ハマゴは眉間に寄せるシワを強くしながら、ズカズカとマーズの前に行く。こういう時は自分が率先することで、ついてくるであろうことはわかっているからだ。

マーズはそれに乗せられつつ、歩調を早めながらもハマゴの後を追う形になった。後方では、ソノオが遠く、木々の景色の中に埋もれていく。はたと足を止めて、一度だけそちらを振り向いたマーズ。

「……」

「何してやがる。置いてくぞアホ女」

「誰がアホですってえ!？」

せっかくの感傷にひたる時間も、ハマゴにとっては知らぬ事情。マーズに暴言を吐きながら、後ろ髪を惹かれる癖がある彼女を導こうとハマゴは歩く。無理矢理感はあるだろうが、一度長い付き合いになる事が確定した相手だ。

面倒で重い事情だ。本当に、嫌になる。だが、まずは忘れさせようと彼は思う。このめんどくささも忘れて、ついでにマーズのアカギに對する思いも忘れさせる。寄せたシワの数だけ、しかし彼は考えるのだ。

盛大な溜息とともに、厄介事の種を二つも抱えながら。

とある森林地帯を歩く中、ハマゴは早める足を一旦止めて手のひらを上に向ける。

すると、降ってきた一粒の雫が彼の手を濡らす。

「……降ってきたか。こりやすく土砂降りになるな」

「はあ!? ちょっと、雨宿り場所探さないと! ポケモンセンターはまだなの?」

「あと3キロ先だ。んで、雨は……嗚呼、もう降つてきやがったな」

ポツ、ポツ、ポツ。最初はそれだけしかなかったのに、葉に掛かる雨粒は彼らが話している間にも激しくなった。数秒後にはザアアアア、と降りしきる豪雨になってハマゴたちを襲う自然の脅威。上を見上げれば、随分と分厚い雲が空を覆っている。上空は風が

強いのだろう。ハマゴたちが気づかない間に雲の移動もずいぶん早い。

数秒も見上げて立ち止まれば、たったそれだけで服の内側まで雨が染みこんできた。生暖かい独特の感触と、どこか鼻につく雨の匂いに包まれる。懐かしい感触に、ハマゴは口角を釣り上げて嗤ってみせた。

「はっはー、びしょ濡れだな」

片手を伸ばし、天に向かって手のひらを広げる彼。

そんなハマゴにマーズの突っ込みが入る。

「言ってる場合じゃないでしょ!」

「そう焦んなよ。今更だろ?」

あくまでもマイペースに彼は言う。ホウエン地方の人間御用達のポケナビを取り出すと、ナビの記録容量にぶち込んだシンオウ地方のマップを見ながら、水滴で滲んだ画面を覗き込んだ。トントン、と二回ほどタツチすれば、拡大された現在地の地形が表記される。

ふむ、とポケナビを持つていない方の手で彼は顎に手をやった。

「近くに崖の横穴があるみてえだな。方向は……あっちだ」

指をさす。そんな彼は、既に頭から足の先まで、ぐじゅぐじゅと音を立てる程の濡れネズミ。来いよ、とあまり焦ること無く歩くハマゴにつられたのか、多少の寒さに全身を震わせながらもマーズは彼の歩調に合わせることにしたようだ。

雨雲がやってきた方向が上流だったのか、隣の川を見てみれば、溢れ出さんばかりの茶色い濁流の様相だ。巻き込まれればただでは済まない。そのイメージを抱いてしまったために、ぞつとして顔を青くするマーズ。氾濫する水量と共に流木も流れている。想像通り、川に落ちてしまえば命の保証はない。

最悪の想像で顔をひきつらせる彼女に、しやあねえなと感じたハマゴは、少しばかり歩調を早めることにする。すると、ぬかるんだ泥だらけの地面が、少し早まった歩調とともにびよんびよんと、草の根をかき分けて飛び跳ねては靴下や裾を汚していった。

そんな調子で辿り着いた横穴は、かなり頑丈な作り。土砂降りかひ

どくなつたところで、崩落の危険も無いだろう。キョロキョロと向こう側を覗き込みながら入り込んだ彼らは、一緒に入ってきた出迎への横風に体をブルリと震わせた。

「うえー…べちよべちよじゃない……」

「出てこいキュウゴン！」

一人嘆くマーズを尻目に、ハマゴは当然だと言わんばかりにキュウコンを繰り出した。

出てきてすぐ、キュウコンは何も言わずに炎を口にたくわえる。ボウツと燃え上がる彼女の炎に、いち早くマーズが駆け寄って体を温めようとしていた。

「こっちは火種、分けとくか」

隣で濡れた胸元などを隠して恥じらう女がいたが、まるで興味が無いかのように相手にしないハマゴ。彼は構わず、「しんぴのまもり」の効果を染み込ませた、特性の防水バックパックをいじり始める。ゴソゴソと松明一式を取り出して、洞穴内の壁と、中央部に設置する。パチパチ弾けた火の粉が飛ぶが、それを受けてキュウコンは気持ちよさ気に嘶いた。

照らしだされた洞穴に、暖かさと明かりが息づき始める。ほう、と無意識にはかれたマーズの息がこの場の安全さを表していた。

「ほらよ」

「え？」

そんな中、唐突にマーズへ手渡されたのは3つ目の火種。

一本の松明だった。

「着替えんだろ。ほら、そっちの岩陰行って来い」

「……気が効くんだけか朴念仁なんだかわからないわね、あんた」

「医者がいちいち女体で興奮するかっての。人間も診るんだよ」

「あーもう、良いわよめんどくさい。そのまま持つてて」

マーズの方も彼の無頓着さに負けたのだろう。その場で脱ぎ始めると、下着だけの姿となった。ただし、その頬は炎で温まったものは別の赤らみを見せていたが。

ハマゴも別にいいかと遠慮の欠片も見出さず、トランクス一丁に

なって白衣を含めた上着の全てを脱ぎ捨て、バックパックに詰まっていた短い棒をカシヤカシヤと組み立てる。

「はい、これ干しといて」

「わあーっただよお姫様。あとタオルもってけ」

「ん、ありがと」

そうして出来上がった即席の物干し竿に服を掛けて、二人の服が焚き火の周りを囲った。流石に下着まではその場で脱ぐのはためらわれたのか、上着を預けたマーズが岩陰に隠れて、ゴソゴソ体を拭いたり着替えたりと、十数秒後に戻ってくる。先程より少し顔を赤らめつつ、手に持つ下着は隠しながらだったが。

彼女は着替えた下着を自分の荷物に戻し、手に取った。

「ほんと災難ったらありやしないわ！ あんた雨男だったりする？」

ブラとパンティー一丁から、替えのボトムを履きながらに彼女は言う。

対して、彼は興味もなさ気にあくび混じりにこう返した。

「さあなあ。厄介事は俺の人生のパートナーだと思うが」

少し遅れて、ボウ、とキュウコンの吹いた炎が燃え上がる。二人が話している間に、キュウコンは洞穴内に落ちていた枯れ木などを拾って火種を多めに作っていたらしい。流石と言おうか、本当に気が利くポケモンである。しかし、そんな彼女のおせっかいに、ハマゴは手で制して待ったをかけた。

「おっといけねえ、遅かったか」

「わっ!？」

ゴツゴツとした岩肌を照らし尽くし、一層明るくなった洞穴の天井には、ズバットやゴルバットといったポケモンが逆さになって吊り下がっていたのである。炎で照らされたことで不愉快になったのか、顔をしかめたゴルバット達に短めの謝罪をしたハマゴは、キュウコンにすぐさま炎を収めるように言った。

炎は少しずつ縮み、彼らの体を温める程度で十分な熱量になる。同時に、減った光量はゴルバットたちがいる天井に届くよりも少し弱い程度で収まった。

「こんだけ大きめの横穴だ。いてもおかしくねえか」
「びつくりしたわよ、もう……」

はあと胸元に手を当てて安堵の息を吐くマーズ。テンガン山での作戦時にも、ああして大量に吊り下がったゴルバット達があった。あの時はアカギの命令で邪魔なポケモン全てを蹴散らしていたが、逆襲にあった時の部下は何人かが再起不能にされている。今ではそれほどの手数で攻める事が出来ないため、下手に刺激すれば無事では済まなかっただろう。

しかし、マーズが思い出している間にも百面相が繰り広げられていたのか、ハマゴはジト目で彼女の様子を観察していた。こんな些細な要素でも、過去にまた引きずられそうになっている面倒な女だ、という思いを抱くのも無理は無いだろう。

彼は立ち上がって、トランクスの上に替えの上着などで身を固めると、白衣は着ずにザリザリと洞穴の中を移動した。

「よ、と」

燃やさなかった小枝を一掴み手にとって、ハマゴは中央の焚き火に投げ入れる。

パチンとまた火の粉が弾けた。

彼はごうごうと燃え盛る炎を瞳に映し出しながら、ふっと息をついてみせる。

「さあて、ここから忙しくなるかもなあ」

「どういう意味よ？」

不意に彼が呟いた言葉に首を傾げたマーズ。

「もう少しすりや分かる……ほら、来やがった」

さあて、と腕をまくり上げる彼は洞穴の入り口から集う多くの影に向き直った。

当然ながら、それらの正体はポケモンだ。しかも、おそらくはこの洞穴の主とその仲間たちといったところだろうか。しばらくは何故か明るい洞穴内を警戒するように足を進めていたが、ハマゴたちの姿を確認するや否や、縄張りへ勝手に入ったよそ者への威嚇を始める。

「ガバイト、ビードル、キルリアか。ボスはあるキルリアかね」

言われた中でも、唯一攻撃態勢に入っていないのはキルリアだ。しかし、キルリアは守られる立場にしては少々顔つきが鋭い。おそらく指示を出せるようなポケモンサークルのお姫様、しかし前線のリーダーでもあるといったところだろうか。見た目と中身が吊上あわないのはどこも一緒である。

「ちよつと、どうするつもり？ ていうかキルリアって……」

小声で話しかけてきた彼女に、心配はいらねえよと彼は笑った。

焚き火の側から移動した彼はキルリアの前に歩き始めると、一度頭を下げた。

「悪かった、ここは譲る。だが、端っこくらいは使わせてくれや。なんもしねえさ」

両手を広げて武器も害意も無いことをアピールしたハマゴ。ガバイトはキルリアの方を見て指示を仰いだ。だが、キルリアは首を振って否定。すると、ガバイトの光って技の態勢を整えていた腕ヒレが元に戻り、ビーダルの方も鋭く尖らせていた目つきをゆるめていた。

次に、彼はキュウコンに指示を出して新しい火種を持つ。すると、マーズを連れたって服を掛けた物干し竿やらを回収して洞穴の隅の方へと移動した。そこでもう一つの焚き火を燃え上がらせた彼は、襲ってこない野生のポケモンたち悪かったなと呼びかける。キルリアは問題ない、と言わんばかりに片手を上げるだけで彼への返答とした。

先程までハマゴたちが使っていた焚き火の前に移動した三体のポケモン。キルリアを中心に、ガバイトとビーダルは炎に当たりながら何やら楽しそうに話し始めていた。残念ながら鳴き声を変換して人間の言葉にすることは出来ないのです、その内容はうかがい知れなかったが。

どちらにせよ、衝突を避けたハマゴの手慣れた様子にマーズとしては感嘆の様相を見せるばかりである。野生ポケモンとのやり取りをほとんどしたことがない彼女としても、物珍しい光景だったのだろう。

「上手く行っちゃった」

「余計な刺激はしねえ方がいい。ソイツらの事情に首突っ込むならまだしも、不干渉だとわかりや過激なやつ以外、人間よかよつぽど心が広いもんだよ、ポケモンってやつはな」

ファウンスの調査団として活動していたからこそその言葉だ。こちらが礼儀を見せて、しっかりと彼らのためになることをしてやれば、その地を荒らしたり、ポケモンを傷つけたりと非道な真似をしないかぎり黙認してくれる。

誰もがわかつているだろうが、ただの野生動物ではないのだ。ポケモンは、その全てが人のように喜怒哀楽を持ち、人を超えた身体能力を持ち、人に寄り添える心を持つ。そのことをしっかりとわかって、同等以上のものとして接してくる相手は無碍にするのは、外道な奴しかない。人間と変わらない。

様々な思いを抱えながらも、時間だけは同じように過ぎていく。

その後はすっかり乾いた服をひとまずの形で畳み、それぞれの荷物に戻す二人。しかし雲の動きも早いが、かなり多く連なっているのか中々雨が止むことはない。

「ふ、あああ……はふっ……」

そのうちに、マーズはうつらうつらと船を漕ぎ始めて、フラツと横に倒れこむ。しかし、ボールから出てきたブニャットが彼女の頭を受け止め、ハマゴはそんな彼女らに枕の一つを投げ渡した。

静かな時間だけが過ぎていく中、くああっ、と大口を開けたキュウコンのあくびの音が洞穴の中に響く。キュウコンも眠くなってきたのだろう。そろそろ焚き火のための枯れ枝も無くなってきたため、ハマゴはすつと立ち上がった。

「……はぁ」

外の雨はまだ止まず。

多少高く傾いている作りのおかげで、外から泥水が流れてくることこそ無かったが、その勢いはとどまるところを知らない。ざんざんぶりの外の雨音が洞穴の中に響き続けているのは、なんとも眠さを助長した。

確かに眠い。それでもやらなければならないことが出来た、と。彼

は降りしきる雨と洞穴のちょうど境目の辺りにまで歩み寄った。

風が吹き、まるで波打つように雨には白いグラデーションが描かれている。雷こそ鳴り響いてはいないが、ハマゴは視界も悪くなった雨粒の向こう側に、真つ黒に染まった雷雲が近づいてきている様子を見た。あと1時間もしないうちに、この辺りには稲光が落ち始めるだろう。

彼はあちこち見て回るが、今のような情報を得るためではない。時折風に吹かれて跳ねた水を多少顔にかぶりながらも、辺りをくまなく睨みつけるようにして見張っていた。

「……チツ、精神擦り減っちゃうな」

ジラーチがボールの中ですやすやと眠っていることを確認して、彼はそんなことを呟いた。マグマ団残党。ジラーチを探しまわっていたあの連中は現れなかったが、あれほどの人数を含めたうえでの探索をしていたのだ。決して、些細な目的程度ではない。

それどころか、奴らが活動するための一つの指針である可能性も捨てきれない。その証明は、バトラーが召喚したグラードンモドキのことである。真実を聞かされているハマゴとしては、マグマ団の中でも狂信的な奴らは普通にやりかねないと考えている。出航の時こそ、その姿を表すこともしなかった。だが、それ以降、時期をずらして地方を渡つてこないとは限らない。

その全てが杞憂であればいい。だが、ハマゴは自分の被害妄想にすぎないにしても、このジラーチが起きている限りの平穩は守りたいとも思っていた。この大雨で拠点を失って気が立ったポケモンが襲つてこないとも限らない。こんな豪雨の中、混乱に乗じて犯罪者が馬鹿をやらかさないと限らない。確率が限りなく薄いとしても、可能性という点でいばありえないと言いつれ切れない。

片手で頭を抱えて、ヤキが回つたなど彼は自嘲する。

乱暴に髪を掻きむしるように手を降ろした彼は、ひとまずは何もおきないだろうと、今度こそ安堵してみせた。家や施設といった場所に止まらないかぎり、何度も繰り返し返したこの最終確認。これで何かしらが引つかからないよう、何度も何度も祈りながら。

「キユウコンも寝ちまったか」

焚き火の前に戻った彼は、小さくなった火の中に乾かした樹の枝を幾つかくべる。場所を譲った洞穴中央のポケモン一行も、ビーダルとガバイトが交互に寝てキルリアを守っているようだ。ここで無遠慮に話しかけて、ささくれだった心を癒やすための話し相手にするのも一興だが、ハマゴはあえて心のなかに蓋をした。

洞穴の壁に背中を預けて座り込む。ひととき大きなあくびとともに、目をつむったハマゴは懐かしい景色を思い浮かべる。緑と石塔に包まれた太古の意志が息づくファウンスを。父親とともに初めて駆け巡った時の景色を。

ゆつくりと、彼の意識は黒に染められていく。やがて、その洞穴の中には規則正しい寝息の音が加えられた。

翌日、雨がウソのように晴れ渡り、さんさんとした日光が大地を照らし出していた。残った水滴は重力に惹かれて落ちていき、葉の一枚を伝うころには大きな一滴となって地面に落ちる。土に染み込んだ水は、やがてその木の根から吸い込まれて新たな循環の一つとなるだろう。

「ん〜、いい気持ち」

「あんま走んなよ。泥が跳ねるぞ」

「わかってるわよ」

怒られながらも、雨で少しばかり鬱々としていたのかも知れない。マーズは気分を紛らわせるように、水が反射する光とが作る自然の風景を堪能していた。

まだぐじゆりと湿った音を立てる土を踏みしめながら、ハマゴたちはキルリアたちが起きるよりも早く洞穴を出ているらしい。結局皆寝てしまったガバイトたち、その隣に置き土産と言わんばかりに、モモンを初めとした食用にもなる木の実を置いていったのは、宿泊代金の代わりだろう。

「それにしても、お腹すいたあ」

「昼間で待ってる。どのみちこの辺じゃあグシャグシャで飯の用意もやりづれえ」

「今すぐ食べられるもん無いの?」

「暴君かよ。話し聞いてたか?」

「そんなことよりお腹すいたの」

額に井を浮かべながら、彼はつぶやく。

「クソツタレ女め」

「なーんか言ったあ? っとと」

彼女は突然投げられた「ナナの実」を受け止めつつも、まあこれでもいいかとかぶりつく。甘さが目立つが、しっかりと舌に残る苦さも相まって単調に過ぎない味の変化が舌を刺激する。

食べ終わったタイミングでもう一個を投げ渡されたマーズは、何か言いたげにひと睨み効かせるが、そもそもそちらを見ていないハマゴはどこ吹く風と言った態度である。今度は、マーズのほうが苛立ち混じりになってムシヤリと木の実をついばんだ。

寿に訪れた命

「……これで、よいかの」

どこまでもくたびれた様子で老人は呟いた。健康的に膨れていた体は痩せぎすに、いくらか綺麗にまとめられていた髪型は形だけで、毛が跳ねている。ストレスと不安から少しばかり白色が増した髪をガシガシと掻き篦りながら、プルートのプログラムの最後の一文字を打ち終えた。

薄暗い電灯、最小限の電力。ジュピターが適当に捕まえた野生の電気ポケモンから、無理やり電力をひり出した後、衰弱してくれば外に逃がすの繰り返し。大規模では足がつくからと、ひっそりと一匹ずつが補填されては交換される。どこまで行っても変わらなかった。

そんな、ポケモンにとっても、プルートにとっても不健康なディスプレイア。機材と木箱と乱雑な書類が散乱する空間で、彼はのしかかるように椅子へと体重を預けた。痛む目頭と額の奥の痛み。ズキズキと、情報処理に疲弊した老脳が悲鳴を上げる。

片手で額を抑えながら、プルートは挿入口から飛び出てきた一枚の真っ白なディスクを手にとった。

「できたぞジュピター」

「あら、早いわね」

完全に生命力を枯れ果てさせたような老人から、さらに搾取しているのはこの女性。アカギ体制のギンガ団だった頃から変わらない、コスチュームじみた服装と髪型。そこから何一つとして変わっていないように見える。

女性、ジュピターは長年待ち焦がれた恋人へキスをするように、その手渡されたディスクへ唇を落とすとした。

「安い接吻じゃの」

「所詮は触れるだけ。アタシは大事なものはとっておくタイプよ」

「はっ、アバズレが言いおるわ」

ギツ、と睨みつけるジュピター。

プルートは一瞬ビクリと肩を震わせるが、すぐさま襲ってきた倦怠

感に身を委ねた。

「それで成すことがあるのじやろう。どこへなりともさつさと行け」
「……フン！ 老いぼれが随分口達者になったわね。最近、何かあったのかしら？ あのマグマ団とかいう奴らがマシだとも思ってるの？ とんだ希望的観測ね」

「アカギに似て最終目的を吹聴するくせ、その過程を省くような奴に言われとう無いの。けなすばかりに口を開かず、たまには具体案や作戦内容を語って見せたらどうじゃ。実際、マグマ団の言葉以外に方法も確立させておらんかったくせにのう」

「私に生かしてもらってるだけの老いぼれめが……ホンツト、大きく出るじゃないの。洗脳装置、このディスク……そして最後のアレが完成した暁には解き放ってあげようかしら？」

「ふひやひや！ 流石、考えても案すら出なかった女は言うことが違うのう」

「黙りなさい」

目を細めて言うジュピター。

剣呑な光を携えた視線に、老人は喉から絞り出したように小さい呻きを返すばかりであった。

「…ま、いいわ。とりあえず行きましようかね？ ——コトブキシテイに」

階段に足を向けるジュピター。薄汚れたコンクリートを、ヒールの踵が踏み抜く。カアンと打ち鳴らされた音は、何かを知らせるゴングのようにも聞こえた。

乾き始めた地面を蹴って、女があつと指を挿す。

「ようやく見えてきたわ。もう、着替えも髪の毛もドロドロ！」

「そんだけ言える元気がありやあ十分だろ」

「ホンツトあんたって唐変木ね！ もう少し女の子に関して調べなさい」

「人体なんかよりポケモンのが先だつたの。まだシンオウの奴らは把

握しきったわけじゃねえからな」

はあ、とマーズは息を吐く。

「そう言う話題でもないでしょっ」

「わかった上で言っただよ」

二人はコトブキシティを目前にしていた。

立ち並ぶビルは、この途中に立ち寄った主要なシンオウの都市群の中でも最も多い。空港なども完備しているため、シンオウ地方の顔役とも言える大都市である。最新の技術や、地方を代表する腕時計型便利ツールの「ポケッチ」の開発も進んでいる。ポケッチカンパニーの前では、雇われのピエロが子どもたち相手に今日も元気に宣伝やサービスを行っていることだろう。

徐々に住宅街から都市部へと移り変わる町中、ハマゴたちはたどりに着いたポケモンセンターで荷物をおろして一服ついていた。

「さて、と」

時計を取り出したハマゴはまだ正午か、と呟いた。

マーズはある程度、持っていた「過去の意識」とやらが薄れたのか、本来の自分をさらけ出すようにシヨツピングに繰り出している。午前の間ににかけて、まだ戻ってきていない辺り溜め込んでいた反動でも来ているのだろうか？ ハマゴにそれを知るすべはないが、大方放っておいても問題は無いだろうと息をつく。

それよりも、本格的に起きたジラーチの方が問題だ。しばらく大人しくしていたが、ジラーチはこういった環境がガラツと変わったところでは興奮する性質である。森林地帯で興味深いものから開放された後は、見知らぬ人工の都市の細かな意匠、外観をこだわった街路樹、店内に並べられた商品の一つ一つ。

1千年という長い時を経て、大きく変化しきった人間の営みにも興味津々で顔をのぞかせている。自然豊かなソノオタウンやフエンとは全く違う、都会という場所に興奮は収まらないようだ。こうなってしまうえば、暫くはここを離れることに文句を垂れるだろう。

「わあーったよ。しばらくはここで観光させてやる。だから離れんじやねーぞ」

バックパックは降ろしたため、頭の上を新たな占領地としたジラーチは、ハマゴの言葉にぱあつと表情をほころばせた。

不安そうな表情はドコヘやら、気の向くままにハマゴの頭を引っ張っては、絡まった髪の毛の痛みを助長させることで、彼をあらゆるところに連れ回そうとする操縦者の完成である。

そんなジラーチ専用の移動マシンと化したハマゴも、最初こそはしゃいでいるのだからしょうがないとしぶしぶ従っていたが、自身の特徴的な青い髪の毛からブチンという音と、ハラハラ飛んでく毛の数本が見えた瞬間に額の井の字もブツリと切れた。

「いい加減にしろよ」

最近のキレやすい若者である。ガツチリとアイアンクローではがねタイプのジラーチを掴んだハマゴは、顔を正面に合わせて流れるように言い放つ。

「調子に乗り過ぎるとロクな事になんねえよなあ？ ん？」

さすがの形相に、ジラーチも効果は抜群といったところか。ほのおタイプの怒声に顔を青ざめてコクコクと頷いてみせる。その両目の端から涙が溢れているのは仕方があるまい。例えるなら気弱な生徒が、ヤンキーに絡まれているようなものだ。そして、なにげにハマゴの言っていることは単なる脅しではなく正しいことなのだから反抗も出来ない。

「わかりやよろしい」

そういったハマゴはジラーチの羽衣部分をむんずと掴みあげ、ボストンバッグのように吊るして歩き始めた。両手足をだらりと重力に預けて揺れる珍しいポケモンと、どう見ても悪人面の白衣を纏った人物。通報必須な組み合わせが町中でそんなことをやっているのだから、周囲の視線は自ずと集まってしまう。

だがハマゴはそんな視線もまともに受け止めず、しかしジラーチに反省させるためバッグポケモンにしたまま街を練り歩き始めた。ヒソヒソという声すら、当然無視である。

「あんたら何やってんのよ……」

「よお、買い物終わったのか」

「結構よき気なアクセあったから、つい買っちゃった」

「程々にしとけよ。路銀がつきまってもテメエの分は払わねえぞ」

そんな彼らに話しかけたのは、ちょうど買い物袋を両手に吊るしたマーズであった。お気に入り入りのものはパソコンの無料倉庫にあずけて、各地で引き出しながら使っていくのだと上機嫌に語る。当然、彼女も今の生活になってからは金銭管理もしっかりしているので、ハマゴの心配には大丈夫だと自信満々に答えてみせる。

白いキャミソールを揺らしながらニシシと笑う彼女に、言っても聞きやしねえなど早々に放置を決め込んだハマゴは、ムチを振るようにジラーチを回して放り投げる。突然の出来事に油断していたジラーチはへぶつ、という間抜けた息を吐きながら彼の頭に乗せられた。

「今度はそこがお気に入りに入り？」

「まあ調子乗ってハゲる危険もねえからな。なあ、ジラーチ？」

「……程々にしときなさいよね」

その問いに、ジラーチは全力で首を縦に振った。

表情が真つ青なジラーチの様子に全てを察したマーズだったが、最初こそ「こんなかわいいポケモンになって仕打ちを！」と怒ってはいたものの、今となっては日常茶飯事と知っている。元悪の幹部だったという冷酷さながらにジラーチを切り捨てた。

さて、マーズとの合流。オコリザルの鼻の上もかくやという場所に乗っかり、カチンコチンでコミカルになったジラーチを乗せつつ一日は終わらない。マーズはまだ行ってみたいところがあると、彼らの手を引くように先導しはじめた。

「ドコ向かってんだ？」

「行けばわかるわよっ」

何やら上機嫌である。それほど彼女の興味を引くものがあつたのだらうか、と彼が頭をひねった矢先、さほど時間もかからず彼女の目的地にたどり着いた。

「ポケッチカンパニー……？？」

「あれ、ポケッチ知らないの？」

「知識としては知ってたんだがな。俺はポケナビがありやあ十分だし

よ」

「ええー？」

そう言つてハマゴが取り出したポケナビに、マーズは信じられないと声を上げる。

ハマゴのそれは、四角いコンパクトなORASタイプではない。一世代昔のタマゴの半分のような形をしたタイプだった。太さは手頃なコップ程度。ポケットに入れるにしても不格好であり、ズボンのポケットやベルトに引つ掛ければ多少は取り扱いやすいだろうが……とにかく、マーズにしてみれば我々で言う「ガラパゴス携帯電話」的な見解であつた。

「そんなのよりポケッチのが機能的だしかわいいってば！ ギンガ団のときは何気に使えなかつたし、結構あたしも憧れてたんだから」

「まあ使いやすいツールがあるならそれに越した事ことあねえがよ」

「よし決まり！ それじゃ早速買いに行きましょう！」

「強引だなあ、オイ」

買い物袋を左手に集中させ、空いた右手でハマゴを引つ張るマーズ。故郷のフエンタウンジムリーダー・アスナや此処で知り合ったシロナ。それらを含め、自分の知る女性はアクティブな奴ばかりだなどと、半ばため息を押し殺しつつも、彼は本社直営店の中に飲み込まれた。

途端に広がるのは、色とりどりのカラーバリエーションモデルが並んだポケッチの棚。他にも、高機能モデルや機能と搭載アプリが削られた簡易モデル。冒険のお供に、という一番人気の、アプリ追加容量と耐水などが豊富な最新鋭モデル。そうした形も中身も様々なポケッチがハマゴを出迎えた。

「ふうくん、これなんかかわいい！ あ、これもかわいいわ！」

かわいい、かわいいと連呼するマーズ。こうした人種をよく知るハマゴにしてみれば、その言葉全て「かわいい〇〇がある」と変換される。結局こいつの場合は長くなりそうだな、と朝方のようにマーズから視線を外したハマゴは、しようがなしに近くの棚から冊子を手に取り始めた。かくいうハマゴも見た目ではなく性能や中身から知っ

て存分に選ぶタイプである。

「ん、オマエもしばらく自由にしてな。店は出んなよ」

むんずと首根っこをひつつかまれたジラーチも地面に降ろされ、恐怖の根源から逃げるようにマーズの方に擦り寄っていった。向こうの方では「あいつ怖かったよねー、頑張ったわあんた」何て聞こえてくるが、それに激昂することなくハマゴは無視を決め込んだ。

そうして一人でこれか、これかと2種類まで絞った彼が悩んでいる時、その肩がとんとんと叩かれた。

「ん？」

「失礼しましたお客様、なにかお悩みでしょうか？」

ここの店員だったようだ。随分と集中していた棒立ちしていたらしく、此処に来てから数十分は既に経過していた。あれだけ思っていたが、マーズの方が先に選んでしまっているのではないかと見渡したが、うんざりとしたように付き合わされているジラーチを引き連れ、彼女の方もまだまだ悩んでいるようである。

一瞬目があつて助けを求められたが、ジラーチの視線を切り捨てたハマゴは店員の方に向き直った。

「これに……追加でバイタル測れるような機能は無いのか？」

「そこまでとなると市販のものでは……ああ、ドクターの方でしたか！」

ハマゴの白衣を見てピンと来たように頷く店員。そちらの方はオーダーメイドでの依頼になると言ったので、だったら仕方ないとハマゴは持っていた冊子を閉じて、元の場所に戻す。

一方、マーズもついに自分の買いたいものを見つけたようでスタッフと対面しながらプランについて話を広げていた。ポケットに関しては、ひとまず落ち着いたと言ってもいいだろう。

「ああ、お待ち下さい」

そのままマーズの方に向かおうとしたハマゴを、店員が引き止める。

「実は、開発の方でお客様のような特殊な職業専用のものを開発しているのです。こちらの方に応募してみませんか？ もちろん、試作品

ですし定期報告やデータの收拾が必要になりますが料金は入りません。試作品の方もそのまま進呈致します」

「タダなら是非って言いてえが、現場に不確定なモン持ち込むのもなあ……」

信頼できる道具を使い、信頼できるようになってから薬を本格的に使っていく。頭が硬いといえばそれまでだが、こうした風に使ってきた道具たちで十分事足りていることもあってハマゴはおいそれと飛びつく姿勢ではなかった。

しかし、こうした要素を入れていけば格段に時間の短縮・医療への貢献の可能性も大いにある。そこまで、ぼんやりとしたヴィジョンを立ち上げたハマゴは結局のところ頷いてみせた。

「だったら応募してみるか」

「ありがとうございます。ちようど、結果は明日ですのでお待ち下さい」

「ちなみに当選人数は？」

「テストケースですが、慎重なタイプということもあって5件ですね」
「当たればラッキーだろう、と彼が思ったところで店員の言葉が続けられる。

「ちなみに、応募した方も五名です」

「ぶっ」

当選確実ではないか。不意打ちにむせた彼は、ゴホゴホ咳き込みながら頬を引きつらせる。そんな、多少おちやめな店員に礼を述べながらも、ハマゴは契約が終わったマーズが地dかづいてきたのを見て頷いた。そして早々にぐったりと使いふるした抱きまくらのようになつたジラーチをボールに戻すと、ポケツチの店を後にするのであった。

「そつちは買ったの？」

「買ったといえは買ったのか……数奇なモンたあ思うがよ」

「？」

疑問符を浮かべるマーズは、しかしそわそわと落ち着かない様子だ。

よほど買ったばかりのそれを見せびらかしたいのか、ハマゴが二の句を告げる前に、じゃじゃーんという擬音が付きそうな勢いで、彼女の購入したポケッチがハマゴの眼前に現れた。

「見てこれ。型は一つ落ちるけど、このあたしにぴったりなデザインじゃない!?!」

「あー……そのまんまだな」

「あんたは文句しか言えないの!?!」

そういったマーズの左手首に付けられていたのは、火星と思わしき赤い天体が画面のフレームになったポケッチである。そこから流星をイメージしたような細いベルトが伸びている。

「しかも、今年から追加されてるのが……これ!」

Pi、とマーズが画面に指で触れると、ポケッチのいかにも操作しにくそうな小さい画面から、立体映像が飛び出してきた。映像は四角形の枠で収まっており、マーズが枠の端に指を置いて広げれば、その大きさも広がる。

自分の持っているポケナビとは大違いのびっくり機能だが、旅立つ少し前、確かハウエンのラルースの方でもそうだった機能が一般にも広げられそうだとか言うニュースがあったことを思い出す。

ハウエンに比べ、そのあたりはシンオウの方が進んでいるようだ。完全に時代に取り残されたような妙な寂しさを背負いつつ、ハマゴはこりやすげえと驚いてみせる。

「前に雑誌で見た時からほしいって思ってたのよ。ふふーん、どう?」

「んじや、旅路の地形だとかルートだとかは任せるぜ」

「うげ、仕事増えた……」

「俺にそんなこと期待するほうが悪い。いい加減覚えろってんだ」

ハツ、と鼻で笑ったハマゴはそのままビシリとマーズにデコピンをかます。

「おっと、ジラーチの容量でやっちゃまった。わりいわりい」

「……あたしの方が年上なのに、何だろこの敗北感」

「悪の女幹部カッコワライなんてやってる奴よか充実した毎日過ごしてたからじゃねーの? よく知らねえがな」

「キイー！　　すぐそういうこと言う！　　あんたホントに医者っぽく無いわね！」

「バツキヤロ、面接や試験の時にエネコの皮かぶんのは当たり前だろ」
「認めた！　　認めたわよこいつー！」

指差して非難してくるマーズを見て反応を楽しむ外道男。ハマゴは早くも、マーズがいることで自分の減らず口を容赦なくたたきつけられる相手が増えたことに悪く無いと思い始めていた。

確かに目的も大事だが、その過程で鬱憤やイライラが募って失敗しては目も当てられない。そのためにも、マーズという緩衝材がいることで心に余裕が生まれたと言っても良い。何より会話は人類の華だ。常に集団に囲まれて生きてきたハマゴにとって、話しかけても帰ってこなかったジラーチ・キュウゴンとだけいた最初の頃は、少しイライラしやすかった環境とも言える。

何より、そんな楽しそうなハマゴの様子を聞いて、くふふとボールの中で笑うキュウゴンがいる。常に隣りにいながら、客観的にハマゴを見ていたポケモンが快く思っているのだ。マーズという旅の同行者は、決して悪いものではないだろう。

「へいへい、とりあえずセンターで荷物降ろせよ。ショッピングが終わればしばらく観光と洒落こむぞ」

「ん？　　……あつ、ジラーチね」

「察しのいいことで」

ポン、と手を打ったマーズも、このハマゴたちについてはそれなりに分かってきているのだろう。口先ではぶつかりつつも、すぐさまこうした空気が戻ってくるのは良い関係を構築できている証拠だ。

まだまだ太陽も高い。ジラーチのため、とは言いつつも、彼らはコトブキシテイで歳相応にはしやぎ回っていた。過去のしがらみも、熟成した性格も吹き飛ばすような悪ふざけのしあいは、マーズとハマゴの心の溝もいくらか埋まったことだろう。

そして——コトブキの夜が訪れた。

「……いいわ、A班は待機。B班は扮したままエリア3を歩きまわっ

て」

コトブキ発展の裏、開発途中で廃棄されたビル。

そんな薄暗い空間のなか、未だアカギの執着が薄れるどころか、カオ豆にコールドールを突っ込んだように深みにハマる女はついにコトブキでの作戦実行のための手続きを進めていた。

ほぼ無表情の、過激派ギンガ団たちは私語の一つも文句の一つもこぼすこと無く、ジュピターの言われるがままに動く人形。ジュピターの前で跪きながら、カタカタとPCを弄る人物もその一人。モニター光が顔を青白く染め上げている。

やがて、そのPCから件のディスクを取り出した団員はジュピターに手渡した。

「やつと出来たの？ 私が言う前に作業くらい進めときなさいよね」

無茶を言う。ジュピターに命令されなければ絶対に何も動かない人形と化しているのに、指示無くして率先して動くことなど出来はしない。そんな部下の一人をいたわる事無く、代わりに蹴りあげたジュピターはその部屋を後にした。当然、倒れたまま「ついてこい」と命令がされていないため、起き上がることすらしていないギンガ団員を置いてけぼりにしたままだ。

「さあつてと？ 今日は懐かしい顔があったわねえ……それも二つも」

言うまでもなく、彼女が言う懐かしい顔とはハマゴとマーズのことである。コトブキシティの防犯カメラを、そのジュピターが手に持つディスクの力で乗っ取っていた時、そのポケモンセンターのカメラの一部に二人の姿が映されていたのだ。

当然、ジュピターは感情を昂ぶらせた。

これまた当然ながら、マーズが幸せそうであつた、などではない。アカギという人物を共に仰いだものでありながら、もはやギンガ団を抜けた直後のように彼を探していないマヌケな姿を晒していた事に怒りを抱いたのだ。

ジュピターとマーズ。最初こそ手を組んでいたが、そのうち互いの性格の違いから別行動を取るようになり、最終的には共に行方を知ら

ないようになっていたアカギ捜索の元仲間。そのはずだったのに。のうのとアカギを忘れたように、ギンガ団のコスチュームすら着用せずに暮らしている姿はジュピターの琴線をナイフで掻き鳴らす程の衝撃を与えた。

そしてもう片方は、マグマ団からもたらされた情報によるターゲットのポケモンを持っている人物。そして自分もよく知るトレーナーとしての腕は三流以下で、お涙頂戴な医者なんて役に立たない仕事をしているハマゴ。

少なくとも、回復マシンであらかた治るというのに、今更アナログな方法で直接あれこれとポケモンを医療するハマゴたちポケモンドクターは、ジュピターにとつて無駄の極みだと思われていた。

そんな二つの思いをませこぜにした結果、ジュピターの手は強く握りしめられ、嗜虐的な感情を隠そうともしない表情が形成されることになった。

半分は、「裏切り者」のマーズへの肅清ができる機会だということ。もう半分は、いとも簡単にジラーチを手にする機会が重なったこと。後もう少してアカギに会える。いや、もはや会っているようなものだと確信した彼女は、腰の辺りにつけた無線機に叩きつけるように叫んだ。

「A班、ポケモンセンターを襲いなさい！」

耳が割れるような音量のそれを聞き、ポケモンセンターの周囲に潜んでいた無表情の人間たちがあらゆるところから現れていく。ある者はゴミ箱の中から、ある者はマンホールの下から、ある者はセンターの天井から。ある者は近くの住宅の中から。一齐に、20人はくだらない人間が、皆一律な表情で、皆一律な姿で、皆一律に声を合わせて、皆一律にモンスターボールに手を掛けた。

『ドローミラー』

『ズバット』

『スカンク』

そこらで手に入るポケモン。攻撃は低い、毒を持つポケモン。人間の力ではまったく傷つかず、その精神を傷めつけるポケモン。一齐

に繰り出されて、それがポケモンバトルに使われるならまだいい。だが、人間に向ければ牙程度の威力では済まない危険な攻撃を多種多様に揃えたポケモン達。

突如、コトブキシティの全ての電子機器はダウンする。

同時に動き出すのは、ジュピターの配下たる者共。

狂宴の序章は、あまりにも唐突に流れ始めるのであった。

暗闇で光るガラス片

ポーン……ポーン……ポン、ポン、ポン。

ソナーの反応が強くなっていく。次第に光点も増えてきた。このポケモンセンサー周辺に、ありとあらゆる人間やポケモンが集まってくる。しかも、絶対に開かなくなったはずの自動ドアや、普段は開かないはずの非情ドア。そして窓からも。

「完全に後手に回っちまったな……」

「んで、どうすんのよ？」

「決まってるんだろ。強行突破の後に逃げる。戦ったって何の意味もありませんわねえ」

全ての電子機器が停止したポケモンセンター。異変に気づいていない宿泊客や、コトブキシティ全域が停電に陥ったことで混乱する夜勤のジョーイが点在する中で、ファウンスの頃からの対犯罪者用の意識に切り替えたハマゴは停電の時点で完全に目をさましていた。

それから30秒後、文字通りマーズを叩き起こした彼はキユウコンの入っているボールを握りつつも、ファウンスの頃から愛用しているソナーによって敵の位置を把握していた。何が原因かは知らないし、何を目的としてこのポケモンセンターに「それ」らしい犯罪者の手先が集まってくるのかもわからない。

それでも言えるのは、とにかく狙われる一因として十分に考えられるジラーチを持つ自分が、まず逃げることに。これで追ってくればそれらへの対処。追ってこなければ何とか公的機関の到着を待つて立ち回ればいい。ハマゴは公式スपोर्टルポケモンバトルは苦手だが、殺しもOKなフリーファイトなら幾らでもやりようはある。

医者ではあるが、他者を平気で傷つける輩がどうなろうと知ったことではない。いざとなれば、「生かして」情報を引き出せばいい。善意もあるが、自分の意志のためなら悪意も十分に持ち合わせているのがハマゴという人間だった。

「サン、ニイ、イチ……ゼロ！」

ソナーの光点に頼らずとも、勢い良く近づいてくる足音が聞こえ

る。

ゼロ、のタイミングでハマゴたちのいる部屋のドアが蹴破られた。

「じんつうりきー！」

「あくのはどうよー！」

同タイミングで出てきたブニヤットと、キュウゴン。

侵入者の姿を確認するまでもなく、ドアごと侵入者は向かいの壁にたたきつけられた。威力は手加減したものであったが、人間なら再起不能。ポケモンなら確実に一時は怯むだろう。その隙にベルトを手にしていたハマゴは、金具部分で窓を割って飛び出した。

「もどれキュウゴン！」

「ブニヤット戻って！ さあ、クロバット！ 行くわよー！」

続いて、マーズが出したのはクロバット。ギンガ団時代よりもずつと愛情を込めて育てた結果、立派で通常よりも大きな体格になって進化した彼女の愛するポケモンだ。

クロバットはマーズのボールから飛び出すと、その両足にそれぞれハマゴとマーズの手を引つ掛けて上空を舞った。二人も人間を吊るしているせいでスピードはそれほど速くないが、それでも自転車よりはずつと速い速度でポケモンセンターを離れることに成功する。

「クソっ、追つてきやがった……やっぱ狙いは俺らか！」

振り返ったハマゴは、ポケモンセンターに侵入したであろう全ての敵対人物がうぞうぞと窓やドア、果てには壁すらぶち破ってこちらの後を追いかけてようとしている姿を見た。

いかんともしがたい異様な光景である。彼の視力が許す限りに見えたのは、皆一様に、同じ表情で同じモーションで追いかけてきているワンシーン。直に、近くにあった乗用車らしきものに乗った足の早い連中も出始めた。

「コトブキの中央公園だ！ あそこならほとんど誰も居ねえだろ！」

「オツケイ！ クロバット、行くよー！」

徐々に追いつかれそうになるが、裏路地をひよいひよいと通る逃走劇に、車やバイクを使った襲撃者たちは思うように距離を詰められない。クロバットが超音波で自由自在に閉所を飛び回ると、次第に、

バツと視界が開けた場所にたどり着いた。

コトブキシテイの中心部に近い中央公園である。噴水や、コトブキの特有の意匠が散りばめられた石造りの見事な場所だった。昼間にはポケモンバトルも繰り広げられる、とても広い敷地を持つ場所。囲まれる可能性は高いが、警察も近い。それでも短期決着を付けられる危険をはらんでいるとはいえず、ハマゴの頭のなかには確実に上手いく方法が渦巻いていた。

「ここで降りるぞー！」

「……なんか考えがあるんでしようね」

「つたりめーだ。じゃなきゃこんな場所に来ねえよ」

言いながら、いちいち状況を報告せずとも済む緊急通報をポケッチから発する。これによって電波が発せられた場所がGPS情報と共に発信される仕組みである。警察の到着は30分もあれば十分だろう。

最も、その30分がなんとも長い時間であることには違いないのだが。

「来たわ……って、こいつらー！」

敵の姿をはつきりと視認できるようになって、マーズは目を見開いた。

襲撃者が身につけていたのはギンガ団の服装である。胸元のGマークと、どこかグレイ型宇宙人じみた奇妙な服装。しかし、見た目を引き換えに運動性能や着こなしは最高クラスかつ、量産も容易というそれだ。

マーズがかつて身につけていた懐かしい服装の人物が10、20、40と次第に増えていく。視認できるかぎりはおおよそ50人前後になった辺りで、円を描くようにしてハマゴたちは包囲されることになった。

直後、どこか機械じみた団員たちをかき分けるように、ゆつたりとした足取りで近づく長身の女性の姿があった。公園を見下ろす月光に照らされ、姿を完全に表したその女は両者がよく知る人物。ギンガ団の幹部にして、過激派のトップであるジュピターである。

「グッドイブニング。お久しぶりね、お医者さん」

「ジュピター、あんた！」

「裏切り者は黙ってなさいな。今はそのドクターに話があるの」
ねつとりとした口調で話すジュピターの目は、狂気の色を含んでいた。もはや本当に視界が正常に作動しているかも怪しいほどに。よくよく見れば、その目の下には深く刻まれた隈取も見て取れる。寝ていないのか、寝られないのか。こんな緊迫した状況でも、ハマゴはそんな細かな観察をしていた。

そして、ジュピターの言葉に対してハマゴの返答はこれだ。肩をすくめて、鼻からフツと息を吐きながら呆れたように言ってみせた。

「しがない流れのドクターに用とは、なんだ？ 過激派ギンガ団はポケモンの回復要員でも欲しいのか？」

「知ってて言えるのなら大したものね。それとも、単にお馬鹿なだけかしら？ ジラーチを差し出せばいいってことよ。もちろん、その後はドクターにも我々の仲間になってもらうけど」

ジュピターの要求は、ジラーチどころかハマゴを単なる部品のように思った上でのものであった。どこまでも人を見下し……いや、単なるデータ上の存在であるかのような傲慢な立ち振舞いに、ハマゴの額にイライラの証が浮かぶ。

そんなジュピターに言いたいことがあるのだろうか。食って掛かるように身を乗り出したマーズを手で制して、彼はまだ自分との会話だと目で言っただけで聞かせた。

「仲間とは穏やかじゃねえな。そのどう見ても洗脳してますって感じの人形になれって？ まっぴらごめんだ。もちろん、ジラーチを引き渡すのもな」

「ふうん、悪い話では無いと思うけど？ アカギ様のために尽力できる一員になれる。その誉れ以外に、幸福なんて何も無いでしょう？」
「……さあて、だったら人類平和だろうがな」

続いて飛び出した言葉に、ハマゴは背中に冷や汗が浮かぶのがわかった。

(さて、価値観どころか大分狂ってんな、この売女)

思うのは罵倒と、話の通じない相手に対しての感想だった。

なるほど、確かに各地でテロ紛いのことをしてるだけはある。正常な判断能力はとうの昔に消え去っていると考えたほうが良いだろう。と、ここまで考えてちらりと時計の方を覗き込む。深夜の1時27分。まだ先ほどの警報を発してから数分しか経っていない。

「一つ聞きたいが、ジラーチを使って何をするつもりだ？」

「決まっているわ。『やぶれたせかい』に消えていったアカギ様を救い、今一度私達を導いてもらうのよ。そのためにジラーチというポケモンには、私達の願いを叶えてもらう必要があるの」

「私達、とはまあ大きく出たもんだ。オマエ一人じゃあ無いのか？」

「ここにいる全てのギンガ団員の願いよ。ねえ、そうでしょう？」

ジュピターが隣の団員に問いかけるが、それは命令ではない。そしてアカギという人物について何も知らず、洗脳されて意識すら無い団員は黙りこくるばかりである。完全に無表情で、いつまでたっても返事が来ない事に業を煮やしたジュピターは苛立ち紛れに団員を蹴り飛ばした。

蹴られた団員は頭からコンクリートの地面に倒れこみ、酷い擦過傷を負う。ハマゴはピクリと手を動かして、しかし押さえつけた。それを知らず、どこか様子のおかしいジュピターは文字通り体を震わせている。

「決まっているじゃないの！ そう、そうよ！ アカギ様がかえってくることを望むのは全ての人間、いいえ、全ての生物の願いなのよッ！！ あの方が創り出した新たな世界で我々を導いてもらい、私はわたたた、た、たた、し、しはああ、あああああああああああああああああああ！」

狂氣的で、喉から枯れ果てそうな絶叫とともに顔を両手でつかむように覆い尽くし、エビ反りに腹を突き出すジュピター。ガクン、とスイツチが切れたように動くと、まるで何事もなかったかのように彼女は元の雰囲気を取り戻していた。

「さあ、早く来なさい。ジラーチを捕まえた功績を認めてあげるわ。私たちは仲間なのだから。一緒にアカギ様を取り戻しましょう。あ

の忌々しい世界から……」

ついには、現実と事実をねじ曲げたらしい。もはやジュピターの中では、ハマゴは過激派ギンガ団の一員という事になっているようであった。どこも笑っていない空虚で暗れやかな笑みを浮かべたジュピターに、気分が悪いと言わんばかりにハマゴはツバを吐き捨てた。「一つ聞くが——」

「時間を待っているなら無駄よ。コトブキシティは全てのシステムがダウンしているわ。緊急通報システムもそれは例外じゃない」

「どういう考えしてんだコイツ……」

仲間だと言っておきながら、完全に敵としても見做している。ジュピターの精神構造はつきはぎだらけに違いないだろうとハマゴは乾いた笑みを貼り付けて一歩下がった。彼の握る「空のボール」がギュツと握りしめられる。

さて、どうするべきか。通報が無駄というのはハマゴにとって承知の上だ。非常電源くらい生きていれば良かった程度の保険でしかない。本命はもつと別のところにある。だが、そのためにもまだまだ時間が必要だ。

そこで話すことすらなくなったハマゴがそろそろ攻撃態勢に入ろうかと足の姿勢を変えるが、今度はつかつかと彼の隣からマーズが歩き出した。

「時間が無駄っていうなら、あたしから言いたいことがあるわ」

マーズは、ジュピターにしっかりと視線を合わせた上で言い放つ。

真正面からの眼光に、正気を失っているジュピターとしては堪えるものがあつたのだろうか。ぐらりと、少しよろめいて頭を押さえつける仕草で、息も荒くなっている。

「なに、よ………」

「あんた、いつまでアカギの幻を見てるの？ あの人には死んだわ」
「………ッ！」

「ばっかみたいよね。やぶれたせかい、伝説のポケモン。一時的にでもあんなものを従えて、アカギの理想に賛同していたあたしは心の底から熱い感情に支配されていたわ」

でもね、とマーズは首をふる。

「……だからこそ、熱源であるアカギがいなくなった今、そのうちに熱は冷めていった。そもそもディアルガやパルキアが姿を表したのは、大量のポケモンや人の犠牲と引き換えに赤い鎖なんて物を持ち出せたから。アカギほど頭の良くないし、踏ん切りもつかないあたし達じゃ、どうあがこうとも伝説を引きずり出すなんて土台無理な話よね。そう考えると、やぶれたせかい何て行けないわよ。どう足掻いても」

「やめて、やめてよ……」

「どこから嗅ぎつけたかは知らないけど、ジラーチを見つけるまでは、あんたも同じだったんでしょ？ 方法が無いけど、とにかく闇雲に動いていたい。だから——」

「アアアツツアアアアアアアアアアアアアアアアアア!! オーロオオオオツト! ウッドハンマアアアアアア!!」

完全に取り乱したジュピターは、マーズの言葉を遮ってオーロツトを繰り出した。そのまま絶叫とも命令とも判別のつかぬ狂態を見せたまま、完全に無防備なマーズを襲う。

ガギインツ、と耳障りな音になる。そんな破れかぶれの一撃が通じるはずもないのだ。まだボールに戻っていないクロバットがオーロツトの攻撃を、はがねのつばさで受け止めたのである。

硬化して銀色にきらめく翼の向こう側から、一步も引かないマーズの凍てつく視線がジュピターを縫い止めている。完全に体躯の差で下からの見上げる視線だが、ジュピターは本能的に芯の通っていない自分とは違うその視線に恐怖した。

恐慌状態に陥った彼女は、今度こそ表現のしようのない奇声を上げて手を振り下ろす。その瞬間、周囲にいた下っ端たちがボールを掲げてポケモンを繰り出した。

完全なる数の暴力だ。50体以上も立ち並ぶゴースやズバットの群れ。下っ端たちの声は重なり、一斉に指示を出し始めた。

「「エアカッター」」

「「シャドーボール」」

確かに訪れた正体不明の衝撃にジュピターは吹き飛ばされる。

それは部下たちも例外ではなかった。洗脳されていたギンガ団員は、繰り出したポケモンごと公園の破片もろとも瓦礫の中に沈んでいる。一応まだ動ける団員は残っているが、此処に来たAとC班を含めた50人前後の人数は、わずか3、4人にまで減っていた。

ここでようやく、アカギの事から意識が遠ざかり、いつものようなジュピターが戻ってくる。頭を打ったことで狂っていた思考も一時中断されたのか、何にせよ、正気に戻ってジュピターが抱いた最初の感情はふつつと煮えたぎるような怒りであった。

それは奇しくも、ハマゴが最初にギンガ団員に抱いたそれと同じ。自分の信念を汚すような行いに対する怒りの感情。

「よくも、よくもよくもよくも!!」

「吠える前にかかってこいよ。よく吠える犬がリードに繋がれてちや迫力も型なしだってハナシだ」

ハツと嘲笑ったハマゴはジュピターたちからの逃走経路を組み立て始めていた。しかし、そのための布石は今打ったにしても、まだ時間が足りない。最後の逃走手段であるジラーチにボール越しに問いかけてみれば、カタカタと任せろと言わんばかりの返事が帰ってきた。

心強いもんだ、と。そんな意味を込めて一度ボールを撫でてやったハマゴは、逆にジト目で睨んでくる隣の女性と向き合った。

「あんた挑発しすぎ。戦えるポケモンいんの？」

「後は任せた。キュウコンは今のでグロッキーだ」

「だろうと思った」

呆れたように肩をすくめたマーズは、腰につけていた5つのうちの1つのボールを手にとった。

「さ、行くわよブニャット。お仕置き開始なんだから」

クロバットとブニャット。マーズがギンガ団時代からずっと愛してきたポケモンたちだ。それは今となっては並のジムリーダーすらはるかに凌駕する強力なパワーを持ったポケモンとして、ハマゴたちを守るために立ち上がる。

主人の愛情への答え方。そして何より、自分の力を発揮することができる戦場。鍛えることは数多く有れど、大立ち回りの機会を待ちに待っていたブニヤットたちは興奮とともに気鋭を高めていく。

「下っ端共、制圧しなさい」

冷静さをいくらか取り戻したジュピターの指令に、ポケモンこそ戦闘不能になったが、まだ体が動くギンガ団員たちがハマゴたちに飛びかかる。動けるのはおおよそ十数人か。流石にマーズのポケモンで攻撃してしまえば、大怪我間違いなしのところではあるが、そこにはハマゴが対処した。

改めておさらいしよう。ハマゴは険しい道ばかりのフエンタウン出身。更には、冒険家のようにファウンス中を駆けまわる調査団の一員として長く活動していた肉体派、かつ医者である。きのみを知り尽くし、利用しつくし、それでいて新たな可能性を模索する彼は当然ながら自分の肉体と知識を磨き続けていた。

それすなわち、付け焼き刃の洗脳された団員では相手にすらならないということ。

「つしや、オラアツ！」

「……うわあ、エゲツな」

どうせ全員まとめて病院に突っ込めばOK。その考えのもと、見事なヤクザキックを団員の腹にぶちかますわ、その手袋に染み込ませた木の実のブレンド薬剤を口の中に突っ込み行動不能にさせるやらの無双である。

これなら背中を任せられるだろうとマーズはジュピターに向き直ると、既に先ほどのオーロットというポケモンの攻撃が眼前にまで迫っていた。しかし、そこは「みだれひっかき」を使ったブニヤットが受け止める。見た目に合わず俊敏な動きと、鍛え上げられた滑らかな動作でオーロットの力任せの一撃は、威力を散らされ弾き返された。

「クッー！」

「その見たこと無いポケモンには驚いたけど、あんたは昔から変わってないわねジュピター。何でもかんでも力で押そうとする。細かく

考えるのはいつもサターンか、プルートのお仕事。そして小回りはあ
たしが担当。ま、その分あんたは突き通す執念深さもあるから……た
だのパワータイプとして見ないほうが良さそうね」

懐かしむように言ったマーズの言葉に、凶星のジュピターは歯噛み
した。

彼女の言うとおりである。オーロットは攻撃力が高いポケモンで
はあるが、その真骨頂は恐ろしいまでの持久力の長さ。自己修復機能
を持った固定砲台とも言えるポケモンだ。いかにマーズが受け流そ
うとも、同じペースで全力を打ち込んでくるオーロットにいつかは競
り負ける時が来るだろう。

「スカンプー、アシッドボム」

「おつとよそ見しちゃいけないわね！ クロバット、エアカッター！」
完全にジュピターと対峙する形のマーズに横槍が入るが、彼女は難
なくそれを凌ぐ。先ほどのズバットたちとは比べ物にならないほど
太く、それでいて強靱なエアカッターはアシッドボムを切り裂き消滅
させてなお、スカンプーにダメージを与えた。

その後ろでは、まだハマゴが人間の下っ端相手に立ち回っている。
流石に無双とはいえ疲れが見えるのか、ポタポタと零れた汗が顎を
伝って地面にシミを作っていた。もつとも、白衣をはためかせて視界
を奪い、余裕でカウンターをかます彼はつかれていても余裕そうだ
が。

「マグマ団め……少しくらい手勢を超越せば良かったものを」

そうして蹂躪される、ジュピターだけの軍団。たった二人だけの強
者に蹴散らされる様を見ながら呟いた彼女に、耳ざとくハマゴが反応
してみせた。

「マグマ団だ?!」

裏拳で団員の一人の顔面を打ち抜いて、彼はメガネを直した。

「知ってんの!?!」

「聞きたいことが増えた。つつうか確定だ!」

マーズが下っ端の残りポケモンを蹴散らし、オーロットの猛攻をし
のぐ。そして戦いが激化していく中で、ハマゴはマーズとの会話を交

わしながらもちろんだと頷いた。

「マグマ団がその女をそそのかしたに違いねえ！ 奴ら……確かに追ってきてやがった！」

少しづつ明かされていく真実。

未だコトブキの光は失われたまま。

真実のイト

「やっぱり知ってるのね」

熱くなつたハマゴを押さえつけるように言葉が浴びせられる。

一度溶けるほど熱されたことで鋼鉄のように冷たくなつたのだろうか。ジュピターはすっかりと正気を取り戻したようで、冷たい視線のままにハマゴを見ていた。そんな彼は近づいてきた団員を一本背負いにし、ギツと絞め落としながらに言う。

「当たり前だ……その上で言つとく。テメエはただ利用されてるだけだろうよ。都合よく組織同士が手を組むなんざありえねえ。ジラーチも手柄も願ひも、何もかも掻っ攫われてもいいのか？」

「ハッ！ 私がそんな失態を犯すとても？ 私の元を離れている間に随分とおちやめな考えを持つようになったのね、ドクター」

「……そつちのは固定されちまつてんのな」

未だ、ジュピターの中では「ハマゴが仲間だった」という間違つた認識は事実として固定されているようだ。発狂した時との落差があまりにも激しい。これが真正銘の狂人か、と悪態をついたところでハマゴは最後の一人を背負投げ、地面に叩きつける。受け身を取ることもままならずたたきつけられたギンガ団員は、一度ビクリと手を伸ばして視界を黒く染め上げた。これで、動ける団員もいなくなる。

「やっし」

パンパン、と手を交差するように叩いたハマゴは手元のモンスターボールをこんこんと叩いてみせたが、カタツと一度だけ揺れたジラーチのボールは「まだだ」という意思表示。今のところは静観するしかないか、と息をついて激戦区へと視線を移した。

オーロットとブニヤット、そして団員のポケモンとクロバットの戦いは未だ激しい火花を散らしている。マーズは矢継ぎ早に指示を出し、一体多数の立ち回りにはなれた手つきで対応していた。

「ブニヤット！ オーロットにシャドークロー！」

ここで、オーロットのタイプを見抜いたマーズが、有効打を与えようとした。命を受け取ったブニヤットが地面を蹴り飛ばし、アスファ

ルトの欠片を巻き上げながらオーロットの懐へ潜り込む。音も置き去りにするような一瞬の移動に、オーロットはギョロリとその大きな単眼の光を広げて驚愕する。

だが黙して受けるはただの樹木。されどオーロットはポケモンだ。練度が低いだけのウドの大木とはいかず、オーロットの足となる根は鋭い棘を作ってブニヤットの後ろ足をえぐり取らんと迫る。奇襲を仕掛けたつもりが、細かな足払いを返されたブニヤットは当然、飛び込みから軸足を崩されたことでぐらりとよろめいた。

「ウツドホーンでなぎ払いなさい！」

「甘えんなブニヤット！ そのまま行っけえ！」

ギリツ、と歯を食いしばったブニヤットは前足にこめる力を強め、腱がはちきれんばかりに身を張り詰めた。その脂肪のようにも見えるが、その実多くが筋肉で構成された前足は、矢を放つ弓のように、前足の力だけでドンツと地面を蹴りあげる。オーロットのウツドホーンは薄皮一枚を剥いで通り過ぎた。

「クツ!？」

「そこおおおおおっ！」

ブニヤットの後ろ足が闇色に輝いた。器用にも後ろ足の爪を使ったシャドークローの三本の軌跡がオーロットの眼がある個所を大きく斜めに薙ぎ、深い爪痕を残す。あまりの痛みにうめいたオーロットは暴走するように根の足やウツドホーンを振り回すが、冷静を乱した相手にブニヤットは遅れを取るはずがない。

無理をした前足の痛みをこらえてオーロットの幹を蹴りつけると、でんこうせっかの要領でその場を撤退。空中へと身を投げ出したブニヤットは、ギンガ団員のポケモンを軒並み倒したクロバットがキヤッチし、マーズの元へと舞い戻った。

「オーロット……ねをはる！」

「同時にシャドーボール乱打よ!!」

これはバトルではない。行けると確信したマーズが二体に攻撃の指示を下すと、闇色に輝く球体が小さな粒のようになり、次々と生成されていく。それらが一直線にオーロットに向かうと、弾ける着弾音

とすさまじいまでのエネルギーの爆発を持って襲いかかった。

さすがのオーロットといえど、極限まで鍛えられた二体の攻撃に為す術はない。根を張って吸い上げた栄養も、その身に承った木の実の効果も上回る連撃は瞬く間にオーロットの最後の一线を超えさせた。ぐらりと巨体が揺れる。次いで樹木が倒れる独特の葉がざわつく音とともにオーロットの巨体はゆっくりと地に沈み、彼の赤い単眼は幹のウロの中で閉じられていた。

「戻りなさい！……よくも！」

「量を出しても変えられないわ。昔のように質を磨きなよ」

「言ってくれるじゃないの。だったら——!？」

二個目のモンスターボールに手を伸ばし、ピタリとジユピターは動きを止めた。

片手は腰から耳元へと移される。

「クソジジイ！…この忙しい時にどうしたっていうのよ！」

彼女が叫ぶと、ジユピターの隣には半透明のウィンドウが現れた。

《襲撃を受けておるのじゃ！ 第3研究所が得体のしれぬ三人組に防衛を突破され、施設が次々と破壊されてしまっておる！》

「なんですって!?! マグマ団の精鋭とやらはどうしたの!！」

《ポケモンを出す前に気絶させられ、門の前に放り出されおったわい！ 戻ってこいジユピター!》

「クソっ……!」

忌々しげに舌打ちをかましたジユピターは背を向けた。だが——

「おっと、どこへ行くこうってんだ？ テメエにはまだ聞きたいことが残ってんだが？」

「ドクター……そこをどきなさい。今ならジラーチだけで許してあげなくもないわ」

「聞けねえ相談だ犯罪者。そして俺はギンガ団員でも何でもない。とっととブタ箱への切符を受け取りやがれ」

「観念なさいジユピター！ もうあんたの手下も全員無力化したわ——!」

死屍累々とした深夜の公園に、勇ましい女性の声とヤクザじみた重低音の男の声が響いた。辺りを埋め尽くすうめき声と、唇の下を噛むようにしてジュピターは怒りをこらえるような表情を見せた。

しかし、それも一瞬でしかない。ジュピターは腰のボールに素早く手を伸ばす。

「しまっ——」

「遅いわー」

途端に広がる光と音。スタングレネードだろうか。キュウコンの破壊光線と違い、純粹に感覚器官を潰すために発せられたそれを真正面から受けて、ハマゴは視界と聴覚を真っ白に染め上げられる。10秒ほど続くキンキンとした音響と閃光の中、人間はごまかせてもポケモンはごまかせない。いち早く我に返ったクロバットは、マーズの指示を待つ前にどくどくのキバを備えてジュピターがいるであろう音の発生地点へと斬りかかった。

しかし、

「……逃しちまったか」

次に元に戻ったハマゴの言うとおり。ジュピターはいかなる手品を使ったのか、既に影も形もない。辺りに倒れていたはずのギンガ団員もあらかた消えており、残っているのは瓦礫に埋もれて身動きが取れない少数の団員と、完全に倒されて伸びてしまったドーミラーたちだけ。

ある程度の収穫はあったが、本当に聞きたいことを聞けないまま事件は収束してしまった。復興した電灯がジジジ、パチン！ と音を立てて公園を照らし始めたが、彼らが掴もうとした尻尾の影すら映すことはない。

ハマゴはもういい、と「準備」をしていたジラーチのボールを撫でながらに言う。淡く全体が光出していたボールだったが、スツと元の色に戻ってしまった。

「何させようとしたの？」

「なんてこたねえよ。単なるトドメの一手だ。……まあ、マーズが強すぎて終わっちゃったがな」

大きさに両手を広げて肩をすくめてみせる。

公園はそれつきり、全てが終わったと言わんばかりの静寂が包み込んだ。ブニャットたちをボールに戻したマーズがつかつかとハマゴの元へ歩き、先ほどの「マグマ団」について疑問を発そうとした瞬間。

P i P i P i P i P i P i !

ハマゴのポケナビがコールを鳴らした。

コールが二巡目に入る前に、彼はポケナビを耳に当てる。

《ハマゴくん、無事!?!》

「シロナ?」

《襲撃した基地の情報から決行日は今日だと聞いて……襲撃されたりしていないかしら!?!》

「おせーよ……ったく」

肩を落としたハマゴは、先程までの一部始終をそのまま語って聞かせた。出鼻をくじかれたマーズも、仕方ないという態度で息を吐いたあと、近くのベンチに座って汚れた服などを繕い始める。

それから約5分。ハマゴの言葉に対応するシロナとの会話が繰り返された中で、聴き終わった彼女は顎に指をやって考えこんだ姿を見せていた。マグマ団、そしてジラーチ。何よりハマゴとギンガ団。ジユピターの行動……。

まだ何も解決していない。団員は捕まえたが、どうせこれもニュースの通り洗脳された手下だろう。ジユピターを捕まえられなかった、マグマ団という組織がハマゴ達と関わっている、ギンガ団はマグマ団と手を組んだ。考えこむほどに、不足した情報に苛つかされる。

《それじゃあ、やっぱりマグマ団は手を組んだのね》

「ジユピターが漏らした言葉を受け取るならな。そっちにも腕章をつけた奴がいたんだろ?」

マグマ団のマークが入った腕章。今のところ確認されているマグマ団員は、ハウエン事変のユニフォームを着ては居ないが、必ず所持品の中にその腕章がある。逆に、普段はマグマ団員だということを隠しているのだからますます危険性は高まっているなどシロナは語った。

《ええ。私の協力者がポケモンを出す前に気絶させたけど……それから彼、珍しいものを持っていたから徴収しておいたわ。ところで、マーズさんがそっちにいるって本当かしら?》

「ああ。何なら変わるか? 電波越しでの情報交換はこのくらいで良いだろ」

《そうね、お願い。彼女とも話しておきたいことがあるから》

「らしいぜ。ほら」

「わつと!? 投げることに無いじゃない!」

自分の方へ話に向いているのはわかったが、突然ポケナビを投げ渡されマーズは驚愕する。あの戦闘の後だというのに、変わらないハマゴの態度にぶつくさと文句を言いながらもマーズはポケナビ越しにシロナと久しぶりの対面を果たした。

「お久しぶりねチャンピオン。事情聴取以来かしら」

《ええ、久しぶり。ハマゴ君には確認を取ったけど、マーズさんも結局関わってきたのね。目的は今も変わらないのかしら?》

シロナが思うのは、あの「やりのはしら」での事件のこと。普通女の子に戻ります、なんて宣言をしたとはいえ犯罪組織の幹部クラスだった人物だ。全てが終わって、あのシンオウの制覇者が別の旅に出て行った後、きつちりとジュピター共々警察組織やシンオウポケモン協会でマーズは取り調べをされていた。

その上で解放されたのは、やはり「やぶれた世界」が常軌を逸した場所であるからだろう。どう足掻いてもそこにたどり着くことはできない。唯一の希望は他地方での伝説のポケモンたちだが、そもそもあの事変がおかしいだけで伝説のポケモンは普段、人の目に触れることはない。

アカギを探そうと熱意に満ち溢れていたマーズの姿を思い浮かべたシロナは、しかし次の彼女の言葉に否定されることになる。

「…あんたが思ってることだけどき、今のあたしには当てはまらないわ。あたしはね、ジュピターを止める。そしてアカギさ——アカギはこの世界に戻ってこなくても良いと思ってる。あいつに付いて行って、あたしたちの全てを終わらせるわ」

《…：…そう》

所詮は電話越し。もしかしたらマーズの考えは、この言葉とは真逆かもしれない。だけど、シロナはそれでも賭けてみようと思った。あのたった一人の人物にすべてを握られていたような女ではなく、独り立ちを宣言したマーズへ。

なによりハマゴもいる。そしてジュピターに言葉を届けるには、幹部時代から一緒であったマーズならば或いは。

《なら、あなたにも事の詳細を話しておくわ》

そこから聞かされたのは、薄々感づいてはいたが隠されていた事実。願い事を叶えられないジラーチ、それを狙うマグマ団というホウエン地方の組織。マグマ団はギンガ団に協力していること、引き取り手のハマゴのこと。

《厄介なのがマグマ団は何かしら、ジラーチの願いを叶える力を復活させる方法を持っているかもしれないということ。でなければ、ハマゴ君が見たようにピンポイントに目覚めたばかりのジラーチを狙わないわ》

「でしようね。あたしたちも『赤い鎖』を作れると分かっていたから神を従えようとした。でも、そんな方法がわからないからあんなたちは後手に回らざるを得なかった。湖を干上がらせた時もね」

《だからこそ、今マーズさんがこちら側に着いてくれたことは頼もしいわ。あちらがわの考えを少しでも想定することができるからね》

「そう言う頼られ方はちょっと心外なんだけど？」

むくれたようにマーズは言う。

《ふふ、ごめんなさい。他に聞きたいことはないかしら？》

「なるようになれって感じよあたしもそこまで考えてるわけじゃないからね」

《それじゃあ、ハマゴくんを呼んでくれる？ ナナカマド博士のところに行ってからで構わないけど、来て欲しい場所があるの》

「だってさ、チャンピオン様が呼んでるわよ」

「あいよ」

二人が話している間、瓦礫に埋まったギンガ団員を引っ張りだしていた彼は、ずらりと並ぶ気絶した団員たちのもとから歩いてくる。白衣をまくり上げた彼の姿は完全にただの喧嘩師だったが、マーズはあえて何も言わずにスルーした。

「いま代わったぜ」

《さっき言った、こつちで襲撃した研究施設の資料。そこに興味深い事があったからあなたと話しておきたいと思ってね。それから、ここを守っていたマグマ団員が持っていたものを渡しておきたいの》
「ほう、そりゃあ……確かに興味深えこつた。しっかし、ボツクスの転送システムを使えばすぐじゃねえのか？ いちいち足で会いに行く必要も薄いと思うが」

《いえ、ハクタイシティ……正確には、ハクタイの森の廃館が目的地よ。そこにしか無いものもあるから》

その目的地について、シンオウ地方出身のマーズが声を荒げた。

「ハクタイの……森の洋館？ ちょっと、あたしたちで肝試しにでも行くつもり？」

《いいえ、本当に大事な……あるいはギンガ団への一手を打てるかもしれない。そんな大事な場所だって言えばわかるかしら》

「え？ でもあたしたちはそんな場所、手を出した覚え無いんだけど」
マーズも大抵の作戦には関わってきているため、どこで何をしたのか、そして幹部という立場からギンガ団の活動概要は十分に知っていた。しかし、ハクタイの森での活動はポケモンの徴兵であったり、あの地に満ちる特別なパワーを用いたエネルギー実験のみ。後者の方はイーブイが進化するパワーを利用できないかと、いわゆる「表の新エネルギーの創造」、そして赤い鎖に回す要素の一つとして見ていたが、結局微弱すぎて利用できなかった、という報告がある。

《こちららも、ギンガ団に関しては前から対策を練っていたというこ
とよ。とりあえず、あなた達のタイミングで構わないからまずはハク
タイシティに向かってくれるかしら》

「そんな悠長にしてもいいのか？ あいつら、一般人をさらって洗
脳、しかもポケモンの強奪まで進めてんだろ？」

《でも、あなたたちはそこにいた大半の団員とジュピターを撃退した。それに、私も協力者が優秀なおかげで、潜伏している基地を前よりもずっと早く発見、制圧できているわ。末端とはいえ相手も残党。この混乱の中で活動も収まるはず》

加えて団員の大半は洗脳されているだけの木偶だ。ブレインとなる人間は、恐らく現在のギンガ団残党の規模に比べれば驚くほど少ないだろう。そこへ襲撃を続ければ、小石を投げ込んだだけの小さな波紋も、底の栓をピタリと打ち抜き巨大な渦を作る。

落ちぶれた組織はそんなものだ。やっていることは非道極まりないが、続けていた月日が経っているだけあってその実態もシロナたちには知られている。

「その間、シロナは働き続けるってことか」

《案外悪くないものよ？ 行き詰まっていた研究もあらかた終わったし、いい羽伸ばしになるわ》

「そんなんでよくチャンピオンやってられるわね……」

《リーグの時期も随分先だし問題無いわ》

そういうことだからと言って電話が切られた。

コトブキシテイの電力も復旧し、街は話し込んでいる間にすっかり騒がしくなっている。自分たちが泊まっていたポケモンセンターの方は直接襲撃を受けただけあって、かなり立て込んでいるようだ。赤色の光がセンターに続く路地裏やビルの壁を染め上げている。

「んじや、まずはここで伸びてる奴らを回収してもらおうか」

「そうね。しかも夜更かししちやっただし肌も荒れてるかも……はあ」

肩を落とすマーズ。彼女自身にとっては美容はポケモンの次に大事なことである。その辺りの感情はよくわかっているが、だからこそめんどくさそうだとハマゴは苦笑を返してみせた。

それから約1時間後、グラツキー状態から立ち直ったキュウコンの力も借りながら、ギンガ団員を届けたハマゴたちは、警察機関に簡易な質問をされるとあっさりと開放された。シロナの手が回っているということもあつたのだろう。加えて、無傷とはいえないが洗脳され

ている一般人を取り返した事なども含めて表彰だのと言い始めた頃に、ハマゴはマーズの手を引いてポケモンセンターの自室の鍵を締めた。

後日の昼時、ハマゴ一行はコトブキシテイを出てマサゴタウンへの道のりを歩き始めていた。先日と唯一違うのは、ハマゴの片手には青色のポケッチが巻かれていることだろう。旅立とうとした直前に、ジョーイからポケッチカンパニーからの荷物が届いているとのことで受け取った一品である。

そう、先日にハマゴが応募した医療業務用の試作品ポケッチだ。デザインに関しては完全なオーダーメイドということと、とにかく機能性と快適さを求めた余分な装飾の無いフレームが特徴的であった。

「地味ねえ。もつとあたしみたいにこう、医療用！ って感じのデザイン期待してたのに」

「あつたところで邪魔だろうが。俺はこれ気に入ってるぜ？」

そう言いながら、ハマゴはいつもどおりバックパックの上に乗っているジラーチへ照準を合わせる。すると、それだけでポケモンのパロメーターが立体映像で投影された。心電図や状態異常といったものから、ハマゴたちドクターにしか分からないグラフのようなもので。マーズとしてはちんぷんかんぷんな表情を浮かべているのだが、逆にハマゴは満足気に口の端を吊り上げていた。

「これで試作品か……まあ、施設のあるところならコレで十分だがちよいと足りねえなあ」

これだけでも格段に診断は楽になるが、ハマゴのように旅をするポケモンドクターや出張ドクターにとつて少し痒いところにギリギリで手が届かないような感じはする。その辺りの経験も含めて最初のレポートは提出した方がいいだろうと既に下書きを始めていた。

「こういうのを見るとあんたって本当にマメだと思うわ。ねージラーチ？ って、あら」

「どうせいつものだ。ほつといても治る」

「……あんたそういうところ大雑把よね」

最初はハマゴともども投影画面を見つめていたジラーチであった

が、当然意味を理解できずに目をぐるぐると回してオーバーヒートを起こしていた。キュウ、と声を上げて倒れこんだがバックパックに上手いこと引つかかっているため落ちる気配はない。

ほんの一夜の出来事。だがそれが過ぎ去って、元の日常は戻ってきた。

目指すはマサゴタウン。裏では、大きな陰謀が姿を現し始めている。彼らの導く一本の道は、一体どこに絡まっていくのだろうか。

「……お持ちしました」

「ありがとうダークさん。今日はこれで十分だからゆつくり休んでて」

「御意に」

サツと音を立てずに消えていくダークトリニティ。いつも姿の見えないところで休息や自由時間を取っている彼らに訝しみつつも、シロナは今は確実に味方なのだからと言い聞かせるようにして己の感情を飲み込んだ。

「それにしても、マグマ団もハウエン地方の組織ってことよね」

彼女が手で転がしていたのは、先ほどダークから手渡されたもの。ポケットから同じものを取り出しその隣に乗せる。先ほどハマゴと電話をしていた際に言っていたマグマ団員から徴収したものだ。これで、2つ。虹色に輝く小さな珠。遺伝子構造の二重螺旋を描くかのようなそれは、今のシロナにとってすっかり馴染んだものであった。

「下っ端ですらコレを持つてるってことは……いえ、やめましょう。もう過ぎたことなんだから」

「コレ」は紛れも無い貴重品だ。ハウエン地方でのマグマ団がこれを手に入れるには、発掘をするか他人から奪い取るくらいしか入手方法は無い。しかし、あの「新生マグマ団」を名乗る過激派集団の手段は後者であることは明白だろう。そうした事実を苛立ちと悲しみを覚えながら、シロナは手のひらに転がる二つの珠を握りこんだ。

道征く者達

ポケモン研究の奥は深い。今わかっていることなどは表面的なことばかりで、なにがどうしてこうなるのか、なんて事は未だ人の手で解明されていることはほんの僅かとも言えるだろう。

ところでポケモンの不思議の中でも、もつとも多く事例があるにも関わらず解明されていないものの代名詞といえば、やはり「ポケモンの進化」だ。あるものはまったく違うタイプに変化し、あるものは元の体を更に丈夫にしたようになる。そしてあるものは虫のように蛹として中間を挟み、三段階目の威風ある姿を現すこともある。

そして、不思議なのが伝説・幻というポケモンたちには進化がないこと。フォルムチェンジと呼称される形態変化は見受けられるが、その大本の性質は進化したポケモンに比べて全く変わっていない。

ここシンオウでいえば、渡りをするシェイミたちのスカイフォルムとランドフォルム。イツシュ地方ならば、神話に埋もれた土着神、ランドロスたちのれいじゅうフォルムとけしんフォルム。こうしてみれば、進化とはまた違った見方があるのもうなずける。

「ううむ……できれば英雄殿にギラティナを紹介してもらえば早いのだが」

そうしたフォルムチェンジの資料と、これまでの研究成果を両手に持つてにらめっこをしているのは、我がシンオウ地方ポケモン研究の権威、ナナカマドだ。

ポケモンの90%は進化する。ということを提唱したポケモンの「進化」についての第一人者。近年は単なる進化ではなく、ポケモンとの絆や特殊な石との共鳴で起こる一時的な進化の「メガシンカ」にも手を出しているが、薄々とそもそもの「恒常的な進化」と毛色が違うため別の意味で興味を持つているお年ごろの研究者である。

彼は時計を見上げると、持っていた資料を元の場所へ戻して白衣をはためかせた。部屋に籠もりつきりで中を駆けまわるように調べるものがあつたため、多少の汗を書くほど火照っていたからだろう。

ナナカマドがすっかり冷めてしまったティーカップの中身で喉を

潤わせながら、ひとまずの休憩を入れていたその時である。チリン、と短い来客のベルが鳴らされた。

「ごめんくださいーい」

カンカン、とドアをノックするマーズ。

コトブキシテイを出発した彼らは、両悪の組織からの追撃もなく無事にマサゴタウンへと到着していたのである。そしていつものようにポケモンセンターで部屋を借りた後、最小限の荷物だけ持ってハマゴたちはナナカマド博士の研究所を訪れていたのであった。

「やばっ、あたしポケモン研究所なんて来るの初めてだから緊張してきちゃった」

「人が忙しい図書館だと思っつけ。どうせ俺らはおじやまさせてもらう側なんだからよ」

何をやらかしたのか、相変わらず羽衣の部分を掴まれてうなだれるジラーチを背中に担ぐハマゴが答えてみせる。ポケモン虐待待ったなしの光景にも見慣れたマーズはそれを華麗にスルーしながら人が出てくるのを待っていると、キィと木材の音を軋ませながら研究所のドアは開かれた。

「おまたせいたしました。当研究所へようこそ」

「シロナから連絡は来てねえか？俺はハマゴっていう者^{モン}だ。ちよつとばかり研究所内の資料を見せてもらいたくてよ」

そう言うと、手元のバインダーの紙とハマゴを見比べる研究員。

「ハマゴ様、ですね。……はい、ただいま確認いたしました。それではまずナナカマド博士とお会い頂けませんか？あ、そちらの女性は……？」

「付き添いだ。邪魔させないよう強く言っとくから」

ヒラヒラと手を振って彼は足をすすめる。通される途中、背中側に担がれたジラーチを見てギョツと研究員が驚いていたが、一行はそれを見事に無視。そうして多少しどろもどろになっていく研究員に通された応接室で待っていると、長身の老人が入室してきた。

「待たせてしまったかね」

「いいや、お会いできて光栄だぜ。ナナカマド博士」

「話には聞き及んでいるよハマゴ君。今日は存分に我が研究所を見ていってくれたまえ」

立ち上がり、ガツチリと握手を交わした彼らは座談に入った。

「む、そちらは……ギンガ団幹部のマーズではないか」

「元、よ。今の過激派とはむしろ敵対関係だから安心しなさい」

服装や雰囲気は変わっても、顔つきをすっかりと覚えていたナナカマドは警戒を見せたのだが、直後に毒気を抜かれたように警戒を解いた。伊達に歳を重ねては居ないということだろう。今のマーズがまったく害の無い存在であると理解した彼は元の調子に戻ってハマゴとの会話に花を咲かせ始めた。

まず話し合ったのは、今日ハマゴが閲覧したいというポケモンの資料について。生体データから生息地、周辺の環境や薬草といった細かいデータを彼が望み、それらは膨大過ぎるため一挙にメモリーの中に収めたものを渡すという形になった。研究の集大成とも言えるものだが、実際に研究を奪うわけでもなければ、敵対するわけでもない。その辺りに関してはスムーズに事が進んだ。

さて、彼の個人的な用事はこれまでにして、これからはシンオウ地方を包み込む不穏なものについての話し合いだ。ここからはマーズも会話の中に参戦してくるようである。

「さて、まずはコイツだが」

そう言つて、ハンドバックのように羽衣を引っ掴みジラーチを差し出すハマゴ。もはやその扱いにも慣れたのか、ハアイと片手を上げて笑顔で対応するジラーチにナナカマドの表情はいささか苦いものになる。これも一つのポケモンとトレーナーのあり方としてカウントしてもいいのだろうか。

ナナカマドの苦悩も我関せずと言ったようにハマゴは話を進めていった。

「今のコイツは、まず願いを叶える力を持たない。7日間を越えずと続き続けている。そしていざって時に発揮するエネルギーは

馬鹿にならない。そんな異常を持つてるのは博士もわかってるよな」「ウムツ、もちろんだとも。そしてシロナくんから聞いているよ、マグマ団どころか過激派ギンガ団にも狙われているのだとな。狙いはジラーチの持つ「願いを叶える」ということなのか、それとも膨大なエネルギーを利用して何かを成し遂げようとしているのか」

難しい顔で額を弄るハマゴの隣で、マーズはピンと指を立てた。

「その点ギンガ団…ジュピターに関してはわかりやすいわよ。破れた世界に行つてアカギを連れ戻すため、ジラーチの願いの力を使おうとしてるんでしょね。願いを叶えるかどうかは別にしても、今のギンガ団は洗脳技術に長けてるわ。願望機になつたジラーチを操り人形にするなんて容易いでしょね」

「となると、問題はマグマ団だ。おそらく願いを再度叶えられるようにする何らかの手を持っていてもおかしくはねえ、そしてまだ全貌も見えない相手だ」

マグマ団に関しては、今のところトップも分からない状態だ。かつてのトップ……マツブサは今回の件にはもう関わらないような状態であるのはわかってる。だから、今のマグマ団はマツブサから離れてその名を掲げる不屈き者といったところだろう。

烏合の衆なのか、それとも明確に力を持ったのが一人いるのか。元マグマ団研究者であつたバトラーはマツブサが現役の時に退団してしまつて居るため、情報源としては役に立たない。ここは、シロナが襲撃した時に見つけたマグマ団員からもたらされる情報を待つしか無いだろう。

「追ひ求める結果はどうあれ、過程としては同じだろうがな。とにかく俺のそこからジラーチを奪取しようとして動いてくるはず」

それだけは間違いのない事実だ。これからの旅路がより暗雲の立ち込めるものになつた事は望ましくないのだが、だからといってハマゴはジラーチを放り出すようなマネはしない。たとえそれが、シロナたちの側にジラーチを預ければ済む話で、むしろ自分が預かっている方が危険であつたとしても。

これが不利益になるのはシロナ、ハマゴ。そして関係者全員が周知

の事実であり、同時にギンガ・マグマ団側としては付け入る最大にして多様な隙だ。それでも誰も強硬してでもジラーチを隔離しないのは、各々の意志を通すことが許された甘い世界からなのかもしれない。

そういう意味では、何故このタイミングでハマゴが自分の元を訪れたのかわからない。多少の疑問符を掲げながら、ナナカマドは次の言葉を放つ。

「すまないが、それに関して我々では対処の仕様が無いのだが」

「まあ此処に来てこの話をしたのは、頼みごともあることだよ」

「ふむ、頼みごとかね？」

今更ナナカマドを通して最適な機関に預けるわけではない。

始まりは、マグマ団の一人を捕らえたというシロナの話聞いてから。ふと浮かばせていた考えをいざナナカマドへと伝えると、ナナカマドはあごひげを擦りながら興味深そうな声を漏らしてみせた。

「だが私達も研究や事態への対処と暇ではない。もちろんシンオウの危機ともあればある程度の時間は割くが……」

「片手間でも構わねえさ。やっといてくれると助かる」

「ハマゴ君がそれでいいのなら……あまり意味があるとも思えんかね」

「あんたも突飛な事思いつくわ。そういう意味ではアカギといい勝負かもしれないけど」

目を丸くして驚く彼女に、意味があるかどうかは俺と相手次第だとハマゴは嗤ってみせた。そうして膝の上ですっかり眠ってしまったジラーチの羽衣を引っ掴むと、また背中に回して吊り下げる。

今となってはその衝撃ですら起きなくなっただいねむりポケモンのジラーチ。仮にも幻のポケモンを相手にぞんざいな扱いをするハマゴに苦笑しつつ、ナナカマドは共に席から立ち上がった。

「それでは、さっそく当研究所の案内をしよう。ついてきてくれたまえ」

「ありがてえ。マーズはどうする？」

「んく……先にセンター戻ってバトってるわ。一応クロバットは残し

とくから、なんかあつたらコイツに頼んなさい」

「あいよ」

クロバットのボールを受け取ったハマゴは、腰のボールホルダーにそれを収めた。マーズが礼儀正しく一礼をしてから研究所を出て行く姿を見届けて、ハマゴはナナカマドの後についていく。

やがて研究資料室とプレートが張り付いた部屋に通された彼は、しばらくの時間をナナカマドと共に過ごすのであった。

一方、ポケモンセンターに戻ったマーズは久々のひとりきりの時間を満喫しはじめていた。マサゴの喫茶店で軽めの昼を取った後は、よさ気なアクセサリー店などに足を向けてぶらぶらと練り歩く。ポケモンの回復関係の店はハマゴがいるという理由で寄らなくてもいいため、本気で自分の趣味に没頭できる時間である。

「さて、次はどうしようっかなあ」

そこで、ふと思いついた。ハマゴに言っただけのもの、まだ一度もバトルはしていない。既に夕方が近い時刻ではあるが、学校・塾帰りのポケモントレーナーが最もポケモンセンターに集まる時間だ。バトルコートも人で賑わっていることだろう。

時間的に子供が多いが、かのシンオウの英雄のような玉が無いとは言い切れない。アカギから吹っ切れた以上、心に余裕ができたマーズは純粋にトレーナーとしての沸々とした滾りを抱き始めていた

そういう意味では、おおよその戦術を理解しつつ相手の心が取り乱されていくジュピター戦はあまり心躍るものではなかった。あれは説得や止めるという真剣な熱さ。今彼女の内側で煮え滾っているのは、純粋な力比べや自分の高みを目指せるかどうかというもの。

そんな燃え尽きる思いを抱きながら、彼女は軽い足取りでポケモンセンターへと向かっていった。すると、やはりそのバトルコートには多くの影がある。近所の初老の夫婦や、暇を持て余した主婦が観客となって取り囲むコートの一つが、今までになく賑わっているようにも見えた。

はて、一体そこで何が行われているのだろうか。よほど熱いバトル

でもあるのだろうか。そんな期待を抱きつつも、辿り着いた彼女は人の波の向こう側の光景を目に焼き付けられることとなった。

まず感じたのは、ぶわつと顔に掛かるほどの熱気。いや、熱気と勘違いしてしまいそうなほどの闘気である。その発生源は、対戦しているポケモン・ルカリオとそのトレーナー。ハッ、という掛け声とともに地を蹴り上げたルカリオは、トレーナーのうごきと同調するように「はどうだん」を放つ。

対して、相手側から感じたのは底冷えするような凍気。その全てを凍てつかせると言わんばかりの空気ごと凍らせるユキノオーの「れいとうビーム」が地面に炸裂し、事前にルカリオが着地しようとしていた足場を崩していく。ほんの一瞬でのやり取りの中、確かに感じられる知略を駆使する相手に対して、ルカリオのトレーナーは叫びを上げた。

「乾坤一擲！ 行きますよルカリオ!!」

ぶるっ、とはどうを感じる耳元の房を震わせる。ルカリオはその手に「ボンラッシュ」の長い棍を握っていた。そして凍った地面へと叩きつけることで飛び出した勢いをそのままに、ユキノオーの頭上へと躍り出る。マズイポジションを獲得されたと判断したユキノオーのトレーナーもまた叫んだ。

「すごいすごいっ！ だったらこっちはウッドハンマー!」

吠えるユキノオーとルカリオが激突。

されど、直後にルカリオは一本の長い棍となっていたボンラッシュのエネルギーを二つに分かった。ボンラッシュの二刀流として、一発の威力では勝るウッドハンマーへと対抗しようということだろう。二本の棍棒と二本の腕がぶつかり合って、激しい火花を散らしている。そのまま手数で攻め、そのスピードに載せた技術が確実にユキノオーを追い詰めていく。

一分、押されたユキノオーのつま先には交代した土の跡が残っている。まるで自分が戦っているかのように正拳をつきだしたながら、ルカリオのトレーナーは握る拳を開いた。

ルカリオもまた、後ろのトレーナーと同調するように棍の一本を上

へと投げ捨てる。やがて重力に従って落ちる一本と、まっすぐ向かってくる二方向への挟撃にユキノオーは防ぎきれないと判断。もつとも勢いの強い正面からの衝撃に構えたが、ユキノオーのトレーナーは相手の狙いに気づき焦ったような声を上げた。

「それは受けて！ その後に“じならし”！」

主人の声を聞いて、すぐさまガードを解いたユキノオーはボーンラツシユの二本を甘んじて受ける。爆風で包まれるユキノオー。これに苦い顔をしたのはルカリオのトレーナーだ。だが、もうそれは間に合わない。ここまで来たからには一気に押し切るしかない。

ボーンラツシユで体力を多く削っている以上、ワンチャンスはある。まさに乾坤一擲の状況。自分のルカリオが先か、それとも振り下ろすユキノオーの足が先か。

その結果は——爆風を突き破るルカリオが知っていた。

「ツ！ はっけい！」

「しま——」

地面に降り立ったルカリオはユキノオーの真後ろ。片足を軸に、前足を踏み出しながらその広げられた両手がユキノオーの懐めがけて突き出される！ 足が地面に触れるその直前、フワツと浮いたユキノオーの巨体。勝負は此処に決した。

ルカリオのはっけいが、浮いたユキノオーの内部で爆発。大きく身を震わせたユキノオーはじならしのために発光させていた足のエネルギーを霧散させる。ダンツと地面と水平に吹き飛んだユキノオーはバトルコートのセンターライン辺りで停止するが、誰の目から見ても戦闘不能であることは確実であった。

「すつづ……」

マーズはこの対戦していた二人を知っている。いや、トレーナーならば誰もが知っているだろう。トバリシティとキツサキシテイのジムリーダーなのだ。ギンガ団にいたころにも、妨害してくる実力者のブラックリストとして十分に知っていた。

だが、今ではそのデータも役に立たないだろう。暗躍組織だったギンガ団がただのエネルギー開発会社になってからどれだけの時が

経つただろう。その間、ジムリーダーの二人もトレーナーとして大きく成長を遂げている。ただでさえ若い年齢なのだ。成長する余地はいくらでもある。

そんな数々の情報を頭のなかで巡らせながら、マーズは感嘆の言葉を口にする。ジムリーダーはバッヂの数に応じてバトル内容が変わるが、今のは正真正銘本気のやり取りだっただろう。その中で言葉少なくも通じあっていたルカリオとスモモの姿は、同じスピード系のバトルを得意とするマーズにとって理想の域にあった。もちろん、彼女自身負けるつもりはないが。

硬い握手を交しているジムリーダー兩名、スモモとスズナはそのまま一戦を終えたことで、いい汗をかいたと互いを健闘しあいながらフィールドを離れようとしている。人々も熱気に当たられたままモンスターボールを取り出し、近くの相手と新たなバトルをし始めている。しかし、当のバトルを終えた二人に声をかける人物は見当たらない。

「ねえ、ちょっといいかしら?」

チャンスは今だろう。乾いた荒野の広がる火星、その名を冠したマーズは、その二人を呼び止めた。正確には、スモモの方だが。

「どしたの…って! あなたはギンガ団のマーズ!」

「なんでこんなところに!」

当然、この二人もギンガ団解散とマーズたちの退団の事は聞いていたが、事件の大きさが大きすぎた。当然ながら警戒しはじめた両者に、先程まで温まっていたマーズの心は急速に冷めていくのを感じた。

「はあ、そんな反応一日一回でいいわよ……」

肩を落としながらも、まだ完全に冷め切ってはいない心の中に言うておこう。

マーズはそう思いながらに続ける。

「まあギンガ団諸々はもうあたしにとってどうでもいいのよ。そんなことより、あんたらしばらく此処にいんの?」

「どうでもいいって……一応、明後日までは滞在予定ですが」

スモモの答えに、マーズは自分の口角が釣り上がるのを感じた。

中々に良い時間だ。あちらにも都合はあるだろうが、ポケモンバトル一回分くらいなら問題はあるまい。

「そう！　じゃあ、早速だけどバトルの予約入れても良い？　もちろん、バッヂは関係ない本気のヤツで」

「あなたが何を考えているかはわかりませんが」

自らの胸に手を当てて、スモモは拳を前に突き出した。

「その挑戦受け取ります。元ギンガ団幹部の実力、この手で打ち破つてみせましょう」

「ちよ、スモモやるの!?!」

「ええ。あたし達の目的そのものではないですか」

鼻の先の絆創膏を弾いて言ってみせるスモモ。

「そうだけど……」

「それこそ気合ですよ！　変なことされても弾き飛ばせばいいだけです！」

不安げに言うスズナに、スモモは彼女の信条をそっくりそのまま言い返す。

納得しかけてきたスズナたちとのやり取りを正面から見ていたマーズは、いかにも居心地悪げに頬をなぞった。まるつきり悪役のよくな立ち位置にされていることはいまさらだが、こうもあからさまだと流石のマーズと云えど何も感じないわけではないのだ。

「あー、それじゃあ明日の朝方にまた来るわね。3対3のルールでいきましょ」

「望むところですよ。さあスズナ、相手が相手だからといって煮え切らないその根性から叩き直しましょうか！」

「ちよ、ちよつと今からやるの!?!」

「当たり前です！」

「……いつてらっしやーい」

服の首根っこを引っ掴まれ、服が伸びると文句を言いつつもスモモとのやり取りは吝かではないのだろう。笑顔のまま彼女らはマーズの視界の外へと消えていった。言ってしまうえばアレな光景だが、多少スキンシップがあるというのは珍しいわけではない。自分にもあ

いう励まし合える仲間が居れば、或いは違う道を歩んでいたのかもしれない。

マーズもまた、二人を見て感じるものがあつたようだ。まったく言つていいほどその道は違つている。ならば、この道を行つて、更にそこから進んだ自分はその二人相手にどこまで通用するのか。

「なんだろう、ホント。色々と考えるだけでも楽しいじゃない」

カタカタと揺れるモンスターボール。中のブニャットも、マーズの感情を受けて気が高ぶつていのだろうか。邪悪で快活な笑みを浮かべているであろうブニャットをダメージとボールの上から抑えながら、マーズはポケモンセンターの自室へと戻ることにした。

今から特訓らしきものを始めるあの二人と違つて、消耗することは良しとしない。しっかりとコンディションを整えるためだ。

だが、その前に。

「あ、ハマゴに連絡しところかな」

ピッピッピッ、とポケッチの投影画面を三回タッチ。

一度目はメニュー、二度目は番号欄、三度目はコールだ。しばらくして手のひらサイズの投影画面にはいつもの凶悪な医者ヅラが表示された。

《あ？ どうした》

「機嫌悪いの？」

《いや、喉乾いてるだけだ……んぐ》

画面の彼はカップを煽つて中身を一気に飲み干した。

《んで、何だ？》

「マサゴタウンにはいつまで居る予定か決まったの？」

《一応は2日くらい滞在予定だ。なんかやることでもあんのか？》

書類に目を通しながら会話しているあたり、彼の器用さが伺えるだろう。いや、もともとポケモンドクターなんてものをやっているのだから、どこかしら器用なところは幾らでも見ることができる。

ずっと一緒にいるのも、少なくともはない時間だ。ハマゴのらしいところを見て謎の安堵感を覚えながら彼の仕草に自然と笑みがこぼれて

きた。

《んだよ、いきなり笑ってどうした》

「ふふ、あんたも随分と熱心だなと思ってるね。あたしはバトルの先約してきちやったからね。ちよつと位遊ばせてもらおうわ」

《わーつたよ。俺もデータ以外で欲しいの煮詰めの時間に時間かかるし、博士との駄弁りも長引くだろうから暫くは滞在で決まりだな。つと、シロナの方にも連絡入れとくか》

「任せたから。それじゃあねー」

バイバイ、と手を振ってマーズは笑った。最近、こんななんでもない事に対して自然と笑えているのを自覚する。唇に指を当てて、また微笑みがこぼれた。

「ああ、そういうことで頼むぜ。多少遅れるがまあギンガ団が暴れねえ限り大丈夫だろ。無責任とかいう言葉は受け付けねえからな、つと」

「君は随分女性との知り合いが多いな。よもや、コレかね」

「は？ ハアツハツハツハ！ だったら面白えな」

からかうようにピンと立てられた小指に、ハマゴは一瞬間を固まらせてから爆笑する。直後に出るのは否定の言葉。別段だれとも付き合っていないし、そのどちらもハマゴが理想とする女性とは程遠い。男女での旅路とはいえ、恋なんてものとは程遠いハマゴにとって、ナカマドのからかいはずボに入ったようだ。

「残念だがおとなしめの女性が好みだよ。ま、んなくだらねえこと言っていないで聞かせてくれや」

「ふむ、どれどれ」

ナナカマドが覗き込んだのは、常冬の街キツサキシテイ周辺の植物とポケモンについての資料であった。その中から出てきた薬草や木の実の効用についての質問に、ナナカマドは何も見ずにスラスラと答えては、途中で待ったをかけられハマゴとの討論が始まる。

この二人は二人で、実に充実した時間を送れていると言えるだろう

う。それからシンオウ地方のおおよそのポケモンの生態や資料を叩き込んだハマゴは、深掘りしていけば大丈夫かと白衣についたホコリを払った。

「ところで、邪魔しちまつてるが研究のほうは大丈夫なのか？」

「ウムツ、構わんよ。行き詰まっておったところだな、君のような若者と話しているといい具合にインスピレーションが刺激される。むしろ、いい薬だ。君の誰にも崩さない無礼なスタンスも合わせてな」

「だったら無料で処方箋出させてもらうか」

「上手いことでも言ったつもりかね」

「言葉遊びは好きな方だぜ、相手をおちよくる常套手段だ」

言いながら、彼はナナカマドのぶんのコーヒーを淹れる。多少寒めの北の地方、暖かなコーヒーの湯気がもくもくと研究所の天井に向かい、その途中で消えていく。

「ふう、あつたけえ」

「合間に飲むこれもまた格別だな……ところでハマゴ君」

「ん？」

「先程の件だが……君は繰り返すつもりではないだろうか？」

「ナイナイ。んなことには欠片も興味ねえしな」

「ならば良いのだが……今のところ、メガシンカについて話していたプラターヌ博士のところも不穏だな、そして我らがシンオウでは他地方の組織が暗躍していると来た。私も多少張り詰めているのやもしれんな」

ぐつ、とカップを傾けるナナカマド。

「……この辺りで俺は退散させてもらうわ。ジラーチもいい加減硬い地面よかベッドが恋しいだろう、よつとー」

一息に立ち上がったハマゴは、眠っているジラーチの羽衣を掴みとった。

ボールに戻さないのは彼の厳しきゆえか、単なる弄りの一環なのか。

「ああ、明日来るときは昼以降にしてくれたまえ。こちらも来客があるのではな」

「あいよ。それじゃあまだだ、ナナカマド博士」

「うむ、また」

ドアを開け、ハマゴはそのまま立ち去った。

最後に話しながら、きちんと読み漁った資料を整理整頓していく彼の手の良さに関心を抱きつつも、ナナカマド自身ポケモンドクターという観点からみた、ポケモンについてのハマゴの論理に頭のなかで電球が灯る。

「さて」

やがてナナカマドも資料室を出て、明かりのスイッチがポンと押される。

真っ暗な資料室からは、音も光も消え去った。

その心滾るままに 前

朝焼けの赤が残る頃、ポケモンセンターの裏庭で腕を十字に組み、グングンと腕を引き延ばすマーズの姿があった。正式な形でのポケモンバトルというのは一体何時ぶりだろうか。日々アカギに囚われていた頃にも鍛錬ばかりは欠かしたことはなかったが、実戦を経験するのは相当に久しい。腕が落ちていなければ良いのだが。

軽い心配を覚えながらも、彼女は相手にがっかりされないようにという気持ちを抱く。数時間後に訪れるであろう対戦に想いを募らせ、口元には小さな笑みが形作られていた。マーズ自身少々舞い上がってしまっているのかもしれない。なんせ、心の底からそうでありたいと思つて挑んだ事はただのバトル以上に久しぶりなのだから。

「朝っぱらから精が出ることで」「うわっ!？」

突如として降ってきた声はマーズの頭上から。その発生源たる二階の借りた個室の窓辺で、ヒラヒラと手を降っているハマゴの姿があった。窓辺で頬杖をつく彼に驚かされた仕返しと言わんばかりにマーズから多少の怒りが放たれる。

「なによ!・びっくりさせんじやないわよ」

ガーツと吠えるように抗議したマーズへ返されたのは薄ら笑いであつた。

「ハッ!・このくらいでビビッててバトルの指示ミスつたりするんじゃないかねーかつて言う心配だよ。素直に受け取れ」

「本心は?」

「驚いたろ」

「最ツ低!・コンディション乱れたらどうしてくれるのよ」

「そんなときや時の運だ。安心して負けてこい」

普通なら応援するものではないだろうか。とにかく、マーズがジムリーダー二人組に挑んだと知ってからハマゴの態度はずっとこれである。負ける、負けてこいなどと間違つても意気込んでいる人間に浴びせる言葉ではない。その辺りが分からないはずもないのだが、奥の

感情を察せない張り付いた笑みを浮かべていたため、マーズはその本心を計り知ることができなかつた。

だから、結局のところ大きめのため息を一つ吐き出す。これが今の彼女にできる精一杯のハマゴへの反抗である。直接ポケモンでぶちのめしてもいいが、その際はまた揚げ足を取って話される話題が増えるだけだと彼女も十分に理解していた。

「実際のところどうなんだ、相手はジムリーダーだろ？」

「しかもかくとうタイプが主体よ。クロバットはともかく、あたしの手持ち二匹は相性あんまり良くないわ。逆に、こつちから弱点をつこうと思えばエスパーとひこうの遠距離があるから問題はないけど……」

そこで言葉を詰まらせるマーズ。理論ばかりでは勝てないと分かっているから、形容すべき言葉が見つからずについてい黙りこくつてしまう。

相性だけで考えて上手くいくのはジャンケンやプログラムのように、不確定要素が無いよう取り決められたものだけなのだから。

加えてこの世界において、トレーナーは苦手な技が来たからといって全てを受けるのではない。ポケモンに指示を出し、時には相殺、時には回避させることで食らわれないようにすることもできる。だから、あまり防御の高くないポケモンであればワザの直撃はすなわち戦闘不能への終着点であるとも言われる。

更に言えば、相手が見た目通りの動きをするとは思えない。例えば、ドダイトスのように重量級の相手が出てきたとして、いざ動くとき見た目と裏腹にすさまじい速度で懐に入られるということもある。どこぞのマサラ人が使っていたハヤシガメまでの戦闘スタイルのようなものだ。

「とりあえず、腹くくったのは確かよ。今やってんのはあたし自身のパワー充填！ ブニャットちゃん達はしっかりセンターに診てもらったし、要所でふらりとよそ見しちやったらポケモンちゃんたちに申し訳立たないったら」

ふんっ、と鼻を鳴らして言い切るマーズ。意気込みを語る彼女に返

されるのは、やはりハマゴの薄ら笑いと適当に間延びした声だけであった。

「おうおうそうかいそうかい。んじや適度に頑張りな」

「ちよつとぐらい、激励くれても良いんじゃないの？」

「ほう？」

したり顔になったハマゴ。

彼はすぐさま面白おかしいといった様子で返してみせる。

「それじゃ、負けたらボディガードはシロナにでも頼んでみるか。当然テメエはお払い箱だ」

「ハア!? あんた一人だと狙われるじゃない! 何言ってるのよ!」

「と、想ってくれる程度にはジュピターと因縁あんだろ? せっかくのギンガ団と高確率で会える俺から離されないようせいぜい頑張るこつたな」

「きいー! あんた本当に性格悪いわね! このつ、馬鹿ツ!」

マーズの足が勢い良く振り上げられる。履いていたサンダルは見事すっぽ抜け、ハマゴの額と小気味の良い音を立てながら激突するのであった。

「どうやら、逃げずにやってきたようですね!」

「ああはいはい。そういうのわかったからさっさと初めましょ」

シュツ、と正拳突きを繰り出し待ち構えていたのはスモモ。トバリジムの肉体派ジムリーダーというのは広く知れ渡る事実。そこから、まだまだ成長中という期待の星である。対するマーズは元犯罪集団の幹部。その事実が抜けきっていない以上、正義感の塊であるスモモは、同じトバリシテイにあったギンガ団に手を出せなかったという負い目もあつてか、いささか過剰な反応を見せている。

実際にそうした視線を向けられてみれば、思った以上にクルというのがマーズの素直な感想だった。今からするのはタダの野良バトルではあるのだが、相手方の気持ち次第でこうも自分の感情すら塗り替えられそうになるとは、とマーズは肩の辺りを重く感じる。

(ま、そう思うのも当たり前前よね)

マーズは名ばかりの幹部ではない。谷間の発電所を占拠してエネルギーを奪取し、そして三湖を蒸発させるための爆弾を設置・爆破した実行犯でもあるのだ。幸いにも人間に死者が出なかったのは幸運だが、まず間違いない爆弾の件で湖に住んでいた大半のポケモンは死亡している。命を奪った行為、それをこの両者は捉え方こそ違えど同じ事実を忘れては居ない。

変わったのだと言い切って、それで済むような話ではないのだ。まあ、ここまで来て持ち込まれても正直なところ思いだけだというのが、マーズが今感じている現実逃避気味の感情なのだが。

「なんでも良いけど、まずはルールを確認して真剣勝負と行きましょ。ぶちのめす、たたき直すなんてのはその後で十分でしょう?」

マーズの問いかけに、真剣な表情でスモモは頷き返す。これくらいの話は通じるようで何よりだ、とひとまずマーズは息をついた。

「使用ポケモンは三体。あらかじめ決まっているポケモンだけを繰り出せるわ。途中交代は無しの勝ち抜き。その他は基本ルールに従ってバトルよ」

「審判はどうしますか?」

「自分のポケモンのコンディションくらいわかるでしょ? それと、長考や間延びもありな野良試合の形式が望ましいわね」

「分かりました。どうやらそちらの方にはブランクがあるようですが……関係ありません。全力で参ります」

ようやく、何かしらのしがらみも関係のない普通の闘気を当ててくるスモモ。キツと睨みつけるような眼光は闘志を乗せるためのものだと思えば恐ろしくともなんともない。むしろ、これからだという気持ちだがマーズの心を染め上げていき、真正面からニヤリと返す。

「さあ、来なさいブニャット!」

「いきますよゴリーキー!」

飛び出してきたのはブニャットとゴリーキー。相性で見ればノーマルタイプのブニャットは完全に不利であるとも言える。事実、スモモはその相性差とブニャットの体格を見た上で眉を顰めてムツと

唸ってみせた。

「手加減しているのですか？」

「まっさかあ！ あたしのブニャットちゃんは最強よ」

「それは、聞き捨てなりませんね！ からてチョップ！」

まず先手を取ったのはスモモのゴーリキー。オウ！と勇ましい声を荒げながら、主人の怒りを体現するかのようになり、接近したゴーリキーから鋭い「からてチョップ」が振り下ろされる。その速さたるや、流星はジムリーダーに育てられたポケモンといった所か。

頭上に迫った凶刃ならぬ凶拳を、しかしブニャットは「見てから」反応してみせる。主人の号令なくともその身をひらりと翻し、まるで風圧を受けて舞う花びらのようにスルリと抜けてみせる。

この動きに驚いたのはスモモではなくゴーリキー。いつもなら完全に先手を取っていたはずの一撃を交わされ、ポケモンとしての意識に少しばかりの緩みが出た。それをやすやすと逃すブニャットではない。もつと力強く、もつと素早く、そして当たり前のように自分たちを滅して見せた「英雄のポケモンたち」に比べれば、と。

「みだれひつかき！」

「ッ、まもるー！」

ブニャットはゴーリキーの突き出された腕を足場に、体に捻りと回転を加える回転にて爪による連撃をスクリューのように浴びせかける。しかし一瞬のスモモの判断で「まもる」の緑光の盾がゴーリキーの眼前に展開され、激しい火花と甲高い音を響かせながら攻撃を無効化。

それに負けじとまもるの効力が及ばない場所へ爪を伸ばし、トリックキーな動きで攻め立て、時には地面をドリフトするように後方へ回りこむブニャット。しかしゴーリキーはそれに思いもよらぬ対処の仕方をしてみせた。

「ゴーリキーー！ 行きますよー！」

スモモが、腰回りにつけていた二本の棒を鎖でつなげた道具——ヌンチャクをじやらりと取り出すとそれを振り回し始める。その声と音を聞き、ゴーリキーはスモモの動きをトレースしたかのように腕

を振り回し、そして後方より迫っていたブニャットのみだれひっかきは弾き飛ばされた。

驚愕の表情を浮かべながらも、態勢を立てなおして下がるブニャット。ゴリーキーはしてやったり、と言った表情を浮かべるとその場でブンブンと「それ」を振り回し始めた。

「ハイッ、ハイッ、ハイッ!! 防御は最大の攻撃へ転じる、です!」
ゴリーキーがブニャットを弾き飛ばしたタネは、その手にもった「緑光のヌンチャク」にある。かくとうタイプであるのに、エスパークイプのように技を変形させて創りだされたその武器は、あらゆる攻撃を防ぎきる程に固く、それすなわち強靱な棍となる。

ゴリーキーとスモモの動きは一致していた。ヒュンヒュンと振り回されるヌンチャクの舞。ヌンチャク、と聞いて思い浮かべられるあの動きを繰り返し出し、ブニャットとマーズを威圧するようにゴリーキーは構えを見せた。

「大丈夫? まだイケるわね!」

面食らうブニャットであったが、予想外の攻撃が来たからといってどうなのだ。まだ受けたのは「まもる」を固めたヌンチャクの、つまりは攻撃技ですら無いその一撃。機動力が失われたわけでもなければ、攻撃が通じないわけでもない。尻尾の先にピンと張るような心地良い緊張感は、これまで久しく味わっていなかった良い味だ。マーズもブニャットを通じて、同じく感じる戦闘への高揚感。

温まってきたエンジンをかけ直すかのように、ブニャットは力強く地を蹴った。

「さあ、特訓の成果を見せる時よ! ——ねこのて!」

勇ましいマーズの雄叫びにも似た号令。そして繰り出された技は、なんと運任せと言ってもいい「ねこのて」である。自分以外の手持ちのポケモンの、誰かのどれかの技をランダムに繰り出す博打技。こんな転換する場面で使うということは、それによる動揺を誘うのが目的なのだろうか。スモモがそこまで考えて迎撃の構えを取った瞬間、同じく構えていたゴリーキーに真空の刃が襲いかかった。

「なっ!? くっ……!」

しかしすぐさま動揺を抑え、ゴリキーはスモモと同じ動きをしながら真空の刃「エアカッター」を打ち破る。ゴリキー自身の視界や距離感と、第三者視点であるスモモの視点。それらを混ぜあわせることで死角をなくした防御は、いともたやすくエアカッターの群れを攻撃する。

「まだまだ行くわ！　ねこのて！」

しかし迎撃はたやすくとも、縦横無尽に駆け巡るブニヤットからは追加のエアカッターが決まりきっているかのように吐き出される。指示しているのは「ねこのて」。そしてブニヤットはエアカッターを覚えられないためまず間違はなく指示とは違う技を選択しているというわけではない。ともなれば、スモモに考えられる可能性の終着点の一つ。

「あなた、はっ！」

ゴリキーはまだまだ防御から攻勢に移れない。そのため、同じ動きをするスモモはその動きの合間に思った疑問を口にする。

「その技、自在にッ！　扱える技を、選択できる、のッ、ですね!？」

「ご名答よ。正解したあなたにはご褒美上げるわ！　ブニヤット！」

号令が掛けられた途端、円を描くようにゴリキーを包围する動きのブニヤットは一瞬でその軌道を変える。放たれたエアカッターよりも疾くゴリキーの頭上に飛び上がり、ねこのての発動を止めてその巨大な腹をゴリキーに向ける。一見すれば無防備だが、スモモは当然分かっていた。厄介さ極まりないノーマルタイプの手段の一つ、その攻撃動作にほかならないのだと。

「のしかかり！」

「ゴリキー……はあああああっ！」

360度を埋め尽くすエアカッターと、そして空からは逃げ道を防ぐブニヤットののしかかり攻撃。どうあがこうともゴリキーの体力は削りきられると判断したスモモに、しかしゴリキーは背中越しで口元の笑みを見せた。それに、スモモは安心したように笑い返すと右足を軸にぐるりと回転する。

動きに追いつくゴリキー。しかしそれは防御のためではない。

視線はのしかかり攻撃をしてくるブニヤットへと向けられている。そして——着弾。

炸裂した技はフィールドを土埃だらけにし、その煙が晴れる前にスモモは片腕をすつと前に差し出した。直後に晴れた土埃の向こう側には、目を回して気絶するゴリキキーの姿。一瞬でモンスターボールの光を浴びてボールに戻される。

その反対側のフィールドには、ゴリキキーを倒した強者たちの姿がある。しかし、一体目を倒したというのにマーズの顔は優れない。ブニヤットもまた、片目を閉じてその身を僅かによじらせている。コレは一体、どういうことであろうか。

「…やるじゃないの。まさかあの瞬間に玉砕覚悟で来るとは思わなかったわ」

「こちらこそ、一度でも悔ったことに謝らせてください。確かに、あなたのブニヤットは強い。これまで見てきたどのブニヤットよりも」

「そのブニヤットちゃんに、戦闘不能ギリギリまでしつかりダメージ与えてくれたじゃない。あんたも十分強いわ……このバトルがとんでもなく楽しく思えるぐらいにはね」

ニツと笑うマーズは、しかしその裏で冷や汗を隠していた。エアカッター包囲と、のしかかりによる封殺攻撃が炸裂した瞬間だ。スモモに合わせてその場で回転したゴリキキーは、遠心力とその膂力を利用した砲丸投げを行っていたのだ。当然、投げるのは「まもる」を変形させた例のヌンチャク。

砲丸というよりも、不壊の投槍の全力をまともに食らったブニヤットは、攻撃の中断こそしないものの無防備に晒した腹へマトモに攻撃を受けてしまった。おかげで、やせ我慢をしてはいるが後一撃でもマトモにくらおうものなら倒れるほどに消耗している。

しかし、一勝は一勝だ。まだ完全に倒れる程ではないと気張って見せたブニヤットは、大地へ根を下ろす大樹のように四足を地面に突き立てた。やる気を見せる眼光とともに視線をスモモへ投げかけ、まだまだと言わんばかりに不敵な表情を作ってみせる。

「さ、やる気だからね。あたしはブニヤットちゃんを続投させるわ」

「わかりました。では、二体目のお披露目と行きましょう。恐らく、この地方の殆どの者が知らない私の新しい仲間です！ いきましよう、メロエツタ！」

そうして、バトルには新たな刺客が繰り出される。

逆巻く楽譜のような橙色の髪。バレリーナを思わせる意匠の体型。そしてスモモによく似た華奢な体は、しかし見た目に反した高いポテンシャルを秘めていることがわかる。トレーナーとポケモンは、よく似通った育ち方をするという。だからこそ、スモモの体現のようで、しかしスモモという格闘家にはあまりにも不釣り合いな音楽要素を含んだポケモンの登場に、マーズは瞠目すると共に警戒度を引き上げる。

「二応、紹介しておきましょう。この子はメロエツタ。私達が旅をしている時、一緒に来ることになったポケモンです。こうした勝負の場でのお披露目は初めてですが、修行は一通りしましたので、遠慮無くどうぞ」

「あ、そ。……だからといって、あたしは簡単には飛びかからないわよ？」

「では、少し緊張感を煽らせていただきます！ メロエツタ、かげぶんしん！」

ドレスの裾を持ち上げるように優雅な動作をしたメロエツタは、その一札の態勢のままに2体・4体・8体・16体と影分身を増やしていく。マーズが知り得るスモモというジムリーダーとはあまりにも違う気質相手に、面食らったのは否定しない。だが、それが原因になつて負けるのは否定したい。相手の口車に乗るようで癪ではあつたが、まだブニヤットが動けることを確認すると、マーズは次なる指しを下すことにした。

「あくのはどうー！」

ブニヤットが前足を振り上げ、地面に叩きつける。すると、薄い闇色の膜の中に黒いリングが散りばめられたような闇のカーペットが地面を這う。次の瞬間には影の中から飛び出して行き、メロエツタと言われたポケモンの影分身を次々と切り裂いていった。

影分身に対するお手本のような対処である。本体を見極められない状況にあるなら、まずはデコイだろうと本体だろうと影分身を一掃するための技を繰り出す。しかし、この場合においてマーズの判断は悪手として彼女に襲いかかることになった。

「かかりましたね、インファイト！」

なんと、メロエツタが現れたのは虚空から。地面やブニャットと同じ高さにはかり気を取られていたせいで、当然ながらその対処に遅れるマーズ陣営。反撃の一手に繋がられる前に、メロエツタの突き出された手がブニャットの横っ腹に突き刺さった。

そこから繰り出される乱打、乱打、乱打、乱打！ 格闘舞踊を思わせる鋭くも美しく、滑らかな動きとともにインファイトがブニャットを打ち据え、最後のフィニッシュと言わんばかりの蹴り上げがブニャットの下顎を震わせた。

たまらず、もともと体力も大きく減らされていたブニャットは地面に力なく横たわる。完全に目を回して倒れ伏した愛猫に、片手で額を抑えながら、マーズはモンスターボールの光を当てた。

「やってくれるわ……あの透明化、固有の能力か何かね」

「さて、どうでしょうか？ ヒントを与えるなら、メロエツタの外見から少しばかり想像して頂ければよろしいかと」

また貴人のそれに似た礼をするメロエツタ。華奢な体つきとは裏腹に、その瞳に揺れる炎は好戦的に燃え盛っている。今まさにその脅威へ晒されたマーズに対する挑戦だろうか。しがらみも何も無くなってきた現状、ただただその思考を目の前のバトルへと集中させ、高めていく。

それでいて、マーズは笑い返してみせた。

「ハッ、まさにそれでぶっ飛ばされたブニャットちゃんへの皮肉かしらね。ま、なんであろうとアンタがそう言うなら、こつちにも考えがあるわ」

言わずともわかるだろう。次のポケモンを繰り出すのである。

腰のモンスターボールを探り当て、収縮・開閉スイッチを押すマーズ。ビー玉サイズからソフトボール大になったモンスターボールを

もう一度押しして、天高くボールを放り投げた。

「さあ、謎解きと行くわよクロバット！」

次に繰り出されたクロバット。ポケモンへの愛情が無くば、決して進化はしないという体現のようなポケモンに、スモモは「ほう」と知らずのうちに感嘆の声を漏らす。人差し指につけたキスをクロバットに送るマーズと、それに応えるように力強く翼を羽ばたかせるクロバットの関係は、見るからに強い絆で結ばれているというのがわかる。

そして、何より挑戦状を受け取ったクロバットという「音波」を操るポケモンの登場にスモモはさらなる闘志を燃やして、マーズ達と改めて正面から相對する。

勝負はまだまだ長い。

さんさんと降り注ぐ太陽の光の下で、雌雄を決する激突が再び酌み交わされた。

その心滾るままに 中

「流石は幹部クラス。スモモと渡り合うなんてやるわね」

時は少し遡り、ブニャットがゴリーキーのヌンチャクに吹き飛ばされていた頃。押しも押されぬバトルの応酬に感心し、そしてマーズの戦いかたにとある感情を抱くスズナの姿があった。

彼女は出会った当初こそマーズたちを疑っていたが、そのバトルに向ける熱意やひたむきな表情を見る限り、客観的な視点を以ってマーズはもう「悪」と呼べるような相手ではないと判断していた。ここで誤解が解けているのだから、スズナとのバトルの時はマーズも少しは肩を軽くして臨めるだろう。

しかし、そうなるとスズナにとってわからなくなるのが隣で大きなあくびをしているハマゴの存在だ。服の上から白衣をまとった、いかにも悪人面というか強面の青年。隣に腰おろして同じバトルを観戦しながらも、どちらかと言うとあまり集中して見ていないように見える。

マーズの連れのようなものだと言っていたが、それは肩の上に乗っている、星のような頭をした珍しいポケモンと関係があることなのだろうか。

「ん、勘ぐってんのか？ 無理もねえがな」

「あつ、そ、そういうわけじゃないけどさー！」

「見た目から散々言われている。いまさら気にすんな、キツサキのジムリーダーさんよ」

メガネの手入れをしながら笑ってみせる彼。何かと慣れている様子に、スズナも彼の近寄りがたい雰囲気からは抜け出せたようだ。実際に話してみれば口調は刺々しくも、声色は優しげ。見た目と中身の釣り合っていないタイプの人なのだろうなとスズナは思う。見た目優しげで中身が真つ黒という人間なら多くは見たことがあるが、スズナにとってハマゴは珍しいタイプの人間だった。

そうすると、少し手持ち無沙汰な現状、話を聞いてみるのも良いかもしれない。スズナは思い切って会話を切り出してみることにした。

「あなたはさ、なんであの人と一緒にいるの？」

まず聞いたのはマーズという元犯罪者と同行している意味。一般的に考えて好奇心の煙られる話題であろうし、同時に答えにくいことは重々承知の上だ。だが、ハマゴという人間がどんな感じの人物であるのかを知るには丁度いいだろうと思って切り出した。

この質問に、ハマゴはスズナの予想通り言いくさそうに額のシワを寄せ、ガシガシと後頭部を掻き始めた。数瞬の間、しかし彼の頭のかなではジムリーダーならばという思いが湧いてくる。

「端的に言うのだ。最近、ギンガ団とやらが暴れてんのは知ってるだろ。俺はソイツらに狙われて、アイツはギンガ団の…ひいてはもう一人の幹部の尻拭いってワケだ。俺についてくればギンガ団は自然と姿を現す。だからアイツは付いてきたってこった」

「ギンガ団の残党…あたしのもとにも話は来てたっけ。そっか、ってなんで狙われてるの!？」

納得しかけたところで、重要なところに食らいつくスズナ。驚愕とともに開かれた瞳で射抜かれたハマゴは、めんどくさそうに肩に捕まっているジラーチの羽衣をムンズと掴みとって、ぶら下げたジラーチをスズナと自身の間に挟み込んだ。

「コイツだよ。流れ星の化身サマだ。文字通り、願い事をなんでも叶える力を持っているんだとよ。ハウエン地方のおとぎ話の存在だ」

ハロー、と片手を上げてスズナに挨拶するジラーチ。話題の中心であるはずのポケモンが、しかしあまりにもぞんざいに扱われながらも抵抗せずに順応しているという理解し難い光景に、スズナはピタリと思考をショートさせてしまった。

「おっと、決着か。マーズも随分とド派手な戦法が好きなんだ」

ハマゴの言葉にスズナがフィールドへ目を戻すと、ちょうど8本のエアカッターが同時にゴリーキーを覆い尽くし、そしてブニヤットの伸び掛かる攻撃が炸裂したところであった。着弾と共に巻き上げられる砂埃と、倒れ伏すゴリーキーの姿に負けちゃったか、と無意識にスズナは言葉をこぼす。

「アイツが居ない場で話しちゃうのも面白かねえからな。バトルが終

わってからにしようや」

「…それもそうね。スモモも一緒に聞いたほうが良さそうな話題だし」

ハマゴはジラーチの羽衣を持ったまま、ぐるりと回して頭の上に着地させる。そしてまた大きなあくびを伸ばしながら、スモモが繰り出した二体目のポケモンと、満身創痍のブニャットとの闘いを眺め始めるのであった。

時は戻り、クロバットとメロエツタが相対する場へ。

メロエツタの固有能力である透明化。技ではないが、確実に厄介なその能力をマーズは見たことがある。いや、それどころか一部の研究員から話を聞いたこともある。そう、彼女がまだギンガ団のマーズであった頃の話だ。

ユクシー・エムリット・アグノム。未確認にして、原初の精神を創りだした神の分身たち。幻と呼ばれたあのポケモン達もまた、人目につかず伝承から生き続けてきた故の力を持っていた。それが、今メロエツタと呼ばれたポケモンが使った透明化だ。

人やポケモンは第一に目で認識したものを見て判断する。それ故に、最初から視界に映らなければ認識することはまず少ない。音だけでは、気のせいだと理由を付けてすぐに忘れてしまうものだ。だからなのだろうか、幻と呼ばれるポケモン達……ホウエンのもので言えばラティオスなども含めて、何かと透明になることで人目を避けて生きるポケモンが多い。

(ユクシー達の場合は精神に働きかけて、あたしたちの脳に認識させないようにしてたのよね。でも、スモモは見た目からヒントを出した。……ダンス？ いいえ、音符……音波?)

ここまで頭を巡らせて、約十秒間。マーズの希望通り、長考などもあるスタンスのバトルを繰り広げていたスモモは、チャレンジャーであるマーズの考えを尊重するため、アクションを一切見せていなかった。スモモ自身、メロエツタの透明化能力は多用するつもりはな

い。しかし、この能力は時としてはジムリーダーの本懐である、相手トレーナーの成長にも繋がる良い力だ。

故に、スズナと諸国バトル修行の旅に出ているスモモはまずメロエツタから与えられる試練のテストケースとして、その相手をマーズに定めた。もし、スモモが思う通りにマーズが悪人のままであれば、この珍しいポケモンであるメロエツタを出すつもりはなかった。

だが、先ほどのブニャットや、このクロバットとの信頼しあった様子から、そんな心配も杞憂であると悟っている。それどころか、今はこの強力なチャレンジャーがどのような攻め手を使ってくるのかと、ワクワクしているほどだ。

「…よし」

「来ますか…！」

スツ、と構えるスモモ。メロエツタもまた目を吊り上げ、キツと相手のクロバットを睨みつけた。

「メロエツタ、かげぶんしん！」

また同じ技の繰り返し。ジムリーダー戦によく見られる、必勝にして登竜門のワンシーンである。対し、策が決まったマーズは、自分が試されている立場であるのだろうか、と半ばスモモの思考を予想しながらも、しかし受けて立つと言った様子で高らかに声を上げる。

気迫と熱意を受け取ったクロバットは、腹が決まった主人の声を耳に受け止め、その翼の筋肉にグツと力を込める。

「スピードスターでなぎ払いなさい!!」

バツと振り払われる手の動きに合わせて、クロバットの口いっぱいに貯めこんだ綺羅星が抑えきれぬ煌めきを瞬かせた。勢い良く飛び出したスピードスターを繰り返し出しながら、その高い機動性を活かした旋回でぐるりと360度を覆い尽くす。

それは先程のシーンの焼き直し。まるで考えなしのようなマーズの行動にスモモの目は一瞬見開かれて、しかしすぐさま驚愕を押しさえつける。

（万策尽きた…？ いいえ、ですが）

あちらが誘っているというのなら、あえてそれに乗ってみるのもま

た一興。優勢だからと奢っているわけではない。ただ、このメロエツタの戦略をどのような形で破ろうとしているのか。その欠片をつかみとり、策が功する前に速攻で摘み取るべくスモモはメロエツタに指示を出した。

ブニヤットが倒された時と同じだ。まだメロエツタの分身たちにかかりきりになっているクロバットの死角から、今度は「しねんのずつき」を叩き込む……！

パートナーの意向を読み取ったメロエツタは、また透明になりながらクロバットに向かわせる分身たちを増やして、しかし一歩ずつその距離を詰め込んでいく。翻弄されているわけではない。だが、クロバットという音に敏感な相手にはメロエツタとて緊張は隠せない。

そして獲物として狙われるクロバットの高感度の耳はピクピクと反応していた。そして目でもまた情報を得て、分身を片付ける速度はグングン上がっていく。メロエツタの動きを読み取り始めているのだ。

スモモも、これには気づいている。しかし完全に影分身が読まれるよりも先に、メロエツタの射程圏内に到達するほうが早いと確信していた。故に、無言でメロエツタと意識を同調させ、初手にして全てに繋がる第一打を叩き込むべく集中力を最大限に発揮させる。

あと5メートル。もう少しでクロバットの背後を取れる。

残り3メートル。メロエツタと繋がる意識から、その手に握る汗を振り払った。

接触まで1メートル！ 透明化を解いたメロエツタが、しねんのずつきを繰り出し——クロバットの表情がニタリとした笑みに変わる。

「ッ!？」

「つばめがえしー！」

マーズのよく通る声が響いて、クロバットは空気を切り裂きその場を離脱。そしてギョんツ、と小さく円を描いて元の場所へと、メロエツタが無防備な背中を見せる場所へと頭から突き進む！ 風を裂き、空間を切り裂き、邪魔するものなど何一つとしてないそこへ！

「しまっ……！」

「細切れにしてやりなさい!!」

光り輝く4枚2対の羽はほとんど無音でクロバットを導き、そしてメロエツタへと打ち据えられる! 同時にクロバットは体を横転。これまで無音だった羽音は、空気を切り裂く甲高い悲鳴を上げながら、鋭いスクリューのようにメロエツタへと打ち込まれる連撃に早変わり。そして恐ろしい連撃にさらされるのはこれまで狩人気分だったメロエツタ。獲物を前にしたサメが、通りがかった船のスクリューに巻き込まれたような呆気なさ。意識などできるはずもない攻撃を、メロエツタは甘んじて受けるほかなかった。

体力のそこまでも切り刻まれそうな中で、だが当然、メロエツタもやられっぱなしでは居られない。スモモは不意を打たれ返された事に賞賛と悔しさを抱きつつも、メロエツタ脱出のために的確な体の動きをトレースさせる。アクロバッターも真っ青な空中ジャンプで踏みとどまり、回転するクロバットの羽刃と真正面から向き合ったメロエツタに、スモモは拳を打ち付けるように指示を放った。

「れいとうパンチ! 白刃取りい!」

ぱき、と一瞬で凍りついたメロエツタの両手。それを打ち合わせる事によってクロバットの回転羽刃の一枚がしつかりと掴み取られる。重心を失ったことで回転を止め、不格好な耐性にならざるを得ないクロバットのピンチが到来。

とは言えそこはマーズのポケモン。愛情を注ぎ込まれ、心血をともにした訓練と、日々を送ってきた最高のポケモン・クロバット。凍りついていないメロエツタの足に無理やり照準を定めると、ご自慢の牙を向いて一気にかぶりついた。

白刃を決めることに全神経を注いでいたメロエツタは、予想外のところからの痛みにうめき声を上げて跳びはねる。その一瞬の手の緩みを突いて抜けだしたクロバットは空高くへと瞬時に離脱してみせ、そして反転し一気に急降下! 折り返し地点で一気に体を捻って、繰り出すその技の名前は――

「アクロバットオオオッ!」

「ドレインパンチです！」

相手の力を削ぎ、そして自分の力をもかさ増しするための格闘の秘儀。スモモといえばドレインパンチ、とまで言わせしめるほど有名なその技を、メロエツタが覚えていないはずもなかった。

直撃する二つの技の威力に、いつの間にか地面を支えにせざるをえないメロエツタは足場を陥没させるが、しかしそれでも倒れない。一方でクロバットはドレインパンチにて体力やエネルギーをも削られて、徐々にその勢いを無くしていく一方。

対等であつたはずの拮抗は徐々にクロバットが不利に陥っていく。そして、正々堂々と真正面から打ち破るべくさらなる気合を込めたスモモに呼応するように、メロエツタの繰り出すドレインパンチは力を得、さらなる輝きを見せ始めていた。

だというのに何故だろうか。マーズは、不利であるはずなのにその顔に浮かべた戦闘の高揚感と笑みを崩さない。このままでは負けるのは間違いない。まだあと一体残っているとは言え、ここでクロバットをこのままにしておけるだろうか？

勿論、そんなことはなかった。

彼女はマーズだ。ギンガ団のマーズ。当然といえば当然であるし、それが彼女らしい強さの根底。だからこそ、真正面からこのまま突き抜けようとしているスモモとメロエツタに送る笑みを、嘲笑を浮かべてみせる。

「クロバットおー！」

スモモがその声にハッと顔を上げるが、もう遅い。なにもかもが。ギャリツ、とクロバットが地面を抉り、羽をたたむことでメロエツタの懐まで身を潜りこませて、その手を弾きあげる。気を集中させているところとは別の場所の衝撃から、込めた力は見当違いの方向へ抜け出てしまう。いわゆるバンザイの状態で完全に無防備を晒したメロエツタ。更に、一気に翼を広げたクロバットは思いつきり跳ね飛ばす！

「へドロばくだんで、トドメッ！」

そして体勢すら満足に整えられないメロエツタに、クロバットのへ

ドロばくだんが炸裂。クロバット特性の、心ゆくまで熟成された濃密な毒の塊は、過剰に込められたエネルギーのせいで非常に不安定だ。それがメロエツタに触れたらどうなるか？ その答えはわかりきっている。毒汁を撒き散らしながら炸裂し、相手ポケモンを吹き飛ばす！

「メロエツター！」

体力を徐々に削る濃密な毒気となったそれが漂う中で、腕で口と鼻を覆いながらも晴れてきた毒けむりの向こうを覗き込むスモモ。せめて後一撃だけでも耐えて欲しいとの願いを抱くも、それは儚く散ることになる。

完全に伸びきって、目を回し倒れるメロエツタの姿が晒されていたのだから。

「戦闘不能、ですね」

「これでまた私が優勢ね。ヒントを出してくれてありがとう。おかげで最初から最後まで、存分にメロエツタの位置を把握することができたわ」

マーズの得意げな語りにスモモは一つの悔しさを抱く。そしてメロエツタの透明化や、常時行っている気配を薄くする術が、何一つとして通用していなかったことに興味が湧いた。彼女の言うとおりなら、その弱点を知ることによりメロエツタの先は開かれるだろうか。

「……そのからくり、後で教えてもらってもよろしいでしょうか？」

「良いわよ。と言っても、ほとんどポケモンの相性だけだね」

「ありがとうございます。それでは、私は三体目と参りましょう！」

綺麗な一礼をしたスモモは、すぐさまそのボールホルダーに手を掛けて、最後の一体を繰り出した。

「ルカリオ！」

現れたポケモンはルカリオ。数多く生息するポケモンの中でも「波導」という、一部の人間も扱うことのできる特殊能力を有したポケモンである。そしてかくとうタイプとして抜け目の無いしなやかな体、波導を扱う特殊な技、なによりも強靱なはがねタイプの肉体を有する

スモモの切り札だ。

近々、遠い地方からの贈り物で更なるシンカと見える事まみになるのだが、その話は今は置いておくとしよう。

「来たわね……そのルカリオの厄介さはよくわかってるわ」

なんせ、ギンガ団時代でもギンガ団下っ端の仕事を妨害したことでも有名な組み合わせだ。数でもダメ、多少の質でも真正面から押し切られる。それこそマーズのような実力者が当たらなければ、スモモたちが現れた時点でその計画を一旦中断する必要に迫られた時もある。

その組み合わせが今日の前で、ピンと伸ばした指全てを折ってクンツ、と挑発してきている。「いつでもかかってこい」という意志の現れであり、既に言葉を交わさずとも即座に戦えるとのサインだ。

(でも、それでこそ…)

付け焼き刃を叩き上げたばかりのゴリキキーではない。まだまだツメの甘いメロエツタでもない。真正銘、スモモのパートナーとして長くを闘い、そして長くを勝ち抜いてた連戦練磨の達人共。

「挑戦ッ！ そして打破のしがいがあるってもんよね！」

胸の内よりこみ上げるような歓喜。未だかつて抱いたことのない高揚感。ここにきて、ボルテージが上限を振り切ったマーズは最高の笑顔を振りまきながら宣言する。

ビリビリと空気をしびれさせる心地の良い戦闘宣言に、ド直球に浴びせかけられたスモモは口の端をわずかばかりに吊り上げて、そしてルカリオもまた鋭い犬歯を覗かせる。

ここでスモモは思うのだ。これまでことごとくを打ち破る挑戦者マーズ。いつのまにかジムリーダーと一人のトレーナーとしての意識が混在するような、不可思議な高みへ足を掛けているような気がするのだと。

そしてマーズという「トレーナー」とのバトルは、このシンオウの旅で求めていたものの一端をわずかばかりにでも垣間見る事ができるだろうとも確信する。別に、巨悪と戦っているわけでもない。これ以上強くなつてどうしようと言うわけでもない。だが、その漠然とし

たものを取り払うような何かが……スモモの胸の内では燃え上がる！

「その意気や良し！ 挑戦を受けます！ さあ、まずはマーズさんから……かかってきなさい!!」

「いいわ、だったら速攻でキメて上げる！」

クロバットはグググッ、と身を張り詰めさせる。直後にパンツと一本の矢のように、まっすぐと、ルカリオの元に跳びかかっていった。

「あやしいひかりー！」

「ルカリオー！」

クロバットの黄色い瞳が怪しげに輝いて、相手を惑わせる魔性のゆらめきがルカリオの精神を狂わせにかかった。しかしルカリオはあろうことか、敵を目の前にして目を瞑る。一見勝負を投げたようにも見える愚行は、しかし、ルカリオというポケモンならではの闘い方であつた。

惑わせる相手には、その惑いを超えた真なる世界を通して相手をする。ルカリオの耳の根本にある4つの房はピンツと張り詰められる。閉ざしたはずの視界に青白く、そして明るくも暗黒の世界を浮かび上がらせながら、ルカリオは構えを取ってクロバットの突撃を躲してみせた。

「そのくらいは読み通り！ 続いてエアカッターー！」

「はどうだん!!」

振り向きざまに放たれたエアカッターを紙一重でかわしつつ、両手を腰だめに構えたルカリオの手の中に青い光の玉が生まれていく。これこそが、ルカリオの持つ波導の力を注ぎ込まれた力の結晶。ルカリオが見る世界のままに、そしてごく自然な動作で放たれた蒼の弾丸は、クロバットを追いかけるように迫りつつあつた。

クロバットもまた、マーズからの教えで波導の追尾弾に焦ること無く対処をはじめ。力強くはためかせた羽は、音を作らぬままにクロバットの進路をカクンと変えてみせた。しかしそれでも追いつがる死神の鎌のような波導弾。徐々に徐々に、その距離を詰められているのはクロバットの方だつた。

その間にもルカリオは波の導きを感じるままに駆け出して、地面を

蹴り上げ上空のクロバットが降下する一点を予測する。まるで吸い込まれるようにそこへ逃げ込んだクロバットに、ルカリオは鋭い眼光を浴びせかけた。

「しんそくー！」

「はがねのつばさー！」

一瞬ルカリオの姿がブレたかと思うと、何やらを振りぬいた姿勢で地面へ戻ってくるルカリオ。そしてクロバットはルカリオが地面に降り立つ瞬間に、置き去りにされた現象をその身に受ける。

まさに世界の認識すら置き去りにする神速の一撃は、しかしマーズの判断によって大きく軽減されることとなった。鈍色に輝いたクロバットの前羽。その一部は不格好な形で弾かれようと、クロバットは未だ健在。はがねのつばさで神速の当たるであろう個所をガードしていたのである。

「ダメよクロバット！ 宙返りー！」

だが、ここで忘れては居ないだろうか。まだ波導弾が残っていることを。

完全に油断していたクロバットにマーズの叱責が飛ぶが、一瞬の攻防と痛んだ体は瞬時の判断を受け付けない。直後、後ろ羽に波導弾の直撃をもらってしまつて、クロバットの体は地面に叩きつけられることになる。

「今です——」

「クロスポイズンで弾きとばしっ」

「さきどりー！」

「んなっ!?!」

この窮地にて、攻撃を判断したマーズは悪くはない。

だが、ルカリオの持つこの技を警戒していなかったのは大きな間違いであった。

駆け出しながらルカリオの放つ「さきどり」は、不可思議な現象を引き起こす。クロスポイズンで毒々しい色に輝いたクロバットの前羽の先は、振りぬかれる頃には輝きを失い単なる羽の交差切りに変わってしまう。

反対に、クロバットの元に辿り着いたルカリオは両手の角のような部分を紫色に輝かせ、いま繰りだそうとしていたクロバットのクロスポイズンをより強い威力で再現してみせた。

不可思議な現象、そして一方的な終幕。もはやマーズも理解しているのだが、風前の灯となつているクロバットの体力は今度こそ尽きてしまう。もはやこのままクロバットがルカリオを倒す未来図は何一つとして無い。

だからこそ、まだ後続を残すマーズは判断を急いだ。そして無意識に手をつき伸ばしてまで叫ぶのだ。クロバットの最後の一手を与えるために、その一手をして倒しきるまでの気迫で！

「おどろかす攻撃よー！」

すんでのところで、バチンとクロバットの翼膜同士がぶつかつて、ルカリオの目の前で弾けた。これにたまらず一瞬怯んでみせたルカリオに、クロバットは最後の力を振り絞つて後ろ羽を跳ね上げる。不格好なジャンプでルカリオに覆いかぶさつたクロバットは大口を開けてルカリオにかぶりついてみせた。

これにはたまらず顔をしかめるルカリオだが、最後の力を振り絞つたに過ぎないクロバットの拘束は強いものではない。「さきどり」で奪いとつたクロスポイズンの力を、今度こそクロバットの顔面に叩き込むことで、突き立てられた牙ごとクロバットを弾き飛ばす。

カハッ、と声にならない叫びを上げながらクロバットは地面を転がり、力なく横たわる。

「…くっ、このクロバット……まだ!？」

だが、クロバットはそれでも諦めない。

体力はとうに尽きている。後続があるから、勝敗にはまだまだ余裕がある。

だがそれがどうしたのというのだ？

自分の手で勝利を捧げるは最高の誉れ。

マーズの最高なまでに昂るこの瞬間を、最高の感情とともに分かち合いたい。

後ろ羽を支えに、クロバットは前羽にグツと力を入れる。

そして——暗転。

「ねえクロバット」

落ちる前に、声を聞いた

「ホントと最高よ、あんた！」

クロバット、戦闘不能。

猛き闘争の果てに 後

これで残るポケモンは互いに一体のみとなった。倒れ伏したクロバットへと慰労の言葉が投げかけられ、赤い光に包まれモンスターボールの中へと戻されていく。かつてクロバットが倒れ伏した痕跡のみを残して、何もいなくなった地面を少しだけ見つめていたマーズ。彼女は髪を少しばかり撫で上げて、その視線を真正面のルカリオへと合わせてみせる。

視線で刻まれるのはいかなる感情か。しかし確実に敵対するマーズの敵意を感じ取って、ルカリオはぶるつと喉を震わせた。

「まさか、最後の最後で一手をもらうとは思いませんでした」
「こつちにだつて意地があんのよ。せつかく久々に味わった純粋なバトル、勝ち星を上げてやろうっていう意地がね」

「はい、そのクロバットの気迫がルカリオを通じてこちらにも伝わってきました。そして私自身も……」

スモモは胸元で片手を握りしめた。そこ手のひらに収まったのは何であるのだろうか。彼女がわずかばかりの切れ端をたぐり寄せるその前に、マーズは次なる……いや、真正銘最後のポケモンを選び、ボールを掴みとつた。

「さあ、ドータクン！ シメを飾りなさいな！」

速さを追い求めた地上の覇者、ブニャット。空中機動を自在に駆けまわる空の王、クロバット。これまでが速度重視だったことに対して、彼女が持つ最後のポケモンはドータクンである。読者諸君がマーズという女性を知っているなら、簡単にイメージできるであろう最後の一体。彼女はギンガ団時代から持っていたポケモンを変えず、大事に大事に育ててきているのだ。

「……」

フィールドに現れたドータクンは全てを理解し、無音でその場に佇んでいる。ルカリオの肩口にはクロバット最後の抵抗の痕跡が残っていた。そして、「おどろかす」攻撃で怯んだときのだろうか、ルカリオの肩足の先は、よくよく見てみれば少しばかり傷んでいる。強制的

に怯まされたことで負荷が掛かったのだろう。

「徹底的にやっつてあげる。あたしのポケモン達は最強なのよ。ジムリーダー如きじゃ止められないくらいにね！ あんたのルカリオ、このまま押し切ってやるわ！」

「ここからは真剣一本です。どこからでも、かかって来てください！」
「ならお言葉に甘えて……ドータクン、がんせきふうじ！」

手のような野太いパーツが広げられて、ドータクンの頭上には光り輝く岩が形成される。しかしそれも一瞬のこと。次の瞬間には射出された巨大な岩石は、フィールド上空で弾け、無数の岩弾となって降り注いだ。

「みきりですー！」

対するルカリオが取った行動は、己の感覚を極限まで高める技「みきり」。これによって増幅された波導の世界の感覚と、風の僅かな淀みすらもその身一つで手に取るように理解する超感覚がルカリオの知覚となった。

同時、降り注ぐ岩の弾丸を前にルカリオが駆け出す。時には地面に落下し、破碎したがんせきふうじの欠片が側面から襲ってくるが、それすらもルカリオは紙一重で躲してみせる。鋭い岩の欠片で青色の体毛が僅かばかりに切り取られるものの、未だに健在する彼は一息に跳びかかり、ドータクンの目前へと躍り出た。

「ボーンラッシュュー！」

「構わずジャイロボール！」

回転し始めたドータクン。嫌な予感が背中をゾワリと撫でて、スモモは叫ぶ。

「やはりッ!? いけない、飛び上がってくださいー！」

ルカリオのボーンラッシュューの棍。それはドータクンの体をすり抜けて、とつきの判断で棒高跳びのようにルカリオの体を上空へと投げ出した。スモモの予感も当たり、おそらくルカリオを巻き込んでいたかも知れないジャイロボール状態のドータクンは、地面を刮り飛ばしながらその技を不発に終わらせる。だが、条件はどちらも一緒だ。

「あなたのドータクンは『ふゆう』でしたか……！」

「流石あー！ でもあの状態から避けられるのはちよつと予想外だったわ」

ゴーストタイプにも多く見られるが、文字通り体が地面から常に離れているようなポケモンに見られる特性、その名は「ふゆう」。不思議な事に、じめんタイプの攻撃であれば先ほどのルカリオのボーンラッシュのように、純粋にエネルギーとして炸裂した技ですら完全に無効化してしまう厄介な特性である。加えてもう一つ明らかになるのは、ドータクンの弱点のひとつである、じめんタイプの攻撃が今後直接攻撃には使えないということだ。

例を上げれば、じしんで引き起こされる土砂崩れや倒木など、こうした二次被害はダメージを与えられるが、「じしん」そのもののダメージは無くなる。ポケモンの昔から解明されていない不可思議な特異性：タイプ。そして特性。これらを十分に活かしたカウンター殺法だったのだが、スモモ相手には不発であったようだ。さすがは多くの闘いを経験してきたジムリーダーといったところか。

すぐさま意識を切り替えたスモモとルカリオ。ルカリオは空中で未だ残る「がんせきふうじ」の岩を利用し、足場に態勢を立てなおす。相手を苦しめるための技が利用されたことにイラつきを覚えながらも、マーズは次なる攻撃指示に。

「サイコキネシス！」

広げられたドータクンの手のような部位がゆらめく。サイコキネシスのパワーがルカリオの体を縛り上げた。薄い青紫色の光はドータクンの視線の通りに動いて、ルカリオを空中へ持ち上げ、そしてサイコパワーがルカリオの体を締めあげてしまった。

「脱出ですー！ はどうだん！」

二度目の締め付けがルカリオを襲う前に、片手で創りだされた威力不足の波導弾が爆発。身に纏わりついてきたサイコキネシスは乱され、自由になったルカリオが自由落下を始める。そこを見逃すマーズではない。

「続けてシャドーボール連打！」

「させません！ ボーンラッシュで打ち返してください！」

めまぐるしく変わる戦況。そしてルカリオは落ちながら戦っていた。

(こっちは耐久……せめて数発当たってくれば後は……！)

知つての通り、シャドーボールを受け続けられれば、時にポケモンのもともとの防御耐性を下げさせる効果が発揮されることもある。そしてマーズが指示した連弾は、小玉のシャドーボールを絶えずぶつからせ続けることによって、今のダメージはゼロに等しくとも、後々の攻撃全てを致命傷につなげるための作戦であった。

シャドーボールはルカリオが地面に降り立ってからもお吐き出され続けているが、ルカリオはその全てをボンラッシュの棍棒で弾き飛ばしている。時には受け流し、時には弾き返し、ルカリオは徐々にドータクンとの距離を詰め始めていた。

そして——ガツ、と地面が跳ねた。

「しまっ……」

「踏み込んでー」

そして一発のシャドーボールがドータクンの脇をかすめて地面に着弾し、その衝撃でドータクンの体勢は崩された。もともと宙に浮いているのだから関係ないと思われるかもしれないが、飛び散った地面の大欠片が運悪くドータクンの背後から衝撃を与えてしまっていたのだ。

「はっけいー」

「くっ、ジャイロボールー」

一足でドータクンの懐へ潜り込んだルカリオが放つ「はっけい」。波導の視界から急所を的確に突き、何匹ものポケモンを沈めてきた凶悪な技は、内部を乱れさせ時には「まひ状態」に繋げることもある。

しかしとっさの判断を取れたのは新米トレーナーではない証拠だろう。一進一退が激しいこの攻防の中で、指示を出したマーズと受け取ったドータクン。その一撃が急所と突くまえに、無理矢理にジャイロボールで回転することで威力と本来の効力を減衰させることに成功していた。

「そのまま轢き潰しなっ!!」

まだまだドータクンに体力は残っている。対してルカリオは手傷程度とはいえ、片足の一部にクロバットの置き土産が残っている状態だ。自身が不利な状態でこそ、ルカリオの機動力は削げ落ちていると判断したマーズの狙い通り、指示もなくとつさに身を引こうとしたルカリオはガクンと片足から崩れ落ちてしまい、ドータクンのジャイロボールをその身に受ける羽目に陥った。

「っしー… 続けてがんせきふうじー」

「また『みきり』で躲してください！ そう簡単には行きませんよ！」

極限まで意識を集中させるという技、みきり。その性質上連発すれば、疲れて成功率がどんどん落ちていく絶対回避に相応しい代償があるが、先ほど使用してからそれなりのインターバルが開いている。精神的なコンディションとしてはまだまだ上々のルカリオは、先ほどの光景の焼き直しのように岩石封じの岩弾をすんなりと避け始めているが、先ほどと違う場面も当然訪れる。

最初に動いたのはドータクン。がんせきふうじの技を中断したドータクンはのっそりと体を傾けたかと思うと、前傾姿勢になってルカリオの方へと狙いを定めている。対するルカリオはいくら見切る事ができたと言っても、重なった疲労と足の負担から中々攻勢に移れないでいる。

だがそこで気づくのはやはりスモモだ。ルカリオが避ける中、ドータクンがいかなる攻撃に移ろうとも適切な対応を取ろうと身構えた。

「ラスターカノンー」

マーズの声とともにドータクンの体で反射していた太陽光が、一点に集まり眩い光球を形作る。テニスボールほどの大きさだったのが、今や成人男性両腕で抱え込むのも難しいほどのビッグボールに。

バシユツ、と放たれたラスターカノンはルカリオの眼前まで迫り、爆発して砂煙でルカリオの姿を覆い隠した。

「まだまだー！ サイコキネシスー」

当然マーズはそれで倒せたなんて思っていない。指示を受け取ったドータクンは周囲に散らばった岩石封じの欠片を浮かび上がらせ

ると、その煙のある方向へ雨あられと降り注ぐ。サイコキネシスは、そのパワーで直接縛り上げるだけではないのだ。

しかし、

「でんこうせっかー！」

煙を突き破って出てきたルカリオは未だ倒れる気配はない。とにもかくにも近づくことで攻めてくるルカリオの猛攻に舌打ちをしながらも、マーズはとにかくこの場を離脱することが先決だと判断。

「距離をとって準備するわよ！」

ドータクンもルカリオの剣幕に押されながら、ふわりと浮かび上がって場所を移動。電光石火の技で距離を詰めてきたルカリオは、しかし一度跳躍している。近接型である以上、地面に降りるまで次のアクションは大丈夫だろうと高をくくっていたマーズは、しかしここままで続いた長い攻防で集中が途切れたのか、ついに楽観的な考えを持ってしまった。

それが命取り。

ルカリオは腰だめに何かを構えている。ほんの僅かな時間でそれに気づいたマーズがドータクンに対して口を開こうとしたその瞬間、別の宣言が上から覆いかぶさってきた。

「はごうだんー！」

放たれた蒼色の玉はドータクンを打ち据え爆発。

「ドレインパンチですー！」

そして一気に跳躍したルカリオがドータクンの上から、ドレインパンチが炸裂する。連続攻撃を受けたドータクンも、流石にこのラッシュには勝てなかったようである。

ズシン、と土埃を舞わせながら地面に落下し、そのままピクリとも動く様子を見せていない。この三本勝負の勝者が、ついに決まった瞬間であった。

「……ドータクン」

クロバットが最後につなげてくれた流れを、結局は活かしかきることができなかつた。マーズの中には悔しさが渦巻いている。それは、先ほどのほんの一瞬でしか無かつたが、決定的な敗北のきっかけについ

て。

はあ、と肩を落とした彼女はドータクンをボールに戻して、バトルコートへと歩き出した。当然、スモモの元にくたためだ。

「やるじゃない。このまま勝つつもりだったんだけどね」

「いえ、相性に助けられたこともありませう。そちらが一度でも効果が抜群の攻撃を繰り出してきていければ、タッチの差で負けていたのは私の方でしょう」

「それでも、勝ったのはあんたよ」

マーズは照れくさそうにしながらも、その右手を差し出した。

「……そう、ですね。勝った喜びを今は享受します。お相手、ありがとうございました」

「ごつちこそ。これであたしも何の気負いもなくバトルできるわ。ありがとう」

互いに右手を預けあつて、固い握手を結ぶ。

スモモ対マーズ。

その勝ち星はスモモ側、ということでのこの一件は落ち着いたのであつた。

「……とまあ、そんなことよ」

まだハマゴが研究所へ向かうまで時間はあつた。その時間を利用して、スズナが先ほど訪ねていたことについて、ことの詳細を話し終えるマーズ。最初はハマゴがちゃんと答えていたのだが、途中で面倒になったのか投槍になり始めたところを彼女が後を続けた。という一悶着はあつたが。

「そうですね。今、シンオウにそんなことが……」

「あたしたちも旅なんてしてる場合じゃないかもね…事によつては街に戻っておかないと」

ジムリーダー、という立場に切り替わった二人からしてみれば、マグマ団という悪の組織と、自分たちがよく知るギンガ団が手を組んだというのは相当に大きなこととして結びついたようである。

「まあ、チャンピオン直々に事にあたってるし、ポケモン協会も動いてる。おまえらが早々抱え込むような事でもねえと思うがな」

深く考えこむ様子の二人に、ハマゴがそう言って締めくくる。

まだ何が言いたげな様子ではあるのだが、彼としてみれば自分の旅が必要以上に騒がしくなるのは避けたいし、要所で力を貸してくれれば言うことはない。何より自分の持ち込んだ問題に、最初から取り組んでいる者はともかく、後々に巻き込むのはハマゴが嫌うところであった。

自分はいいのだ。ポケモンドクターだ。傷つくポケモンが居るなら治療しに行く。その傷ついた原因を癒せるなら積極的に介入する。だが、自分以外が傷だらけになるのは見ていられない。

「てめえらはてめえらの旅を続けてくれや。なあに、無敵のチャンピオン様と後で合流する。戦闘面に関しちやあつちはプロだ。デカイ権限のおかげでそれなりに被害も最小限で済むだろうさ」

「……そこまで言うんだったら手を引くけど、あたしたちもジムリーダー。シンオウの人たちが傷つけられるようなことがあつたら連絡をちょうだい。電話一本で手を貸すからさ」

「ええ、スズナの言うとおりで。巨悪と戦うのもまた私達の役割の一つでしょう。ギンガ団最盛期には証明できなかつたこの力、今こそ奴らにぶつける時でしょう」

「妥協案はそこ、か。お嬢ちゃんたちも中々に強情なことだ」

やれやれ、息をついたハマゴはコーヒーを一杯口に含む。口の中に広がる苦さは、はたしてこの空気の味か。それとも自分のタチが侵されそうな話によるものか。どっちにしろ、似たようなものだろう。

ボーン、とポケモンセンターの時計が音を刻む。時間を確認したハマゴは、そろそろかと言いながらに席を立った。

「とりあえず、俺の連絡先だ」

「これはあたしの」

「うん、あたし達のも渡しとくね。ポケッチ出して！」

左腕のポケッチ同士で連絡先を交換して、ハマゴは一足先にポケモンセンターを出ていった。自動ドアが締り、風にはためく白衣が見え

なくなつて、マーズが盛大なため息をついてみせる。

抱え込んでいるものがどんどん大きくなつていくハマゴ。それに反して、肩の荷を降ろして、最後に残った軽い荷物を背負っているマーズ。初めて会った時とは反対の様相となる現状に、彼女としても思うところがあるようだ。

「マーズ……さん。どしたの？」

「どうしたもこうしたも無いわよ。アイツ、余裕ぶつてるけどドコまでが本当なのやら」

トマトジューズをストローで吸い上げて、彼女はテーブルに肘を付く。少しばかりに眉を顰めてマーズは続ける。

「あいつさ、いろんな事で苦労もあったみたいだけど、流石にこんな大きな事態は出会ったことなんて無いでしょ。だから、アイツとしてもどうしたら良いか決めあぐねてる。それにジラーチを守る気持ちは本物なのか、每晚毎晩ほつとんど寝ずに警戒してるし」

思い出すのは今朝のこと。マーズがウォーミングアップのために早起きした時、初めて彼女はハマゴの寝顔を見た。その目元には今でこそ見えていないが、黒く深い隈取がある。今は化粧品か何かで綺麗に隠して強がっているのだろうが、医者の不養生とは言ったものだ。既にその足取りがフラフラなことくらい、マーズには簡単に分かつていた。

「しばらくは此処にいるって言ってたけど、あたしとしてはさっさとチャンピオン様に会っておきたいのよね。そうしたら実力的にも問題は無いし、夜の警戒もそこまでしなくていい。アイツが張り詰めて倒れる前には、合流しておきたいかな」

「…驚きました。思ったよりもずつと思いやりのある方だったのですね」

「ま、ちよつと前まで敵同士だったし、あたしはギンガ団の幹部だった。そんな悪の組織の人間がほかの人を思いやるってのは、子供にはちよつと想像しにくかったかしらね」

「む、子供ってなによ。5かそこらしか違わないでしょー!」

その言葉にきよとんと目を開いて、直後に吹き出した。

「あつはは。そうかもね。でもその5年…あたしの場合には色々見えてきてんのよ。悪の女幹部なんて肩書持ってた位にはね」

楽しいこともあった。だが、それ以上に暗く重い話題を何度も取り扱ってきた。公式には発表されていないが、ギンガ団の悪事や実験によつて犠牲になったポケモンは数知れず、100人とまではいかずとも、人間もまた命を落としている。

そして今もなお…いや、傀儡となった人間を操るジュピターのギンガ団だからこそ、更に人的被害やポケモンへの被害は増加している。あちらとしては他の組織と手を組むほど後が無い状態だ。だからこそ、遠慮が無くなつていとも言える。

「汚いところ見るより真つ当な行き方した方がいいわよ。例えば、この件にはかかわらない…:とかね。あんたたちを舐めてるわけじゃないの。実際、スモモのほうがあたしよりも強かつたわけだし。でも」
それでも、とマーズは思う。

「まだまだ青春真つ盛りな十代が、こんなことに首突つ込む必要なんて無いの。楽しい旅を続けなさい。それで、余裕があれば世界を楽しみなさいな。あたしが出来なかつた分、満喫してもらえればそれでジューブン」

そう、こんなことに関わつたあの「英雄」も、今となつては行方知れず。ギンガ団を脱退してからハマゴと出会うまで、ギラティナのいる「やぶれたせかい」を探すあの空白の時間。伝説のポケモンの背中に乗っている姿を見たとか、隠れ里の修羅のようなポケモンバトルを制したとか、そういう話もあつたのが、ここ最近になつてバツタリと消えた。

有名になりすぎたあの「英雄」の友人…:何かと騒がしいクロワツサンヘッドの金髪も、その行方を知らないらしい。釈放された時、ポケモン協会にそれとなく第一の手がかりとして聞いてみたこともあつたが、返答は芳しくなかつた。

あれが、一つの末路なのだとしたら。光も闇も、あらゆるものに関わりすぎて、強くなりすぎて、そして消えていくのが一つの道なのだとしたら。

その可能性を少しでも含むような道を、目の前の二人には歩まないで欲しい。このままジムリーダーを続けるか、それを超えて四天王になるか、はたまたチャンピオンの座をつかみとるか……表舞台に認識されているここでどまってほしい。

ふと浮き上がったこの考えに、丸くなりすぎたかもとマーズは苦笑する。

「それでも、いざというときには力を貸しましょう。私には難しいこととはわかりませんが、知人が苦勞している隣で悠々としてなんて居られません」

「あたしもスモモと同意見かな。それに、今ならフットワークも軽いし、いつでも駆け付けられる。困ったときはお互い様ってカンジ！」
しかし、マーズの願いを跳ね飛ばすように彼女は言う。

若い勢いにまかせてのことか。どちらにせよ、マーズとしてはそりやそうよねと納得するしか無かった。僅か、最年少ジムリーダーの名を冠する武闘派少女スモモ。キツサキの伝説の管理人であり、ジムリーダーでもあるスズナ。若くとも、彼女らの肩書が力を示している。

それから、こころえきれないマーズの爆笑とともに密談は談笑へと変わっていった。女子特有の和気あいあいとした話題から、スモモの抱える家庭事情などなど。いつしかそこには、本音で語り合う女三人揃った姦しい姿があったのだ。

「今日も精が出ることだ」

「ん、ナナカマド博士」

「飲みたまえ。休憩も研究の一時だ」

「ありがとさん」

ほれ、と差し出されたコーヒーを受け取って礼を告げるハマゴ。

手に取っていたのは薬草の資料だろうか。ハクタイの森に群生する、オレンの実のような癒やし効力を持つ草花についてデータを取っていたようだ。開いたページにしおりを挟み、地べたから椅子に

座った彼はナナカマドと対面する形になった。

「どうかね、調べ物の方は」

「まあ順調ってとこだな。ここのデータ量はスゲエ。キッチンと整理もされてるし物言い一つも浮かんでこねえや。あ、並び順はちゃんと整えてあるぜ」

「それは重畳だ。して、昨日の件だが、〃やりのはしら〃に落ちていた欠片を解析し始めたよ。……調べるほどに、我が研究所の空気が重くなりはしたがね」

「それは、すまねえな」

「いや、いいのだ。ギンガ団のこともある。君が必要というのならすべきことだ。それに、忌避すべきことではあるのだが……私達にも利があつてしまった。ならば、続ける他あるまいよ」

あごひげを撫でながらナナカマドは言うが、その声色には沈んだ感情が含まれている。ハマゴとしても、「頼みごと」は悪用どころか限定的な部分だけ際限してもらえればそれでいいと思つているので、先日言われたように負の歴史を繰り返すつもりもない。

しばしの無言の時間が続いて、ハマゴはカップの縁から唇を離れた。

「それはそうと、ポケモン研究の権威に少しばかり聞いてみてえことがあるんだ」

「ウムツ、何かね？」

「ある程度のポケモンは知ってる。だが、俺はこのシンオウ地方に生息するポケモンの得意・不得意が何なのかは知らねえんだ。どうせ故郷とは違う地方に来たんだ、新しい助手をポケモンゲットしておきたいと思つてな」

「ほう、それは良いことだ。して、どのようなポケモンを所望なのだね」

「ずばり、俺が求めるのはひとつだ」

ピン、と指を立てて言う。

「手先の器用なポケモン。勿論、力の加減が上手いエスパークタイプでも構わねえ。ドクターやつてると、キュウコンだけじゃあと一手が足

りない時もあったな」

「手先の器用さ……今は思い浮かばんが、ふむ、探してみよう。この暗い空気を和らげるには丁度いい話題かもしれないからな」

「恩に着る。わりいな、何でも任せちまってよ」

「いや、ポケモンたちが元気な姿になってくれる。その一助を担うのだ。喜んで探させてもらおう」

目元が垂れ下がり、柔らかな表情を形作るナナカマド。確かに、ハマゴの頼みごとのせいで陰鬱とした空気が研究所を流れているのも確か。しかしこうした微笑ましい頼みごとを聞いて、和気あいあいと研究所を賑わせるのも、ナナカマドポケモン研究所の一つの醍醐味である。

トレーナーから寄せられる相談にのるのも、ポケモン研究員たちの一時。今までがそうであったように、ナナカマドは、ハマゴにも同じく暖かな空気でその話題を受けいれた。

「さて、随分話し込んでしまったようだ。外も暗くなってきたいな」
ナナカマドが窓を見上げると、端がほんのりと赤くなっているが、暗くなってきた夜空が目に入った。薄っすらとした蒼色から、金色の光が強くなる三日月が研究所の窓からほんのり光芒を垂らしている。積み上げられた資料の黒い文字が反射して、キラリと煌めいていた。

「んじや、俺はこのあたりで御暇させていただきますかね」

「それなりに調べ終わったようだが……明日が最後かね？」

「ああ、そんならいか」

ハマゴの欲しいデータは、この2日の半日……合わせて丸一日分の時間を使ったこととおおよそ全てがその手に収まっている。明日のあたりには仕上げと、最後の一時となるだろう。長く思えたマサゴタウン連泊も、ほんの3日で終わりを告げつつあった。

「二つ、昼食を共にしてみないかね？ 昼前から研究所を開いておくので、気が向いたら是非来てくれたまえ」

「おお、その提案にやありがたく乗らせてもらっとく。そんなじや、また明日だ。博士」

「ウムツ、また明日だ。ハマゴ君」

今日も一日が終わる。ゆつくりとした平和の歩みは、何よりも尊く
て。

波乱の日々が近い未来に待ち受けていようとも、ハマゴは笑って過
ごすのであった。

支度は済ませた？

「新しいポケモン、か」

ふと呟いた言葉に、頭のなかで広がる想像。そこで第一にジラーチと一緒に学ばせてやる光景が浮かぶあたり、自分でも抑えられないほどの期待はしているんだろうな、と。白衣を纏った男はひとりごちる。

彼の周りに積み上げられているのは薬草、地質、気候、そしてポケモンの資料や本の数々。まとめて読み終わったそれらを綺麗に整頓しなおした彼は、よつこらと立ち上がった。一つ一つを見た目に反して丁寧に本棚や資料箱に戻している背後から、木製の床を叩く小気味の良い靴音が聞こえてくる。

やってきたのは彼——ハマゴにとって想定通りの人物だった。

「精が出るな」

「ナナカマド博士か」

その言葉に、ナナカマドは両手にもつポットとカップを掲げて見せた。

真っ白でシンプルな容器は、その中の液体を引き立たせる。

「コーヒーを淹れてきたのだが、飲むかね？」

ハマゴが後ろを向いても、香りは鼻孔をくすぐってきた。集中したことでの目の疲れ、また彼の悪い癖でもあるのだが、長い間の飲み食いの放棄もある。喉から乾きを訴えられていた彼は、ちようどいいと二つ返事でそれに答えた。

「さて、君に紹介したいポケモンだが一晩語り明かした結果、結論が出た」

カタツと置かれたカップを前に、席を同じくしたハマゴは目を丸くしてみせる。

「冗談だろ？」

「ウム、一晩は冗談だ。せいぜいが3時間だな」

軽めの冗談を流して、ナナカマドがコーヒーを注ぐ。

淹れたての暖かなコーヒーは、電灯の光を反射しながら芳香な匂い

を部屋の中に充満させていく。彼らだけでなく、同じ部屋にいた研究員もブレイクタイムを誘発されていく。

そうして穏やかな空気が広がる中で、最初の一口を飲み込んだナナカマドはカップを持つ手の人差し指を立てながらに言った。

「ミミロップ、などはどうかね」

「ん、ミミロップ。ノーマルタイプのうさぎポケモンだったか」

左上を見上げながら、ハマゴは答えた。

うさぎポケモンのミミロップ。人型に限りなく近いポケモンで、その愛くるしい見た目や戦いを好まない正確とは裏腹に、持っているのは高い戦闘能力、そしてノーマルタイプならではの器用で多彩なタイプの技を覚える点から人気が高い。ちなみに、シンオウ地方で初めて発見・記録されたポケモンでもある。

人のよりは少ないが、三本の指もあるために物を持つたりするには最適。ハマゴの助手としての役割にもびったりなポケモンだろう。また、強く主張した研究員の趣味も多分に含まれてはいるが、もう一つの理由を含めてこれに決定したのだとナナカマドは言う。

「ちようど君たちはハクタイの森に行くと言ったのでな。そこでミミロップを捕まえて育て上げればいい。ただし、あまりに荒らすようなマネはやめてくれたまえよ」

「んなこと百も承知だ。しかしミミロップ…なるほどな。んで、もう一つの理由ってのはなんだ？」

ハマゴもミミロップについては資料を見たため理解している。そして博士が太鼓判を押してくれたのだから、助手に向くヤツをしつかりと選んで同行をお願いしてみようと、一方的なゲットではなく、双方の目的を合致させるゲットの方法を頭のなかで思い浮かべた。種族だけでは意味が無い。本人のやる気が無いのに共用させたところで、この業界は務まらないからである。

キュウコンも同じようにしてゲットしたっけか。そんな懐かしい気分になりながらコーヒーを一口すすするハマゴに、ナナカマド博士はまだ続きがあると続けた。

「先ほど言った決定した理由の一つなのだがな。実は、プラターヌ博

士からも一つ頼まれていることがあるのだ。バシャーモ、カメックス、ジュカイン……こうした進化しきったポケモンのさらなる進化：いや、パワーアップ形態と言うべきか。こうしたものがあるとするなら、君はどう思うかね？」

「…さらなる進化？ つつうのは、フォルムチェンジとは違うのか」

ハマゴが思い浮かべるのはこの地方で渡りをするポケモン「シエイミ」や、ホウエン地方のラルスで大暴れをしてみせたデオキシスというポケモンが見せる、全く違う姿。能力も、果てにはタイプすら変わるが、何かしらの条件で別の姿になれるフォルムチェンジと違うのは時間とともにそれなりに知れ渡ったポケモンの性質である。

勿論、ハマゴたちドクターの界限でもそのフォルムチェンジするポケモンは知られている。ホウエンの一般的なポケモンなら、ポワルンがそれに適用されるだろう。

「うむ。それよりもずっと短期間、例えば、バトルできる時間のみという限定的な状況で見せる新たな姿だ」

しかし博士は、それらとは違うのだという。

「それがフォルムチェンジと違うのは、元の姿がベースとなって強化したような姿になると言った具合であろう。サイドンがドサイドンに一瞬だけ進化できる、と言った例えがわかりやすいだろうか」

「ほおう、確かにイメージはつかめた。……すると、あれだ。つまりミミロップも」

「ウムツ！ そのミミロップもまた、プラターヌ博士が言う強化形態……『メガシンカ』が可能だと言われているのだよ」

「メガ、シンカ」

聞き慣れない言葉だ。ハマゴがその言葉を頭のなかへ詰め込んでいる最中、ナナカマドの手が彼の目前で開かれた。

「これが、そのメガシンカに必要な二つの石だ」

ナナカマドが手のひらに転がしたそれは、一見すればビー玉のようにも見える茶色とクリーム色が半々に塗られた捻れた木の葉が収まったような珠であった。しかし、ビー玉というには大ききのほどは手のひらよりも二回り小さい。

その隣には、虹色の宝玉。これも同じような木の葉が捻れたような模様があるが、なんというべきだろうか。見ているだけで様々な可能性が生まれそうな、そんな錯覚を覚えてしまう。

「進化には石、ねえ」

「不思議と関わりが深いものだ。やはり君もそう思うかね」

定石のようで、その実突拍子もない眉唾に近い話。

しかし二人の博士が当然のように示した事実だ。その手の話に詳しくないハマゴとしては、すんなりと受け入れられる事実であるし、この後に続くであろう話題にはポケモンドクターとしてではない、ハマゴという一個人としての期待が湧いてくる。

「だが、進化の石ともまた違う。その名をメガストーン、というそう
だ」

その二つを、ナナカマドは専用の石ケースに入れて机の真ん中に置いた。

「そして隣の虹色の宝玉はキーストーン。人とポケモンの絆によってこれらが繋がり、メガシンカが促されるらしい。そこで想像はついて
いるだろうが、ハマゴ君にはこれらを頼みたいのだよ」

「ミニロップのメガシンカ。そしてデータ提供か……生憎だが、俺はバトルなんざからつきしだ。単にミニロップを助手として育てるならともかく、メガシンカなんて御大層なモンができるとは限らねえぜ
？」

その言葉に、ナナカマドは笑う。なぜなら、こんな否定的な話を切り出していても、ハマゴが断るはずもないと思っ
ているからだ。それはニヤけたハマゴの口元が証明している。ナナカマドはあえてそれに乗ることにした。

「ふむ、だがバトル以外でのメガシンカ、およびにそのパワーアップした力を発揮できないとも限るまい。ポケモンとは可能性だ。その可能性の一つに、君は手を貸そうとは思わんのかね？」

「可能性、か。その言葉を使われちゃあお手上げだな。オツケー、ありがたく引き受けさせてもらいたいんだが、いいか？」

などとほざいているが、ハマゴとしてはどんな答えが帰ってこよう

とも引き受ける形に持っていくつもりなのは見え見えだ。彼としてもこの先が楽しみであるのだろう。ポケモンドクターをやっているのは父親の力になりたいのがきっかけだが、基本的にそうして誰かを助けるための仕事を選んでいるのだ。

「多少の時間が掛かろうと構わんよ。むしろ、ポケモンの研究とはそういうものだ。我々が躍起になって事にあたるのではない。旅に出た未来ある者たちから情報を集め、我々がそれを煮詰めていく。ポケモンずかんを渡すのもそれと同じなのでな」

自動的にテキストが表示される不思議な凶鑑。あれは元からポケモンのデータがバラバラに入っているが、それらは先人たちが集めた情報が、そのポケモンを認識することで浮かび上がるのだ。だが、そのテキストは人の凶鑑によってそれぞれ違うことがある。

その理由は、凶鑑を持つ人間が聞いた話や、実際にその場で見た光景を凶鑑は記録しているからだ。だから凶鑑の完成とはすなわち、まだまだ遠い未来の出来事だろう。

ナナカマドは笑みを浮かべて、まだまだ若いハマゴを見る。宝玉から視線を離せていない彼は、ナナカマドが初めて見る歳相応の好奇心に満ちたそれだ。苦悩と苦労が積み重なって深く眉間に刻まれたシワや、敵意を持つ相手に向けてきた吊り上がった目。そして白衣で隠されてはいるが、鍛え上げられた医者とは程遠い肉体。

その見た目相応以上の過去を歩んできているのは確かだ。日常的に密猟者や犯罪者と関わり、自然そのものを保全した険しい環境で暮らしてきたハマゴ。しかし、彼は歳相応という言葉を落つこととしたわけではなかったらしい。

「さて、データのほうも集まったし、読みたいもんも読んだ。面白い頼まれモンも頂いたことだ」

チラリと残る資料棚へ目を向けるが、あとは頼んだ通りのデータがポケッチを通じて送られてくる予定だ。これまで読んでいたのは、ハマゴ自身が良いと思った「追加分」である。

ハマゴはテーブルの上に乗った二つの宝玉が乗ったケースを掴んで、ポケットの中に放り込んだ。ぞんざいな扱いのようにも見える

が、彼の服のポケットほど安全な場所も早々無いだろう。それを我々はよく知っているはずだ。

「まだ昼か」

「食べていくかね？」

「いや」

ポケットで時間を見る。右上にはレターマークで一通のメッセージ。で例の二人と食事をしたとマーズからの連絡が入っていた。とすれば、ハマゴとしては大量に購入したあの木の実のストックで、腹を満たせるものを適当に齧って行けば良いかと思考する。

「コーヒー御馳走さん」

空っぽになったカップを置いて、彼は立ち上がった。

「この辺りで御暇にすつかね。あんまりチャンピオンを待たせるのも悪い」

「そうか。……月並みな言葉だが、気をつけたまえよ。ギンガ団の活動を堺にその名を擦り付けようと模倣犯や無名の犯罪者も活動を広げてきているとのことだ。珍しいポケモンというだけで狙われる確率は」

「重々承知だよ。ファウンスで調査団にいた時からな。年をとると心配性になっちゃうのか？　ったく、未来が恐ろしいもんだ」

ナナカマドも、言うだけ無駄かと頭かぶりを振った。

「それではよい旅を。研究所で朗報を待っておるよ」

「こつちこそ、閲覧の許可をありがとな。シロナと合流した後に限るが、急患があればすぐ呼んでくれ。アイツの権限フルで使って治しに来るからよ」

「はっはっは！　心強いな。では、また」

がっちり握手をかわして、ウムツとナナカマドはいつものように頷いた。

「ここでお別れみたいね」

マサゴタウンの端。街道へ続く道の隅で、4人の人影が集まっていた。

ハマゴとマーズ、スズナとスモモ。偶然に出会ったこの組み合わせは、しかし道を同じくすることはなく、各々の目的に沿った進路を取るために歩みを別つ。ハマゴたちはシロナの要請に応えるため、元来た道をたどるように北へと向かう。スズナたちは武者修行のため、東へと向かう。

スズナたちが向かうフタバタウンは、かつてのシンオウの英雄を送り出した町だ。そこに行つて、英雄の足取りを追いながら自分たちを強くするのが彼女らの旅の目的なのだとか。

「今度会った時はアタシがバトルする番だからね！」

「そういえばあんたとはまだ戦つて無かつたわね。望むところよ」

「ふふ、時間があれば再挑戦を受け付けていますからね」

「冷静ぶつちやつて。今度はギリギリどころか圧勝してやるから覚悟してなさい！」

新たに生まれた女同士の友情を、拳をぶつけあうことで確認するマーズたち。

暑苦しいことだなとアクビをしながら見守るハマゴが呟いたところで、ジラーチはキラキラと目を輝かせながら彼女たちの別れの姿を一步引いたところで見守っている。

「それじゃ、また会いましょう」

「ええー！」

重なつた声と共に交わされるハイタッチ。

背を向け、片手を振りながら離れていくスモモらの後ろ姿を見送つたマーズは降つていた手を腰に戻して、快活な笑みをハマゴに向けてる。振り返つた際にキャミソールの隙間からチラリと見えた肌に、恥じらいを持ってと呆れたように彼は返した。

「ドコみてんのよ！ いやらしーわね」

「んなことどうでもいい。さっさと行くぞ」

「あ、ちよつと！」

軽く受け流すハマゴに、突っかかるマーズ。久しぶりの二人きりは、マサゴタウンに着く前の騒がしい関係にすぐさま落ち着いてしまったようだ。これでどちらかが片方の事を意識していれば面白い

ラブコメディにでも発展したのかもしれないが、生憎とそんな感情の一欠片すら、その両者は持ち合わせていなかった。

つかつかと歩調を早めにするハマゴに、あーだのこうだの文句を並べるマーズ。ひとしきりに軽めの罵声を浴びせかけたところでようやく落ち着いたのか、耳を小指でかっぽじっていたハマゴに対して疑問を投げかけた。

「随分早足だけど、何か目的でも在るの？」

「楽しみが出来てな。まあ特大の方はシロナんところ着けば良いんだが、その前に……ほらよ」

PiPiと表示された投影モニター。すでにそれをお気に入りにしてデータしてもらっていたハマゴが表示したのは、一種の薬草の映像資料だった。

「俺らがよく使う『ずごくいきずぐすり』と『まんたんのくすり』の原料になる薬草だ。本当なら薬剤師連中が指定したトコでしか栽培されてねえんだが、ハウエンと違ってシンオウはその辺甘いようだな」
「ようはそれが欲しいがために早足ってわけ？ あんたも現金なトコあんのね」

「自分の欲望には素直な方だと思ってるがな。したいことを貫いて、トコトン突き詰める。最高の言葉だと思いがね」

ニンマリと言い切ったハマゴはこの上ない悪人面だ。

肩をがくつと落として盛大なため息を付いてみせるマーズ。思い浮かんだのはマーズのギンガ団活動最盛期の事。ぼそりと呟いたその言葉は、ハマゴの鼓膜を突き刺すような声色で言い放たれた。

「……はあ、在りし日のギンガ団にあんたが居たら、案外上手く行けそう」

「犯罪行為に手を貸すつもりはねえよ。合法的な制裁なんかは面白そうだな」

「こんの肉体派あ」

おうよ、と盛り上げられた上腕二頭筋。ジラーチが目を輝かせてそれに飛びついて、垂れ下がる遊びを始める。だがハマゴとしてはそれに付き合っつてやるギリはないのか、H A H A H Aとアメリカンなわざ

とらしい笑みを零し、すぐさまジラーチの羽衣を引つ掴む。

ぐるり、と。振り回されたジラーチは元の位置——ハマゴのバックパックの上——に座らされた。勢い良く付いた尻を痛そうに撫でて涙目で抗議を始めるが、ハマゴはそれを適当にいなすばかり。

「……虐待も真つ青よねえ」

「なんか言ったか？」

「別に」

「虐待じゃねえぞ。愛だ愛」

「聞こえてんじゃない!?!」

騒がしい道中、他の旅人にジト目を向けられつつも、マイペースな一団は我こそが正義だと言わんばかりに街道を往く。ハマゴは期待に胸を膨らませて、かつ雑にジラーチをイジメながらに嗤ってみせた。

(刺激のない生なんてまっぴらごめんだろう? 俺の手元に来たんだ。ちよつくら付き合ってもらうぜ、ジラーチよお)

千年を眠りこけて、7日だけ目覚めて……一体どれだけの出会いと別れが待ち受けるのか。その真実こそ悲しみの権化であるジラーチを案じて彼は日々を笑い続ける。気に入ったポケモンはトコトン可愛がるのは、形は違えどマーズと同じ。

この二人も出会うべくして出会ったのだろうか、後に金髪を揺らす黒服の女は呟いたのだった。

「おい、急げ!」

「わかってる! 板はこっちだ! 早く貼りあわせろ!」

名前の無い小さな村。

総勢100人にも満たない、シンオウのどこにでもありふれた農村。

村に住む人々は、皆が冷や汗と脂汗を流しながら必死に慌ただしい様子を見せていた。やがて、何かに怯えるような彼らは自分の足から伝わってきた重たい感触に身を震わせることになる。

「あ、あああ……また来た！ あいつだ！ また来やがったあ!!」
一歩ごとに震える大地。

隣接する田んぼ道の向こうから、強大な一つの影が農村めがけて歩みを進めている。

村人たちは分かっていた。こんな有り合わせの板程度では、あの影の主どころかその末端の進化前ですら止めることは出来ない。だが、それでも抗いたくて、恐怖を振りほどきたい一心で。哀れな村人たちは、その現実を直視したくはなかったのだ。

やがて不鮮明な影はシルエットになり、雄々しく天を衝く2本の角の影先が、一番近くにいた村人の首まで覆い尽くす。巨体を見上げる村人は、もはや恐怖を通り越して声にならない声で震え上がるしか出来ない。

硬い皮膚を、更に人間が創りだした道具を取り込み進化した姿。灰色の岩のような体に映えるオレンジのプロテクター。シンオウ地方で初めて存在が確認されたポケモン。

「……………」

ドサイドン。

そう呼ばれるポケモンが、ただただ無言で怯える村人を見下ろしていた。

恐怖の渦中

ハマゴたちがマサゴを出て数日後、彼らはコトブキシティの北の街道から大きく東側に逸れた森のなかを歩いていた。コトブキでは試作ポケッチの定期報告をするなどの事もあったが、今度はギンガ団に襲われることもない平穏なままに街を抜けてきたのがこれまでの道のりである。

さて、そんな彼らが森のなかで一体何をしているのか。それはハマゴの追い求める薬草の数々が自生している地帯を探していたのである。分量次第で「まんたんのくすり」や「すごいきずぐすり」の原料となる薬草だ。忘れられているかもしれないが、一応ポケモンドクターである彼にとつては垂涎の一品である。

そうして奥まったところへ繰り出すこと数時間。ほくほく顔で薬草を摘み取ったハマゴの姿がそこにあった。

「あんたも飽きないわねえ」

「仕事を飽きちまえばそれまでだつつの」

近くの岩へ腰掛けて、これまでの道中で疲労が蓄積したふくらはぎをもみほぐすマーズ。彼女はハマゴが活き活きとしながらジラーチをこき使い、薬草かそうでないかを教えながら着々とジラーチ助手化計画を進める様を見ていた。

そのうちサングラスとか掛け始めるんじゃないかしら。いや、似合わないわね。とりとめもないことばかりが浮かんで、はあ、と息を吐きだしたのは悪くないはず。そういえば、最近キユウコンを見かけなくなつたわね。

暖かな木漏れ日と、森林の涼しい空気がマーズの意識をふわふわと漂わせていく。そのままストンと眠りに落ちて意識が暗転。それから暫くの間が立ったか、彼女にとってはほんの一瞬のつもりだったうたた寝は、土を踏みしめるハマゴがバシツと彼女の背中が叩かれたことで妨げられた。

「ったあ!?! なにすんのよ!?!」

「何って、もう日が落ち始めてんぞ。置いて行かれてえのかよ?」

「嘘っ」

マーズとしては一瞬だけ眠っていたつもりだったのだろうが、実際のところはとつぷり沈みかけた夕日が、長い影でいち早く森を暗闇に変えてしまっていた。

このままキャンプの準備を始めれば良いかもしれないが、ハマゴとしては近くにあるはずの農村までさっさと移動して置きたい心づもりである。

「こつちに進めば小さいが村がある。完全に暗くなる前にさっさと行くぞ。キュウコン、松明代わりに先導頼んだ」

モンスターボールを放り投げながら彼は言っ、マーズは仕方ないかと立ち上がる。地面に降り立ったキュウコンが尻尾の先に小さな火を灯して、暗くなり始めた森のなかを明るく照らしだした。相変わらず、炎や念動力の扱いが器用なポケモンだ。

此処のところはジラーチばかりが外に出ていたが、久しぶりの出番であるからか、キュウコンはいつも以上に軽い足取りで歩いているようにも見える。そして口の端が軽く持ち上がっているのは気のせいではないだろう。るんるん気分とはこういう状態の事を言うのだろうか。

そのまま歩いてどれだけの時間が経っただろうか。ハマゴの片手に巻き付いたポケッチを見れば、夜の7時前後をデジタル数字が表している。すでに太陽は木の背丈に負けてしまって、辺りはすっかり宵闇に包まれていた。

頼りになるのはキュウコンの尻尾の先に点った灯火だけ。近日雨が振ったのだろうか、更に森ということでもぐしよぐしよの足場をびつちやびつちやと踏破しつつも、ハマゴたちはようやく木々の向こう側の明かりを見つけることが出来た。

「あつたあつた。あの村だ」

「ポケモンセンターは……無いみたいね。じゃあ交渉して泊まるの？」

「最悪野宿だが、人里近くなら野良ポケモンに襲われることもねえだろ——つと」

さつと通り過ぎた木の幹を横目で見て、はたと彼の足が止まる。

「どうしたの」

「しっ、黙ってる」

キュウコンが尻尾の一本を近づけて、ハマゴが注目した木に近づける。

……根本が濡れている。そして、大きな一つの凹み。これが原因で立派な大木が枯れることはないだろうが、そんな目的のために付けられたものではない。

瞬時に事を理解したハマゴは、マズったなと苦虫を噛み潰したような表情になる。寄せた眉間の皺が深みを増す表情が、キュウコンの灯火で明るく映しだされた。

「少し急ぎ目に移動すつぞ。多少汚れるのはもう気にすんな」

「ちよ、ちよっと待ちなさいよ」

大股になって早歩きになるハマゴ。飛び跳ねた泥が白衣やブーツにこびりついていくが、彼としてはそんなことは知ったことではない。いまいち自体を飲み込めていないマーズもここにいるのは危険ということとは分かったのか、文句を垂れつつもハマゴの後ろに付いて行く。

やがて村の家屋から照らされた明かりが強くなり、森を抜けて田園の風景が彼らの周りに広がった。

「ここまで来れば何とか……」

そう言っただけ息を吐こうとしたハマゴは、足の裏から感じる僅かな揺れを感じてバツと背後を振り返る。すると、先程までハマゴが抜けていた道無き道を横切るように、けたたましい足音を響かせ、そして時には木々を突っ切る一体のポケモンが全力で疾走していく姿が見えた。

しかしそれも一瞬のこと。すぐさま暗闇の中に姿をかき消され、木々を薙ぎ倒す音だけを残して去っていくポケモンはハマゴたちを襲うわけではないのか、どんどん遠くへと離れていく。

一体なんだったんだ。そう悪態をつきたいところだったが、あの「縄張り」を抜けただけでも御の字だろう。不明というか、あんまりに

も不自然な点が多いあの光景が焼き付いて離れないが、俺達の危機は去ったみてえだな。

珍しく胸をなでおろすハマゴの表情は見えなかったが、安堵とわかるため息を聞いてマーズは首を傾げる。そうしている間に、人間よりも危機察知能力の高いキュウコンはもう大丈夫だろうと言わんばかりに歩みを再開する。

目指すは明かりの在る方。この田園を広げているであろう人里だ。

到着してすぐ、ハマゴは近くの家を訪ねてこの村一帯で泊めて貰えそうなどころはないかの交渉に入った。こういう小さな集落なら、一人に聞けばおおよそ全体の事は把握できるだろうと踏んでのことだ。

予想通り、村人はハマゴたちに泊めても大丈夫な家を案内してくれたが、珍しい来客にも、ハマゴの傷ついたポケモンが居れば無償で治すという言葉にも、あまり喜色を浮かべてはいなさそうだ。

泊めてもらえる家の人間も、ハマゴたちを言葉でこそ歓迎はしたものの、その顔持ちは暗い。村全体がこうなってしまうとは、この村に何が起こっているのだろうか。それに、此処に到着したのはもう深夜も近いはず。だというのに、家屋の明かりが消えているところは本当に少ない。まるで夜は何かに警戒しているような暮らし方だ。

「この村、なんかあったのか？」

「い、いえ。特には何も。そんなことより寝床はこちらの部屋をお使いください。丁度空いておりますので、一晩だけでもゆつくりと過ごせるよう——」

必死に取り繕ったような村人の案内はそこで途切れた。

ズン、と地を響かせる何かが家屋を揺らしたのだ。

地震か、それともこの深夜にどこかの馬鹿がバトルをおっぴはじめたか。なんて思考が浮かぶも、ハマゴはすぐさまその考えを投げ捨てる。村人の怯え方があまりにも異常だったからだ。

「……しやーねえ。マーズはここで待ってる」

「わつと」

バックバックを置いて、小道具を投げ渡した彼はマーズにそう告げる。

「厄介事かどうかちよっくら見てくるわ。直接戦うわけでもねえし大丈夫だろ」

「あんた首突っ込むタイプだっけ？」

「テメエの目で確認ぐらいはしねえとな。やってられないもんだよ」ギユツ、と薬液の仕込み手袋を嵌める。

完全に喧嘩を仕掛けに行く暴力人間の表情だったが、引き際は心得ているだろうとマーズは片手を振って彼を見送ることにした。

それから村人の静止を振りきって地面を鳴り響かせる方へと進むハマゴは、もともとの農村がそんなに広くないこともあり、すぐさま原因であろうそれを見つけることが出来た。

腰が抜けたのか、立えずにいる一人の村人を静かな瞳で見下ろす前後二本角のポケモン、ドサイドン。明かりをザラザラとした岩肌が受け止めて淡い灰色に光らせているが、それよりも目につくのはおおよそ暗闇に似つかわしくないプロテクターのオレンジ色。

すわ交戦か、予想以上に超弩級な相手を前にハマゴも冷や汗を垂らして事の顛末を見届けようとするが、騒ぎ立てて絶望の声を上げる村人たちに対して、ドサイドンは静かなものだった。一步も動こうとはせず、ぐるりと辺りを見回す。

やがて片手の指をドサイドンが来たであろう方向へと向けて、次に村そのものを指差した。そして両手を広げて村が押し潰されるぞ、というような動作をした後、ドサイドンはくるりと逆を向いてゆっくり元来た道に戻っていく。

ずしん、ずしん、ずしん。

あまりにも不可解な行動を取ったドサイドンは、森が在る南方とは反対の、テンガン山に繋がる平野の東方へと歩いて行く。そして危機は去ったと思ったのか、物々しいバリケードの一部を持っていた村人がへたり込んで、先程まで見下ろされていた村人は失神したようだ。

何が起こっているのか。その謎が何一つとして解明されていない状態で、ハマゴはとにかく自分が出て来ることをやるために失神した村

人へ歩いて行く。どうやら、この村で最初に診るのはポケモンではなく人間になるみたいだな、と。とりとめもないことを考えながら。

後日、自分一人じゃ無理そうだと判断したハマゴはマーズを引き連れて気絶した村人の診察に来ていた。極度の緊張の糸が切れてしまったため、その精神面以外は特に問題はないとの診断を下した彼は、聴診器を外して椅子の背もたれに身を預ける。

夕日のチリチリとした熱さにうんざりしつつ、いかにもかつたるような態度で、まずは質問を投げかけていた。

「何だったんだありや。この村はドサイドンが脅しに来る習慣でもあんのか？」

「そ、そうじゃないが……」

「だったらキリキリ話してくれや。幸いこっちにや腕のたつ女もいる。それに職業柄、だ。どう見たって怪我人が出そうな状況は放っとくワケにもいかねえんでな」

俯いた村人は、事の発端は3日前だと言った。

もともとこの村の近くの平野は、季節によってサイホーンたちが南北を移動して住処を変えたりしながら暮らしている場所だった。しかし、3日前に突然4匹ほどのサイホーンが西側……つまりはこの村めがけ、田園の方に侵入。そして当然のごとくまっすぐに駆け抜けたことで6枚ほどの田んぼが犠牲になった。ついでに幾つかの家屋も半壊。

その日の夜から毎日、サイホーンの群れのリーダーであろうドサイドンがこちらの方に姿を表し、村を潰すような仕草をしては腕を払ってから帰るといった状態が続いているらしい。最初はバリケードを作ろうとしたが、もともと田んぼの用水路にあった落下防止の鉄柵も容易に突き抜けていく相手だ。この村にトレーナーはいないし、ポケモンたちも豊穣のためにその力を振るうものばかり。

とてもじゃないが、ドサイドンやサイホーンといった屈強なポケモンを追い払うことも出来ない。そして為す術のない現状、村はてんやわんやの大騒ぎになって、今となつては暗い絶望感を抱いたままドサ

イドンたちが何時かサイホーンを引き連れ、蹂躪される日を待つばかりなのだ。

だからといって、生まれ育った村を今更捨てる事もできない。名前もなければ小さい村だが、それでも故郷の愛着はある。

そこまで語った村人の話を聞いて、部外者という立場だからだろう。ハマゴは少し引つかかるものを感じた。しかし、今はそれを飲み込んでおく。下手な空想を話したところで解決する問題でも無いだろう。

「なら、一晩泊めてもらった分だ。せめてドサイドン共の様子を見てきてやるよ。なんでこうなっちまったかの原因もわかるかもしれないからねえからな」

「本当か!？」

「薪背負った狸の船に乗ったつもりで待つときな」

それだけ言って、またいくつかの質問をした彼はトントン、と額を指で叩いた。

やがてある可能性に思い当たった彼は席を立ち、部屋を出ようと扉に手をかける。

「ああ、ぎっくり腰は気をつけとけよ。随分筋肉に疲労が溜まってるから多少は休める日も作つとけ。んじゃ、お大事に」

「お大事に〜」

医者 of 常套句を置き土産にして、太陽の光の元へと出てくるハマゴ一行。

先日の記憶を掘り返しながら辺りを見回すと、なるほど。自分たちが来た方向とはまた違い、東側には木々があまり無い平野が広がっているのが見えた。田んぼの向こうに見える平野の入り口あたりに、まだドサイドンたちの姿は見えない。

「あっちの方らしいな。ほれ、行くぞ」

「わかったわよ」

彼に促されて後続くマーズ。

流石に今回は暴力沙汰の要素が強いと思ったか、ジラーチはボールの中に収められている。代わりに外に出ているのはマーズのクロ

バット。地面を駆けまわる相手に対して、実際にこの二人を掴んで空に逃げられるクロバットは、しかしサンサンと照りつける太陽の光を浴びて不快そうに顔を歪めていた。

「んで、何考えてんのあんた？」

田んぼ道に差し掛かったところで、クロバットの頬を撫でながらマーズは言う。

彼女が気になっていたのは、どう考えてもハマゴが村人の言っていた話を鵜呑みにしていないという点。確かに気になる点はあったが、実際にそのドサイドンを見ていないからこそ浮かび上がる疑問なのだろう。

それに対して簡単だ、とハマゴは笑って返した。実際にドサイドンたちを見てみればすぐに答えは見えてくる。そう続けて視線を元に戻そうとするが、後頭部に突き刺さるマーズの視線を感じて居心地が悪そうに「わかったわかった」と息を吐く。

「まずあれだ。ドサイドンは冷静に努めてたが瞳が揺れてた。ありやあ何か焦ってるようだった。村人共は突然でビビっちゃったんだろうが、よくよく見りやあアレは村を潰す予告なんかじゃねえ。ありや警告だ。そして極めつけは昨日の夜、走っていったあのポケモン。もしかしなくてもサイホーンだろうな」

「ああ、にしても警告？　ドサイドンってサイホーンの進化系だし警告なんて器用なことできるわけ？」

「ん、ああ……そうだが」

マーズの疑問は、サイホーンを知る者ならではの言葉である。

控えめに言ってサイホーンは馬鹿だ。それこそ突進している間に、突進を始めた理由を忘れるほど。その進化系のサイドンですら、強力無比な物理的側面を持つが、あいも変わらず物忘れやらボケが多い。そういう意味では、塾や学校に行く子供に叱りつける時の文句として「サイホーンになってもいいの？」と言われることもある。

だから、ドサイドンがそんな冷静だのという話を聞かされたところでマーズにはあまりイメージが沸かなかった。ドサイドン自体、その存在が周知され始めて時間が立ったとはいえ、まだまだバトル中の姿

はともかく生態や知能に関してはそれこそドサイドンを持つトレーナーか、研究の関係者ぐらいでしかわからないだろう。

その辺りを加味した結果の返答なんだろうなと思ったハマゴは、しかしわざわざ説明するのも面倒かと、喉まで出かかった専門用語を並び立てた文章を飲み込んだ。代わりに口から出てきたのは簡素なそれ。

「ドサイドンになってようやく頭が良くなった、そういうもんだ」

「そういうもんねえ……」

「無駄口叩いてねえで万が一の心配でもしてろ。ジュピターとの再戦までさんざんこき使ってやるからよ」

「……まあいいけど。楽しいし」

無駄口を叩きながらの道中も短いものだ。もともと平野の方が見えていたとはいえ、テンガン山に繋がる岩山を隔てた向こう側に件のサイホーンの群れがあった。

群れの規模はおよそ30〜40頭のサイホーンと、進化したサイドンが2頭。そして警告を発してきていたドサイドンが一匹。もしかなくてもドサイドンはこの群れのリーダーであろうことがわかる。

ぞろぞろとサイホーンを引き連れ、しかし突っ走らせること無くゆっくりと歩かせているドサイドン、そしてリーダーから指示を受けてサイホーンたちが統制を外れないよう調整するサイドン。理想的な群れのあり方の一つだろう。

「やるじゃんあのリーダー。サイホーンって何かと忘れるから突進初めてまた忘れて突進続けるってのに。リラックスさせてその気持ちでいっぱいにしてんのかしらね」

「さあてな。まあコレで分かったろ。ドサイドンが頭良くなったってのはよ」

身を伏せ、頭を乗り出して見下ろす二人はコソコソと会話を繋げる。

あくまでハマゴの予想は予想。予想を確信に変えるためにも、まず彼らはクロバットに捕まって岩山の上に乗ると、そこからバレないように群れの様子を観察していたのだ。

「んで、最悪のケースとしてはこの後だな」

「なに？」

「今はまだ大丈夫だろうが……問題は夜の入りだ」

夜。特に日没したタイミングでサイホーンが何体か田園を突っ切ったりしていくのが多い。サイホーンたちの多くは夜行性なので活発になるのは分かるが、村の方を襲撃するようにして突っ切っていく理由はない。

此処は人気もなければ、人間が暮らすには少し厳しい環境。それだけ組み合わされば、ファウンスでの日々を思い出す位には思い当たる節はいくらでもある。

「サイホーンが完全に寝てる時はドサイドンたちが警戒を強める。だが寝起きでサイドンたちが掛り切りになれば戦力は落ちる。となると、そこにつけ込む奴らが何をするのかなんざ明白だ」

「……密猟者ってこと？」

「しかも質がわりいぞ。むしろ最悪だ」

吐き捨てるようにハマゴは言う。

ホウエンでもサイホーンが狙われる最たる理由がある。シンオウでも、おそらく変わらないだろうと思いつつながら、彼は眉間のシワを最大限寄せながらに吐き出した。

「サイホーンは頑強だ。見世物だの、そういった^{まじ}的^{まじ}に使うには最適でな。次の日には色々忘れちゃうから、自分が何をされているのかを理解する前に衰弱して死ぬことも在る。だが補填がきく上に長持ちで下手すりゃ従順な生きたサンドバック。その手の奴らが如何にも好きそうだろ？」

「ああ……あたしたちのように目的のために使ってたんじゃないんで、使うのが目的ってわけね」

元犯罪者、という肩書を持っているマーズでも、ポケモンを大事にするうちの一人の人間だ。普通の感性を持ち合わせている。だからこそ、この事態の元凶がそうであるのなら……？

彼女もまた、ハマゴに共感するように、奥歯を噛みしめることで己の感情を表した。そして気づく。ちようど今が、

「日没……」

「さて、一働きしてもらおうぜマーズ」

眼下のドサイドンがビクリと体を震わせて、在る一点を見据えている。

そこにあるのは人工の光。そしてクラクションをわざと鳴らして威嚇する愚か者たちの姿。それに驚いたサイホーンは、サイドンたちの静止も聞かずに跳ね起きて、あらぬ方向へと突進する。

ほんの一瞬の出来事だというのに、すでに事態は嫌な方向へと動き始めていた。そしてクラクションを派手に慣らした大型のトラックに乗ってきた人間たちが降りてきて、自分たちに向かうサイホーンを攻撃、行動不能にさせて特殊な檻に閉じ込めようとする。

「野郎……！ やりやがったなあああああ!!」

握っていた岩の一部が悲鳴を上げる。握りしめられたそれが、砕かれる。

ハマゴは充血するほどに瞠目し、怒り、咆哮を上げたハマゴはさすが片手のポケッチの照準を合わせて、情況証拠を撮影する。そしてキュウコンをボールから出して、彼女の背にまたがって急な斜面を降りていった。

その様子に驚いたのはマーズだ。

これまでハマゴが怒りを見せたりした姿は見たが、密猟者を前にしてこの変貌。ジラーチを横から掠め取った時も同じように怒り狂った。ちまった、と軽めに話していた様子を見るに過剰表現かと思っただが、話よりも阿修羅になったハマゴは見ているだけで軽く背筋を凍らせる。

地の底から響くような怒号を噛み殺し、鋭い目つきだけで殺せるような視線を密猟者集団に合わせて降りていく彼を、慌ててクロバットで追いかけるマーズ。

「…ギンガ団の時も思ったけど、これあたしじゃないんじゃないの」

思わず呟いた言葉に返すものはない。だが、ポケモンバトルでは最弱を豪語する彼は、純粹な流血沙汰の喧嘩において真価を発揮するのだろうかというのは、前のギンガ団襲撃の際に嫌というほど魅せつけら

れた。

ポケモンに指示を出すならば、司令塔を殴り飛ばせばいい。至極単純だが、トレーナーでは中々実行に移そうとしない禁忌。それを、犯罪者ばかりを相手にしていたハマゴは選ぶことが出来る。

そしてキュウゴンが一直線に向かったのはトラックの側面。キュウゴンの「だいもんじ」が叩きこまれたトラックは燃料に引火し、爆発を起こして横転する。これ以上サイホーンの被害が出ないうちに、合理的な判断でそのトラックを破壊したのだろう。

すでに囚われた二匹のサイホーンが中にいたが、その程度で傷がつくほどサイホーンはヤワではない。それを知っているからこそその突貫だった。

「な、貼りこんでやがったか!？」

「構うな口封じだ！ どのみちこれだけ取れてりや十分だ！」

「へっへへ……それもそうだなあ！」

一足先についたハマゴは、密猟者たちのセリフを聞いて後からシメて聞き出すかと頭を回転させる。そしてキュウゴンから降りた彼は、いつもどおりキュウゴンへ自由に戦うように指示を出すと、腹の底から空の果てを揺るがすような重低音で世界の音を震わせる。

「楽にブタ箱に行けると思うなよ。常習犯共がああああああ！」

薬液の仕込み手袋を引っ張って、その右拳を振り上げる。

3人の密猟者は軽薄そうに笑うと、その懐に隠し持っていたナイフ、銃、長い鉄の棒を手を取った。実質素手のハマゴを嘲笑いながら数で圧倒しようとする3人の密猟者。

「いけやガーマイル！」

「ドククラゲ！」

「ぶっ殺せビークイン！」

しかしそれでもハマゴは嘲笑う。彼は怒りが頂点に達しながらも、その実精神は冷静のひとつだ。この状況下でも、突破して全員をブタ箱に送り込めるだけの逆転劇を用意できると自らに誓う。そして、ひたすらに駆けた。

そう、ポケモンを出す一瞬のロスタイム。狙いはこの一瞬。無呼吸

で踏み込んだハマゴは一気に距離を詰め眼前へと踊り出る。まるでスローモーションの世界。いっぱいいっぱい引き絞られたその右足は、流星を描いて密猟者の顔面を陥没させるのだった。

標的の行く末

「ドオラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
蹴りぬいた足。陥没する鼻。

流れ出る流血の軌跡を描いて、密猟者の一人は白目を向いて沈黙する。

「野郎やりやがったな！ アシッドボムだ！」

「ビークイン、とどめばり！」

攻撃直後のハマゴは片足を突き出した状態。当然ながら飛んでくる攻撃を避けられるはずもない。蹴り飛ばされた密猟者に出されたゲームイルが狼狽え、キュウコンに阻まれているのが救いだが、ポケモンの殺すつもりで放たれた攻撃を食らって、無事で済む人間はいない。

だが、アシッドボムが振りかかる直前、その間に入り込む影があった。キュウコンだ。

「……！」

何も言わず、口に蓄えるのは炎。邪魔をしていたゲームイルを蹴っ飛ばした彼女はアシッドボムを自慢のオーバーヒートで蒸気の一片も残さず消し去った。近づいてきたビークインは、なおもハマゴを狙っていたためその横つ面に鬼火を当てる。青白く不気味な炎を受けたビークインは怯み、技を解いて交代。だがその身には鬼火がもたらしたひどい火傷が染み付いている。

「助かったキュウコン」

片手でさらりと、彼女の口元を撫で下ろすハマゴ。

残り二人と3匹になった密猟者たちを睨みつける彼は、その手袋をぐっと握りしめる。

「さて、サイホーン共を狙ったその理由。聞かせてもらおうじゃねえか」

「一人倒したくらいでいい気になりやがって……」

「おい、聞こえるか！ 邪魔な奴が現れた。全員こつちに来い！」

「チームだったか……。そりやそうだな」

ちらりと彼が横目で見れば、ドサイドンたちが自慢の強靱な身を呈して、半壊状態のトラックからほぼ無傷のサイホーンを救出しているようである。人間が人間同士のいざこざを片付けている間に、ドサイドンは当然身内を優先したということだ。

合理的な判断が出来る彼らに感嘆を抱き、ヒュウと口笛が鳴らされる。

「くろいまなぎしー」

ちょうどその時、上空からようやく到着したクロバットが真っ黒に染まった眼を密猟者とそのポケモン達に向けると、そのまま目から抜けだした不可思議な文様が黒い光となり、彼らの足を縫い止める。

ギンガ団元幹部の手塩にかけて育てたクロバットだ。くろいまなぎしという技一つでも、複数の相手を同時に相手取れるだけの成長を果たしているということだろう。

「おまたせ」

「おせえぞ糞女。こちとら一人手にかけてんだからな」

白衣についた土を払いながらハマゴがいい、マーズはそれに鼻を鳴らして応える。

どこまでも優位に立っているのは間違いなく彼らだ。だが、どういうことだろうか。くろいまなぎしで縛り付けられた密猟者たちも、その顔に張り付かせたいやらしい笑みを解いては居ない。その増援によほどの自信があるのか。それとも？

「コイツはツイてるぜ……」

「あん？」

その答えは、他でもない彼らの口から語られた。

「青い髪、ツリ目の白衣!! 小遣い稼ぎに遊んでたら、まさか鉾山を掘り当てるとはなあー!」

「運がいいぜ俺たち。これで遊んで暮らせるってもんよ」

「……ハア？」

ぐはは、げひやひや、と絵に描いたような悪どい笑い声を上げる彼らの行動に、ハマゴらは疑問の声を上げた。しかし、よほどの欲の源となっているのだろうか。あいも変わらず動けないままだというの

に、ギチギチと締め上げられる身体も無理矢理に動かし、彼らはよく滑る舌を回している。

「ちようどいい、教えてやるよ。オマエらは1億もの懸賞金を掛けられてんだ。俺らの中じゃちよつとした有名なんだよオ！ しかもたった一人の人間と、それに加えて手持ちのポケモンまで捕まえれば更に1億！」

「そして仲間の到着はあと2分もいらねえ。さあ、観念し——」
続けようとした、二人目の言葉はそこで区切られる。

何故か？ なぜなら——

「やかましいッ!!」

ハマゴが土手っ腹に足を突き出していたからだ。

「カ、ハッ……!!?」

「あーだこーだどくつちやべつてやかましい奴らだ！ いいか！ テメエらは遊びと言いやがった！ サイホーンたち命ある存在を、ポケモンを捕まえて、売りさばいて、その後死のうがどうでもいいと！これが遊びだと言いやがった！」

「が、つげふつ！ ぐふつ、ぐえつ……おごつ！」

倒れこんだその腹に、彼は何度も足を押し付ける。

バウンドする身体に合わせるようリズムミカルな蹂躪だ。腹から腕を、足を、そして顔面を蹴り飛ばすハマゴ。擦り切れた傷口から飛んだ血が、ニヤけ笑いを浮かべていた密猟者の最後の一人に振りかかる。

頬を濡らした生暖かい血液が目元に飛んで、密猟者は顔を真っ青に染め上げる。マーズは、沈黙して見るしか無かった。命を弄ぶ……それは自分にも言えることだ。密猟者に降りかかったその言葉が、まるで自分の過去に響いているようにも聞こえてしまう。だから、彼女は言葉を全身で受け止め、動くことが出来なかった。

「捕まえたのなら共に生きろよ！ 傷つけて遊んでんじゃねえ！ テメエの道楽のためだけに命が在るわけじゃあ……ねえんだよっ!!」

指を絡め、両手で作った槌を振り下ろす。

肥えた土手っ腹に叩き落とされた人間アームハンマーが、いたぶら

れた密猟者の一人を情け容赦のない痛みとともにブラックアウトに追い込んで、彼は激情に任せたままに振り下ろした拳を解いた。

「ヒッー」

幽鬼の如く揺らめいて、ギリリと下から横に移される視線。

まだまだくろいまなぎしの効果は続いている。当然だ。彼ら密猟者は鍛えることを怠った者。ジムリーダーとまでは行かずとも、まともポケモンと共に身体を鍛えていれば、この技の影響はポケモンよりもずっと軽いはず。だというのに動けない彼らは、やはり墮落しきった者である証。

無言で土を捲り上げ、持ち上げられたハマゴの右足。

一人目のようにその顔を突き抜けんばかりに振り切られるその足は、しかし避けられる。

このタイミングでくろいまなぎしが解けたのだ。

不味いと思った瞬間にマーズも動き出すが、それよりもフラストレーションが溜まっていたのであろうガーマイルの方が早い。トレーナーが倒されたことよりも、自分がずっと無視されていた事に苛立ったガーマイルは鱗粉を毒の粉に変えて、それを「かぜおこし」で打ち出す。

触れれば腐食が始まる猛毒は、ポケモンたちはともかく人間がマトモに耐えられるものではない。命が助かったと言わんばかりに密猟者も己のブークインを先行させるが、そこはキュウコンに前を阻まれる。

「バカがあー！ トレーナーが空きだぜえ！」

キュウコンはハマゴを守らず、マーズのクロバットも間に合わない。

やがて1秒もしないうちに毒紫の煙がハマゴを飲み込み、止んだ風とともに纏わりついて留まってしまった。あれだけの殴る蹴るの運動をしたハマゴだ。当然呼吸も荒く、咄嗟に息を止めるだなんて芸当が出来るはずもない。

「くっ、アクロバットでガーマイルを！」

すでに煙に呑み込まれた以上、これよりもひどくなることはない。

だがハマゴはもう倒れてしまっているだろうと判断したマーズは目標をガーマイルに変えた。自分もハマゴの二の舞いになる訳にはいかない。そう思つてのことだ。

ろくに鍛えられておらず、怒りに身を任せていたガーマイルは隙だらけ。クロバツトのアクロバツトが背後から突き刺さり、マーズたちが降りてきていた岩山の壁に吹き飛ばされたガーマイル。瓦礫に埋もれて戦闘不能状態になったそれを確認したマーズは、次はドククラゲの番だと、つばめがえしを指示する。

一方、ビークインに向かつていたキュウコンは軽い身のこなしで近づくと、ほぼゼロ距離で神通力をビークインにお見舞いしていた。いつものように冷静を装つてはいるが、ハマゴを直接攻撃しようとしたビークインには内心怒り狂っているキュウコン。締め上げる力はいつもの加減が上手い様相ではなく、九尾の妖狐として恐れられる暴虐の妖の本性をむき出しにした攻撃性に溢れている。

ギリツ、と締め上げる音がやがてギチギチとすりつぶすような音に代わり、ビークインは一瞬にしてその意識を刈り取られた。それと同時に、吹き飛ばされていたガーマイルが岩山にぶつかつて戦闘不能になる。

これで、2対1だ。

追い詰められた最後の密猟者は、冷や汗を垂らしながら考える。だが、その視線はチラチラとハマゴの方に向けられていた。この期に及んで、一億…いや、二億という金に吊られた欲が彼の思考を妨げているらしい。

目の前に居るのは、非力そうな女とたつた2体のポケモン。今はまだ保っているが、そのうちドククラゲも倒されるだろう。だが……次の瞬間、密猟者はドククラゲを見捨てることにした。もともとビークインも倒されている。それなら、自分だけが助かつてまた適当なポケモンを「奪つて」しまえばいい。

ここで倒れているポケモンたちは、ガーマイルを除いて彼らのポケモンではない。どこからか盗まれたポケモン。それを痛めつけて、酒の勢いで蹴りつけて、すこしばかりドコかが傷んでしまっているが、

飽きればまた適当な仲間に移すか捨てていけばいい。密猟者にとって、ポケモンとはその程度の価値しかなかった。

だから、密猟者は口元をスカーフで隠しゴーグルをつけると、晴れてきた毒煙の中に突っ込んだ。全てはハマゴを確保し、持っているであろうその手持ちのポケモンを「あそこ」に売り渡して金を得るためだ。

幸い、ドククラゲには脅しつけて死ぬ気で戦え、でなければ殺すと言っている。だからちようどいい時間稼ぎになるだろうと、密猟者はハマゴらしき人影を見つけて、欲に塗れたその目を見開いた。

「ひゃっはははははー！」

腕を伸ばし、嘲笑とともに自分の夢を思い描く。

金をもらったらどうするか。適当な美人でも買うか、またポケモンで良さそうな商売を見つけたか。いや、仲間の資金にして適当な街を襲えばもつと金が手に入る。いいじゃねえか。

「……あ？」

そうしてぐつとハマゴの腕を握った時、彼はその妙に硬い感触に違和感を感じた。

確かにあいつは鍛えているようだが、こんな、「岩のように硬かったか？」と。

「おい」

ぽん、と肩に手が置かれる。

沸騰するように暑くなっていた感情は冷め切って、目元についた血が先ほどの恐怖を呼び起こす。一瞬にして下がった体感温度は、まるで凍りづけにされているような。

錆びついたブリキの人形のように、肩に置かれた手の方向を見る。それが、彼の本日みた最後の景色だった。

「ぎっ……ぎゃあああああああ!!? 目が、目があああああああ?!?!?」

びちゃり、熱い、と思った瞬間に彼の目は焼きごてを押し付けられたように痛みを発した。必死に目を拭おうとするが、少しでもまぶたを開けば、液体から目に染みる成分が刺激を強める。だから、必死に

目をつむったまま、のたうち回るように目を拭うが一向に取れる気配はなく、それどころか強い粘性・弾力性があるのかぐにやりと形が変わる程度で液体の飛沫一つ上がらない。

「ノワキとマトマの実をブレンドした特製カクテルだ。ちよつとした薬品がカクシアジだがな」

「て、てめえええ!!? あ、あああああああああああ!」

煙が晴れて、ようやく全貌が頭になる。

先程まで密猟者が掴んでいたのは彼の白衣。だが、中身は長い石と木の棒が詰まった身代わりだ。本物のハマゴは毒の影響など一切ないかのように見下ろし、その右手の手袋をギョツと嵌め直している。

「多少粘膜が焼けるが、まあ2時間もすりゃあ硬くなる。その時にまつ毛ごと引き剥がしてもらおう凝った」

「ぐ」

「そろそろその口閉じろ」

ハマゴの背後からぬつと姿を表したキュウコン。

養豚場の豚を見るような目で密猟者を見下ろした彼女は、眉間のあたりから薄紫に輝くサイコエネルギーを溜め込んだかと思えば、密猟者の頭にそれを直接打ち込む。リング状のエネルギーが連なって密猟者の頭に消えていったかと思うと、苦しんでいた彼は一気に脱力し、その身を地面へ横たえた。

文字通り深めの眠りに誘う「さいみんじゅつ」だ。普段は中々寝られない病室の子や、傷が痛んで眠れない患者、薬の副作用で睡眠が難しい人に使うための技だが、今回のこれは昏睡状態にまで追い込むぞれだ。一人くらい、1週間寝ても問題無いだろうというキュウコンなりの怒りの表し方である。

「ハマゴ! あんた無事だったの!?!」

「よお、速攻見捨てた割には心配してくれるじゃねえか」

「それよりなんで毒受けて……」

「んなもん簡単な理由だ」

ドン、と胸を張って彼は言う。

「医者に毒が効くかってんだ!」

しばしの無言。吹き抜ける風。そして静寂。

とんとん、と難しそうに額に指を当てていたマーズは、思ったよりも素っ頓狂な理由を聞かされ混乱状態にされたが、自前の精神力でなんとか持ち直そうとしていた。

マーズの必死の様子をそれはともかく、と一蹴した彼はキュウコンをボールに戻すと、辺りをキョロキョロと見回し始める。すると、在る一点で彼は目を留める。

「あれが増援ってやつか」

砂埃を上げて走ってくるのは、先ほどの襲撃で壊したトラックと同型のそれだ。それがおよそ4台ほど。まだ見えないが、後ろの土煙の量を見るにそれに加えて2〜3台ほどはあるだろう。

荷物のところを檻しか入っていないとしても、10人以上がこちらに向かってきているのは間違いない。しかも、キュウコンはオーバーヒートを繰り返したため微妙に疲弊している。その上で、今度は明確にこちらを捕えようとしてくるのが分かっている。

「ジリ貧ね、村に一旦戻る?」

「いんや、俺の厄介事だ。ここは一つ協力してもらおうしかねえなあ」

「協力?」

「ああ。あれを見てみる」

彼は頷くと、在る一点を指差す。つられて目を向けたマーズはうげえと舌を出すほどに嫌な顔をした。

先ほどの戦闘が終わったからか、今度はこちらを囲い込むようにしているドサイドンたちの姿があつたのだ。敵対している行動は見せていないが、今回の一見で人間にいい感情を抱いていないのは確かだ。警戒心を強めた、鋭い目つきがハマゴたちを見据えている。

「あ、ちよつと、なにするつもりよ!」

「言ったとおりだ」

だが彼はそんなもの気にならないと言わんばかりにスタスタと歩き始めた。

やがて群れのリーダーであるドサイドンと、その両脇を固める2体のサブリーダーのサイドンの目の前で立ち止まる。両脇のサイドン

は威嚇するように角を回転させ、息を荒げている。対してドサイドンは冷静そのものと言った様子で、ここまで無防備に近づいてきたハマゴを見下ろしていた。

「頼みがある」

「ばっ…!?!」

話を切り出したハマゴに、サイドンは聞く耳持たぬと言わんばかりに腕を振り上げた。警戒しているポケモンに対して、これほど無謀な真似をする彼の姿は見たことがないマーズは、彼らしくない行動にバカと言いかけて、次に訪れるであろう鮮血の未来を脳裏に描いた。

だが、マーズの予想は外れる。

「……………」

「ああ、オマエなら聞いてくれると思ったぜ。村にわざわざ警告してくれるオマエならな」

ハマゴの頭上に迫る太い腕は、ギリギリで寸止めされていた。だが、ギリギリと締め上げられるように震えるサイドンの手は、ドサイドンのプロテクターによって無理やり止められていたのだ。

手の先が抑えられ、サイドンの手首あたりが眼前にあっても瞬き一つしないハマゴ。ドサイドンに止められたこともあって、サイドンはさすがとその腕を降ろさざるを得なかった。

「すぐにでもやってくる、奴ら」

土煙を上げるトラックの台数ははつきりしている。

6台のトラックに、一人の運転手と上の方に乗っている2人。合わせて18人という脅威が近づいていた。当然、彼らはハマゴを手にした後は予定通りサイホーンを狙い、売りさばくだろう。意地汚い泥棒は、目の前の王冠を手にしたからといって、その背後にある金貨の山を置いていくほど殊勝ではないのだ。

「テメエらの怒り」

止められてもなお、サイドンは怒り狂っている。そして散り散りになって逃げていたはずのサイホーンたちも、こうして落ち着いている以上自分たちを襲った相手をぶっ飛ばしてやりたいと心から願っている。三歩歩いて忘れたとして、残る怒りが再びその憎悪の記憶を思

い出させる。

なによりも——静かに剣呑な光を目にたくわえたドサイドンが、この中で最も内心穏やかではないだろう。

「アイツらにぶつけてみねえか？」

「……………」

だが、ドサイドンにはその荒れ果てた怒りの心を押し付ける必要がある。

彼はこの群れのリーダーだ。群れが減るような自体は避けねばならないし、すでに売られてしまった仲間や、これまでの襲撃で各所に突進していったサイホーンを連れ戻して、元の形に戻す使命がある。

なるほど、この胆力にあふれた人間の提案も尤もだろう。自分の群れを乱した愚か者どもに鉄槌を振り下ろす。それも必要だが、群れそのものが守れなかったら意味が無い。これ以上、犠牲を出す可能性がある賭けには乗れないのだ。

「……………」

「まあ、そうだ。当たり前だ。だが、俺はオマエらの事情を解決できると断言してやる」

ゆったりと首を振ろうとしたドサイドンを止めて、ハマゴは続けた。

「知り合いに、人間の中でもリーダーに近いがいる。そして奴らは人間でも爪弾きモンだ。あの村の誤解だって解いてやれる。ここに奴らが来たのは日が浅いだろ？ だったら、売り飛ばされた仲間を取り戻せるよう掛けあって、約束させてやる。そして、この場で傷ついた奴が居れば俺がすぐさま直してやる。どいつも死なせねえよ」

「……………」

ドサイドンからしてみれば、彼は完全に部外者だ。狙う一端となつてしまったのもなりゆきであるし、むしろ自分の不利益のほうが大きい。

「ポケモンが傷つけちまう状況を強いるのは屈辱の極みだが——」

ここまで真正面に向き合っている。己の命も顧みず。

ならば、彼の意志は十分に伝わった。

咆哮だ。怒りの咆哮を掲げよ。

同胞はすでに奪われ、住居は踏み荒らされた。

しかし、しかしである。ドサイドン。この群れの主として願う。

己を脅かした者共には罰を。鉄槌を！

その身に溜まった怒り、いまここで——解き放とうではないか！

「ヴ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ドサイドンの咆哮が群れに響いて、一匹、また一匹とサイホーンに意志が伝わっていく。目指すはあの畜生ども。平穩を踏み荒らし、家族を奪っていった矮小なる者共だ。

ならばこそ、我らもまた踏み荒らそう。邪魔するものは突き抜けよ、立ちふさがるならはねのけよ。猪突猛進にして初志貫徹。それこそが我が群れの意義であり、我ら自身であるのだから。

「……思った以上に効果的だったかね、こりやあ」

「あんたまたやらかして……!」
「んなことよりクロバットに俺のバックパック持ってこさせろ。こりやデカくなるぞ」

本当なら、屈辱だがそれでも奴らを許せないと自分の意志を言葉に乗せるつもりだった。しかし、思った以上にドサイドンは聡いポケモンであるというのをハマゴはその身に刻まれる。知性とプライドと感情と、それらを兼ね備えて、そして頑強無敵の存在として進化したのがドサイドンだったのだ。

もうトラックは100メートル以内に近づいていたが、四十近くのサイホーンの群れは、あつという間にトラックを飲み込んでいった。運転手は破壊されるトラックの中に閉じ込められ、逃げようとした者は跳ね飛ばされていく。そして歯向かおうとポケモンを出した者は、リーダーとして謙遜なき実力を誇るドサイドンにあつという間に蹴散らされていった。

一致団結したケモノに人間は為す術はない。食い物だと思っていたそれに、胃袋から食い破られた哀れなる密猟団は次々にその意識を落とし、無様な姿へと変貌していく。

死人だけは出したらヤバイ。そう思ったハマゴたちが無理やりに

救出したのもあるが、結局のところ、密猟者たちに骨折以下の怪我で済んだ者は誰一人としていなかったという。

その数日後、村には大量のジュンサーと、警察組織。そして人間用の医療組織が集まるてんやわんやの大騒ぎとなっていた。

何かと忙しく動く村人たちの傍らにはずっとドサイドンたちもおり、最初こそ恐怖していた村人だったが、その原因が彼らの背中で縛られている密猟者たちにあつたとハマゴらに教えられることで、恐れていた事を謝罪。そして和解する形を取ることができていた。

色々と考えさせられるものがあつたのか、マーズは借りた部屋でまだ寝ている。そして、ハマゴは……

「それじゃあ、あなたは狙われているってことなのね」

「懸賞金1億だかなんだか知らんが迷惑な話だ」

「……本当なら保護するのが当たり前なんだけど」

事情聴取の最中、ハマゴも密猟者の一人と間違われて手錠を掛けられそうになる一悶着はあつたが、ジュンサーは純粹に心配そうな表情で彼を見た。

「こればかりはシロナさんが関わっている以上口出しできないわ。でも、忘れないで。今回みたいに必ず私達を頼ること。あなただってまだ18歳の子供なんだから」

「当然だ。それよか、ギンガ団とマグマ団の動向についてそつちに情報はねえのか？」

「残念だけど、私達のところでは人の失踪が相次いでいる以外わからないわ」

「進展なく、被害ばかりか……辛いもんだ」

加えて、破壊活動とポケモンの窃盗行為もその「失踪した人間」によつて引き起こされていると聞いて、彼は歯を食いしばる。ギチギチと軋む音にこもる感情は、ただただ純粹な苛立ちだ。

その後、事情聴取から開放されたハマゴは厄介事をこれ以上持つてくる訳にはいかないといい立つ。尻を蹴り上げ、泊っていた部屋で悩

むマーズを正気に戻して合流。そしてようやくこの村を出発する準備を整えていた。

「しかし悪いな。こんなに木の実だの薬草だのともらっちゃってよ」

「いえ、今回の事を考えれば少ない報酬ですよ」

バックパックをパンパンに膨らませ、この辺りに自生する木の実などを貰ったハマゴが嬉しそうな声色を隠せずに言って、村長はハマゴの若々しい表情に笑ってみせる。

「そんであれだ。オマエらにも無茶言っちゃったな」

トラックを吹き飛ばして、密猟者を実質的に全滅させた功労者の代表ドサイドン。

彼は気にするなと言わんばかりに首をゆったりと振る。

「おまえたちの仲間が見つければ、私達が必ず伝えに行く。済まなかったな、ドサイドン」

「……………」

背中を向けたドサイドンは、片手を上げて群れが待つ平原の方へと足をすすめる。きつと、彼らもこれからは村人と有効な関係を築くことが出来るだろう。既に売られてしまったサイホーンたちの事は気がかりだが、それはもうハマゴたちの手から離れた問題だ。

ドサイドンの姿が見えなくなった頃、世話になったハマゴらも歩き出した。

次に目指すはハクタイ。彼らの旅は、まだまだ続いているのだから

……

森の洋館 前

がさ、がさ、がさ。

森の茂みが揺れて一つの影が飛び出した。

それは白衣をはためかせて、茂みの向こうにある段差に多少驚きつつも難なく着地し手招きをする。次いで、手招きされた者もまた飛び出した。健康的な二の腕をキャミソールから覗かせて、森で小さな虫に刺されたのか多少痒そうに肌を払っている。

燃えるように赤い髪の女性と、深い海のような青い髪の男性。対象的な両者は目の前に広がる光景にようやくか、と疲れたような表情を見せる。森のなかの行軍はそれなり以上の苦勞を要したのだろうか。ズボンの裾は泥で薄汚れ、髪や服の一部には若々しい緑色をした葉っぱが目立つ。

多少荒げた息を整えながら、女性はバツと太陽に向かって両手を掲げて、溜まっていたものを吐き出すように叫んだ。

「長かった〜！」
「ようやくハクタイ到着か。シロナのやつがお冠じゃなけりや良いがな」

知つての通り、我らがハマゴとマーズである。当然、ジラーチも羽衣を掴まれ麻袋のように背中に担がれている。何時ものといえbaumつものであるが、その状態で爆睡するジラーチをいつものだと言わんばかりに二人は歩みを再開する。

道無き道から顔を出した二人は近くの街道へ足を向けた。ここまて来ればあとはゆつたりと整備された道を行くだけだ。

そうして、さほど疲れていないように見えるハマゴへと、マーズは口を尖らせハマゴに文句を垂れ始めていた。いくら元調査団の専属ドクターだったとはいえ、自分がこれだけ疲弊しているのに息の一つ荒げた姿を見せないハマゴへの不平不満もそれなり以上に溜め込んでいるのだろう。

「なんだってんだ？ 今日はやケに攻撃的じゃねえか」

「元はと言えばあんたが道はずれるから時間掛かったんじゃない。も

う大体読めて来たわ、あんたの行動原理」

「そりゃ結構。だからといって、読めたところで付いて来るしかオマエに選択肢は無いんだがな。おお、怖い怖い。仮にも女ならそんな顔してんじゃねえよ」

「そう、それよ、あんたのそれが無ければまだ楽しい旅路なんだけどねえ、あたしの興味を引くようなことであればもっと楽しかったはずなのに！ 何だってあんたみたいなのが、よりによって……」

足の痛みと疲れから適当な語彙が浮かばないのだろう。

尻すぼみになって行く言葉尻を拾い上げたハマゴは、ニタリと笑って言い放つ。

「共通の話題ってんなら、ドクター目指すか？」

「将来的にあんたと専門知識言い合う未来は願ひ下げよ！」

ああ言えばこう言う、こう返せばこうからかってくる。どこに行っても変わらない様子を見せる余裕があるだけマシというものだろう。時折暴走するハマゴだが、暴走していない時もマーズの精神をガリガリと削っていく。もともと相手を傷つける事に長けているのだろうか？ 医者だというのに容赦のない性格を持った男に、マーズは内心で毒づくことは止められなかった。

騒がしくも街道を歩くこと十数分。足場の悪い森の道が無事に抜けた二人は、いつもの様に軽口を飛ばし合いながらに眼前にあるハクタイシティへのゲートにたどり着く。ハクタイの森側から訪れる此処は、たまに気の立って凶暴になった野生ポケモンが街を襲わないようそれなりの實力を持ったトレーナーの警備員が待機していた。

二人がゲートの職員の前でガサガサと懐を探して取り出すのはカード。

「そういや、ミミロル見かけなかったな」

「メガシンカだっけ。そういや頼まれてたわね」

「まあシロナと合流してからでも遅くはねえだろ」

マーズはトレーナーカードを、ハマゴはポケモンドクターの免許証を提示しながらに言う。警備員へ怪しい身分でないことを証明した二人は、その服についていた葉っぱを払ってハクタイシティへと足を

踏み入れた。当然、その背中に担いで眠りこけるジラーチを見て警備員は驚いていたが。

さて。ハクタイシティの謳い文句は「むかしといまをつなぐまち」。比較的近代的な意匠の多いシンオウ街の中でも、高層ビルや古民家が共存する珍しい風景が展開されている街である。また、ここには草タイプ使いのジムリーダー・ナタネもおり、日々旅をするトレーナーたちが訪れており、トレーナー以外にも神を象った神秘的な「ポケモン像」を拜むために訪れる人も少なくはない。

ようするに、他の街よりもいささか活気に満ち溢れ、そしていい雰囲気のある街であるということだ。必然的にカップルや、複数人以上で行動している人が他の街よりも多く見受けられる。

そんな活気と賑やかさ、そして騒がしいとまでは至らないちょうどいい塩梅の街が、シロナの指定した待ち合わせの場所であった。

それから、彼らはいつもの様にポケモンセンターで宿泊の手続きを進めると、重たい荷物を置いて身軽になった肩を回す。此処に到着する前に、ハクタイの森ではシロナの言う「廃館」を見つけていたのだが、そのついでにハマゴが様々な薬草や木の実を採取していたため、バックパックはパンパンに膨れ上がっていた。マーズもハマゴの行動に文句を言いつつも、ハクタイの森に落ちていた進化の石やらを幾つか拾っていたのだから微笑ましいものである。

ドズンっ、とおよそバックパックが立てるにも似つかわしくない重低音を床に響き渡らせたところで、ハマゴは白衣の内側と小道具入れに簡易的な医療キットを装備していく。これから向かう先は再び森だ。いつもより入念な準備はしておいて損はないだろう。

「そっち荷物まとめ終わったか？」

「ん、ちよつと待って。つけてくネックレスで悩んでるし」

「置いてくぞゴルア」

テキパキとパターン化された準備を終えるハマゴと違い、マーズは悩みもオシヤレも多き女性である。とはいえ彼の周りに女性が居なかったといえはそうでもない。仕方ないことだと割りきって、ハマゴ

は白衣を捲り上げて丁寧に座椅子に背を預けて座る。あくびを一つ噛み殺して、彼は頭のなかで考えを巡らせ始めた。

そう。どうせ何日掛かろうが、警戒レベルが引き上がっているおかげでギンガ団の犯罪被害も抑えられている。マグマ団の方は中々姿を見せていないため不安は残るが、せいぜい1時間程度の遅れは今更だろう、と。ハマゴはキュウコンの入ったボールを掲げて暇な時間を過ぎし始めた。

正義感に強いのか、それとも興味が無いのか。確実な線引きは在るのだろうか、それを把握しきれない不可解な価値観を持った男がハマゴだった。そうして多少真面目な事を考えた後に、見かけつかれていないような彼にも精神の安らぎを取り戻す時間が必要だったのだろうか。恐ろしい目つきが目尻は多少緩み、気だるそうなただの青年然とした空気が変わっていく。

そんな時だった。化粧台を前にしているマーズから言葉が飛んできた。

「あんたは炎タイプと水タイプどっちが好き？」

「悪タイプ」

「まじめに答えなさいよ」

「当然炎だ。なあキュウコン」

「しかも注目先そっち!?!」

くだらない会話と、ハツハツハと軽い調子の笑い声。

ポケッチを適当に弄りながら答えた彼は、マーズがもうっ、と文句ありげな声を最後に話を降らなくなった事を確認するとポケッチの通話機能にPiと指を添えた。投影されたスクリーンに並ぶ番号の一つにコールをかけると、しばらくは1分ほどの長いコール音だけが鳴り響く。静かな部屋に、コール音はやけに響いて聞こえるものだ。一瞬ハマゴの方を見たマーズは、ああ、と一人納得してすぐさま顔を戻した。

ハマゴのポケッチ。通話先にシロナ、と名が書かれたその画面にはデフォルメされた2つの人が描かれている。コールが止むと、矢印で示された通話先の受話器マークがパツと変わり、代わりに画面にはシ

ロナの顔が表示された。多少凝ったデザインを気にもとめず、ヒラヒラと彼は片手を振って画面向こうのシロナへ話しかけた。

「うーっす。俺だよ俺」

《貴方そんなキャラだったかしら…？　ともかく、着いたのね？》
「今はポケモンセンターでマーズの支度待ちだ。俺らはドコに向かえばいい？」

一転して真面目な表情に切り替わったハマゴ。

シロナも気を引き締めた表情で口を開く。

《例の廃館…：…と言いたいところだけど、こつちからポケモンセンターの入り口に向かうわね。今はナタネさんとお話してたから。…：…あ、彼女も貴方と話したいことがあるそうだから、今回の件が終わったらジムの方に来てくれないかしら？》

さて、ジムリーダーが直々に話したいこととはなんだろうか。これまでのドクターの感から、重病とまでは行かなくとも多少の問題を抱えてそうだなと予感して、彼はバックパックの中身を見るようにして視線を投げる。

それも数秒にも満たない一瞬のこと。ああ、と言葉をつなげて彼は言う。

「了解だ。マーズ次第じゃ随分掛かるかもしれないねえが」

《大丈夫よ。こつちも頂いたお茶が無くなるまで話すからゆつくりしてて。それじゃまた後で》

実に優雅なチャンピオンである。今この瞬間にもどこかで人が失踪し、ポケモンが盗まれているかもしれない状況下であるというのに。などと、自分の行動を棚に上げて内心シロナへ毒づいたハマゴは重い腰を上げた。

座っていた座椅子がギツと小さく軋んだ音を立てて揺れる。悩み多き女性マーズは、最終的にどつちでも良いやと凡そイメージ通りのアバウトさを発揮して炎を象ったネックレスを首に回し、ハマゴの方へ顔を向けた。

「来るって？」

「聞いてたんならわかるだろ。支度の方は終わってんのか」

「ブニヤットちゃんたちを回復させておきたいけど時間あるかしらね」

「あつちは優雅なティーパーティー中だ。30分程度は時間が空くと思うぜ」

「ふうん、そう。じゃあちよつと行ってくるわね」

マーズは立ち上がると、多少早足で階下の受付目指して部屋を出る。

「俺も行くか」

誰に聞かせるでもなく、ひとりごちたハマゴもその後が続く。森を抜ける少し前から爆睡していたため、ベッドに寝かせていたジラーチを容赦なくボールに戻した彼も立ち上がった。軽めのストレッツチで腕や足を伸ばした彼はドアノブに手を掛けて、閉めた扉に鍵をかける。

廊下の靴音すらしなくなれば、部屋の中は物音一つない静寂を取り戻した。

ポケモンセンターの1階はフリースペースだが、各街ごとに違ったサービスが展開されていることもある。人間とポケモン両方向けのカフェで、ハマゴは頼んだコーヒーを片手に優雅な一時を過ごしていた。

カフェと反対側に位置するソファやテーブルが置かれたスペースでは、ブニヤットにブラッシングを掛けているマーズの姿がある。こうして見ていればただのポケモン好きなお姉さんだがなあ、と最後の一口を飲み干した彼はカップをソーサーに戻した。

「やっぱ地域か。博士んトコで飲んだのと味が違うな」

簡易メニューに目を通すが、ナナカマドの研究所で飲んでいたものはそもそも品種を聞いていないことに気がつく。今度時間あつたら直接会って教えてもらおうか、と。早速この地方で得た交友を深めようかと思ったその時、それなりに賑わっていたポケモンセンターが統一されたざわめきに支配された。

ざわめきの中心点は入り口だった。センターの自動ドアが通した

人物は黒い服と、それによく映える長い金色の髪を靡かせていた。隠れた目元はミステリアスさを惹き立て、身体的な特徴よりもなお女性らしさを感じさせる。

彼女はキョロキョロと軽くセンターを見渡すと、目当ての人物を見つけたのか硬い表情を一変させて口を開く。ニツとほほ笑みを携えた彼女はまっすぐに――ハマゴの方へと足を向けた。

「こうして会うのは久しぶりね、ハマゴ君」

「さっすがチャンピオン様」

「え、どうかしたの？」

現れただけでこの存在感である。そしてセンターの中に居た人々は、ハマゴが白衣を着ていることもあってか仕事のそれだろうなと当たりをつけて視線は離さずとも近寄って来ることはなかった。

視線に慣れきっているのか、それとも感覚が麻痺しているのか。注目されていることに一切の無頓着さを見せるシロナに内心で感嘆の念を抱きながらも、彼はカップをその場に置いて立ち上がった。

「マーズ、行くぞ」

「そつちに居たのね。久しぶりね、マーズさん」

「相変わらず、ッさん」付けはむず痒いわね……」

「ここじゃ目立つだろ。移動しながら話そうぜ」

ブニヤットの頭を撫でてからボールに戻したマーズも、立ち上がったハマゴたちに付いて行く。センターを抜けた3人は赤、金、青と尚更人目を引くような外見のため、先程よりいくらか増した好奇の視線に晒されながらも街を行った。

ポケモンセンターがあるのは、かつてのギンガハクタイビル（現ギンガハクタイ支社）が見下ろす道路の向こう側。つまり、古民家が立ち並ぶ歴史的な風景よりも現代的な都会の町並みが展開されている。

「それじゃ、本題に入りましょうか」

視界の先からビルや小さな店が後ろへと抜けていく光景を見ながら、三人は歩道を歩いていた。最初こそ過去にマーズがギンガ団脱退直後の話やら、久しぶりにあったことなどで花を咲かせていた会話の空気もすぐに切り替わる。ここからはこの地方の命運を分けるかも

しれない事態へ関与するものだからだ。

「まず、私たちはこのままハクタイの森にある廃館を目指します。そこに過去、ギンガ団の科学者プルートが残した手がかりが在るみたいなの」

「手がかり…？ つつても、その科学者は今もギンガ団に協力してんだろ？」

「ええ、表向きはね。でも彼の本心はすっかり乾ききってしまったみたいよ」

「あの守銭奴がねえ。まあ狂ったジュピターのトコいればそうもなっちゃうか」

シロナの口から語られたのは、プルートという老科学者の真実だった。

つい最近まで、生きるため渋々とは言えジュピターに協力していたプルートは、しかしついに精神の限界を迎えたのだろう。金に向けられたその欲望すら押さえつける程の心の疲弊から、シロナが襲撃した基地に一つのメッセージを残していたのだ。

「それが、この先の廃館にあるらしいわ。詳しいことは分からないけど、ジュピター率いる残党のおおよその概要だったり、そういった情報であることは確かね。これでイタチごっこも終わりよ」

「アカギの作ったギンガ団も、ジュピターが頭目じゃあ内部分裂で崩壊か。ここまで来るといつそ哀れね」

自分の知りうるギンガ団の様相と、プルートの人物像を思い描いてマーズは息を吐きだした。かつて所属していた事もあって、その思いの中には本人にしか感じられない哀愁があるのだろうか。どこか遠くへと視線を移す彼女の隣で、ハマゴは疑問の声を上げた。

「しかし、なんだってそんなトコにある？ こっちに来る途中で見つけたが、電子機器どころかゴーストタイプにしか縁のなさそうなボロ館だ」

「だからこそなのか、それともプルートの縁がその館にあるのか。詳しいことは私にも分からないわ。ただ、彼はこの鍵を残した」

およそ科学者の男が持つに似つかわしくない、デフォルメされた（

w・c) という顔が付き、ピンクのストラップがついたそれ。まるで玩具のようにも思える大きさの鍵は、単純な作りをしているため重要なものには見えない。

秘密の鍵、と仮に名付けたコレをシロナは握り締めると、懐に戻す。「これは見た目通りの物理的な鍵と、電子ロックに対応するプログラムが入った鍵よ。その両方を同時に差し込まないと決して開かない扉が、あの廃館に隠されている」

「そんなこと公言しちまっていいのか？　コトブキ襲われた時みてえにドコに耳があるやら」

「良いのよ。今は協力者のダークトリニティっていう凄腕の三人組が私達の周囲で見張ってくれているわ。彼らから何のアクションもないうってことは、つまり安全ってことよ」

「ダークトリニティ…？　聞いたことあるような」

ううん、と考えこんだマーズ。確かに記憶の隅には引っかかっているのだが、どうしてもその名前をドコで聞いたのかが思い出せない。まあ、重要なことではないだろうと判断した彼女はシロナの話に意識を戻した。

「なににせよ、私達が合流するだけで何かを感じられるのは確かよ。彼らが疲れないうちに早く目的地に行きましようか」

話している間に、ゲートはすぐ近くに迫っていた。

その向こう側に見える森林、そして木々の間から少しだけ見える廃館の天辺。そこに一体何が待ち受けているのか。プルートが残したものは一体。ハマゴとしては、プルートという人物像を知らない。老研究者で、犯罪者。実際にあつたことがない以上、彼の頭に浮かぶのはたったそれだけの情報と、それに付随する犯罪歴、そしてマーズたちの言葉から受ける守銭奴という印象だけだ。

だが、それ故に。その鍵が使われる部屋で手にした情報を別の角度から読み取ることも在るだろう。シロナはそう思いながらも、その仏頂面の下に隠された感情を隠すハマゴを見る。ああ、表情から感情が読み取れないのは、かつてのあの「英雄」もそうだった。

この事態が発展する前に終わらせることが出来ればどれだけ良い

か。あの英雄が、英雄と言われてしまうような事件にならないために、事に当たらなければならぬ。

「……チャンピオン、顔にシワが寄ってるぜ」
「そう？」

横から突き刺さる彼の言葉に、ふと眉間を触る。ああ、確かに思いつめていたのだろう。視界は寄り、眉間には険しい跡が残っていた。余裕が無いなんて、頂点からトレーナーを待ち受けるチャンピオン失格ね。

「お茶が入りましたよ」

「ありがとうございますちゃん」

立ち上る蒸気と広がる香り。砂糖もミルクも加えないストレートティーの入ったカップは、琥珀色の液体を揺らして持ち上がって傾けられた。小さな、されど上品な唇から口の中に注がれていく僅かな紅茶。中身が殆ど減っていないはずなのに、カップがソーサーへ戻されて、子供らしい高い声が部屋の中によく響く。

「ふう、美味しかったわ」

「もつたいないお言葉で。ところで、おかわりは如何かね」

「そうしたいところだけど、椅子が汚れちゃったわ。これ以上は風化が進んじやう」

「数少ない椅子だからねえ。なら、ティータイムはここまでとしよう」
少女が座っていた椅子は、先ほど飲んだ紅茶がこぼれ落ちたかのようにならぬように濡っていた。もともと上等なものであったのであろう、しかし今はその絵柄からワタがはみ出ている椅子は水気を帯びている。しかし、おかし。先ほど少女は確かに紅茶を口に含んだ。そこから零れ落ちるような事は一切なかったはずなのに。

しかしそんなことは露とも気に留めず、二人は当たり前のように片付けを始めた。

ふと見回してみると、電気も通っていない部屋だ。

薄汚れた壁紙はところどころ剥がれかけている。電球は割れ、埃を

かぶっていた。豪華なシャンデリアの幾つかはきらびやかな金をくすませている。そして、食卓を囲んでいた二人の周囲には——似たような劣化した家具しか無い。

「おや」

側頭部以外が禿げ上がった老人が声を上げると、髪の毛長く赤いリボンが目立つ少女もピクリと耳を動かした。彼らの視線はこの館の入り口の方へと向けられている。しかし、しかしだ。こんなところでこの組み合わせの人間が居るなどと、本当に妙なものだ。確かにこの時間で前門へ辿り着いたのはハマゴたちだけだが、ここは「廃館」。

森の洋館と呼ばれる廃墟のはずなのだ。

「お客様か。久しぶりだねえ」

「今度は招かれざる客か、それとも彼の言っていた本当のお客様か。楽しみねおじいちゃん」

「ああ、だが万が一もありうるからな。彼の言っていたことが本当なら相当の強者のはず。ここは、〝いつもどおり〟といこうじゃないか」

「そうねおじいちゃん。〝いつもどおり〟に歓迎しましょう」

監視カメラも無い。だからといって、彼らがポケモンから情報を受け取ったわけでもない。ただ、それが当たり前のように彼らは、生きた人間の気配を感じ取る。それは彼らが生きた人間が持っているものを既に失っているから。かつての残骸の一つですら持ち合わせていないために。

立ち上がった少女は口をOの字に開けて声を出そうとして、すぐさまその華奢な手で自らの口をふさいだ。

「——おっと、彼が言うにはどこに耳が在るかわかりませんものね。お客様が来ている以上口に出せませんわ」

「そのとおりだとも、気をつけなさい。さあ、部屋に戻って待っていないさい。ワシはお茶の後片付けをしておくからね」

「そうね。私はあの子の隣の部屋に居るわ。もし、彼らがそうだった時は呼んで頂戴な」

「ああ、ああ。勿論だとも。それまでゆっくりしてなさい」

すつ、と少女が消える。

残された老人は台所へとカップの中の紅茶を流すと、ボロボロの布巾で水気を拭き取りカップを戻す。そのカップやソーサーも、よくよく見れば模様は削れ、取手が欠けている。陶器がここまで傷んでいるということとは、よほど手入れも何もされていなかったのだろうか。

それらを用いて、お茶を飲んでいたこの二人は一体何者なのだろうか？

老人がティーポットを手にとった瞬間、「お客様」はこの食堂へと足を踏み入れた。

森の洋館 後

「本当にこんなトコに証拠があるの？ うえっ、すっごい埃……」
「ゴタゴタ言ってるじゃねえよ。俺も嫌だったのに、ほら、マスクでもつけてろ」

「ありがと」

伸びきった草木を切り裂いた先は片方の蝶番が外れかけた大門が待っていた。下手に物音を立てないよう、無事な方だけを開いてみれば巻き上げられた土や埃が舞い上がり、不快な空気が肺に侵入しようとしている。

ガーゼマスクを受け取ったマーズを見やりながら、シロナも口元を布地で隠す。薄暗い通路を照らしたライトの光には、歩く度にふわっと舞う大量の塵が見える。どこもかしこもこんな調子なのだろうか。相当長い間放って置かれた洋館の中、そう考えたマーズはげんなりとした表情で息を吐いてみせた。

「まとまって動きましよう。下手にはぐれるとゴースたちの悪戯で分断されることもあるわ」

「異議なし」

「わかったわ」

シロナの言葉に頷く二人は、まずは大きな部屋から探索していきましようと言う方針に従って彼女の後ろを歩く。シロナは片手にライトを、片手に要石を握りしめて先頭を行った。この狭い室内だ。ポケモンが暴れるには普段使っているガブリアスのような大型のポケモンでは館を崩落させてしまう危険がある。だからモンスターボールよりも即効性のあるミカルゲを要石の状態で持ち歩いているのだから。

やがて、くすんでしまった豪華絢爛だったであろうエントランスホールを抜けたすぐ先に広大な食堂が見えた。薄暗く、ライトに照らされた机のシートは一見純白を保っているようにも見えたが、やはりその上には灰色の埃が降り積もっている。暗闇の中で灰色が明るい色として見えただけだろう。

一体どれほど廃館として放って置かれたのだろうか。ゴーストタイプのポケモンがまとめて共存している場所ということと解体される事がなかった、というのが現実の事情である。少なくとも、待ち合わせ場所ということでハマゴが調べた限りはそうした理由であったらしい。

「……………」

だからこそ、こうして物音ではない。話し声がするのはおかしいはずなのだ。

「え？ おかしいわね。今ここは閉鎖してもらっているはずよ」
「んだと？」

いかにゴーストタイプが豊富とはいえ、ここは森に立地する洋館。湿気で傷みやすくなくなった手入れのされない建造物。いつ床が抜け、壁が崩れてもおかしくはない荒れ具合だ。

だからこそ、よほど物好きなオカルトマニアかゴーストタイプを目当てに探索に来るほんの僅かな人間以外は訪れることはない。仮に来ていたとしても、今はダークトリニティが閉鎖しているとのこと。
「行ってみましょう」

シロナの行動は無謀にも思えたが、しかしミカルゲの要石をしつかり構えて一步を踏み出した。信頼するポケモン、常に張り詰めている意識。そして確かな実力があってこそその行動だろう。

ゆったりとした歩みは、床板をギチギチとかき鳴らしながら彼らの行軍を知らせる。やがて声のした方へライトを向けたシロナは驚いたように目を見開いた。

「あなたは……………」

照らされたのは一人の老人だった。深い緑の半纏と、特に目立たない顔立ち。あまりに日常的な立ち姿だからこそ、このような寂れた場所には不釣り合いさが浮き彫りになる。

「どうしてこのようなところに？ 此処は今、立ち入り禁止となっています。少し事情を伺いたいのですが」

不審な人物ではないと知って内心胸を撫で下ろし、事務的対応で尋

ねたシロナ。その後ろではハマゴが怪訝そうにシワを額に寄せて訝しんでいるが、彼女がそれに気づいた様子はない。だからこそ、彼女の肩を掴んで自らが気づいた異常について知らせようとするのだが、ハマゴが行動を起こすよりも老人のほうが早かった。

老人は何も言わず、ただ一度目を伏せたと思えばそのままゆつたりとテーブル沿いに歩き出したのだ。

「待ちなさいっ！ マーズさんは反対から回りこんで！」

「な、おい待てシロナっ！」

手は空を切り、ライトの光がない暗闇の中に消えていった老人を追いかけたシロナ。しかし、ハマゴが思ったよりも早くかけ出したシロナは狼狽えた様子で立ち止まった。

「おい、話聞けって」

彼女の方に手を掛けるハマゴ。

しかし呆然と、彼女は絞りだすような声で言った。

「……消えた」

「はあ？」

「さっきの老人がどこにも居ないのよ。そこは壁だから、どうやっても反対側に走るかこつち側に曲がってこないとおかしいはずなのに」

シロナがわけがわからないと頭を捻ったところで、テーブルの反対側から回りこんだマーズの赤い髪が薄ら闇から浮かび上がってきた。闇の中でも色濃く目立つ髪はマーズのそれに違いなかった。

「こつちにも居なかったわよ。もしかして逃がしたの？」

マーズの言葉に、シロナは頷きつつも奇妙な表情になる。

先ほどの老人。一応、後ろの方にガラス窓はあるが、木組みが嵌めこまれているためコレを上げて窓を開けるといふ2つのアクションが必要になるはず。だが、開け放たれた様子もなければ積もった埃が一切触れられていないことを表している。

「さっきのは一体……？ ゴーストポケモンたちの悪戯の一つかしら」

「確かにそこら辺にゴーストやゴースト、果てにはゲンガーあたりが彷徨っているがそのミカルゲにビビッて近づいてねえぜ」

「それじゃあ」

「まあまずは聞いてくれや。さっきの爺さんだが、呼吸どころか歩くときに揺れずにスライドしてたのを分かったか？　ありや此処に住み着いてる幽霊だ」

「はあ？　バツカじゃないのあんた。幽霊なんて」

「居るところには居るんだよ。ゴーストタイプの干渉が強いところは特にな」

ハマゴが思い浮かべたのは送り火山だ。ゴーストタイプの宝庫であり、かつての伝説の存在を制御したという宝珠。そして様々なポケモン・人間の墓所として祀られ、エスパーの双子ジムリーダーが訪れる、といったパワースポット要素が溢れている場所。

時折、成仏しきれなかった魂がヨノワールによつて冥界へ案内されていることもあり、ホウエンの人間にとつては幽霊や死はかなり近い関係にある。故にこのような突拍子もない結論を、確固たる自信を以って彼は告げたのだ。

「だがあの手に持ってたティーポット、そしてその席」

ハマゴは指差す代わりに手持ちのライトで照らしだした。ティーカップが置かれていた場所と、一つだけ並びを崩している椅子に埃は見当たらない。

「埃がこの辺りだけ積もってねえだろ。あの幽霊、此処に住んで結構長いだろうな」

「サイホーンの時と言い、探偵やったほうが儲かるんじゃない？」

ジト目で見つめてくるマーズに深い溜息を返したハマゴ。

「つたく、今は茶化す時間じゃねえだろ。んでシロナ、あの幽霊が地縛霊か悪霊の類なら、ゴーストポケモンを扇動して襲ってくる可能性もある。必要ならキュウコンに『にほんばれ』で一気に祓わせるが？」

「……いえ、本格的に襲ってくるなら入った時点で出られないようにするはずよ。今度彼らに会ったらなるべく邪魔はしない事を伝えて早々に探索を済ませましょう」

「オーケーだ。しかし幽霊って言葉にすぐ順応するとは思わなかったぜ」

「私も考古学者やっていると神様にだって会ってるから、幽霊も居てもおかしくないでしょうね」

神様、というのは逆にホウエンには余り縁のない言葉である。自然災害や過去の遺物の化身という形で祀られ、畏れられる古代のポケモンがホウエンには多い。だが明確に信仰されるようなポケモンはさほど居ない。

そういう意味では物珍しいシロナの話に耳を傾けても良いのだが、状況が状況である。現状にもっとも相応しい思考に切り替えたハマゴは振り返り、この場を一丸となつて突き進もうと言う言葉を出そうとした瞬間――

「おわっ!？」

彼の立っていた床が抜け、片足をツツコんでしまう。

「もー、なにやってんのよ」

「しまらねえなあ畜生! つたく」

床板が傷んでいたのだろう。文句を言いつつ足を引き抜くハマゴ。靴には腐り落ちた木材の欠片が泥や何かと一緒へばりついている。引きぬいた時にはねた泥が顔に当たり、更に彼の機嫌は急降下だ。

医者としては自分自身が不衛生な場所に居るだけでも不快であるというのに、自分が不衛生そのものに成り果てるというのは到底ハマゴには受け入れがたい事実だった。

顔を顰め、不機嫌な感情を隠そうともせずこんな仕打ちにした先ほどの幽霊にいらだちを覚える。怒りの矛先は場違いかも知れないが、こうして人間に害意を与えるのが目的な存在ならばそれ以上の敵意で返すのが彼のやり方だ。

「男前になったんじゃないの?」

「うっせえなクソツタレ」

「はいはい」

相当不機嫌な様子で返す彼の言葉に、過去の出来事から罵詈雑言を浴びるのに慣れているマーズは軽く笑って流してみせた。何も弱い女で居続ける必要はなかった。今となっては迷いはすれども立派なおトナ。簡単にあしらうような反応もすることは出来る。

それからだ。

シロナも彼らのやり取りを微笑ましい視線で見ているのだが、突如として彼女が手に持っているミカルゲ——要石がブルブルと震え始めた。これは危険を知らせるメッセージにほかならない。

「注意して！ 何かあるわよ！」

「ッ！」

シロナの言葉にシンクロするようにバツと周囲を警戒し始める二人。スイッチの切り替えの速さはそんじよそこらの一般人とはわけが違う。片や険しい自然や悪意を切り抜けた不良医師、片や悪意に晒され続けた悪の幹部。その手に持ったモンスターボールと、いざというときを想定したジラーチのボールへの防御は忘れない。

バランスよく陣を取った3人。警戒を強めた彼らに訪れたのは——周囲に置いてあった家具のダイレクトアタックだ。

「これ、サイコキネシス!？」

「キュウコン、じんつうりき！ つべこべ言う前に防御しとけ！」

「ドータクン、サイコキネシスで返しなさい！」

青く、薄い光を纏った家具がくるくると回転しながら持ち上がったかと思うと、彼らめがけて降り注ぐ。この大量に陳列している椅子や、その巨大なテーブルまで。持ち上がらないものもあるが、この広大な食堂にある大半の家具が悪意ある弾丸としてハマゴたちを殺す勢いで飛来する。

だが、彼らの鍛え上げられたポケモンたちはその家具を壊すことなく、各々の技で食い止め、または静止させることで勢いを止める。破壊しない理由は、ここがゴーストタイプのポケモン達が暮らしているゾーンの一つであるから。たとえばそのポケモンたちが牙を向いたとしても、そのポケモンたちを根絶させる理由にはならない。犯罪者や無責任な者達とは違うのだ。

とはいえ、そうした手加減を余儀なくされる環境であるためだろう。キュウコンとドータクンも次々と捌いていくが、次第に劣勢になり始めた。延々とこの場で対応する理由もないため、その間にハマゴたちは逃走ルートを作ってエントランスホールへと撤退した。

「もどれ」

声を揃えてポケモンをボールにしまう二人。

その時だった。

——イーヒヒヒヒヒヒヒッ！

食堂のあつた方から、愉快的笑い声が聞こえてきた。

幼い子供のようにも感じるが、人の声では到底発音できそうにもない音。ともなれば、ここを根城にするゴーストポケモンたちの仕業だろうか。ゴーストタイプはやけに陽気なポケモンもいるが、それにしたって多少の違和感がある。

そう、例えば——

「そういうや、きっきのだけど」

「どうしたのマーズさん」

「いや、サイコネシスにしちやパワーがブレてたと思ってさ。むしろ……電気つぽかったなって」

激しい攻防の中、彼女の目に映ったのは青く物体を包んでいたパワーの正体。薄い膜がぴたりと合わさったように被さり、そのサイコパワーでエスパーポケモンは物を浮遊させる。だが、マーズ曰くあのエネルギーはどこことなく不安定で、迸る電流のように揺らめいていたという。

「電気？ となると、電磁波であの椅子を持ち上げていたっていうの？」

「あれ、全部木製つぽかったが……ああ、そういうことか！」

納得した、と言わんばかりにハマゴは手を打った。

「デザインに使われてる鉄とかを浮かせてたわけか」

貼り付けられた金属板であったり、そうした金属部分は打ち付けられているため、多少バランスに無理はある。だからこそくるくると回転しながら空中に持ち上げられていたのだろう。だからこそ、その板金が取れてしまった椅子は動かなかったのだろう。

彼の言葉に納得がいった一行であったが、それは根本的な解決にはなっていない。ともかくここで重要なのは、攻撃してきたのは少なくとも電気タイプのポケモンであることだ。

「……他に目的のあるやつが侵入してきてる？」

「いえ、それはないわ。家の外は私が雇ったやり手の傭兵さんが見張っているもの」

マーズの発言はすぐさまシロナによって否定された。

この家の周囲は現在厳戒態勢が敷かれている。この地方に訪れている巨悪を祓うため、重要な一件を邪魔される訳にはいかないからだ。しかし、そうなるこのゴーストタイプの宝庫である廃館で、電気タイプという不釣り合いなポケモンが意図的に攻撃してきたという謎が残るわけだ。

「そしてもう一つ、あの老人の幽霊はその正体不明の電気ポケモンに協力してらってことね」

「一体何のために？ この家から追い出すのが目的？」

「プルートとかいう爺が指定した場所なんだろう、だったらセキユリテイとして置いたって可能性もある。まあ、幽霊を使うなんざ到底ありえない発想だが……まあ想像なんざいくらでも出来る。今はその鍵を使う場所を見つけ出しちまおう」

こんな場所からさつきとおさらばしたいからな、と本音を飲み込んで、代わりに不潔極まりない家の中に険しい表情を向けるハマゴ。傍から見てもイライラした感情が高まっていることが分かる彼をこれ以上此処に居させるのも悪いだろう。協力してもらっている身として、シロナは早急に考えを切り上げ探索のための足を動かすことにした。

「まずは上に上がりましょうか」

すぐさまエントランスホールから移動し、あの攻撃してくる食堂ではない2階の探索を提案する。二人も否定の意見なくうなずいてシロナの後に続き、ギンギシと嫌な音を立てる階段をゆっくりと登っていく。もうもうと立ち上り、舞い上がった埃にゲンナリしつつも進んでいけば、一見変哲もない西洋風の廊下が広がっていた。

ここも同じ。かつての豪華絢爛で清潔であったろう名残だけが残る廃墟の様相を呈している。ドアの幾つかは蝶番ごと外れて倒れ、まだ無事なものもドコからか入り込んだ隙間風に揺られてはキィキィ

と揺れていた。

「……ここかしら」

しかし、シロナはその中から正確に一つのドアを選んだ。

「ほお、なるほどな」

「ちよ、ちよつと」

感心するように頷く彼に待ったの音がかけられたが、それには選んだ張本人であるシロナが返した。

「この取手と地面よ。他に比べて埃が降り積もっていないわ。つまり、少なくとも最近開閉されている証拠ね」

体当たり調査も行う考古学者シロナは、遺跡に向かう時も単身で自身のポケモントレーナーとして、そして秘められた実力を存分に発揮した調査を行う。その際に僅かな変化や仕掛けを見抜く観察眼は鍛え上げられているというわけだ。他にもハマゴ顔負けのバトルによって培われた勘など、現在も長くチャンピオンとして君臨し続けるだけのスキルを保持している。まあ、シロナの話題も程々にしておくでしょう。

そうして開いた扉の先にあったのは、薄汚れたシーツの掛けられたベッドと、散らばった椅子。そして奇跡的に茫々と成長した観葉植物と、一台の砂嵐を移したテレビ。

「……テレビだあ？」

ハマゴがおもわず言ってしまったが、無理も無い。

アンティークな見た目とボロボロになってしまったこの廃館の様に似合わないテレビという電化製品。あつてもおかしくないといえよそれまでだが、食堂も古ぼけた台所器具しかなく、オーブンやレンジといった物も見当たらなかった。電灯も存在せず、あるのはロウソクなどを前提としたシャンデリア・燭台だ。その中で突然のテレビである。困惑するなど言つて無理があろう。

とかく、ここで重要なのは、不釣り合いさなどではない。テレビは確かに点灯していて、砂嵐であろうがコンセントも電力も関係なく映っているということだ。

「あの鍵使うトコ、ここじゃない？」

「ええ、きつとそれで間違いないわ。まずは鍵穴を探しましょうか」

テレビ周辺を探り始めたシロナに続き、ハマゴ、マーズも周辺の家具やらを引つ張っては壁を覗きこんだり、ドアをもう一度除いて鍵穴が隠されていないか等、周辺の搜索を開始する。ゴソゴソとした物音が静かな館の中から発せられること数分は経っただろうか。もともと広くもない部屋ということもあり、すぐさま音は止んだ。

「おかしいわね……ここだと思っただけど、ハズレかしら」

この部屋の物もあらかたひっくり返してみたが、シロナたちのお目当てである「鍵穴」らしきところは見つからなかった。ホコリまみれになったハマゴが汚れ損かよ、と吐き捨てて適当な椅子に座ったところ、ボスンと気の抜けた音がしてクツシヨンからワタがはみ出る。

いよいよもってボロ館の謎も降り出しかと思われたその時だった。先程まで砂嵐ばかりを映していたテレビが突如としてバチバチツとチャンネルを変え始めたではないか。

その異様な光景に黙って見入る三人。テレビのノイズは次第に音を出し始め、ゼロだった音量から棒が立てられていき、音量バーは9に固定される。それなりに大きな砂嵐のザーザーしたノイズが静かな部屋に巻き散らかされる中、次第に砂嵐の灰色の部分と、黒色の部分が分けられていく。

「こりゃあ……見つからねえわけだ」

黒いノイズ部分は中央に寄って行き、次第に前方後円墳と同じような——鍵穴の形を作り出した。灰色のノイズ部分に対して黒い場所が随分少ない砂嵐画面だったのはすこしばかりマーズも気になっていたが、なるほど、こうするためなら納得がいく。

——イヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ!!

「……さっきの悪戯の正体は、このテレビの向こうにいるポケモンなのね」

おそらく自分たちを観察していたのだろう。いわば、この奇っ怪な笑い声を上げるポケモンは悪の天才科学者プルトの用意した秘密の番人といったところだろうか。

「挿れるわ、皆いいわね？」

「応とも」

「いつでもいいわよ」

マスクを外して、彼らは構える。

「それじゃ……」

大きな玩具のような鍵が、テレビ画面にコツンと当てられる。すると、鍵の挿入されるはずの部分は何やら浅葱色に輝いて、テレビ画面にその光が広がっていく。それは先程見かけたサイコキネシスのパワーだと思われていた、電気の力。

——ケケケケケケケケ！

けたたましい笑い声とともに、テレビ画面は真っ白で鮮烈な光を放つ。

シロナたちを飲み込んでいき、目を開けることすら難しい閃光の中、彼女らは少しの浮遊感を感じる。そうかと思えば——足は傷んだカーペットの薄柔らかな地面から、硬質で甲高い音を掻き鳴らす鋼鉄製の地面を打ち鳴らした。

おどろおどろしい廃館とは大違いだった。こーん、こーん、と機械のソナーのような音が鳴り響き、チカチカと目を引き回る赤いランプが点滅する。急いで確認したシロナの持つ特別な端末によれば、ここは地面の下にある施設であることが示されている。

「ヒヒヒヒヒッ！」

直後、ひゅんつと目の前を飛び回るポケモンが、今度はエコーのかららないほど確かな声で笑ってみせる。浅葱色のプラズマを纏った、ひょうたんに角が生えたようなシンプルな形のポケモン。見るからにでんきタイプらしく、それでいてゴーストタイプのようにいたずら好きで神出鬼没。

その名をロトム。ある子供が単純に名付け、それでいて名は体を表すという言葉を全身で表現することが可能なポケモンであった。

「こいつが案内役だったってわけか。ジラーチに似て生意気そうなツラしてやがる」

「……ええ？ 似てる？ これ？」

素っ頓狂な声でナイナイと手を振るマーズと、んなこたねえよと呑

気な雰囲気崩さないハマゴ。いざ正体が判明してみれば、なんてことではない。こんなところまで来て警戒する必要も無くなっただろうと、気を抜いた二人は実にコミカルなやり取りを繰り広げ始めた。

「ん、んっ」

「悪かった悪かった」

そこに咳払いで空気を正したシロナ。軽く謝るハマゴを無視して、彼女はこの移動した自分たちの目の前にある、鋼鉄製の巨大な扉を見上げて、その手にもう一度「ひみつのカギ」を握りしめる。

鍵穴らしき場所にはめ込めば、こんどこそ鍵らしい役目を果たしたひみつのカギ。ぎぎぎぎ、と重そうな音を立てて開いた扉の奥には、何に使うのやら巨大な機械と、それら全てを総括するようなアーチ状に広がった広大なコンソールが待ち受けていた。

——…ひみつのカギを確認しました。録画を再生します——

簡素なアナウンスが彼らの耳に届いたかと思えば、ぼうつと浮かび上がる人のシルエツト。少々小柄な老人で、陰気臭そうな視線。紫色の髪色を持つ白衣の人物は…紛れも無く、この場に招いたプルートのものの似姿であった。

迅雷風烈！ ひみつの研究所

『ワシの研究所へようこそ。お主がかのチャンピオンであるという前提で話させてもらうぞ』

何もない空間に浮かび上がった立体映像の人物が喋り出すと、電灯が消えてその人物のみが目立つように調整されていた。腰は曲がり、数年前の多少ふくよかな体型とは真逆、およそ不健康に痩せこけた見た目の老人は口を開いた。

『マグマ団と手を組んでから、調達される人間は増え、洗脳される手駒は増え、そしてあのバカ娘の過激なやり方は鳴りを潜めさせられた。狂ったジュピターはいいように扱われ、今となつては実質、マグマ団の者共がこちらの手綱を握っている状態じゃ。まあ、元々自我を持っていた構成員がワシとジュピターしかおらん組織。口を出された時点で、こうなることは分かっておったがな』

映像の中でゲホツ、と咳き込むプルートの。どうやら顔色同様体調の方も良くはないらしい。狂ったながらも、約束を守っていたジュピターと違って狂氣的なまでにジラーチを追い求めるマグマ団はプルートをいいように扱うだけで何の施しも与えていないらしい。

今となつては加害者だったギンガ団も、被害者同然の状態である。尤も、そんな事実はシロナやハマゴの知るところではないのだが。

『そして奴ら、潤沢な資源とワシの研究を横取りした結果……近々大規模な作戦を起こすらしい。まだまだ中途に過ぎんが、ワシの命ももはや用済みとして消される可能性も高い……凶々しいとは承知の上じゃ。牢獄でもなんでもいい。助けてくれ』

喉から絞り出した震える声。プルートの表情にあるのは焦燥と後悔。そして何よりも、生への執着。老いさらばえた今だからこそ、今を生きる残り僅かな命を繋ぎ止めたい。そんな必死な彼の感情が、映像越しでもありありと伝わってくるかのようだった。

『作戦の場所と、ワシが今囚われておる場所はこのメモリーの中に記した』

映像の中で彼が指で持つメモリーは、一般的なスティックタイプ。

そして再生時間に反応して排出されるようになっていたのだろう。シロナがいた機械のスロットから、ステイツクメモリーが機械音と共に差し出された。

それを手に取り、映像の中の物と相違ないかを確認した後、すぐさま懐へ仕舞うシロナ。戻り次第、すぐさま解析に掛けるべきだと決意する。シロナとて、たとえ相手が悪人だとしても改心した相手を見殺すような真似はしたくない。それに、助けを求められたのだ。答えない訳にはいかない。

『それから、そこにいるロトムを連れて行ってやってくれ。こやつの研究成果は全てそのひみつの研究所に残してある……上手く使え、そしてあわよくば、こやつでマグマ団の鼻を明かしてやってもらいたい。のじゃ。優れたトレーナーであるなら、それに答えるポテンシャルは持っておるからな』

『おい、何をしているー!』

ハツとした表情で振り向くプルートの。彼は急いで目の前に手を突き出すと、映像はそこで途切れた。果たして、彼はたどり着く頃にはまだ生きているのだろうか。このような終わらせ方をした以上、彼の安否が気になるが……それを今ここでウダウダと考えていてももしかたがないだろう。

暗くなっていた部屋に電灯が戻り、研究所は明るく照らしだされる。そして悲しさを隠そうともしない表情のロトムは、途切れた映像があつた場所を心配そうに見続けていた。

「あなた、ロトムっていうのね」

あの奇妙な笑い声をあげていた張本人。そして椅子などを浮かび上がらせて攻撃……いや、イタズラしてきたポケモン。マーズが知るよりも、ずっと手厚く育てられてきたのだろうか、プルートのいう非道な科学者に対して親愛の情を持っているようなロトムの、安心させるようにシロナは言う。

「大丈夫よ、あの人は必ず助けだす。無事な姿で会わせてあげるから、力を貸してもらえるかしら?」

「……! ……!」

もちろんだ、と両手代わりのジグザグなプラズマ体を揺らすロトム。一文字を結んでいた口元は、再び活発な笑みを浮かびあがらせる。そしてシロナの周囲を飛び回って、自分はやれるんだぞというアピールまでし始めた。

「ねえマーズさん」

「はいはい、わかってるわよ」

呼びかけられたマーズはうんざりとしたように、しかし口元の笑みを隠さずにロトムに近づいてこう言った。

「チャンピオンの手持ちは空気がないから、あんたはあたしが引き受けるけどいい？ 安心なさい。これでもトレーナーとしての腕はかなりのもんだと自負してるわ」

そう言っただけのモンスターボールを右手に持つマーズ。ロトムは一度シロナを見たが、やはり雰囲気的にもマーズの方が気に入ったのだろう。喜び勇んで彼女に近づくと、ハイタッチを交わすようにプラズマの腕でモンスターボールの開閉スイッチをチョンツと押しただ。

吸い込まれるロトム。点滅するモンスターボール。次第にカタカタと彼女の手の中で震えていたボールは、ポケモンの捕獲完了を示すポウンという軽い音と一緒に揺れを収めた。

ボールを軽く投げ、キャッチしたマーズはボールの赤部分に軽いキスをする。

「ロトム、ゲットね」

ここまで無言だったハマゴは、マーズの行動に耐え切れずブツと吹き出した。咄嗟に手で口元を覆い隠すが、震える方は笑いをこらえきれしていない。普段とのギャップを知っているからこそ、このように「色気」を意識したようなマーズの行動がツボに入ったのだろう。

しかしハマゴのふざけた態度もそこまでだ。悪かったな、と軽く手を振ってマーズに誤った彼は目の前のコンソールを叩きだした。ルートが使っていたこの研究所の施設にロトムが有効活用できる何かがあるのは先ほどの通信で明らかになっている。だから、それが何かを見ておきたかったのもあった。

「つと、これだな」

ツターン！ と叩かれたキーボードのエンター。同時に、彼らのいた部屋の右の扉がプシュツと空気を排出しながら開かれた。ただコンソールを叩くだけでは開かない嚴重に施された電子ロックも、シロナが持っているひみつのカギによって反応するようになっていたのだろう。

奥のほうを覗き込んでみれば、オレンジ色のロトムの体とよく似た色合いの家電が数多く鎮座していた。これらが、ロトムを上手く使うための道具なのだろうか。傍目はどのメーカーにも属していない多変わった家電だが、さて。

「これがその記録かしらね」

扉から入ってすぐの右側に、少々埃が積もった日誌が置かれていた。パツと埃を払いのけながら手にしたマーズがペラペラとそれをまくると、かつてのプルートらしい傲慢な言葉使いで研究成果に対する彼のコメントが記されていることが分かる。

そして付箋の挟んであるページまで飛ばすと、その中に書かれている事と目の前の家電がなぜここにあるのかの疑問が解ける。

「なるほど、ね」

「こつちも日記があつたぞ。随分古いやつだがな」

ハマゴが持ち上げている方は子供向けの日記帳だ。名前の部分は薄れ、表紙もヨレヨレになっているが中に書いてあるひらがなだらけの内容はロトムと少年の出会いが綴られていたらしい。最後の方は段々と字が綺麗に整えられていき、悔しそうな殴り書きがあつたという。

マーズとしてはそちらの方も気になるが、今はまずロトムの特性を確認するところからだ。

「ねえロトム、今はどれに入りたい気分？」

「マーズさん、それって…」

彼女は5つある家電に向けてロトムの入ったボールを放り投げる。出てきたロトムは、懐かしい物を見るように目を輝かせてそれらを見回すと、洗濯機に向かって頭からツツコんでいった。

すると、なんとということだろうか。グニャグニャと洗濯機そのものが変形していき、洗濯機の上にはトゲのようなものと、ロトム顔があらわれた。彼のプラズマ腕は洗濯バサミのような形になり、片手で排水口をホースのように持ち上げる。そして腕の色は先程よりもずっと深い蒼色になっている。

コミカルな生きた洗濯機として、ロトムはその姿を生まれ変わらせたのだ。

「これが有効活用ってことの意味か……」

「家電に取り付いて姿をかえられるのね。ロトム……モーター、つまりはそういうことかしら」

「みてえだな、こっちのロトム発見者の日記にも書いてある」

シロナは既にロトムの由来について気づいたらしい。何かと関連付けて歴史や謎を紐解く考古学者の面目躍如といったところか。先ほど見つけた日記を読んでいたハマゴのそれに同意し、シロナの予測が正しいことを裏付けた。

とりあえずロトムのことに関してはこれで良いだろう。あとはすぐさま本拠地に戻り、シロナがステイクメモリーの中身を解析することで今回の調査は終わりである。

「にしても、ギンガ団が取り込まれたか…マグマ団も何を考えてやがる」

過去、ハマゴ自身が身にしみて知っている。マグマ団は自然愛護団体の過激派の集まりが更に暴走して出来た組織。今は、過激派という目的のためなら手段を選ばないような輩のみが集まることで、更に助長されて手のつけられないことになっている。

かつてはマツブサというリーダーがいた事でその方向性はまとめられていたが、今はマグマ団は壊滅状態。残党が寄り集まってマグマ団を名乗っているだけの団体だが、それ故に質が悪い。何をしでかすのかも、そのためにどんな被害が出るのかもわからない。

共通しているのは大地を増やすという目的。だが、大地を増やすという目的自体も伝説のポケモンの力を利用したりとロクなことをしていない。

「……そういや、バトラーから連絡こねえな」

ふと思いついてみれば、ジラーチの短冊についての調査結果が来ていないことに気づく。何かあればまた連絡するようなことを言っていたが、古代文字の解析だけならそう時間もかからないはず。電波が届かないのか、それとも。

「ハマゴ君？」

「ワリイ、ちよつと考えふけてた」

シロナの言葉で現実を引き戻される。ともかくやることが出来たとはいえ、それはこの調査が無事に終わってからだ。それに目の前で起きようとしているマグマ団の凶行も見過ごす訳にはいかない。それが実行されれば、まず間違いなく周辺のポケモンや人が犠牲になるだろう。既に人間を再現なくかき集め、洗脳している輩だ。

強く拳を握りしめながら、彼はシロナの方に向き直った。

「それはそうと、ほら見て。有効活用ったってどう移動させるのかと思えば、面白いことになったわよ。家電キーホルダー、なんてね」

そういったマーズの手には、銀の輪つかに通された残り4つの家電が小さくなって括りつけられていた。オーブン、芝刈り機、冷蔵庫、扇風機。デニムのベルトを通す輪に通してみれば、彼女自身のトレードマークである赤と相まって似合わないこともない。

ロトムの方が完全に片付いたことを見届けて、シロナが口を開いた。

「それじゃあ戻りましょう。地上にはこっちの扉を使えば、来た時と同じようにテレビの部屋に転送されるみたいだから」

そう言っ取り出したひみつのカギを手に、シロナは近づいた扉にカギを差し込んだ。

途端、閃光があたりを埋め尽くして――

「……戻ってこれたみたいね」

薄暗く、ボロボロになった小さな部屋。

ハマゴたちは無事に地上へと戻って来たようだ。窓の向こう側で鳴く、ホーホーの音がやけに響いてくる。硬質な地面から、また不安定で埃の降り積もった床板に。ワープパネルの応用だろうか。そん

なことを考えていた矢先であった。

「おかえりなさい。彼の言っていたのはあなた達だったのね」
「！」

扉の方から聞き慣れない声がした。

咄嗟に振り向いた3人は、その幼気な声を発する女の子が安楽椅子に座ってこちらを見上げて居ることに、初めて気づいた。しかし、いつの間にか？ 少なくともこんなところに子供が入り込めるわけがない。そもそも、シロナが雇ったダークトリニティが一人も通さなはずだが……。

しかし、ハマゴはすぐさま気づく。こういうオカルトになれば頭の回転が最も速いのは彼であった。

「この幽霊その2ってやつか」

「あらあらご名答よ。いかつい顔のお兄さん」

薄く笑った彼女はキィキィと揺れる安楽椅子から降りると、上品な様子で一礼を試みさせた。

「プルートおじさんが頼むからどんなことかと思えば、中々に面白いことが起きているみたいね。ちゃんと彼の頼み通りに出来てよかつたわ」

「彼と知り合いなの？」

「どうかしら」

意味ありげに笑う少女。

長い髪に目元が隠れて、その評定をうかがうことは出来ない。

読めない相手だ。シロナがそう思っていると、少女はごめんなさいねと謝る。

「でも、ありがとう。ずっと孤独だったその子を……ロトムを連れ出してきて。おじいちゃんの言ったとおり、優しい人たちね」

クスツと笑った少女。すぐさま、薄っすらとその体を消えさせてしまおうと、音もなくその場から消失してしまった。

「あの食堂の爺さんもグルだった、ってわけか」

「あれ、これって」

マーズは安楽椅子の上には、森の羊羹が置かれている事に気がつ

く。添えられた小さな紙には「あの子と一緒に食べてね」というメッセージがついていた。あの幽霊少女なりの感謝の仕方だろうか。どちらにせよ、幻と言われる森の羊羹の謎も一緒に解けた。幽霊特産の菓子なら、そりゃ幻にもなると。

「ちようど4人分あるみたいだし、一本頂いておくわね」

「んじゃマーズは2本だな、俺も一本もらつとくか」

「えー、どこに持てつて言うのよ……」

仕方なしに、二本まとめて小脇に抱えようとしたマーズだったが、洗濯機ウォッシュユロトムが横から掠め取って頭の上に乗せてしまった。してやったり、といったように笑い声を上げるロトムに心底疲れたという表情を隠そうともせずマーズが肩を落とす。彼女にとつて旅の苦勞が増えた瞬間である。そしてハマゴにとつては話の種が増えた瞬間でもあつた。

「ひとまずはポケモンセンターに戻りましょうか」

ダークトリニティに作戦終了を告げたシロナが、振り返りながらに言う。

その言葉に反対の異を唱えるものは一人も居なかつた。

ポケモンセンターでハマゴたちが借りている部屋でノートパソコンを広げるシロナは、早速ステイクメモリーをスロットに差し込んだ。すると、その中に収まっていたファイルにはこれからギンガ団がしようとしていたこと、そしてプルートの囚われている拠点の位置座標と経路、彼自身の映像では語りきれなかつたメッセージが残されている。

「……ハマゴくん、とりあえずプルートの言っていたギンガ団の大規模作戦だけど、その時にはまた同行してもらおうわ。今度は迎えに行くから、それまで自由に旅をしていてもらつていいかしら？」

「結構時間が掛かるってことでもいいのか？」

「そうね、やることがいっぱいだわ……だからこそ、有効な手が打てるんだけどね」

資料に目を通していたシロナは立ち上がり、電源ボタンを押して

ノートPCを閉じた。底に記されている内容をハマゴが知れば怒り狂い、今にでも突貫するであろうことは、この前のサイホーン事件を知らされた時に十分思い知らされている。

だがそれでは駄目だ。狂ったジユピターにとって仲間の一人と勘違いされていて、キーとなるジラーチを持っている彼には後から動いてもらわなければいけない。それに、プルートの救出はダークトリニティと協力しても難しいと感じるものだ。連れていくわけにはいかない。

救いがあるというならば、解決の糸口がハッキリと見え始めたことだろうか。シロナは腰に手を当てて、ふっと息を吐く。そして手で押さえつけたポケットの中の、その感触で渡そうと思っていた「それ」を思い出した。

「そういえばハマゴ君、マーズさん。メガシンカって興味あるかしら？」

「ん、キーストーンか？」

「……あら？」

素っ頓狂な声を出すシロナ。返ってきたのは、彼女にとって予想外の反応であったからだ。

「この後、森に行つてミミロル捕まえに行く予定だ。ナナカマド博士から頼まれたコレのためにな」

ハマゴは懐から、キーストーンとミミロップナイトの入ったケースを取り出し、シロナに見せた。そして事のあらましを語って見せれば、なるほどと頷き苦笑する。まさか、サプライズに渡そうと思っていたものが被るとは思っても居なかつたからである。

とすると、このマグマ団から押収したキーストーンとメガストーンは……。

「じゃあ、マーズさんに渡しておくわ」

「あ、あたし？」

当然、彼女の方に行き着いた。

「さすがの私でもそれが何か分からないけど、ナナカマド博士に聞いてみたらどのポケモンをメガシンカさせられるのか判明するんじゃない？」

ないかしら。あなた達のキズナの強さを信じて託します。今度出会うとき、期待しておくわね」

「結構押し付けみたいに渡されたなあ……まあ、多少懂れてたし？もらつとけるならもらつておくわ」

どうせなら、と一緒に渡されたネックレスの外装にキーストーンを括りつけ、首にかけるマーズ。そこまで大きな石でも無く、ファッションのまとまりを妨害するわけでもない。ちょうどよさ気のアクセントとしてマーズの服装に色が付けられた。

「さて、忙しくなるわね。それじゃあハマゴ君、マーズさん。また会う日まで元気で」

「あいよ。一回の医者がどこまでやれるかわからんが、善良な観光客として協力させてもらうぜ」

「あんたその物言いなんとかならないの……ああ、ジュピターの相手は私に譲ってよね」

ひとまずの別れを済ませて、すぐさま出立の支度を整えたシロナは足早に去っていった。この一分一秒の間に、プルートの命が失われるかもしれないのだ。速いに越したことはないだろう。キーストーンのやり取りが多少おざなりだったのは、おそらくはそちらの方にも意識を取られていたからだろうか。

興味深げに、正体不明のメガストーンを手のひらで転がしていたマーズはそれを自分の手荷物の中に突っ込んだ。ハマゴと違い、未知なる仲間の可能性。それは彼女に少なからずの興奮を与えている。その証拠に、口元が今にも笑みの形を作りそうになっている。

「そんじゃ、マサゴと一緒にだ。しばらくは自由行動と行こうぜ」
「りよーかい。先にシャワー浴びて寝てるわね」

「俺はちよつくら散歩がてらに電話してくるわ」
右手をヒラヒラと振り、部屋から出たハマゴは部屋の鍵を白衣のポケットに突っ込み、そのまま手をポケットの中に入れながらセンターの出入り口をくぐっていった。

彼を出迎えたのは満天の星空。この街のポケモンジムが、月の前に大きくそびえ立っている。巨大な樹木が目立つ、草ポケモンのジムに

よくある巨木という象徴は、巨大なシルエットになって街の雰囲気醸し出していた。

「こっちにも顔出しとけって言われたっけか」

そんなようなことを、この街に到着してからすぐに言われていた気がする。さて、草タイプのポケモンのエキスパートが、一介のポケモンドクターに一体何のようがあるのだろうか。気になるところではあるが、それは明日以降アポを取ってゆっくり時間を作ればいいだろう。

今のところ、それよりも気になることがある。

この街の象徴、神話のポケモンそのものの姿を象った石像が聳え立つ名物の高台に辿り着いたハマゴは、近くのベンチに腰掛けながらポケッチを起動した。P i P i P i、と電子音とともに操作して番号をつなげると、通話中を知らせるヴィジョンが浮かび上がる。

映像付きのテレビ電話は、この世界では最もよく普及したサービスだ。殆どの通信機器にこちらの映像を映し出すことが出来、逆に相手側の現状をよく知れる。騒がしかったり、ピンチだったり、この電話が活躍する事で記事に取り上げられたこともあった。

そんなこんなでつながったのは、ふとした拍子に思い出したジラーチの研究をしてもらっているバトラーのところだ。そろそろ、短冊に書かれていることが判明していればいいのだが。

「よお、久しぶりだな……おい、バトラー?」

通話は確かにつながった。だが、相手の姿が見えない。

いや、一体コレはなんだろう? 彼が居るはずの研究室は薄暗がりでもよく見えない。

《……………お》

「バトラー! おいバトラー! 何があった!?!」

うめき声がひとつ。緊急事態にでもなったのか。呼びかけるように叫ぶハマゴへ応えるように画面の下から出てきたのは、血塗れになった男の右手だった。

《ハ、マゴくん……ちようど、よかった》

「待ってろ!」

ポケナビの方を取り出し、すぐさまバトラーを救出に向かわせるため地質調査団のツテから知り合いの人間の医師へとメールを送る。二つ返事でバトラーの元に友人が向かった事を確認すると、まずハマゴは現在確認出来るだけの材料からバトラーを安静にさせた。

話す余裕はあるし、出血量も最初だけでそう酷くはない。安全が確保された後、また電話すると言って彼は電話を切ろうとしたのだが。

《まっつてくれ》

「喋んな馬鹿野郎。おとなしく待ってろ」

《マグマ、団は……確実に、君のジラーチを使い潰すつもり、だ……》

その言葉によぎったのは、ジラーチが傷だらけで倒れていた時の光景。ジラーチの命をなんとも思わず、使い潰す。ならば多少死にかけていたところで彼らの目的に使えたという事なのか？ 使用方法は、願いを叶えさせることではなかったのか。

《一度、たりとも……うばわせ、る、なよ……？》

「わかった。わかったさ！ だから喋るなっつてんだろうが!!」

これ以上はバトラーが無理をする要因にしなければならない。

そう判断したハマゴは、距離からしてそろそろ友人のドクターが彼がいる場所に到着したはずだろうと考え無理矢理に通話を切った。これで、後はゆつくりと床に寝ているバトラーは無事に搬送されるだろう。

たったの一日で、ギンガ団とマグマ団、そのどちらもが大きく動き始めていることがわかるとは。流石のハマゴも、精神に疲れを感じて頭を抑え、天を仰ぐしかない。こここのところ張り詰めっぱなしの警戒はかなり精神的に來ている。

頭の奥に響く頭痛は考えすぎの証拠だろう。

それでもハマゴは弱気な考えを押しえつけて、あえて気丈に振る舞う姿を呼び起こす。一度目をつむり、再び目を開ければ——いつもどおりの暴力ドクターの出来上がりだ。

「つたく……何がしたいんだ、クソツタレの犯罪者共が……」

彼のつぶやきは、月の中へと溶けていく。

夜空はすべてを包み込み、等しく闇を抱えていた。

長耳と勇気

バトラー邸へ謎の襲撃、プルートの話したギンガ団の実態。これまで遅々として進んでいないと思われていた事態であったが、その実、ハマゴの知らない場所では進展を迎えていた。搬送されたバトラーはまだ意識が戻っていないようだが、あと1〜2日もすれば目も覚めるだろうとのこと。現代の医療技術はそれほどまでに進化している。

そんな中、ハマゴはマーズと行動を別にしていて。ジラーチはボールの中へ仕舞って彼が所持している。流星にこんな状態で、敵のキーであるジラーチを他人に任せるとはしないようだ。

さて、彼が訪れているのは、昨日も訪れたハクタイの森のハクタイシティ側入り口である。心配したところで治療が進むわけでもなければ、思案したところでプルートの無事に保護されるわけでもない。だからこそ彼はいつもどおりに、そして自分の目的を果たすために行動を始めている。

ドライ、などという言葉はこれまでの彼を見てきた諸君にならおよそ似つかわしくないというのを知っているの通りだろう。彼は必要以上に激情を出さないだけで、自分が今動くべきなのか、動かずともいいのか、そうした判断のできる男だ。

空のボールを放り上げて、キャッチ。

フレンドリイショップで購入したそれは黒地に黄色のHという文字が描かれたボール、ハイパーボールである。これ一つで6個ものモンスターボールを買うことが出来る値段であり、高級品なのだ……正直、モンスターボールさえあれば事足りるということでは在庫が誇りをかぶっていることも多いボールだ。

では、なぜ彼はそんなものを買ったのだろうか。

「つたく、あの店員め……」

思い起こすのは今朝の出来事。

彼が訪れたフレンドリイショップはてんやわんやの大騒ぎになっていた。その原因は来店した客がポケモン共々酔っていた事で暴れまわっていたのである。おかげで、彼が入店した時には幾つかの商品

は棚ごとポツクリと昇天なされていた。

そんな中、来店してきたハマゴがボールを買い求めていると知った際にはこれ幸いと、幾つかが割れてしまつて使いものにならないボールの箱詰めパック買いのうち、無事なものを押し付けられたのである。廃棄するにも多少手順が大変なモンスターボール。そこに現れた客。我々の知る法律とは程遠いこの世界では、そうした安くした押し売りは別段咎められることではない。

とはいえ、そうした訳ありモノを押し付けられた側の感情は我々の世界と同じである。ぶつくさと言いながら森の入り口をくぐつたハマゴは、24時間ぶりとなる鬱蒼と茂つた森の空気に出迎えられた。しかし、一部の密集したところと違つて森のなかは木漏れ日が差し込む場所も多い。見た目以上に不快な感覚はなく、ハマゴも片手であくびを抑えながら、程よい朝の涼しさを堪能して道を進むことが出来た。

問題なのはその後である。彼が目指すのは浅く、この数年で補導された通過ルートではない。そのルートをあえて外れた自然そのものの獣道。この森で暮らし、まだまだ世界を知らないイタイケな子を我がものとするために侵入したのである。

……という言い方は犯罪臭がするが、言つてしまえば冒険してポケモンゲットだ。野生のポケモン達は人の言葉を解するとはいえ、進んで人の往来する道に近づくものはあまりいない。縄張りや、突然であつて驚いたから襲いかかるものだ。

「さて、この辺りかね」

空のボールを仕舞いこむと、腰にあるモンスターボールへ手を掛け彼は呟いた。

ここから先はいつポケモンに襲われてもおかしくない。となれば、キュウコンを出しておくに越したことはない。ファウンスの地質調査団として働いていた時と同様、彼はごく自然にキュウコンを待らせて森の獣道の中へ歩いて行く。

ガサガサと草むらを揺らして進む中、葉っぱや折れた木の枝が白衣にまとわり付いていく……ということはない。さすがと言おうか、自

然あふれるファウンスに行く経験を活かし、衣服には汚れらしい汚れは見当たらない。無駄に鍛え上げられた無駄のない無駄な動きである。その後ろをキュウコンもトコトコ歩いて付いて来る。道中会話らしい会話が無いのも彼らのあり方の一つだろうか。

そうこうしている内に随分と奥まった所まで来たのだろう。木々の密度が高まり、薄暗くなってきた森はコケや湿り気が強くなってきた。キュウコンは燃え移ることも熱くもないが、火傷はする不思議な怪異の炎、「おにび」を展開することでその先を明るく照らす。

これまでの旅路で何度も見た光景。しかし、本来なら一瞬だけ生み出すものを延々と持続させる離れ業も、このキュウコンならではのう。

「……見つかんねえなあ」

森のなかを歩きまわること、はや2時間。正午のため簡易な栄養飯とポケモンフードで昼食を広げた彼らは、ひどく苔むした不思議な岩が鎮座する開けた場所に到着していた。

彼は背負っているリュックから小さな折りたたみ椅子を開いて座り、その向かい側にいるキュウコンにポケモンフードを手渡しで食べさせている。

反対に、ハマゴはギュツと握ればゼリー状になって出てくる十秒メシで話題のCMを思い起こしながら、簡素な食事に味があるだけマシか、と故郷の栄養食の不味さを訴える患者たちの姿を懐かしんでいた。故郷であるフエントアウンは漢方が受け継がれてきた街ということもあり、その「不味さ」と「栄養バランス」の神がかった調整はこの病院食にも負けては居ない。

ゴミとなった栄養inゼリーというパックをゴミ袋に入れ口を絞めたハマゴは立ち上がり、この奥地で静かにそびえる苔むした大岩と対面した。

見れば見るほど、どことなく漂ってくる神秘的な気配に吞まれそうになる。ここだけ、自然の力が凝縮されたような不思議な感覚。キュウコンもそれを感じているのだろう。心地よいそれに身を任せてゆつたりと体を伸ばしリラックスしていた。時折クアツと大口をあ

ける欠伸が、ハマゴのそれと似通っているのはご愛嬌といったところか。

ミミロールを探しながらも、まったりとした休憩を楽しんでいるその時であった。ガサガサと草木をかき分け近づいてくる気配がある。しかしキュウコンは一切警戒していないため、ハマゴは悪いやつではないだろうと判断して待つことにした。

十秒ほどが経って、がさりと彼らの目前にある茂みが揺れる。本人としては隠れているつもりなのだろうか、ぴよこんと見える黄色いボンボンのような体毛と、茶色くピンツと張った耳が丸見えだ。

(探しに行くまでもなく、来たか)

そんな珍しい物でもあったのかね、などと続けて、彼はバックパックをあさると、一枚の四角いものを取り出した。折りたたまれた野外用のシートだ。その端をつまみ、バツと一振りすれば広がって、ひとり程度のスペースを作り出す。

椅子から欠伸混じりに立ち上がった彼は、シートの方に寝っ転がるとあくびを噛み殺すと同時に目を閉じ、メガネを外して胸の上に置いた。

「焦ることねえ、今日くらいゆっくり寝るぞキュウコン」

そうだねと言わんばかりに尻尾をふり、体を地面に落ち着けたキュウコンはリラックスしたように瞳を閉じ、ハマゴ共々眠りについた――

勿論嘘である。

睡眠はある程度取ってしまえば十分であるし、ジラーチを持っている以上、なんの援護も無いこの森のなかで無防備に寝ることなんてありえない。だが、彼の事情を知るはずもない長耳の乱入者は、その言葉聞いてホツとした息をついた。

下手をすれば、仲間のように無理やり傷めつけられて捕われるかもしれない。仲間うちから連絡を受けて、偵察のためにきたこのポケモン――ミミロールは、彼らののんびりとした様子に胸をなでおろしてその場を去ろうとした。

この人間は自分たちに害ではない、と伝えるために仲間の居る方へ

と振り向いたミミロルは、またガサガサと茂みを掻き分けながら来た道を引き返していく。その背中に、小さなシールのような物を貼り付けて。

「……いったか？」

小声で確認すれば、キュウコンは薄目を開けて僅かに頷いた。

キュウコンが先ほど寝る前に尻尾を振ったのは、こちらに目を向けているミミロルに向かって発信機を投げつけたのだ。あれだけの尻尾だ、目的がはつきりしている以上、暗器や道具を仕込むのいうってつけない物もない。

「さあて、追いかけんぞ」

急いでシートを畳み、バックバックを背負ったハマゴはキュウコンの背に飛び乗った。そして彼女は、人を背負いながら一切の足音を感じさせること無く軽やかなステップで木から木へと飛び移る。

時折吹く風とともに移動しているため、木上がざわめいたところで風のしわざだろうと言うカモフラージュができる。現に、後をつけられているミミロルに気づいた様子はない。

おおよそアサシンか、立派な犯罪者のような光景だが、ファウンスという場所では相手の犯罪者や密猟者も同じ手を使ってくるのだ。それを学ばずして、どうして戦う地質調査団の一員でいられようか。

そんなこんなでミミロルを追いかけていくと、中々森の奥まったところまで来ていることに気がつく。方位や場所は把握しているため帰る分には問題はないが、既に先ほどの演技で汚れてしまった白衣や音を消すため仕方ないとはいえ、葉っぱを体毛に絡ませてしまっているキュウコンを見て、マーズに小言を言われるなど内心辟易した。

「ここか、とまれキュウコン」

言われるまでもなく、完璧に止まってみせたキュウコンから降りたハマゴは、片手で樹の幹を支えにしながらミミロルが棲家の仲間と合流したところを観察しはじめた。斥候のミミロルが懸命に話し、それを聞いた他のミミロルもホツとした表情を見せている。

人気でカワイイポケモンは、何も考えていない子供や、優しい大人の説得で手持ちになるだけではない。当然、その筋の人間から狙われ

る要素が数多く、そのためにハクタイの森も周辺の警備がフアウンスほどではないが嚴重だ。

しかし、それらを擦り抜ける者ほど残虐だったり、狡猾だったり、とにかくポケモンにとつて害悪であることは間違いない。このミミロルたちは、そうした心がなく、己の欲望にのみ従う身勝手な者共の犠牲者なのだろうか。

(流石に心の病気までは癒しきれねえや)

荒療治で、経過観察もしていない。シンオウに来てすぐ出会ったスポミーの少年を思い出した。そういえば、最後の忠告ぐらいは聞いたんだらうか、それとも煩い大人の戯れ言を忘れてまたスポミーを殴り飛ばしているのだろうか。

ほんの一瞬だけ思い出に浸った彼は、すぐさま考えを振り払ってミミロルたちをみた。平穩無事に暮らし、しかし怯えながら毎日を過ごさなくてはならない野生のポケモン。……正直、ミミロルたちにこの地の愛着が無ければナナカマド博士なんかには引き取ってもらったほうが良いかもしれない。

「ま、押し付けはよくねーや。そうだろ、相棒」

キュウコンの口元を撫でると、彼は木の上から降りる態勢に入る。「よつと」

しっかりと手袋を嵌めた彼は、樹の幹を上手く滑り降りてミミロルたちの前に躍り出た。またこれか、とすべてを悟ったように目を閉じ、大きな息を吐いたキュウコンもそれに続く。ハマゴと違って一足とびで地面に降り立ったことで、ミミロルたちを体操驚かせた。

「よう、どうもはじめましてだ」

メガネの位置を直しながら言うハマゴの姿は、まるつきり悪役である。ミミロルは斥候役だったミミロルにどういう事だと問い詰めるように声を上げるが、ハマゴが一步踏み出したところで言葉を切つて後ずさりする。

当たり前のように見慣れた光景だ。患者のもとに赴いては、何度も泣き喚かれることも少くはない。一部の気性の荒いペットが医者の前では大人しくなる現象のようなものだろうか。

怯えながら、キュウコンとの力の差を理解してミミロルたちは立ち
尽くす以外に選択肢は無かった。ここまで接近を許したとなれば、仲
間の誰かの生殺与奪は既に握られていると言っても良い。

観念すると言わんばかりに項垂れ、または涙ぐむミミロルたちを別
段表情を変えずにハマゴはよく観察する。

そんな中、一匹だけハマゴから目を逸らさない勇ましいミミロルが
いた。

「……………ほお」

ハマゴのつぶやきでビクリと体を震わせるが、懸命な勇気を振り絞
る。やがて歩き出したハマゴは、己を見つめるミミロルのもとへと一
歩ずつゆったりと歩いて行く。その近くに居る仲間たちは横からい
きなり攫われるのではないかと、気が気ではなかった。

そしてハマゴは己を見上げる勇気あるミミロルを——通り過ぎ
た。

「…?」

不思議に思ったが、既に見えるのは彼の凶悪なツラではなく白衣の
背中。

まさかと思い、勇気あるミミロルが振り返って見たのは、仲間の中
でもまだまだ幼い生まれてすぐのミミロルたちだ。体格も一回り小
さく、人間が近くにいるという恐ろしさすらまだ知らない年齢。

不味い。冷や汗を垂らし、恐怖などすっ飛んだ勇気あるミミロルは
なんとしてでもこの人間を止めなければならぬと、足に力を込め
る。「でんこうせっか」でハマゴを吹き飛ばそうとしたのだ。

だが、そんなことは人間のパートナーが許さない。

突然ガチガチに体が固まったかと思うと、ミミロルは技を中断させ
られる。そう、キュウコンが放った「じんつうりき」の仕業だ。締め
付けるような痛みはないため、拘束程度に威力が落とされているが、
その分持続性は十分。

結局、勇気あるミミロルは決意に結果が伴うことはなかった。

「よおー、そのチビ助」

屈んだハマゴがメガネを抑え、子ミミロルの一匹に手を伸ばす。あ

の子は、生まれながら足が弱い子だ。不味い、守らないと。

そのまま引つ摺んで連れ去ってしまうのだろうか。勇気あるミミロルが歯噛みしながら、なんとか神通力を破ろうと四苦八苦するも、どうあがいても彼の手が子どもたちにも届く方が早い。

彼の手は——ぽん、とミミロルの子供の頭に置かれた。

「足が弱ってんのか？ ああ、しかもロクに動けてねえのか筋肉もしぼんでやがる。温室育ちは人間に飼われる哀れなポケモン共で十分だっつもの。ほら、これ食え」

なにを、言っているんだこの人間は？

ミミロルたちの頭に浮かんだのはその一言だった。

おもむろに、彼は懐から一枚のクッキーのようなものを取り出して、ミミロルの子供にかじらせる。まだまだ善悪の区別もなく、このような場所で閉鎖的に暮らしているせいでお腹も空いていたミミロルの子供は喜んでそのクッキーらしきものに食いついた。ちなみに味は薄めのモモン味だ。

「おうおう、何枚か置いてってやるから1日に1個ずつ食えよ。そしてたらその目付きの悪いミミロルみてえにスゲエ速さで駆け回れるからな」

誰が目付きの悪いやつだ。キュウコンのじんつうりきに縛られながら、勇気あるミミロルは悪態をつく。

さて、話は変わるがインドメタシン、というポケモンの基礎能力を底上げするドーピング剤がある。いわゆるプロテインのようなもので、継続的に食えることでポケモンの重要な6つのステータスのうち、素早さを集中的に上げることが出来るシロモノだ。

今食べさせたのは、インドメタシンを原料に混ぜた栄養クッキーの一つだ。もちろん、この世の不思議な生き物であるポケモンにとって即効性があるが、しっかりと体に溶けこむまで時間もかかるデメリットもある。

ハマゴはトレーナーではないため、そうした能力の底上げには興味はない。しかし、思ったように火を吹けないブーバー、体がすぐに崩れてしまうイワークなど、決して完全な存在ではないポケモンたちを

普通の体に戻すため、いくつかこういった薬品を利用した物も作ることも可能だ。

彼なりの調整で、1週間ですういった異常もある程度は普通の個体程度には治るよう、インドメタシン以外にも我々が知らない名前の薬品やら、栄養が混ぜられている。味に関しては、フェンの漢方薬を反面教師にしたが故の努力の結果だ。

「一日に1枚以上食べたなら逆に歩きづらいからな。美味いからって食い過ぎるなよ?」

ハマゴはピンと人差し指を立てると、口の周りにクッキーの欠片がこびりつけて笑顔になっているミミロールに顔をゆっくりと近づけた。目つきの割には優しい視線を尖らせ、彼は言った。

「いいな?」

あまりの凄みに、その子はこくこくと何度も頷いた。

ハマゴが与える恐怖は、こういうところに役に立つ。先程は怖がられたが、一長一短ということだ。短所を短所のままに捉えていては、ポケモンドクターとして資格をとることすら叶わないのである。

そのミミロールに残り6個のクッキーと、あまり食事ができていなさそうな集落に幾つかの食用かつ栄養のある木の実を渡した彼は土を払って立ち上がった。

「さて、邪魔したな。俺の旅に連れてく助手を募ろうと思ったが、てんで駄目だ。まあ未来あるポケモンに道を開かせたんだから良しとするが……帰るかね」

そう言うと、彼はキュウコンのもとに戻る。

去り際にチラリと、あの勇気を出したミミロールを見る。多少の見込みがあつたんだがなと心のなかで呟いたが、それだけだ。目を閉じたハマゴはキュウコンの背にまたがると、戻る道を見据えてすぐさまその場を飛び立たせた。

緊張が途切れ、恐怖と困惑に満たされたミミロールたちはその場でぐったりするように地面に倒れこんだ。だが、あの人間ならこの場所を言いふらしたりはしないだろうという謎の安心感もある。ドクターという言葉には聞き覚えもなく、渡されたクッキーや木の実も怪

しいが……その優しさが籠もった言葉にどことなく、ミニロルたちの心は絆されていた。

「……」

勇気を振り絞って戦おうとしたミニロルはというと、他のポケモンたち以上に腰が抜けてしまった様子を見せていた。あの時でんこうせつかを放とうとしていたが、実際、このミニロルにあるのは度胸だけ。戦う力は平均よりもずっと下のほうに位置している。

大丈夫か、と労るように差し出された仲間の手をとって立ち上がるうとし、やはり腰が抜けていて立てなかった。そのおかしな様子に、生まれた時から一緒の友達が笑ってくるが、勇気を出したミニロル自身は乾いた笑いしか出てこない。

「……」

しかし、なんだろうか。的確にあの子を治そうとした……ドクターとか言った人間は。なんだか惹かれるものがある。自分でも出来そうだと言う野生には通じない甘い考えも浮かんでくる。もしかしたら、あれを極めれば自分だけの持ち味というものが出来るのでは？

地面に体を投げ出し、悩む勇気のミニロル。そんな彼女の顔を、友達らのミニロルがぼんと叩いた。何をするんだと怒るが、もう一度友達らの顔を見た彼女はハツとする。友達は笑っていたが、どこか寂しそうな表情をしている。

ふと周りを見回してみるが、仲間も、あの斥候役のミニロルも、彼女と目があう度に頷いてみせた。

彼女らは、ミニロルは——ポケモンだ。

切っても切れない不思議なキズナが、人間とポケモンの間にはある。勿論、それが一勝つながらない者も多くいるし、本当に繋がったものたちは必ず、その世界に名を轟かせることになるだろう。

そんな不思議な縁があったのだと、仲間たちは言葉を使わず彼女に教えていた。

自分の手を見て、握りしめる。

勇気を出したミニロル。その意思は決まった。

「で、まーた買物してやがったのか」

「ふふん、面白いアプリもあったし収穫はバッチリよ」

ポケモンセンターに戻る頃には、夕方も近い時間だった。

センター近くの飲食店に入った二人は、少し早めの夕食を取っている。この後二人共にそれぞれ予定が入っているから、今のうちに一緒に済ませておこうと言う魂胆である。早速注文したいものを見つけ、店員を待っていた二人は昼までの情報を交換していた。

「あんたが向こう行ってる間に、オダマキ博士って人から伝言ね。ジラーチの短冊は解析済みだけど、データにする前にバトラーって人が気絶しちゃったからしばらく待ってて欲しいってさ」
「なるほどな。こっちは反対に収穫ゼロだ。まあミミロルも旅してりやどっかに居るだろ」

「気楽ねえ。旅するには向いてるかもしれないけど」

先に運ばれていた水の入ったグラスを傾け、笑うマーズ。

そんな二人に店員が近づいてきた。

「お待たせしました。ご注文をどうぞ」

「えーっと、あたしは……」

各々の注文を確認した後、店員はバインダーの用紙の一部を千切って彼らに渡した。

「今週、当店ではカップル割引を行っております。ご利用なさいますか？」

「お、ラッキーじゃねえか。やっといてくれ」

「お願いねー」

「承りました。それでは……」

注文票になにやらを書き込んだ店員はゆったりした足取りで席を離れていく。

しかしこの二人、平然と赤面しそうなサービスに対応するものだ。どっちも経歴上はある程度ドライになれるとはいえ、同様ひとつすら何もないと言うのは健全な男女として如何なものだろうか。

「カップルとはなあ、俺もいい嫁さん見つけてえもんだ」

「あんだ……そう言う感情あつたの?」

「ひでえなテメエこの糞女」

なんとも気の抜けるやり取りである。ともかく言えるのは、この二人にそんな甘い展開は訪れないということだろう。

「この後はジムリーダーとこだっけ?」

「一応な。朝の方にアポ取ったら夜に来てよ」

「ジムリーダーはご多忙なものね」

「あいつらはドンドンやるが増えていくからな。なんせ、街の看板であり挑戦を受ける役だ。それでいて、人に教える才能も必要。最後は街の抱える問題に自ら当たっていき、頼られるのが当たり前になる。大変だぜ」

「ふうーん?」

そこで思い浮かべるのは、マーズのよく知るあの二人だ。

「スズナとスモモみたいなのは?」

「武者修業つてのもよくある話だ。ジムリーダーだって人間だ。一つの場所に縛り付けられてるわけじゃねえ」

ポケッチを押し、ハマゴはテーブルにタウンマップを表示させる。

「そうだな、まあリーグに出るには規定の8つを集める必要があるとはいえ、程よい腕試しの場である必要もある。一つの地方にジムが8種類しか無いわけじゃねえ。有名な街じゃなくとも、ジムだけが建つてる絶海の孤島やら、火山の中やら……つまりは、幾つかが地方のポケモン協会に休暇を申請して、空けんのオツケだ。羽根を伸ばして、更に成長してくるんなら万々歳だからな」

そんな二人の会話も聞こえない店舗の外。

ガラス越しに青い髪 of 青年を見つめる、長耳のポケモンの姿があった。

伸ばした手の周りには

「よく来たわね！ 歓迎するわハマゴくん！ あたしはハクタイのジムリーダー、ナタネ！ よろしくね」

「ポケモンドクターのハマゴだ。よろしく」

再びマーズと別れたハマゴは、消灯し静かになったハクタイジムのトップであるナタネと固い握手を交わし、挨拶もほどほどにソファへどっかりと座り込んだ。

彼が通されたのは関係者用通路から近い応接室。樹木や葉を模したレリーフの掘られた見事なソファに座り、ナタネが愛飲している緑茶を差し出される。食後ということもあってチビチビと湯のみを傾けたハマゴは、開口一番に問いかけた。

「で、俺に何のようだ？」

「わお礼儀なし！ ……じゃなくて、まずは一つ教えてほしいことがあるの。えーっと、その」

「ハッキリ言えっての」

完全になら目線のハマゴは何様のつもりだろうか。もともと、ナカマド博士にすらタメ口だった彼にとっては平常運転だが、彼の素の表情や独特の言い回しもあって、ナタネはビクリと背を伸ばす。普段こういった相手をジムリーダーの権限で拘束しないわけではない。ただ、今は頼む立場であるため少々気が引けているのだろうか。

いや、原因はもつと別のところにあった。

「あの森の洋館だけど…いたの？ 怪しい人影とか、ゆ、ゆ、…ゆう…！」

「幽霊か？」

「ひゃああああ?!」

ハッキリと口にしてしまえば、その単語事態を恐れるように悲鳴を上げるナタネ。正直言ってジムリーダーの威厳もクソもない声が部屋の中を通って外へと漏れ出ていった。盛れた叫びを聞いて警備員が入り込む始末。もつとも、警備員も悲鳴の主がナタネであることに気がついたら、いつものことかと呟いて巡回に戻っていったが。

後にハマゴが聞いたところによると、夜の消灯したジム内を歩くのですらビクついているらしい。おかげでナタネとは長い付き合いであるのだとか。まあ、今はそのことは良いだろう。

何だそのことかと言わんばかりに肩をすくめたハマゴは、懐をまさぐりながら言った。

「伝説の羊羹職人な幽霊なら居たぜ。ほら、これが土産だ」

「わあ、これが噂の森の羊羹…じゃなくて！ いたの!? マジで!？」

「ありやあ死んで50年は軽いな。ポルターガイストやら実体化やら、随分と能力を身につけてやがった。死人は物にさわれないのに、なあ?」

「ひいひいひいひい」

ちよつと楽しくなってきたハマゴは、真実をわざとらしく、オドロオドロしい口調で語ってみせた。知つての通り、ハマゴは少しだけSツ気が強い。体を張った芸人も真つ青なりアクションを見せてくれるナタネに対して、彼の嗜虐心が刺激されたのも当然の流れだったのだろう。

それからナタネを怖がらせるように、しかし体験した出来事をシンオウの危機に関しては一部伏せた上で話した。ジムリーダーではあるが、街の評判を聞けば分かる。物事の解決に自分が自ら乗り出すシロナと同じタイプだ。

これからシンオウ全土を巻き込むかもしれない大作戦を控えているマグマ団の活動で、人々の心の支えやシンボルにもなるジムリーダーが街から動くのはよろしくない。いつもは余計なことにフル回転している頭を捻り、ハマゴは森の洋館での出来事について語り終えた。

「そうなのね……でも良かった、害のあるような、ゆ、ユレーじゃなくって」

「しっかしあれだ、分かんねえ事が一つ。なんで俺を呼んだ? 言っちゃあ何だが俺である必要はねえし、さっきまで顔も知らなかった相手だぜ」

「シロナさんは忙しいのは分かってたし、口も硬いだろうから。それ

にマーズは元々ギンガ団の幹部だったから話しにくくて……だから、貴方ならもしかしたらそこであったことを教えてくれるかなって思ってた！」

「消去法か。なるほど、考えてんな」

「へっへーん。そう？」

皮肉も見事に通じていない。

話すだけ疲れるタイプでもあるなど、内心ハマゴは付け加えた。

（しかしあれだ、行くトコ先々で女、女、女ときた。十人十色とは言うが、肩身が狭いもんだ）

未だに勘違いで鼻を高くしているナタネを見ながらに思う。むしろホウエンでは、アスナの祖父である元ジムリーダーのムラ爺や、ジラーチの解析を任せているバトラー、出立前に顔を合わせたオダマキ博士。新しい知り合いには男性も多かった。だが、こちらに来てから縁があるのは異性ばかり。

肩身が狭い、とは思っているものの、彼自身は出会う人物が誰であろうと、その縁は大事にしている。だからこそ、まだ数回程度しか会っていないバトラーも心の底から心配し、一度しか会っていないスポミーのワルガキトレーナーも覚えている。

（スポミー、か。死んでなけりやいいがな）

あの時ガキ……ユンジに言った「一人ひとりに手を差し伸ばすほどお人好しじゃない」という言葉はどこへ行ったのか。結局のところ周囲の問題に首を突っ込んでるなど、ハマゴはこれまでの道を振り返っていた。

今のところ、死の危機に瀕したポケモンに出会ったのはあれだけだ。自分が必要とされるほどの状況が起こっていないことをまずは喜ぶべきだが、これから先、マグマ団の動き方次第ではあっちこっちでドクターとしての手腕を振るわざるをえないだろう。そんな未来が来ないよう、シロナが上手く立ちまわってくれことを祈るのみだが……チャンピオンの名は伊達ではない。最悪の事態にだけはならないだろう。

「ちよつとー、聞いてるっ？」

「ん、まあ極秘だ極秘。ジムリーダーだろうがなんだろうが、実質上の立場にあるシロナが伝えなかったってことあ、そうだと思つとけ」
「ダメかあ……あたしもジムリーダーのひとりとしてシンオウの危機には立ち向かわなくちゃいけない。だから何かお手伝いできるかなつて思つただけどね」

「下手に刺激すると爆発する危険もあるからな。限られた少数の中で情報を留めとくのが良いんじゃないか？」

懐のジラーチのボールを少しなでて彼は言う。そうだ、スズナとスモモにも話したように、多少の開示はしておいたほうが良いだろうか。仮にもジムリーダーなのだから、そのあたりの注意喚起くらいは、と思つてシンオウで動き出したギンガ団の事についてハマゴは語ろうとしたのだが。

「あ、そのことなら森の洋館に行く前のシロナさんに聞いたよ。……でもね、ハクタイからも行方不明のトレーナーやポケモンたちが居るんだ。その人達を無事に取り戻すまで、どうしても落ち着いていられなくて……あ、何人かは誰かのおかげで、コトブキシテイに倒れてたのが無事に戻ってきてたんだよ！ まだ洗脳の後遺症や、暴力を振るわれた痕があるけど、今は町の人達が一丸になって懸命に看病してるけどね」

「そりゃあめでたい事で。しっかし、ギンガ団のやり方はやつぱ氣に食わねえな」

などどほざきながら、内心で滴り落としている冷や汗が額に浮き出ないよう必死になる男がいた。コトブキシテイで見つかった洗脳メソッドとは、つまりそういうことだろう。ハマゴのキュウコンが全力の破壊光線で焼き払い、彼の殺人的な肉体的沈静の餌食になった人たちである。

後遺症が残らないようにはしたが、氣絶は氣絶。それだけの怪我を負っているのは確かである。今更人間を痛めつけることに罪悪感も、洗脳されているとは言え襲ってきた敵を退けることに忌避感も無いが、やつちまったという後悔は彼の中を渦巻いていた。

「まあなんだ、意気込むのも悪かねえ。だがテメエは前ばつか見すぎ

て足元疎かにするべきじゃねえ、と俺は考えるぜ。チャンピオンが直々に事態の収束に動いてる以上はな。さつきも言ったかもしれないが、己の街を守り、待つってのがジムリーダーとして現状求められてる状態だと思うぜ」

もちろん、人間もポケモンも。

最後にそれだけ付け加えたハマゴは、湯呑み手に取り、口へと傾けた。

シンオウ地方においては地位も何もない、旅人でしかないハマゴ。勝手知ったるハウエンと違う、シンオウという土地のジムリーダーへと言える助言は一般論しかない。しかし、言葉の節々から感じ取っていた彼女の印象。多少、手が口よりも先に出そうなナタネであるからこそ、一般的な価値観に基づいた言葉は彼女に染み込むだろうと思っ

た。

言われたナタネは、その瞳を揺らして口を閉ざす。直接にでも、すぐにでも、助けに行きたい。証拠を掴んだであろうシロナに協力する身となって、前線で洗脳された人間たちを開放したい。そんな思いがあるのは確かだ。

だが、立場上、そして町の人間のシンボリックな存在だからこそ、そんな勝手な行動は許されない。分かっている。分かっているからこそ、こうしてハッキリと他人の口から語られてしまえば、はやる気持ちには押さえつけられた。

「あんたにあたしの何が分かるの」

「ん？」

「——つて言いたかったんだけど。無理だよ、当たり前だけど。うん、分かっているつもりだったけど、改めて言われるとやっぱりヘコむなあ」

「なんだ、ここで一発発破かかりや面白えんだが」

「むしろここで飛び出したらジムリーダー失格よ」

「そうかい」

ずれたメガネを直して、彼はあくび混じりに口を開けた。

元から帰ってくる言葉は分かっていた。ナタネは先走りしやすい

が、バカではない。ときには止まり、時には戻ることを知ら知っている、立派なおトナだ。そして、これまで以上に敵が見えない現状では、下手に動くのはそれこそ下策。

護りが薄くなった街の人間は、僅かながらも数を減らすことだろう。おそらく、今も潜んでいるであろう人さらい・ポケモンさらい専用の団員の手によって。

そしてまだ誰も知らない事実であるが、マグマ団が実質ギンガ団残党を吸収してからは、各地での人員・ポケモン強奪の手口は更に過激になっている。

ポケモン協会で予想されていた最悪の事態は、マグマ団の大規模作戦という謎によって引き起こされつつあるのだ。

もつとも、ここに居るこの二人が知る由もないのだが。

しかし、今一度決意を固めたナタネのいるこの街であれば、伸ばされた魔の手が握られる前に、その神経を断ち切ってしまうだろう。それほどまでなのだ。ジムリーダーの本気というものは。

それから多少の雑談を挟んだ彼らは、すっかり湯呑みの湯気が消えるまで会話を続けていた。ハマゴ自身も、こうして面と向かって個人と会話する行為は嫌いではない。元々の見た目のせいで、じつくりと話せる人間に限られているのもあるからだろうか。

会話も一旦の区切りが付いたところで、夜も更けてきた。ポケモンセンターとはそれなりの距離があるため、これ以上長引かせては夜道も危なくなるだろう。だから最後に、ナタネは悩んでいた事を切り出した。

「それとき、今度はもう一つお願いがあるの。これはシロナさんの協力者じゃなくて、ドクターのハマゴくんへの直々のお願い」

「ドクターとして、か。いいぜ」

二つ返事で受ける彼。ポケモンドクターとしての誇りはある。

「ここから少し、ハクタイの森を奥に行ったところに草ポケモンが集まる大きな樹が生えているの。とても大きくて、地面に深い根っこを下ろした雄大な樹」

「まさかそれを直せつて言うのか？」

「違うよ。その樹の周りには草ポケモンたちが集まって、平和に暮らしてただけだ……最近、何者かに痛めつけられてるみたいなの。森のポケモンたちは仲間意識が強いから、普通なら敵意をもったトレナーくらいならすぐ追い返しちゃうんだけど、なぜか既に2ヶ月近く弱りきつて……そこまでジョーイさんの使うような設備は持つていけないし、あたしの持つ知識や道具じゃ全然元氣にならないんだ」だから、お願い。

ナタネは懇願した。

「あの子たちを元氣にしてあげてほしいの。犯人はあたしの方で見つけるからさ、お願い」

「……なるほど、な」

この時点でハマゴはおおよその見当がついていた。

ポケモンたちが痛めつけられている理由。そして野生のポケモンたちの硬く、時には脅威にすらなりうる結束を越えて、ピンポイントに対象のポケモンを傷つける事ができる方法。

ファウンスでの経験は、ここシンオウに来てからほぼ全ての事件で役に立っている。だが、今回ばかりは危険な匂いを感じずにはいられない。……だからといって、危機に瀕するポケモンを見捨てるという選択は無かった。ハマゴは、ポケモンドクターなのだから。

ナタネのお願いのすぐ後、話を一旦打ち切つて、彼はハクタイジムを後にした。

満点に浮かぶ夜空を見上げながら、白んだ様子の見えない真つ暗な町並みを眺める。まるで自分の進む道が、暗雲に立ち込めているようだと感じた。もっとも、それにしても、それにしてもは街頭や信号機の明かりが目につくのだが。

「穏便にすみやいいがな……」

後頭部をバリバリと搔くと、レンズ越しの瞳が空を映し出した。小さく呟いた言葉は空の中に溶けていくのを感じながら、ナタネにはもう一つ勉強させる事になるだろうなど、嫌な予感を拭えずにはいられない。

厄介事ばかりが迷い込んでくる、しかしそれだからこそ。後に続く言葉は胸の内に仕舞い込んで、ハマゴはアスファルトに転がる小石を蹴り上げた。

飛来した石が額に赤い跡を残し、石を受けた人間はその場に倒れ伏した。

あまりに圧倒的。あまりにも別格。その脅威と対峙するマグマ団のメンバーは、次々と盗んで洗脳したポケモンを繰り出しては使い捨て、その圧倒的な黒と金の権化に立ち向かっていた。もっとも、拮抗などというワードはまったく当てはまらないのだが。

「くそっ！ もっと増援と駒を寄越せ!! 聞こえてるか!」

《無茶だ馬鹿野郎! あんなのにいくら送り込んだって……あ!?

うわあああああああ!!! 奴ら、どうやってここに——》

「切れやがった!? コイツだけじゃねえのかよ!」

元ギンガ団残党の真のアジトにて。

圧倒的な実力を古いながら、敵の最深部でその武を振るうたつたひとりのトレーナーに為す術無く蹴散らされていくのは新生マグマ団と銘打たれた、新人のならず者たちだった。

彼らは、この元ギンガ団のアジトで一人の女と一人の老人を囲い、逃げ出さないよう見張っていれば高い報酬と、好きだけポケモンを使える権限を与えられていた。思慮の足りないならず者たちは、破格の報酬に飛びついて、豪遊とポケモンの虐待で楽しんでいたところ——この襲撃を受けた。

まるで魔法のように、上のダクトから現れた女にならず者……いや、マグマ団の新入りたちはあつという間に殲滅されていく。彼女が、シンオウチャンピオンであるシロナが現れてまだ10分も経っていない。だが、既にこの場所で行われた戦闘により、マグマ団側の戦力は4分の1にも満たない数に減らされていた。

《こちらAチーム! 管制室に辿り——な、なんだテメエら! ポケモンも出さずに舐めてんのぎゃあああああああああああ!》

「彼らもホントよくやってくれるわね。……ダークさん、そいつらはふん縛って捨て置いて構わないわ。それより隔壁とマップの照合をお願い」

無言でシロナの要請に答え、彼女の手に持つ小型端末にプルートの提供したマップデータと、現在の基地のデータが重ねられていく。そして大量に存在する研究室のうち、プルートが捕らえられているであろう入り口の場所が判明したとの一報が入った。

騒ぎ立てる雑魚をミカルゲの「あやしいかぜ」で吹き飛ばし、壁に叩きつけた直後、トゲキツスの「でんげきは」が彼らの意識を刈り取っていく。

「狙いはあのジジイだ！ 急げ！ 報酬が無くなっちゃうー！」

「俗物ね……」

あくまでも報酬のため、人間をなんとも思っていない言葉にシロナは不快感を掻き立てられた。だが、今から助けようとしている人物も、元々はそんな考えを持っていた老人である。何となく心のなかにあるわだかまりを今は無視して、彼女はプルートの捕らえられている研究室にたどり着く。

「ルカリオ、はっけい！」

「アアッ！」

ひとしきり気合を込めたルカリオの攻撃は、扉を傷つける事無く向こう側にあったロック機構のみを物理的に満遍なく破壊した。ランブが消失し、エアロックが漏れ出た事で緩んだ扉は、ルカリオが無理やり横に押し入れることで開かれる。本来ならポケモンの膂力すら上回る力で閉じられる扉だが、肝心の機構はたった今破壊されたばかり。ただの金属の板と成り果てた扉が、侵入者を止められるはずもなかった。

「プルートさん！ 聞こえますか!? プルートさん!!」

研究室とはいっても、研究棟と言ったほうが良いかもしれない。地下に作られたこの場所は、森の洋館にあった研究室を更にグレードアップさせたような作りをしている。ここはまだ部屋の入り口に過ぎないということだろうか。

だが、ここから地道に探したのでは、金に取り憑かれたようなしつこい新入りのマグマ団員に身柄を持って行かれてしまう。腰のボールに手を掛け、ダークトリニティのメンバーも二人ほど使って捜索してやろうと思ったときだった。

「……………」

「ルカリオ…そうね、波導で探して！」

制したルカリオが言いたいことを察知しての指示。

ルカリオの耳元に存在する器官が、水平に伸ばされる。

そして目を閉じたルカリオの視界には、青くなつた世界が映し出されていた。

波導の世界。ありとあらゆる物が持つ固有の振動が移された世界。やがて自分が移動しているかのように、2つにも3つにも分かれて隅々まで探し回ったルカリオは目を開けると同時に駆け出した。シロナに一度だけ吠えることしかない辺り、既にプルートの確保されてしまっていると思ってもいいだろう。

「いいわ、先に行つて！」

「ッ！」

力強く頷いたルカリオは、ポケモンの身体能力を發揮してグイグイとシロナとの距離を引き離していく。シロナもミカルゲの要石を肩に乗せると、気配に敏感なミカルゲの特徴を上手く使いルカリオの軌跡を辿っていった。

やがて辿り着いたのは、地下から地上へと繋がる斜めのエレベーターがある搬入路だ。いざという時爆破して証拠ごと押しつぶすことが出来る施設から脱出するための手段として、これまで見てきた基地にもあったもの。

ルカリオは逃げ出すマグマ団員と、顔を殴られ地面に伏したところを担ぎ上げられたプルートの姿を確認する。その瞬間、足に込めた力で一気にその場へと飛び込んだ。

「うおっ!? こいつは……………」

「侵入者のポケモンか！ いけゴローン！ だいはくはつでぶっ飛ばせ！」

ポケモンを使い捨てにする彼らなりの最大の攻撃。

だが、その選択はあまりにも悪手に他ならない。鍛え上げられたルカリオと、素人同然のゴローン。そのレベルの差はあまりにも大きく、素早く繰り出された「ボーンラッシュ」の2撃で戦闘不能にされたゴローンは、持ち主の元に弾き飛ばされ諸共爆発した。

せめてプルートの連れていき、報酬を独り占めしてやろうと。ゴローンを繰り出した団員の相棒だった者は、すぐさまパネルを操作して地上へ一気に登ってやろうとしたが、生憎ルカリオのスピードに、搬入用のエレベーターが勝てるわけがない。

呆気なく、ひと跳びでエレベーターに降り立ったルカリオは「しねんのずつき」を団員のスキンヘッドにぶち当て、エレベーター上にあつた木箱を破壊する勢いで吹き飛ばした。箱の中にあつた大量のモンスターボールに囲まれながら目を回す男を一瞥すると、パネルを操作してプルートの容態を確認する。

またもや波導の力を使った彼は、プルートが栄養不足であること、老化による身体能力の低下があることなど、大雑把な情報を読み取っていく。後に命に別状は無いことを確認すると、ホツと息をついて気絶しているプルートを背中に背負い込んだ。

「ルカリオ！ よくやったわ」

エレベーターが元の場所に戻ると同時、姿を表したシロナは感謝の印にルカリオの頭を撫で回した。喉を鳴らして気持ちよさそうに目を細めていたが、シロナが最後に微笑んだと同時に再び臨戦態勢に入る。いつまた襲ってくる輩が湧いて出るかもわからない状況であるからだ。

「任務は完了した。自爆プログラムも完全に破壊した。施設の制圧は完了だ」

「ありがとうダークトリニティ。ポケモン協会からの増援があるままで、残党を無力化しておいて。トリトドン、ミカルゲ、トゲキッスをそれぞれ貸しておくわね」

「了解……」

ボールを受け取ったダークトリニティは、代表した一人の言葉と同

時にすつとその場から掻き消える。まるでもりのようかんに居た幽霊のようだな、と余りにも卓越した隠形の技術に関心すると同時、彼女は地上で待機しているポケモン協会から命を受けて待機しているジュンサー達に連絡を取る。

プルートの奪還作戦はなんとか成功した。だが、気になるのはジュピターの姿が見えなかったことと、ここに真のマグマ団員が一人も居なかったことである。彼らはまた別のところに、拠点を作ったということだろうか。

自分が制圧したギンガ団残党の最後の基地を見るが、結局奴らの上層部が考えている「大作戦」とやらの全貌はまだつかめていない。管制室や、研究所を直接制圧したダークトリニティと後で合流し、彼らの情報を待つのが現状でできる唯一の手段。

だが、本当に尻尾は見えるのだろうか。片付いたはずの問題だが、その先のヒントが何一つとしてないモヤモヤした感覚を覚える。実態のない雲を手で掴んだは良いが、何の意味もない水滴が手にこびりついただけ。

「せめて、これが何か意味がある一滴なら良いんだけど……」

潜入した時とは、別の意味で騒がしくなり始めたギンガ団残党のアジト。戦いのさなかで硬く握られた手の汗を見つめながら、まだまだ終わらない敵の存在を感じる。まるで、あの伝説のポケモンが顔を出したときのようだ。

普段踏みしめている大地そのものがひっくり返るような脅威が迫っている。どこにでも居て、しかしその全てを掴み取れないマグマ団の行動に、彼女は大地のポケモンの影を見たのであった。

お前が選んだ

「……くそっ」

プルートが奪われた。今しがた一報を聞き、使えない部下を処分してもイライラは収まらない。力いっぱい机を叩きつければ机に大きな亀裂が出来るが、そこから漏れ出るように感情が収まることは無かった。

それもこれも、犯罪者や密猟者などという金に目が眩んだ愚か者たちばかりを部下として招き入れたからだ。我々の崇高なる目的を全く理解せず、長いものに巻かれるばかりの思考を放棄したゴミ共。正直、あの狂った女ジュピターよりも使いみちのない人材ばかりだった。実力も兼ね備えていないバカ者共だ。

「貴様が言ったとおりにした途端にコレだ!!」

「ワシのせいじゃなかろう。全ては我らの崇高な目的を理解しないあやつらが悪い」

「所詮はあの伝説を耳にすることもない異国の者。こうなることは目に見えていたはず。案を受け入れた貴公にもその責があると思うがな」

「黙れ、元から喋ることすら放棄していた置物が今更口を開くな」
「なんだと……?」

一触即発になりかけた空気に、パンパンと手が打ち鳴らされる。

「内輪もめを起こすよりも先に、あのことを話したほうが実りあると思うんだけど」

「今更話し合うことがあるか? 我々の目的は一致している。そして、あの計画も前段階に過ぎぬとは言え成功は確実だ。街一つが消えるが、まあそれだけだ」

「失敗のしようがない。話すだけ無駄だと思うぜ。これだから女つてやつは……」

「なんですって……?」

再びその場は剣呑な雰囲気になり飲み込まれていく。互いが互いの足を引っ張り、相手を貶していく様子は誰が見ても醜いと言わざるを得ない。

い。当然のようにボルテージが上がった全員が腰のボールに手を伸ばし始めたところで、一体のポケモンが彼らが囲う円形テーブルの中央に繰り出された。

そのポケモンの名はマグガルゴ。出現した途端、文字通りマグマと同等の熱が彼らの顔を灼いていく。身を乗り出していた誰もが顔を歪め、元いた席に座り直せば熱はそこまで届かないよう調整されていたらしい。頭を冷やせ、ということだろうか。

「おいおいおい、面白いことやってるじゃん。なに？ あんたらそんなことしてるヒマあるわけ？ ウケるわッ！ あははっ！」

チャラチャラとした態度で階段を降りてくる男。その腕にはかつてのマグマ団を記すマークが刻まれた腕章を付けている。……いや、彼だけではない。その円形に並べられたテーブルで向かい合う数人の男女、その全てが等しくマグマ団の腕章をつけていた。

その男にキツと睨みつけるのは、先程柏手を打った女性。イライラを隠そうともせずには彼女は口をついて出てきた言葉を男に浴びせた。「今更出てきて……あんたがちゃんと基地に待機していればあいつは！」

「確かあのメガシンカバカはこのチャンピオンに囚われたんだっけ？ あ、もうシユクセー済みだから忘れていいよ」

「なっ……！」

場は騒然となる。この男が来たのは外に続く階段から。つまりは、そういうことなのだろう。親しい仲であった女性は項垂れるように自らの席に座り込み、あつけらかなと真正正銘の同士を粛清したチャラ男の態度に、歯を噛みしめるものも居た。

だが、逆らえない。この中では最も実力が高く、なにより彼との戦いは「戦いですら無い」状態で終わることも知っているからだ。そして何より、この大掛かりな作戦を思いつき、牙の抜けたマツブサでは考えられない所業をしでかした。そんな過激派の……新生マグマ団の頂点に立つニューリーダーなのだから。

今のところ、彼はその態度に反してしつかりとした実績を残してきた。今回の粛清も、実を言うと捕らえられたメンバーがついに情

報を漏らして楽になろうとしていたのを察知……いや、監視していた際に知ってしまったからである。善とは言わずとも、この地方を混乱に陥れる片棒を降ろそうとした勇氣ある捕虜は、物言わぬ軀となって刑務所のカメラ外に転がされていた。

「さて、じゃあ第一次ドツカンドツカン大作戦、その準備といこうじゃないの？」

考え方も、強さも狂っている。

だが、それ故に彼のもでこそ彼ら過激派の大地を広げるという思想が実現されると信じるしか無い。明日は我が身かもしれないと恐怖を押し殺しつつ、垣間見えた夢の切符を胸に抱く新生マグマ団たちはゴクリと生唾を飲み込んだ。

ねちやりと絡みつく唾液。運動したとき特有の嫌な感触を、ペットボトルの水で押し流しながら草木をかき分けていく。密集する木々をかき分け、草木を飛び越え。道なき道を行く二人の男女がそこにいた。

「もうすぐよ」

「あいよ」

「……えつとね、それ重くないの？」

「命よりは軽いもんだ」

男——ハマゴの軽口に問題なさそうだと感じたナタネは、ここまです息をほぼ切らさずについてきているハマゴに感心していた。元々ファウンスという、保護区に指定されるほどの自然が豊かな土地の調査団に属していた事は聞いている。だがその本分はあくまで医師であると思っていただけに、ハマゴの屈強な体や体力に関しては予想外だと感じていたのだ。

彼がこうまで屈強であることに、実は薄々気がついていた。あのシロナが関係があるからと言って、一介の医者でしかないハマゴを極秘の任務に同行させたことがきつかけだ。しかし、心の何処かではやはり疑っていたのだろう。驚愕という感情がナタネの心境を大きく占

めている。

二人は軽い足取りで、道を行くには険しいはずの環境を踏破していた。人間というのは、服であったり荷物であったり、とにかく余分なものが多い生き物だ。こうした何かと引っかけやすい場所では真つ先に足が遅くなりそうなものだが、そうでもないのが彼らが特別である証だろう。

「さあ、見えてきたわ。あの大樹の根本にいますよ」

指を指したナタネ。指の先を見上げてみれば、木々の隙間からでもよく見えるほど、大きく立派に育った一本の大樹の焦げ茶色の幹が見えた。それから幾ばくもしない内に草木や木々の密集地帯を抜けて、広場に出る。これだけの大樹だ。太陽がどこに行つても影になつてゐる所では、日光を受けられず木々も育たないのだろう。自然と出来た広場は、なるほど、ポケモンたちにとつて憩いの場としてちょうどいいかもしれない。

「あいつらか」

とは言え今回の目的は上ではない。その根本に倒れている草ポケモンたちだ。ナタネを押しつけるようにしてそのポケモン達の元にとり着いたハマゴは、ボールからキュウコンとジラーチを出して背中の荷物をドンツと地面に置いた。

「どう？ 治りそう？」

「今から診断だ！ まずは黙つてろ!!」

「は、はい……」

一括してナタネを黙らせたハマゴは、どこか余裕がない。先程までは普通の態度だったのだが、ここで倒れているポケモンたちを見たその瞬間から彼の目つきは医者として、他の勘定も混ざった複雑なものへと変化していた。

胸元から普段使っている聴診器を当て、ポケツチを取り出し最初の仕事を始めさせる。バイタルや彼にしかわからない情報がポケツチによつて空間投影されていき、それらをほぼ並列して見た彼は診断を終える。聴診器を取り外し、冷や汗を垂らしながらに彼は言う。

「何がどうつてわけでもねえ。こいつあ、やっぱ痛めつけられてるだ

けだ」

「痛めつけるって……でも、ここは協力した森のポケモンたちが決して悪意ある人間を近づかせない聖域みたいなものよ!?」

「ポケモンたちにもルールがあるってことだ」

「ツ? それって、どういう」

ナタネが言うが早いのか、ハマゴはバッグの中に両腕を突っ込んだ。

「キノココ、ポポッコが2体、マダツボミにナゾノクサ、スポミーが2体……間に合うか」

「あなた、それ——」

彼は両腕に、7個のモンスターボールを抱えていた。

「やれ、モンスターボール」

ナタネが静止に入る前に、彼が落としたボールは7体のポケモンたち全てにヒットすると、ポケモンをボールの中に閉じ込めてしまった。元々瀕死寸前まで追い込まれ、傷つけられているポケモンたちだ。当然抵抗する力が残っているわけもなく、大きく3回揺れた後にボールは赤い光とともにポケモンたちを収容してしまった。

「アンタツツ!!」

当然、ナタネはハマゴの胸元に掴みかかった。

鬼のような剣幕でまくし立て、彼女の言葉が吐き出される。

「騙してたのね! 全部この子達を捕まえようっていう魂胆だったわけ!? シロナさんを上手く騙し通したようだけど、絶対に許さないツツ!!!」

「落ち着けよ、アバズレが」

「黙れ! ロズレイド、エナジー……」

「かなしばりだ、キュウコン」

先に技を放とうとしたロズレイドを、キュウコンの金縛りが封じ込める。初手を潰されたことに息をつまらせたナタネだったが、すぐさま次の指示を出そうと身を乗り出したところで——突如突撃した、ハマゴの肩に抱え上げられた。

態勢が変えられたことと、自分が大の男に捕まったことを理解したナタネはハマゴに抵抗しようと試みるが、彼はガツチリと関節や要所

を押さえ込んでいたので上手く力が入らない。

「今度は人さらいってわけ!? ギンガ団の手先だったのね!？」

「だあまつてろ!!!」

「ッ!？」

ハンマーで殴りつけられるような大声に、ナタネはビクリと震えて抵抗を止める。上手くそのタイミングで立ち上がったハマゴは、器用に足でバッグの中に草ポケモンたちを入れたモンスターボールを詰め込んだあと、ポケモンたちに指示を出し始めた。

「ジラーチ、そいつ担いでキュウコンに乗れ! キュウコン、ロズレイドを拘束したまま後ろからついてこい! ジラーチは俺とキュウコンの間だ……チクシヨウが、間に合えばいいがな……」

ナタネの耳元でボソリと呟かれた不穏な言葉に、今度こそナタネは身震いした。もはや主力を封じられ、抵抗すら出来ない状態では何をすることも出来ない。何よりシロナを騙しきった悪漢に捕まえられ、自分の立場が最も危うい位置になったことを認識したからである。

焦るように森の中へ再度突撃した彼に担がれるなか、せめて一言いってやろうと思ったその瞬間だった。

「……きやがった! かえんほうしやで迎え撃て!」

突如、森の闇の中から毒の液体がハマゴたち目掛けて吹きかけられたのだ。その技の名は「ヘドロばくだん」。相手を毒状態に陥れることもあるが、恐るべきはその威力。相手を殺す気で放たれたのか、火炎放射で蒸発しきらなかったものがへばり付いた草木は、瞬く間に溶けてドロドロになっていった。

「森のポケモンたち……! あたしたちはここよ!」

「馬鹿野郎! なんて知らせやがった!？」

「当たり前じゃないの!? あんたこそ」

その続きを言おうとした瞬間、ナタネは地面に投げ出された。ハマゴが突如として生えてきた蔦に足を取られ転んでしまったからだ。投げ出された体と、必死に取った受け身のお陰で傷は少ない。だが、手のひらは擦り剥けて流血とともに痛みを訴えていた。

「ぐさむすび」 かよ……」

悪態をついて立ち上がるハマゴだが、彼からすぐさま離脱する者がいる。

「今のうちに！」

「おい、馬鹿かお前は!? 戻れバカ女！」

ハマゴの必死の呼びかけにも応じず、キュウコンの横つ面を蹴りつけたナタネはロズレイドの救出に成功してしまう。そして彼らに追いついたのは森の虫ポケモンたち。皆が皆殺気立っており、普段穏やかに暮らしている顔とは正反対の表情を見せている。

それもこれも、ハマゴが草ポケモンたちを捕らえてしまったからだろう。そう考えたナタネは、彼ら虫ポケモンたちに自分は敵ではないとアピールし始めた。

「あたしはナタネ！ このハクタイのジムリーダーよ。おねがい、あいつから草ポケモンを取り戻したから、残った子たちを奪還するのに力を貸して！」

ハマゴから逃れた直後、いつのまにか一つだけモンスターボールを持っていったのだろう。捕らえられた草ポケモンが入ったボールを掲げながら必死に説得するナタネに対し、虫ポケモンは互いに頷きあうような仕草をしていた。

そして算段がついたのか、メガヤンマがナタネの元に近づいてきた。喜びに頬を緩ませた彼女はホッと安心したように胸をなでおろして――

「しゃがめ!!!」

聞こえた声に思わず従ってしまう。

直後、メガヤンマのソニックブームが彼女の首があつた場所を通過していった。

「……え？」

「あいつらの狙いは俺ら、いや草ポケモンだ！ 急いで逃げる馬鹿野郎!!」

態勢を立て直したハマゴとキュウコン。キュウコンは直後、メガヤンマに飛びかかった。その隙にナタネを連れ出したハマゴは、彼女が手に握っている要治療の草ポケモンが入ったボールを取り上げ、バツ

グの中に詰め直す。そして呆然としている彼女の手を取ると、強引にだが走り出した。

背後では吹き飛ばされたキュウコンがなんとか持ち直して逃走するハマゴたちの後ろにつく。ナタネという荷物をなくし、バッグを背負い直したハマゴはジラーチに隣を並走するように言い放った。

「どうして、なんであの子達は攻撃してくるの!?!」

「そんなもん、森の裏切り者を俺たちが連れているからだ! ツ、ジラーチ!」

横つ面から飛び込んできたのは、こちらを追いかけるゲームイルが放ったシャドーボール。これまで戦闘の指示を出したことがないジラーチに、しかしハマゴは一切の迷いなく指示を下した。

「サイコキネシスで捻じ曲げろ!」

指示を受け取ったジラーチの短冊が浮かぶように揺れ、腹の閉じた瞳が僅かばかりに薄めを開ける。その瞬間、シャドーボールは内側から崩壊するように弾け飛んでしまった。破片が僅かばかりにハマゴの頬を焼いていったが僅かな傷だ。手袋を握り込み、オレンの治癒効用のみを抽出した液体をなすりつけた彼はゲームイルに向かって火炎放射の指示をキュウコンに下す。

炎に巻かれて墜落したゲームイルは、しかしキュウコンの出力不足も相まってすぐに傷一つ無く復活するだろう。だが今は一度退けることが出来ればそれで十分だ。追撃が無いうちに、ハマゴたちは再び走り出した。

その後ろを驚異的な速さで追いかけるメガヤンマが、あつという間に彼らの前に先回りする。メガヤンマの頭上で七色に輝く不可思議な岩の形をしたエネルギーが渦巻き、「げんしのちから」という技へ成った瞬間にハマゴという人間へ放たれた。

肋の一本は覚悟するか。ぞわりと腹の中に駆け巡る抉れたような嫌な感覚とともに気を引き締めた彼に、しかし衝撃はやってこない。

「……メガドレインよ!」

ナタネのロズレイドだ。げんしのちからのパワーのみを吸い上げ、完全に攻撃そのものを無効化する。ジムリーダーらしい、普通の発想

と実力ではなし得ない減少に困惑したのはメガヤンマ。畳み掛けるように近づいたロズレイドの華麗な蹴りの一閃が、メガヤンマの顎に当たる部分にクリーンヒット。意識を失ったメガヤンマは力なくその場で墜落した。

「説明、後でちゃんとしてもらうから」

「わあーってる。だが、恨むなら自分を恨めよ」

「…え？」

「走るぞー！」

今度は手を引かない。自分の意志でこの森のポケモンたちから逃げることを優先したナタネは強かった。タイプ相性でいえば圧倒的に不利なはずの虫タイプ・飛行タイプを併せ持つ野生たちに、相性を覆す圧倒的な実力でもって迎え撃ち、しかし余計な傷をつけることなく確実に無力化させていく。

必死の逃走劇の間、キュウコンやジラーチはもう必要ないなと感じたハマゴは、最後のひと押しをロズレイドが放った瞬間、ナタネの体を引つ張り、キュウコンの背中に自分共々相乗りになった。

意図を理解した彼女がリーフストームを命じると、ジム戦では中々見せない真正銘本気の一撃が、木々をなぎ倒しながら森のポケモンたちを壊滅させる。出していたポケモンを全てボールに戻したナタネは、前にいるハマゴの腰に両手を回して捉まった。

「とばすぞー！」

グンツ、と腹の奥に来るような重めの衝撃。一気に加速したキュウコンは地面ではなく、余計なものが殆ど無い木々をジグザグに蹴りながら恐るべき機動力で森を抜けていく。やがて見えてきた出口の光を目指し、彼女の純白の体は光の中に飲み込まれて――

「葉っぱの欠けたとこなんぎツバ付けときや治る。そう落ち込むなマダツボミ」

ポンポン、と最後に診たマダツボミの頭を撫でたハマゴが白衣をはためかせて戻ってくる。扉をくぐった彼を待っていたのは、今回の騒

動に巻き込んだ張本人だった。

「あの子達は？」

「無事だ。ボールの中で傷も生命力も維持させたおかげで多少時間は掛かるが元通りになる。あとは栄養つけて、食って、動いて、寝れば万事解決だ」

手のひらに付いたガーゼを弄りながらハマゴが答える。見た目危なかったようにも見えたが、今後難の後遺症もなくこれまで通りに暮らせることが分かるとなると、草ポケモンたちを心配していたナタネはどつと疲れたようにその場にへたり込んだ。

その隣に遠慮もなく座るハマゴ。まだ中では細かな治療が続いているが、これ以上は自分が手を出すことも、手伝うことも必要ない。回復マシンと自分と同じプロであるジョーイの手に任せれば事足りるのだから。

「ねえ、なんで森のポケモンたちはあの子達を狙ったの？」

最初こそハマゴの紛らわしい言動に勘違いしていたが、襲われたポケモンたちから明確な敵意と殺意を向けられてしまった以上、その理由の程を聞きたいとナタネが申し出る。不可解だったのだ。自分は、森の不利益になるようなことをした覚えはない。草ポケモンたちと触れ合い、時には共に食事をし、ただただ楽しく遊んでいただけだったのにと。

「それこそが、テメエが自ら選んだ間違いだ」

ハマゴはそんな彼女の思いを真正面から否定した。

少なからず衝撃的な理由があると思っていたが、この切り返しは予想外でしかない。驚愕に目を見開いたナタネに、ハマゴが遠い昔を見つめながらポツリポツリと語り始める。

「ポケモンってのは生きもんだ。野生には野生のルールがあり、それを破った奴らには容赦の一欠片もねえ。それこそ、俺達みてえに死に物狂いで逃げて縄張りから出るしか無い」

直後、何かを話そうとしたナタネを、手で制するハマゴ。

まだいいことを言い終えていないのだ。

「まさかジムリーダーともあろうものがこうなるとは思っていなかった

だが……まずはナタネ、テメエがやっていた特定のポケモンと野生の中で何度も何度も遊ぶつてのはな、特にわかりやすいアイツラのルールに触れちまったんだ」

ファウンスでは、ソレを語れるだけの多くの経験をしてきた。

「今回連れてきた草ポケモン共、ありやあかなりの弱小で厳しいルールの中じゃすぐさま淘汰されちまう側の連中だ。食い物にありつけず、ただひたすら弱った上でひっそりと死んでいくタイプだな」

「そう、そうだよ。だからあたしも、あの子達の助けになりたくて」

「そこで手を出しちまったのが、更なる疎遠の理由だ」

「――！」

彼は語った。

「話を最初に聞いたときから思ってた。んで、予想通り、あの地域のルールはかなり厳しいもんだ。だが、アンタという施して弱小共が食い物にありつけ、あまつさえは我が物顔で縄張りの森の中を駆け回ったときだ。するとどうだ、虫ポケモン……てめえがかなり強いと言っていたアイツラにとつちや面白くねえ話になる」

実際、しつこく攻撃してきたメガヤンマはかなり怒り狂っていた。メガヤンマにも自分なりのこだわりやプライドがあった。だから、その場のルールを侵した人間と弱小ポケモンたちが許せなかったのだろう。

「どこもかしこも手を取り合って生きてるわけじゃねえんだ。そしてブチ切れた集団は必ず禍根を傷とともに残していつちまう。……ま、今回は幸いにも命もなんも失われなかったんだ。リーフストームの威力で頭も冷えたろうし、自分より強いやつがいるこの街に報復に来たりもしねえだろうよ。安心して過ごすこつた」

「……あたしが、悪かったんだ」

「仕方ねえよ。どこにでもある話だ」

ユンジのスポミーと同じだ。どこにでもありふれた悲劇だ。

優しさは時に、誰かの怒りのトリガーになり、悲劇の幕開けという仕掛けを動かす。今回はナタネの優しさが、メガヤンマたちのプライドを傷つけ発展しただけのことだ。その場に居合わせないだけで、こ

んな些細ごとで失われる命や、悲劇が繰り返されているものだ。

見るからに肩を落とす彼女に、ハツと笑ったハマゴは言い放つ。

「しゃーねえしゃーねえ、あんたはこれまでずっと忙しかった上、長く見ず知らずのポケモンを施せる立場にいるせいで余計話がこじれちまったんだろうよ。ま、次がねえようにすることだったな」

「……ありがとう、そしてごめんなさい」

「気にしねえよ。外面や言動のせいで厄介事なんて日常茶飯事だ。んなことより首がちゃんど肩の上に乗ってることに喜んどけ。あの時避けなけりや俺は死体を持ち帰るハメになつてたからな」

あつけらかに笑った彼の言葉に、ナタネは思わず首をさすった。

メガヤンマのソニックブームは、ナタネの頭上を飛び越えた直後に他の木へ直撃し、きれいな断面を作っていたのだ。人間などという柔らかな素材に当たったとき、どんな悲劇が起きていたか。想像するだけでも恐ろしい。

「俺から言える問題はまあ、残りは一つだ」

「あの子達のこと、だよな」

「ご名答。ま、幸いにもジムトレーナーで育てるやらジムで放し飼にするやら方法はいくつでもあんだろ。一番気をつけなきゃならねえのはあの森に近づけるなつてことだな。ほとぼりが冷めようと、ルール違反の裏切り者だ。生かして縄張りに踏み入れることを許すほど、野生は甘かねえ」

「もちろんあたしが引き取るわよ。こうなつた責任はジムリーダーとして……深く考えずに行動したあたしが、責任をとる」

強い意志とともに宣言された言葉に、そうかいと軽く返したハマゴ。

もうここから先は自分の領分ではない。ナタネがそう決めたのならそれでいい。くさポケモンたちの命を助けて、回復するのが目に見ている。なら、ポケモンドクターとしてこれ以上は何もする必要はない。

彼は足音を響かせながら、ナタネの元から歩き去る。

未だに俯いて、軽率だった己を恥じる女性をゆつくりと一人で見つ

め直させるために。

「アンタもういいの？ 挨拶の一つもしないなんて」

「んなこと言われてもな、観光も終わった、用事も無し。ついでに医療知識も収穫は無し。だったらもうオサラバで良いはずだぜ」

「ふうーん、なんというか、考え方が複雑よね。未だにわっかんないわ」

「分かれてもこつちが困るだけだつつの」

ハクタイシテイを背中に、合流したマーズと共にハマゴは街道を歩いていった。ナタネに関してはすぐさま立ち直るだろうし、何の心配もしていない。文字通り一つの心残りなく旅の準備を整えた彼らは、また新たな街を目指して歩を進めている。旅路の再会といったところだろう。

「そんで？ 外に出しとくのが気に入ったのか？」

「どつちかって言うのと狭いとこ嫌いらしくってね。まあジラーチの遊び相手が増えたから良いんじゃない？」

そう言ったマーズの隣には、元気そうに飛び回るロトムの姿がある。ジラーチも新たにできた仲間に興味津々なのか、ここぞとばかりに話しかけようと試みるがロトムはけけけけつとけたたましい笑い声と一緒にジラーチを見つめるばかり。

そのうちムツとしたジラーチがロトムに飛びかかるが、生憎ロトムのタイプはゴースト混じり。空中でみごとに実態を掴みきれなかったジラーチは、ロトムに流れる電流にダメージを受けた後、受け身もロクに取れず地面に頭から突っ込んだ。

「手間が掛かるやつだ」

その羽衣を引つ掴んで肩に引つ掛けたハマゴは、ジラーチが完全に気絶してしまっていることに盛大なため息をついた。いざつてとき以外はやっぱポンコツだよなあと言う呟きには、なんとも言えぬ感情が込められている。

幻のポケモンという幻想を崩す音が今にも聞こえてきそうである。

実際にハマゴの中では石の彫像が音を立てて崩れ落ちるイメージが渦巻いていた。

「まあ厄介事も過ぎ去ったんだ。次の目的地を目指そうぜ」

「それフラグだと思っただけだ。えーっと、このまま東に向かうと……？」

マーズが確かめる地図には、テンガン山の洞窟を通過してカンナギタウンがあると記されている。昔を伝える街であり、シロナの生まれ故郷。別段そういった意図を持って目指していたわけではないが、森から抜けたのだからまつすぐ行くこうといった単純な発想である。

「その前にはデカイ谷があるな。……谷、か。確か手足の痺れに効果のある薬草があったっけか」

「また寄り道？　ま、いいけど」

まるでコウモリのように腕にぶら下がるロトムで遊びながら、マーズが微笑みそう言った。

彼らの旅は、まだまだ続く……

谷底に咲く

しばらくは街道が続き、半日もしない内に抜けた先は平原が広がっている。広々とした大地に風が吹き込んで、緑の絨毯がやわらかくしなつては太陽光を照り返す。真っ白な線が揺らめいて、通った風の現在地を知らせていた。

ここまで広い平原ともなると、いくつか乱立する木はあれどハクタイの森と正反対の爽やかさが溢れていた。平穏な時間を提供するよな平原だが、旅人たちはこの先にすぐさま壁があることを知っている。そう、テンガン山だ。

ハクタイとカンナギを結ぶ道のど真ん中に、テンガン山という巨大な山がある。シンオウ地方の歴史の深さの原点であり、同時に標高の高さにおいても頂点に位置している。何より、神話の存在が今も息づく現代に続く伝説の地であることは、知る人ぞ知る事実である。

「……相つ変わらさずデカイわね」

かつてアカギが夢破れた場所であり、かつて己の栄光が沈んだ山だ。感慨深げに霊峰を見上げるマーズの目が細められている。下からでは見えず、上からも視認できない。なのに険しい内部を通れば初めて姿を現す、「やりのはしら」という伝説と触れ合える窓口。

マーズにとって余りにも因縁がある土地だった。今までは近づこうともしなかったが、いざアカギのことを心から切り捨てた今となつては、浮かんでくる感情も別なものになっている。

「引きずってんのか？」

「まさか」

ハマゴの軽い問いかけに鼻で笑ってみせた。

もう、自分はある場所で禊を行ったようなものだ。抜け落ちたものは多かったが、それ以上に今手にしているものは多い。狭い閉鎖された感情と知識。アカギにとって使いやすい手駒にするための教育だったのだろう。だが、それを通過したからには、

「抱きかかえてるもん、今度こそ落としたくないって思っただけよ」

少しだけ陰がかかった表情で彼女はそう言った。

ハマゴは吹き出した。

「ぶつぷお！ ポ、ポエミーなこと……」

「大事な場面で笑うのやめてくれない？ 正直不快なんだけど」

「わざとに決まってるんだろ馬鹿女」

「あんたあたしに何の恨みがあんのよ!?!」

「いや、別に？ なーんもねえぜ。面白いからやってるだけだ」

悪びれもせずに言い放つハマゴのセリフに、今生何度めかもわからないため息が漏れる。この男と関わってからのため息が何割を占めているか分からないが、数えるだけ碌な結果が出ないだろう。

それからまた、平原の中央で整えられた道を歩いて行けば目の前にあったテンガン山はただの岩山のように彼らの前に立ちふさがった。このあたりの地形はかなり急で、途中から車道と別れた歩道を行った彼らは山の中へ続く横穴の入り口への順路を取っていた。

いつのまにか草木は控え、ゴツゴツとした赤茶色の岩肌が目立つようになってきた。丸太をつなぎ合わせたものや、ロープなどを用いて作られた頼りない橋がいくつも掛かるほど急な溪谷が、平原の代わりに顔を覗かせている。

下を覗いてみれば、かなり流れの早い川が流れる底が見える。また、階段状になった台地では、何人かのポケモントレーナーがそんな命の危険があるような場所でバトルを繰り返しており、飛び交う岩石と水飛沫が彼らの視界に入った。片方のポケモンは相性も悪く、ジリ貧の様相を呈している。

「バトル、か。トレーナーってのはやつぱすげえな」

ふとハマゴから発せられた言葉は、誰の耳に入るでもなく無音の波に飲み込まれていった。バトルよりはただの喧嘩、喧嘩というよりは命のやり取り。彼にとって生涯で経験したバトルは、そんなシチュエーションばかりだ。

自分の利益や欲望ばかりを優先するファウンスのポケモンや珍しい植物目当ての密猟者たち、自分を狙うため街まるごと停電状態にしてみせたギンガ団。こうして挙げてみれば、彼の人生がどれだけ波乱万丈であるかが伺える。

もちろん、健全で公式的なポケモンバトルを何度も見ているのでそれが全てというわけではない。それでもバトルを見るたびに彼は思うのだ。ポケモンとトレーナーの間で深まる絆、成長していく強さ。自分とは別のベクトルではあるが、自分の界限と違ってなんとも健康的なものだと。

別段今の仕事が嫌なわけではないが、別の道を歩んだ身としては思うところが無いわけではないのだ。一種のあこがれのような感情を抱いたことすらある。ある意味でポケモンの本能そのままに生きさせてやれる生き方だ。ポケモンの命を預かり、意思を尊重する立場としてトレーナーという存在は何かと眩しいのだ。

(ま、それでもついてきてくれたコイツにはいくら感謝しても足りねえがな)

すつ、とキュウコンの入ったボールを撫でる。バトルにおける潜在能力はあっただろう。だが、それでも彼女は数多のポケモンの命を救い、患者が己の体と戦う中で外から支える側の存在になった。そのため普通のポケモンでは出来ない器用な技の使い方や、野生とは程遠い知識を第一とした生き方を学んだ。

「今度はあんたが考え込んでんの？」

「まあなあ、釣られちゃまったって言えばそれまでだ」

ニツと口元を緩めてボールの頭を叩いた。これからも頼むといった合図だが、相棒には伝わっただろうか、いや、いつものことだ。伝わっているに違いない。

らしくない感傷に浸って、かぶりを振ったハマゴの目には薄暗くなってきた空の色が入り込んできた。ここに到着したときには夕暮れになっていたが、高い岩が囲む溪谷だ。日の光は遮られ、すっかり足元も危険な山道に変わっている。

「暗くなっちゃまったか。ここらで一休みすつか」

「ハクタイからそれなりに歩いたしね。どこにキャンプ貼るの？」

「ん、ちよいと待ってくれ」

操作したポケッチの画面。一本の花の画像が表示されて、隣の文章を読み込んだハマゴ。この時点でまたか、と頭を抱えるマーズ。サイ

ホーンのときもそうだったが、薬になりそうな植物があるところへ寄っていくのはもはや恒例行事である。

「この谷底、時間で水位上がるとかはねえか？」

「だろうと思った。心配しなくてもまったく不安なさい」

「んじゃそこだ。朝イチで採取に行くからよ、明日は朝飯から昼まで自由行動つつうことで」

「りよーかい。そんじゃクロバット、ちよつと近道するわよ」

マーズのモンスターボールから繰り出されたクロバット。いつぞやのコトブキシテイのように、足の片方ずつにつかまった二人はあつさりど谷底の平らな場所に辿り着いて、ハマゴの荷物から TENT を展開し始めた。

カン、カン、カン、と打ち鳴らされる杭の音を背景にして、マーズがドータクンと共に夕食のシチューを作り始める。キュウコンはいつも通り神通力を用い、ハマゴの荷物からポケモンフーズを取り出して、ポケモンの数だけ皿と盛り付けをしていた。

カンツとひとときわ高い音が響いた。固定のため、最後の一本を打ち終えたハマゴはハンマーを片手に火の元へ近づいていく。小さな折りたたみの椅子に腰を下ろした彼は、ハンマーを片付けハンドソープを手にとった。すぐ隣を流れる川の水を桶に掬い入れ、キュウコンへ合図を送れば、尻尾だけで彼女が返事をする。

ふわっ、と青白い鬼火が彼女の尻尾から一つ離れ、ハマゴの持つ水の中へ溶けていく。それから数秒後、すっかり熱くなったお湯に手を付けながら、ハマゴはしっかりと手洗いを済ませて食卓に向き直った。

目の前には湯気を立ち上らせる皿が差し出される。

「はい、あんたの」

「サンキュ」

炊き上がった白米と、簡素なシチュー。屋内での食事を経験した後だからか、こうした谷底の川の側というシチューエーションで差し出された料理は、美味しさも何割増しかに見える。鼻をくすぐった香りにゴクリと鳴らされるハマゴの喉。グルル、と猛獣のような腹の音も相

まって、彼はもはや腹をすかしたケダモノだ。

生物誰しも欲求には逆らえない。微笑ましいものを見るように小さく笑ったマーズも席につき、パンと両手を重ね合わせた。ドータクン、クロバット、ブニヤット、キュウゴン、ジラーチ、ロトム。彼らの持つ全てのポケモンもポケモンフーズが盛られた皿の前に揃い踏みである。

「いただきます」

ポケモンたちの鳴き声も重なって、騒がしい食事は幕を開けた。

彼らの胃に美味しい美味いとかき込まれていくシチュー。時折近づいてくる最愛のポケモンたちに、その一部をおすそ分けしながらも、暖かな食卓は、炎の揺らめきとともに明るく照らし出されていった。

そんな時だった。パラパラ、と彼らの食事処から少し離れた岩壁が音を立てる。落ちてきたのは少量の小石と砂。幸い風の吹かない地帯だったため食事は台無しにならなかったが、いち早く反応したハマゴが音の発生源に目を向ける。しかし、既にそこに音の主はいなかった。

「……このあたりのポケモンか？」

「かもね。大方お腹すかせてたつてトコじゃないの？」

言いつつ、スプーンを口に運ぶマーズ。彼女にとつて戦闘態勢に入るのには1秒もいらぬ。それ故の余裕の態度である。もともと、現状彼らにはギンガ団……もといマグマ団がいつ接触してきてもおかしくはない。今のは姿が見えない限り、ポケモンではなくそうした輩である可能性も捨てきれない。

彼らは最大限の警戒心を持ちつつも——まったく食事の手を止めることはしなかった。

「なんかあったら対処頼むわ」

「はいはい。ブニヤットちゃん、多少は足温めといてね」

に“や、と鳴いたブニヤットは残りのご飯を全て平らげて、ぐつぐつとその場でストレッチを始める。どちらにせよ体がなまってきたところだ。訓練がてらちようどいいだろうと体を伸ばしたところで、今度はハマゴが疑問符を掲げる。

「ん？」

「どしたの」

「いや、そういや影っぼいのがあったなど。なんか長え、細いのが見え
たような」

「このあたりのポケモンだったらリーシャンかしらねえ。ま、ギンガ
団連中じゃないならいいわ。リーダーの方は何かある？」

「いんや、野生ポケモンの域を出ない波長ばかりだ」

「なら気にしなくても良いんじゃない？」

「それもそうだな」

呑気な会話を繰り返す二人に、ブニャットはもうちょい危機感を
持てとずっこけた。だがキュウコンの方はいつもの事だと、首を振つ
てポケモンフーズをまた一つ喋んだ。いざという時は完全に寝た状
態から跳ね起きることが出来る主だ。心配事なんて有りはしないと
軽くブニャットに言うが、未だにハマゴについて疑問が解消しきれて
ないマーズの手持ちにとっては首を傾げるばかりだ。

新参のロトムは楽しければそれでいいやと言った様子で近くの手
持ちたちに話しかけており、ジラーチに至っては最重要であるのにポ
ケツとした様子で会話の中身そのものに疑問を掲げている。まさに
「ポケツとモンスター」だろうか、座布団が全部持つてかれるような低
俗なシャレを、ポケモンたちの様子を見つめながらに思いついたハマ
ゴはアホらしと呟いた。

そんな彼らの視界に入らないよう、スニーキングしている者もい
る。それは、先程の小石を落としてしまった張本人。長い耳をピンを
張って、辺りをしつかりと警戒しながら覗き見る姿はプロの諜報員
も顔負けだが、欠点もある。いざ攻撃的な存在に出逢えばあつという
間にやられるということだ。

隠れているポケモンの名はミミロル。ハクタイの森からついてき
ていたミミロルは、未だに彼らの前に現れるタイミングを逃し続けて
いたのであつた。

まだまだ誰も寝息を立てている早朝の出来事だ。張ったテントにパチツと明かりが付き、むくりと人影が起き上がる。やがてテントの入り口を捲り上げ、月明かりに青髪を揺らしながら現れたのはハマゴであった。

パチャパチャとゆったり流れる川の音に耳を傾けながら、少しばかり歩いた彼は河岸に設置した椅子に座って空を見上げる。そして一息ついた後、ポケッチをカチリと押しとある場所へとコールを掛けた。

山や洞窟でも、深奥まで行かない限りこの世界の通信機器は十全に機能している。それが谷底であろうと変わりはない。コールが5回ほど鳴った後、向こう側の受話が完了した電子音が聞こえてすぐに彼は口を開いた。

「ようバトラー。研究職にしちやあ、早い回復だな」

《ジラーチのことが気がかりで夜も眠れないのさ。それより、掛けてきたってことはメールは見てくれたようだね……早速だが、本題に入ろうか》

昼の間に彼のポケッチへ届いていた一通のメール。ポケナビから番号を引き継いでいる以上、ハマゴ宛のメッセージが届かない道理もない。早速時間を作った彼は、メールの通り都合のいい時間を選んで連絡を取ったというわけである。

病院のベッドの上で眠らずに待っていたバトラーも、今か今かと心待ちにしていたことだろう。

《まず、私の研究所はこちらに残ったマグマ団の残党が襲撃してきた》

「やっぱりか……こっちもギンガ団残党がマグマ団に吸収されちゃってる。奴ら、行動力だけは見習いたいもんだ」

《はは、……話を戻そう。私が研究していたのはジラーチのデータ。短冊に描かれた文字を我々の知る既存の言葉にしようというのと……過去、取っておいたジラーチの願いの力を膨大なエネルギーへ変換する研究成果だ。君も知ってる通り、ファウンスを一時死の森に変えたものさ》

言葉を区切るバトラー。

ハマゴが話についていく時間を取って、彼はまた続ける。

《そこでデータにコピーの後があったのは、後者の方だった。本来なら私の生体認証なしに持っていけないんだが、結果は知っての通りだ。そしてマグマ団は間違いなく、君のジラーチを使って再びグラードンを揺り起こそうとしているに違いない……》

ただ、とバトラーは不思議そうに言った。

《疑問なのは私のこの研究では、絶対にグラードンそのものを作り出すことは出来ないことだ。マグマ団が掲げていた“大地を増やす”なんて目的も以ての外、あれは周囲にある生命力を全て吸収し、ゆっくりと肥大化することしか出来ない上、ジラーチが受け取った彗星の力が尽きればエネルギーを撒き散らして破裂するだけの不完全な存在だ》

かつて勇氣とポケモンへの愛に溢れた少年たちの活躍によって、その最悪な事態が発生する前に食い止められたが、メタ・グラードンは所詮欠片を元にして大地にエネルギーを満たし、姿形だけを真似た不完全なものでしか無い。あの装置に残っていた観測結果から割り出された結果からも、破滅と悲劇しか産まず、コントロールも不可能。だというのに、ジラーチを使ってそれを繰り返そうとしている事にバトラーは疑問を抱かずにはいられなかった。

《だが、技術はあの時よりも進んでいる。悪意もそれだけ高まっているはずだ。私のデータを元にして、何か別の方法でマグマ団の残党は厄介なことをやらかすに違いない》

「それに関しちや言いたいことがある。近々、シンオウで奴らはデカイ事をやらかすつもりらしいぜ。流石に計画があつたとしても前段階だろうが、碌な事じゃねえのは確かだ」

《そうか……こちららも、私が居た頃より、マグマ団に関してはあまりにも無知にすぎる。だからオダマキ博士に頼んで、かつての団長マツブサに連絡をつけるつもりだよ。流石に組織の元長なら残党の思想や意見くらいは知っているかもしれないからね》

「今んとこはどっちも情報待ちか……とりあえずその情報、チャンピ

オンのシロナに渡しとくぜ。そっちは逆に知りたい事とかねえか？」
《ああ、とりあえずマグマ団はグラードンを使ったことから分かるように、伝説を利用する気だということだ。シンオウについてはかの新チャンピオンでもあった『英雄』が脅威を被ったと知っているが、かなり離れた土地ということもあって詳しいことはさっぱりだ。それらに関する資料があれば送ってもらいたい》

「了解だ。シロナも何かとツテがあるらしいからな。あと同行者も元ギンガ団幹部とかいう実績持ちだ。分かり次第連絡する」

《ああ……それとだ、一つ言い忘れていたことがあった》
「なんだ？」

既に通話終了のボタンを押そうとしていた手が止まる。

その間に、バトラーはあることについて話し始めた。

《君のジラーチの短冊にびっしりと書かれた文字。その解読は一通り出来たよ。やはり、それには願いの内容が描かれていたんだ》
「あいつが起き続けていられる理由、ってことか」

《中途半端なのは許してくれよ？ まず一つは、ジラーチに最高の出会いが訪れ……そこから先はまだ謎だ》

「最高の出会い、ね」

ふとハマゴは考え込んだ。出会った状況としては最悪だったが、果たしてジラーチにとって最高の相手といえるのだろうか。いつもは幻のポケモン相手ということすら忘れるようなぞんざいな扱いばかりをしているが、ジラーチ自身も完全に嫌がっては居らず、むしろ楽しめるようにしているつもりだ。

自分という日々が、本当に楽しいものならば。医者としてではない。ただ一人の人間として、思うところがある願いの内容だった。

《2つめは、ジラーチが永い眠りにつかず、十分に生きられるように。この願いから分かる通り、きつとあの子にとってこの目覚めが最後の生涯になるだろう。ちゃんとよくしてやってくれよ？》

「……わーってる。で、3つ目は何だ」

《言いくいが、最後はまだほとんど解読出来ていないんだ。ただ今のところ分かっているのは、前2つと違ってかなり難しい言語が使

われている。だけど一言だけ、『幸せと』というキーワードは分かった」

「幸せと……？ まさか、最後の願いは2つ目までとは別の人間が願ったのかよ？」

《そこまでは分からない。なんせ、あの短冊の文章は文献にすら残っていないほど古い文字だ。ルーン文字とも違うし、解説が困難だね……とりあえず、こっちの方は優秀なスタッフに任せてある》

これから忙しくなるからね、とバトラーは回線の向こう側で笑ったようだ。つられてハマゴも、悪どい笑みを浮かべてしまう。

「とりあえずはだ、ありがとよ。まあ、あの寝坊助が起きていられる理由なんざ、ある意味想像の範囲内ではあったがな」

《考えてみればあり得ないわけじゃないからね。どんな人間が願ったのかは分からないが、千年経ったところで願ったのは人間という種だよ》

「とりあえず、切るぜ。俺はこれから葉草採取の時間だ」

《ドクターの本分お疲れ様。私もそろそろダイアンが迎えに来る頃だから切らせてもらうよ……話してみてわかったけど、君とは改めて会ってみたいものだね》

「そうだな。旅が終わったら適当な飯屋にでも行こうぜ」

《楽しみにしてるよ。それじゃ》

通話が切れ、ハマゴはポケッチの仮電源を切る。その場から立ち上がって手や足の柔軟を始めた彼は、岩肌で揺れる草花を視界に収めた。時間だと言ったのはこの花が咲く時間帯にもあったのだ。

長く伸びた茎の先には、小さくてこじんまりした黄色い花がついていた。だがその周囲には似たような形をして茎の先が蕾のように膨らんだ植物が多く、花が咲くまで判別は難しいであろう形状をしている。この険しい崖を登ってまで、危険な場所へ取りに行くのは無駄な苦勞をするだけだ。

「ツカメソウ、か。シャレの効いたネーミングだな」

割とこの世界に溢れているネーミングに苦笑を漏らすと、彼は手袋と靴を履き替え暗い谷の影の中へと消えていった。上流に行くほど

花は多いというナナカマド博士の研究所からコピーした資料を参考にしての行動だ。

テントに残されているマーズたちも、そのうち起き上がって残った夕飯のシチューを食べ始めるだろう。やることは増えたが、今日もまた普通の一日が始まりそうだという予感が彼の頭によぎる。

静かになったテントの側。小川のせせらぎばかりが聞こえる場所。だが、彼が言ったことを確認したからなのだろうか。ブクブクと泡立つ謎の影が、水底より浮き上がってきていた。

大口開けた闇の穴

ピリリリリリリリリリ!! ピツ。

無造作に置かれた右手が画面に触れた途端、もぞもぞと布地を動かす奇妙な生物。その端から赤色のぐったりと伸びた毛を覗かせたそれ。またの名をマーズという女性は、半開きになった目であたりを見直し、ぐつと体を伸ばしてみせた。

「んんー……もう朝あ?」

夢を見ていたのだろうか。夢を忘れているのだろうか。それともそもそも見なかったか。眠る直前から真っ暗に暗転、そして一瞬で迎えたような感覚と、たしかに眠っていることで鈍った体が思考とバラバラの緩慢な動きになっている。

暖かさがほんのりと残る掛け布団にもう一度体を埋めたい衝動に駆られながらも、必死にそれを我慢する。んあつ、とおおよそ女性のイメージが崩れた適当な掛け声。誘惑という名の物体を取っ払うと、テントの隙間から入ってくる冷たい空気にヒンヤリと肌を凍えさせて、背筋を震わせた。

あくびを一つ。ぼやけた視界をこすりながら、チラリと腹を見せてだらしない寝間着姿で外に出る。まだまだ傾いている太陽の光は谷底にまでは入らないので、薄暗くもその中で輝く焚き火の炎がマーズの前面を黄色く照らし出した。

次に鼻孔をくすぐったのはシチューの香り。腹に直接殴りかかってくる暴力的なまでの攻撃に、直撃を受けた欲求は腹を鳴らして抗議した。ぐぐぐぐぐ、いつもの光景である。

「おはよう」

「おはよー……」

先日の夕食とは逆の光景だ。

何らかの薬草か、はたまた調味料でも加えたのだろうか。昨日よりも緑色の使者が紛れ込んだシチューの入った器が、マーズの前にコトリと置かれた。大抵こういうときはハマゴの仕業である。だが、それにハズレという文字は存在しない。

「いただき——」

「……の、前に顔洗ってきやがれ。水ならキュウコンが濾過しといってくれたからよ」

「あーい……」

ガチガチとした岩場というよりも、暗く閉鎖された崖のしたという環境だからだろうか。いつもよりも圧倒的にグラグラと意識の薄いマーズを尻目に、やれやれだと首を振るハマゴ。

マーズは簡易的な水桶に溜まった冷たいそれを手に救うと、バシヤツと自分の顔に懸けて丁寧に洗っていく。肌を傷つけず、かつ全体的に塗りたくるように。最初に手を入れたときからだ、徐々に彼女の意識はハッキリとし始めていた。

水面に映っただらしない格好に気がつく、軽く手ぐしで髪の毛を整える。少し流れてしまっているが、朝の間はこれでも十分だろう。顔だけはまともになったマーズは、今度こそ食卓の場に着いて「いただきます」と手を合わせて口を動かし始めた。

「へえ、美味しいじゃない」

「いつものことだろ。ほら食った食った」

「わかったわよ」

コトコトと煮込み直すシチューは、先日比べて少し固まりやすくなっている。だがそれがいい、という人がいるように、この二人も一旦置いたカレーやシチューの方が好きなタイプだ。サラサラすぎるのは嫌いではないが、置いたものに比べれば負ける、という思想の持ち主である。

「よし、出てこいジラーチ」

当然ながら余すこと無く食べられたシチュー。鍋の内側に僅かにこびりついた程度に残るそれは、キュウコンが「じんつうりき」で浮かして綺麗さっぱり取り払い、ジラーチの前にある皿の中へと飛び込んでいく。

当然のように寝ぼけていたジラーチだったが、ハマゴが羽衣をひつつかみ、そのままバルブのようにぶん回すとビックリして飛び起きてしまった。最後は遠心力に任せて上に投げ、落ちてきたところをハマ

ゴがナイスキャッチといった具合だ。

ジラーチは寝起きでいきなり虐待じみたことをされてお冠だったが、無言でスツと差し出されたシチューの残りとスプーンを渡され、不機嫌な感情もどこへやらといった具合である。幸せそうな表情を浮かべながら、一心不乱に食べ始めていた。

「んじやデカイもんは洗つとく」

「ジラーチもすぐ食べ終えるでしょうし、小さい方はキュウコンとあたしでやつとくわね」

ハマゴは鍋や、机などの設置具を。マーズは皿をはじめとした小物を片付けはじめ、キュウコンは食器などを洗うための水を神通力で川から浮かし、すぐさま火で炙って蒸留させると、気体になったそれらをこれまた神通力で洗い物用の水桶に移し替える。そうして準備された後は、マーズのやっていない小物をテキパキと片付け始めていた。

一方、シチューの残りを食べきったジラーチはご満悦でお腹をポンポンしている間に、ハマゴが空っぽの皿を取ってマーズ側に投げ捨てる。飛んでくる方向も見ずにキャッチした彼女は他の洗い物と一緒にそこへ入れると、ザバザバと一緒に洗い始めていた。

朝の食事が終われば、次は朝の体操である。

ポケモンたちを全て出して、ハマゴがそれぞれに考案した体操をやらせる。ドータクンなら腕のような部分を中心に、サイコパワーの精密動作確認。クロバットなら羽を中心にした柔軟と、一定の飛行方法が十全に出来るかどうか。ブニャットやキュウコンは関節と神経を確かめる軽めの柔軟運動と、技の確認である。

ジラーチはというと、ドータクンとタイプが一緒であることから似たような体操に加え、しっかりと手足を伸ばし、第三の目がしっかり開くかどうかの確認だ。

「おお、やっぱ目力あるな。あいつの腹」

「むしろ怖いと思うんだけど」

ジラーチの第三の目といえば、お腹の真ん中からカツ、と見開かれたそれである。模様であるのか、眼球であるのか。ジラーチを始めと

する幻のポケモンは、内部までの詳しいスキャンが通らないため真相は闇の中だ。

第三の目は他にも、バトラーがジラーチの力を利用するとき、千年彗星のエネルギーを受け止めて願いを叶えるそれを、単にグラードン復活のために回されていたということもあつた。特別な力を使う器官であるが、別に普段からカツと開いてもパワーを回さなければ不思議な事は何も起こらないようである。少なくとも、ハマゴやマーズが慣れる程度には。

「戻れキュウゴン」

「みんな、戻って！——さて、あんたの用事は終わってるの？」

「時間が時間だからな。咲いてる間にしっかりと採取させてもらったぜ」

ほらな、と差し出された試験管には、彼が求める花が収められている。その状態を維持するため、ほんのりと水色っぽい液体越しであるが、時間を過ぎても開花したままの花を見てなるほどね、とマーズは呟いた。

「それじゃ行っちゃう？ テンガン山抜け」

「ああ、カンナギ方面で頼むぜ」

すでに車や交通道路が整備されているだけあって、テンガン山の内部を徒歩で抜けていくルートは、ある程度の獣道こそあれど正式に補導されている場所は無い。自らの足で旅をする旅人たちのためのルートでもあるが、それは薄暗く険しい洞窟の中。一筋縄ではいかないう道のりが待ち受けているというものだ。

テキパキとテントも片付け、ハマゴの背負う荷物の中にピッタリと収まったところで、彼らは降りてきた急な斜面を登るためザリザリと石を蹴り転がしながらあるき始めた。しかし、あの重い荷物を持った上でというのは、ハマゴに相当な負担が掛かるはずである。

流星のアイツといえども、ギブアップしそうなら素直にクロバットを貸してやろう。そう思って少しばかり息を切らしながら、斜面の途中を歩いて行くマーズはふとハマゴの方へと振り返ってみたのだが。

「……あんた、ホントに人間？ ポケモンが化けてるとか無いわよね

？」

「んだテメエ。いきなり何言ってやがる。寝てる間に脳でもやられたか？」

「いや、聞いたあたしがバカだったわ……」

ピンピンしている。それどころか、ハンドバッグ程度の荷物量しか無いマーズですら少しばかり息を切らしているのに、ハマゴの方は余裕の表情である。吐き出す息でメガネが曇っている、などということもないので、やせ我慢でもないのだろう。

こいつとただだけ過酷な環境にいたんだ、と。自分もある意味前線から戻ってきてはまた行くなど、過酷な労働を強いられる職場にいた事を棚に上げて内心ドン引きしているマーズ。ある意味で悪い夢だと断じた彼女は、思いを振り切ってテンガン山を抜けるための先導に専念するのであった。

「……対象・ジラーチとその護衛はテンガン山に入りました。どうやらカンナギへ向かう模様です。よほどのことがない限り、作戦時にトバリへ到着することはないでしょう」

水の中に仕込ませた機械からの動画を元に、火山を模した腕章をつけた者が機械的に告げる。ハマゴたちが洞窟の中へ入っていく映像を最後に、モニターは先程の映像で、彼のバックパックの上に乗っかるジラーチの拡大画像へと切り替わった。

静かな部屋に、ふんと鼻を鳴らした声が響く。

「キツサキにでも行ってくれたほうが、雪に紛れて奇襲も楽だったのだがな……まあいい。トバリでの作戦後はそのまま奴らの確保に行けばいいだろう。ジラーチの確保にそう急ぐ必要もない……」

「監視は打ち切りましょ。そろそろここも破棄する予定だし」

新生マグマ団の数あるアジトの一つ。マグマ団の中でも上位の権限を持った者たちのうち、二人がそこにいた。ジラーチという宿願への足がかりがすぐ手に入るかもしれない場所にあるというのに、あまり感情らしきものは見られない。よほど彼らの言う次の作戦という

のが大事なのであろう。むしろ、それを経てこそジラーチに価値が生まれるとでも言うのだろうか。ここまでギンガ団以外、ロクな襲撃をしてこなかったことから事情は窺い知れる。

ここで明らかになった事実としては、彼らの行う大規模作戦の目的地は「トバリシティ」だということだろうか。前にハマゴたちが手にしている情報と合わせれば、トバリシティ壊滅の危機がすぐそこにまで迫っているということ。

当然、まだシロナたちはその情報を手にしていない。気になるのはその猶予期間。この悪意が侵略するその時間だが――

「そう言えばトバリのジムリーダーは戻ってるの?」

「いや、我らのリーダーのおかげでまだ武者修行に出たまままだ。現在はミオシティで鋼鉄島への出港準備をしているらしい。まだまだ青臭いガキだということだな、完敗した程度でジムを空けるとは」

鼻で笑う男にとって、少女たちのバトルに掛ける情熱なんてものは何の価値もない物であるらしい。まるでやんちゃな子供に苛つき、鬱陶しいと思っっているような態度で、行儀よくしてろ心のなかで毒づいている。

質問をした女も同様、彼女らの現状を知ってあざ笑ってみせた。彼ら新生マグマ団にとって、ポケモンとは「最初からある程度強いもの」なのだ。当然、強いトレーナーをバトル以外の方法で倒し、奪っているのだから強いのは当たり前である。

従わなければ、プルートを死にかけになりながら開発させられていた「洗脳マシン」をポケモン用の出力にして従順にさせ、いずれはマシンを使わずとも自分たちに使われることこそが生きる理由だと誤認させる。鬼畜外道の所業とはまさにこのことだろう。

良識なんて、犯罪集団である彼らには微塵も持ち合わせていない。全ては目的に至るための手段であり、自分だけの幸せを使うための道具だ。今ここにいる仲間たちですら、途中までは庇うように見せるだろうが……本質はあのニューリーダーと同じだ。最後の最後で、自分以外は簡単に切り捨てるだろう。

「まあいい、準備ができ次第招集をかけるぞ。我々の数は少ないのだ

からな」

「はいはい。まあ手足はいくらでもその辺に居るんだけどね」

プルートの残した人間専用の洗脳装置を見ながら女は笑う。他人の人生なんてどうでもいいのだろう。それが壊れようが、脳に生涯を負おうが、身体に異常が発生しようが、所詮は他人事。むしろ、自分たちの目的のために死ねて幸せだろうと勝手に想像する。ある意味で、狂ったジユピターと同じような思想だ。

願わくばこのような人間、世の中の法理などに関係なく、居なくなつたほうが害が減つてちよいどいいだろう。だが世の中とはこんなものだ。蹴落とす側のみが生き残つて、躊躇した方はどれだけ高潔な意志があろうと世界に残らない。

結局のところ、倫理なんてものは人間が勝手に作り出したルールだ。自然界には何の意味も持たないということ。故に――

「さあ、2日後のパーティ準備よ」

「そうだな」

間に合わないのだ。良き心を持つたものたちは、いつもその心のせいで倒すべき相手を取り逃がす。自らもその非情に徹することが出来ればいいのに、出来ないからこそ。

つかつかと廊下を鳴らしてドアを閉める二人に続き、マグマ団の正式団員と、荷物持ちの洗脳団員が続いていく。機器は全て移動することを想定した分解型なのだろう。テキパキと短時間で荷造りが成され、やがて彼らが使っていたアジトは書類一枚も残っていなかった。

シロナたちにも、もはや彼らを止めることは出来ないのだろうか。マグマ団は完全に撤退している。情報の一つすら残っていないこの場所に辿り着いたところで、シロナがやっていたように終わりのないイタチごっこが続くだけ。

果たして、そうだろうか？

ごそつ、と天板が外れる音がする。

「……………任務、完了」

降り立ったのは忍びのような黒い装束をした、灰色の髪をなびかせる影たち。マグマ団たちの弱点は、これだ。次々に拠点を移し、短時間しか留まることが出来ないため、周辺の索敵が開始される前に潜入していれば、内部の警備はガラ空き。洗脳された団員いっぽんじんたちは、そもそもが希薄な意志しかないと視界に入らなければ戦闘行動を取れない。

こうして気配の全てを殺すことが出来る人間がいれば、情報は全て筒抜けだ。

「式、報告を」

「ああ」

「参、男を追え」

「…ああ」

「潜り込む」

手短かに伝えあった3人。彼らはダークトリニティと呼ばれている、シロナが直々に雇った何でも屋だ。既に報酬を受取り、彼らの主……ゲーチスの元に送つてあるのだが、ゲーチス自身がまだまだ身を潜める必要があるため、そのために必要な活動資金を集めるためシロナから雇われ続けているのだ。

彼らこそ、悪意寄りではあるが中立にして、倫理に囚われたものたちには出来得ない仕事をこなす者たちだ。その働きぶりはこの光景を見ただけで分かるだろう。実質、ギンガ団残党や新生マグマ団に関する情報の8割以上は彼らの手によってもたらされている。

だからこそ、間に合った。

式、参、と便宜上識別されたダークトリニティの2人は、闇の中に吸い込まれるようにしてその場から掻き消えた。残る一人も、どこから取り出したモンスターボールを構えて新生マグマ団たちが歩いていった方向に顔を向ける。

直後、おそらく壺となるダークトリニティの一人が幹部の女がいる方へ尾行を開始した。

今、男が指揮して行った方は実働部隊だろう。洗脳団員の多くを引き連れ、気を引き締めたようにしてトバリシテイの方へと足を向けて

いる。逆に新生マグマ団の正団員と幹部の女が居る方は、少数であり
気を楽しんで向かっている。

どちらも一般人に見つからないルートを通っているが、女幹部が居
る方はかなり厳重な警戒を敷きながら、あらゆる電子機器の探知範囲
外へ、あるときはポケモンの鋭い感覚器官を利用した警戒を行って行
軍を続けている。ともなれば、女の方がマグマ団の本拠地がある方へ
歩いているということだろう。

「……………」

壱は、ここで焦って通信を行い、シロナへ報告するようなことはし
ない。そもそも報告と、いざという時の護衛を兼ねているのは式と呼
ばれた方だ。今の自分は完全に己を殺し、マグマ団の本拠地を見つけ
ること。金払いがいいだとか、シロナを気に入ったという感情はそこ
に微塵も存在しない。

ただ、「命令」であるが故に。どこまでも忠実で人形のようにありな
がら、たしかに人間である彼は密やかに足跡を消していく。

これまで秘された強大な「地」の悪意。それが明らかになる時は、近
い。

視点を「参」と呼ばれたダークトリニティに移すとしよう。

彼はトバリシティで行われる作戦の実働部隊の一部を連れた、新生
マグマ団幹部の男の追跡を開始していた。アジトから撤収する道中
で、ふいに辺りを見回した彼は部下に耳打ちしている。あの女とは違
い、神経質そうな見た目に違わず疑い深いのだろう。部下のレーダー
や周囲を見張るポケモンたちの様子を見ながら、付けられていないこ
とを何度も確認している。

ダークトリニティの「参」は息を潜め、体臭を周囲の草木と同化さ
せ、見つめているという感覚を消して相手の認識から完全にズレてみ
せる。およそ人間業ではない隠形に、ようやく警戒を解いた幹部の男
が通信を始めていた。

「…………アジトは引き払った。我々は今トバリに向かっている」

近過ぎもせず、遠過ぎもせず、小声であるが聞き取れる位置で「参」

は幹部の男の言葉を耳に拾っていた。流星に通信機から発せられる通信相手の声までは聞き取れなかったが、働きとしては十分以上だろう。

「ああ、問題ない。証拠は何一つとして残っていないはずだ。決行は……何？」

はた、と男が足を止めた。

「そんな馬鹿な……だが、リーダー。そんな笑えない冗談はよしてくれ」

幹部が話しているのは、我々でしか未だ正体を知らぬ、ニューリーダーだったようだ。おおよそ若く、しかし明らかに邪悪で実力を持った怪物。その相手から信じられない言葉を受け取ったのか、再び神経質な幹部の男は辺りを見回し、焦ったように部下から機器のモニターを奪い取る。

「だが機器やポケモン共には何の反応も！」

《……！ ツハ！ ……………》

「だ、だが……そうか。き、貴様の言うことに間違いは無かったな。仕方ない、その言葉に乗ってやろう」

完全に足を止めた男はその手に何かを握っている。それは、この世界に住むものなら、見たことがないはずもないありふれたモノ。モンスターボールだ。おもむろに放り投げた彼の側に、一匹のポケモンが青白い光の筋から、その頑強な姿を表した。

「メタグロス！ 周囲にサーチをかける!! 全域だ！」

その瞬間、「参」はその場から飛び退いた。

当然それを見逃すメタグロスではない。スーパーコンピュータを超える脳の処理速度で周辺を分析する中で、動く物体など容易くロツクオンすることが出来る。メタグロスは主人である幹部の男の指示を待つまでもなく、バレットパンチを発動させた。

銀の一矢となって「参」がいる場所へと急加速。だが身をなんとかよじらせ躲してみせた「参」は、電話越しというありえない状況から自分が居ることを予測してみせた「ニューリーダー」とやらの危険度を一気に引き上げる。

ほんの一瞬に過ぎないが、このまま人間たちにも姿を見られるのは不味いと考えた彼は、メタグロスの視界の外に外れ、再び気配を押し殺した。

（撤退、情報を持ち帰るべき。だが……）

大樹の幹を背もたれにし、ちらりとメタグロスを見る。まだトレーナーは追いついていないが、姿を見られたことには変わりない。そしてあの常軌を逸した速度、何もせずに逃げに徹するのは得策とはいえないだろう。

どこからともなく取り出したのはモンスタールボール。常日頃、ほとんど頼ることはないが、それ故に確実な切り札であるポケモンを繰り出すことに躊躇はない。

「…キリキザン」

持ち主に似たのか、寡黙にただ刃を研ぎ澄ますポケモン。主人の代わりにメタグロスの前に躍り出たキリキザンは、腕の横についたブレードを振りかぶりながら「だましうち」を放つ。しかし、対するメタグロスは動きを観察、計算して確実にキリキザンを弾き返す場所に鋼鉄の腕を挟み込んだ。

たたらを踏み、のけぞるキリキザン。その不意を打ってバレットパンチを繰り出したメタグロスだったが、キリキザンは軽い身のこなしで体をひねった。自身の刃をスケートのように滑り込ませ、硬質なメタグロスの腕を滑り抜ける。一気に眼前に躍り出たキリキザンに、「参」はカッと目を見開き呟いた。

「つじぎり…」

メタグロスの側を通り抜ける際に、キリキザンの刃が自然な流れで振るわれた。

しばし、硬直。

一陣の風が吹きすさび、木々を揺らす。

土煙が巻き起こり、メタグロスの巨体は地面へと倒れ込んだ。

「め、メタグロス！ そんな馬鹿な、こいつはエリートトレーナーが育てていたポケモンだぞ!？」

同時に到着したのはマグマ団の幹部連中だった。キリキザンは彼

らを一瞥したのち、木々の雑踏の中へと消えていく。すぐさま薄影ど同化して行ったキリキザンは先に離脱していた「参」と合流し、モンスターボールの中へと戻っていった。

あのまま尾行を続けるのは簡単だが、作戦実行地にはダークトリニティに何故か気づいてみせた謎のニューリーダーが控えているはずだ。そのまま捕まって、洗脳装置を使われてしまえばダークトリニティの名折れ、ひいてはここまで彼らを育て上げたゲーチスの顔に泥を塗る事になる。

確実ではないにせよ、強大なリスクが存在する中で現状最も有用な情報を手に入れている中、深追いする必要はない。

口元のマスクのズレを直した「参」は、すぐさま「弐」が向かったであろうルートとは別の道でシロナの元へと走り出した。

影の揺れる森の中、存在の跡すら残さずに。

彼と彼女の温度差

「孫娘から話は聞いてるよ。今日はうちでゆっくりしていきなさい」
優しいな声色は、これまで張り詰めていた彼らの心を解きほぐした。湯気と共に香り立つ熱い味噌汁をコクコクと飲み込んだ。少しばかり冷えた体を芯から温めて、ほう…と息を漏らす。魚を贅沢に使ったそれは、彼らの箸を進ませる。

ここはカンナギタウンで最も古い作りの家。普段は静かなこの場所も、二人の訪問者によって少しばかり和気藹々とした空気が流れているようだ。

テンガン山の洞窟を抜けてきたハマゴたちを出迎えたのは、すっかり暗くなつてしまつた夜空。彼らの姿を照らし出したのは、地上から放たれる仄かな文明の光だ。到着と同時に、いつも通りに、ポケモンセンターで宿泊の手続きを済ませようとしていた彼らが何故こんな所に居るのだろうか？ その答えは単純。シロナの話聞いていた彼女の家族が、ハマゴたちに声をかけたからである。

ハクタイで話していた内容を覚えていたのか、シロナは近日にハマゴたちが訪れることを家族に知らせていたらしく、ハマゴたちは白衣を着た老婆の案内のままに夕食を振る舞われていた。若者二人の食欲を想定してか、食卓には数多くの食材が並べられる。途中で老婆は研究所からの要請があるからと家から出てしまったが、彼らの夕食は問題なく始められた。

ジラーチも当然のように余すこと無く平らげ、最大限の感謝を述べるハマゴとマーズ。それに手を振り、活気を貰っているのだから気にすることはないとシロナの祖父は笑ってみせた。

ほんぽん、と腹をなでて瞳を閉じ始めるジラーチを尻目に、老人の口からゆつくりと言葉が紡ぎ出された。

「どうだいあの子は？　ここ最近手紙でしかやり取りしていないからねえ。無理はしてないかい？」

凄そうな掛け軸を背中に、どっしりとあぐらをかいて座るシロナの祖父は心配そうに彼らに訪ねてくる。たつた二人の孫娘だ。いくら

チャンピオンだ、世界的な考古学者だ、神と交信出来る者だともてはやされたところで、実態は家族を持つ一人の人間でしかない。

「今でも危機に立ち向かっている。だから、無理って言やあ無理だろうな」

「そうか……ずっと、変わらないね。あの子は」

「昔からののか？」

「ああ。だから、チャンピオンなんてものを続けていられるかもしれないね」

自分を曲げず、相変わらずやっているシロナの姿を想像しているのだろうか。懐かしむように明後日の方向に視線を投げかけて、瞬きとともに彼の瞳は曇ってしまう。それだけの立ち位置だ。巨悪に立ち向かい、最前線で士気を上げることも求められる。人の抱いたあこがれよりも、更に上を行かねばならないシンオウ地方のチャンピオン。常人では耐えきれないだろう。味方からも敵からも押しつぶされるようなプレッシャーがかかっている。

いつまでたつても孫の幻影ばかりを追い続けていては、目の前にいる客人に失礼だろう。上へ向けていた視線を戻した祖父がハマゴたちに向き直る。

「そういえば、君はどこから来たんだい？」

「ハウエン地方のファウンス……いや、フエンタウンだ」

そこで爆睡しているジラーチと出会ったファウンスは、あくまで仕事場だ。買えることも少なく、過ぎた時間は多いがあくまで生まれはフエンタウン。思い直して告げたその場所に、老人は「ほう」と目を見開いてみせた。

「フエン！　ハウエン地方とはまた遠いところから来たんだねえ。あそここのフエンせんべいは私も好きだよ。ああそうだ、漢方薬のおばあさんは元気かい？」

「知り合いか？　だったら、何年か前にぼっくり逝っちまったよ。なんかあれば親父に頼んで供えてもいいぜ」

「ああ、そこまで深い知り合いじゃないからね。でも彼女も逝ってしまっただか……老いているのがよく分かるよ」

それから少しばかり雑談が続いて、口調は荒くとも話し上手なハマゴと、老年ゆえの経験豊富なシロナの祖父と。彼らの口からは次から次へと話題が投げ出される。その中であまり会話に参加しなかったのはマーズ。気まづげに視線をそらして、ハマゴからわざと話題を振られた際には焦ったように答えを返すことの繰り返しであった。

それもそのはず。このカンナギに祀られている遺跡の伝承を探るため、アカギが直々に来たこともある上、孫を介しているとはいえかつて明確な敵対関係にあった人物の祖父だ。シロナ自身に対する確執はあまりないが、周囲との関係については未知数のところが多い。

現状、ギンガ団が普通のエネルギー開発企業として活動しているその様子を、危険な犯罪集団が野放しにされていると意見する声も無いわけではない。

「……ん？」

いたたまれない様子のマーズに気がついたシロナの祖父は、ふっと笑う。マーズのことは彼も知っていた。かつてこの場所に訪れた、あの悪の組織の首領が部下にしていた者だということ。だが、彼の長年の勤が告げている。もう害ある存在ではなくなっているようだ。気まづい雰囲気になるのも無理はないだろう、と。老人は腰を上げた。

まだまだ話したいことは山積みだが、一人の女声を蔑ろにしてまで続けるものではない。ハマゴも無言でうなずき、座布団から立ち上がった。

「そろそろ時間も遅い。君たちが寝る部屋に案内するよ」

「そうだな。夜更かしは誰にとっても健康に悪い。ほら行くぞマーズ」

「あ、わ、わかったわよ」

ジラーチの羽衣を二本ともひつつかみ、背中に回して吊り下げる。相変わらず扱いに慣れたせいで起きる気配の無いそれを乱雑に揺らしながら、ギイギイと古い床を軋ませながら彼らは部屋に通された。

冷たく、ほのかな明かりだけが頼りの廊下。

先導する老人がおもむろに口を開く。

「あの子のおかげでね、ワシらの家も広くなったもんだ。だけど、やっぱり3人だけじゃあ広すぎるもんでね、部屋は結構余ってるよ。だからこうして旅人さんを止めるのも、初めてじゃあない」

障子で遮られた部屋は多く、シロナの祖父と祖母、そして妹が暮らすにはあまりに大きな日本家屋。雄大で特徴的な屋根が広げられたこの家は、シロナの収入や彼女の周りの人間が実家であるから、と言った理由でいつの間にか広くなっていったそうだ。

「そりゃあ、最初は騒がしかったもんさ。チャンピオンの実家だ、立派な家だ、歴史の続く素晴らしい場所だ、なんてね。でもそれも最初の1年ほどしか続かなかったよ。あとに残ったのは、ただの老人と、村長の老婆と、普通の孫娘。次第にあの子がチャンピオンであることが当たり前になって……」

懐かしいね、と。その寂しさを感じられる声色であるのに、何一つとして不満もなさそうに老人は語る。彼女の祖母であるカラシナ博士と違って、彼は村長でもなく、研究員でもなく、凄腕のトレーナーというわけでもない。ただ単に暮らすだけの一般人。

だからこそ、孫娘を何の色眼鏡もなく見て、シロナの妹を何のしがらみもなく素直に育てることが出来る人物だった。積み重ねてきた年の数だけ、その能力をきちんと発揮する。回りが優れているからこそ、彼自身もそうした持ち味を持つに至ったのだろうか。

「マーズさん」

「は、はい」

「何も肩肘貼る必要なんてないんだよ。ワシらは何の恨みも抱いちゃいない。それどころか、アンタに恨みを持つてる人も、どうせ表じや口にも出せない臆病者さ」

考えていることが見透かされているかのような言葉に、マーズは足を止めて聞き入ってしまう。

「だからその若い力を余すこと無く、自分のために使いなさい。周りの視線なんて気にする必要はないんだ。ワシのように昔を知る人がいても、気にすることなんて無い」

「自由について……」

「そう思ったことくらい、あるだろう?」

かつて多くの立ち止まる若者を見てきた。

シロナがチャンピオンになって最初の一年で、挫折しかける若者が何人も訪ねてきた。きつと、彼女の家族であるなら成長できるはずなんだと期待して。だけどあのときは答えられなかった。この老人は何の力もない一般人だったのだから。

だけど今は違う。掛けられる言葉はありきたりでも、こうして過ごしてきた中で得た一つの答えを言っても良いじゃないか。

マーズはふと気がついた。スモモやスズナと出会った時。あのときは何も考えず、一人のトレーナーとして興奮していたな、と。他の何も考えられないくらい、バトルに魅せられていた。

思い出した熱い思いは、固まっていた体を溶きほぐしていく。

「うちの孫娘はどちらも、自由に育ってる。そんな彼女らの祖父であるワシが言うんだ。きつと間違いじゃないと思うよ」

「ありがとうございます」

気づけば自然と頭を下げていた。

こんな感情に何度も振り回されるほど、自分は未熟だ。

ハマゴと違って、まだ確固たる思いというのは強く定まっては居ない。投げかけられた言葉に平然と返せる度胸は持ち合わせていない。でも、ジュピターをこの手で止めたい。ポケモントレーナーとして遥かな高みへ上り詰めたい。この2つの思いは本物であるはずだ。

「さ、話し込んでしまったね……着いたよ」

「おお、広い広い」

「君はなんというか、軽いね。悩みがなさそうだ」

「んなことあ無えさ。俺だつてこのバカ伝説について悩んだりしてるっつの」

肩に背負っていたジラーチをアンダースローで整えられた布団にシユートし、ハマゴは押し入れの近くに荷物を降ろした。バックパツクから幾つかの道理を取り出し、ある程度整えると着替えを取り出す。

「お風呂はどうするんだい?」

「お、そんじやシャワーだけでも貰うわ。マーズはどうだ」

「あー…先に入っても良い？」

「あいよ。んじや爺さん、先に連れてってくれ。俺はちよいとやることかな」

「はい、はい。マーズさん、それじやあこつちに」

老人がマーズを連れて部屋を出たのを確認して、ハマゴは深い蒼色の単発をガシガシと搔いた。ふわっ、と大口から出てきた欠伸を噛んで、開いた障子から覗く月の光に誘われる。縁側へ作業道具と共に座った彼は、幾つかの木の実を取り出してすりつぶし始めた。

「なんつーか、重いよな。アイツも」

本人が聞けば二重の意味で怒りそうな事を呟いて、乾燥させたモモンとクラボを粉々にする。ホウエン地方特有のお菓子、ポロックの製法を取り入れたものだ。ただ、効果は単なるお菓子ではない。麻痺と毒を中和する即席の飲み薬である。

非戦闘時にしか使えないが、別に戦場医師というわけでもない。しつかりと治療に専念できる場所こそが彼の本領が発揮される場所だ。今まで様々な陰謀や、大騒動に巻き込まれては暴力沙汰で解決していたが、彼はれっきとしたポケモンドクターである。

そう、ドクターであるはずだ。

「……怪我人ばっか増やしてんなあ」

そうは言いつつも、今度は「戦闘用」の薬を作り始めた。

リュガ（渋さと苦さが強い）とジャポ（恐ろしく苦い）の実を取り出すと、慎重に試験官の中へと2つの果汁を落とし、より濃度の高いブレンドジュースを作り出した。そしてジャポの実の殻を僅かに落とすと、それを幾つかの小さな瓶に詰める。

完成したのは果汁手袋の弾薬だ。ジャポの実の乱雑に扱われるとはじけ飛ぶ特性を活かし、的確にこのブレンドを相手の口の中に投擲することで、その場で悶絶することが免れない苦味、エグみをプレゼントすることが出来る。その上、ノドの中に入れば勝手に弾けて食道まで飛んでいく特殊効果つきだ。前にサイホーンを盗んでいた密猟者の激辛粘液攻撃とはまた違った悪意の一品である。

「はあ」

心底気だるそうに人を傷つけるための薬を作った彼は、指に残った果汁をチロリとなめて、顔を青ざめさせた。この時点で相当なキツさが彼の舌を襲っている。ただの果汁でこれなのだから、今作ったのが実際に使われた時の相手は……そこまで想像して、ハマゴは思考を放棄した。

そんな時だ。作っているのはバイオ兵器でも、匂いは甘く、美味しそうな木の実が材料だからだろう。匂いにつられてガサガサと、シロナの実家の敷地内へ侵入する不屈き者がその存在を知らせる。

「——ハハアツ……！」

ひたすら凶悪な笑みは、まさに悪鬼羅刹そのもの。

先程まで相手を傷つけることを心底嫌っていたような態度とは反対の、あまりの豹変である。ただのチンピラから人を殺して回るギャングのような表情になった彼に怯え、ガサッと音を立ててしまった侵入者。

急いでその場から逃げようとするが、その前にハマゴはモンスターボールを鋭く投げ込んでいた。

「おにびだ」

出てきたキュウコンは彼の表情を一瞥して、また悪い癖が出たかのため息を吐く。そのため息は青く揺らめく炎となって、彼が示した方向をゆらりゆらりと取り囲んでいく。およそ神秘的だが、触れば立ちどころに大やけどを負う代償を持った攻撃が侵入者をいとも容易く囲い込んでしまった。

出来たばかりの薬と、前からあった瓶をセットして、ギユツと手袋をはめ直すハマゴ。「手術オペの時間だ」などと呟いて迫る姿はただの狂人にしか見えない。およそ善とは程遠い容貌で鬼火の示す茂みを覗き込んだ彼は、鬼畜外道を思わせる表情をスツと引つ込めるに至った。

うん？ という疑問の後、一度顔を話して考え込むハマゴ。

もう一度覗き込んでみれば、何故だという疑問符が見えるほどにゆたかな表情を作ってみせた。だが、見間違えであるはずもない。自分

の目は、腐り落ちたベリーではないのだ。

「ミニロル……？」

森からのストーリーカーが、ついに尻尾を掴まれた瞬間である。

金沙の髪を靡かせて、夜の黒に紛れる女性が独り。

片手のポケッチが映し出した独りの老婆と、なにやら会話しているようだ。

「そう、彼は今うちに居るのね。……分かった、できればそのまま留めておいてくれると助かるわ」

『あんたもあんたで随分な事に首を突っ込んでるそうじゃないか。ねえシロナ』

彼女の祖母が言う名前。

当然だが、この女性はシロナであった。

マグマ団の作戦を潰すための最大戦力としてこの場で待機していたのだ。

「いつものことよ。ねえ、それより本当に良かったの？ 彼らにあの玉を渡しても」

『英雄さんが持つてるような純正じゃないんだ。神を呼び出すような程のものでもない。まあ、神の力の補助くらいにはなるだろうけどね。でもそれだけだよ。あんたが危惧するような事は起きやしないさ』

「ならいいけど……あ、おばあちゃん。もう切るね」

眠りを感じさせない明るい街。街の全面にソーラー発電工事が成されたナギサシティともまた違う、まさに都会といった様相を見せる街。かつてのギンガ団の本部があり、現在の穏健派……ただの新エネルギー開発産業の本拠が在る場所。

「ジムリーダーが居ないからってのは分かるけど、こんなところで一体何をするつもりなのかしら」

実行部隊の者たちが言っていたという日付まで、あと数時間を切った。本来ならコンディションを整えるため眠っておくのも良いのか

もしれないが、何時から始まるというのは未だに分かっていない。……尤も、かつての三大湖爆破事件に比べれば場所と日付がしれただけでも御の字なのだが。

ポケモン協会から借りた拠点の屋上から、今はまだ平和で静かな街の様子を眺める。だがすぐにでも混乱が訪れるだろう。そう思い、町の住人は既にできるだけ避難させてある。代わりにダミーとして協会の人間が一般人を装って生活するフリをしているのが現状だ。

ちなみに全員が戦闘員。その生命を投げ出すかもしれない役割に、覚悟を以って志願してくれたものたちだ。

責任重大。チャンピオンとなって以来、ほとんど遭遇することのない巨大な危機を引き起こすマグマ団を思い、知らず拳に力が入る。自分が暮らした大地ではないからこそ、このように非道な所業が行えるのだろうか。だとしても、自ら道を踏み外した外道どもは皆仲良く縄で縛りつなげてやろうという気持ちしがシロナの中を駆け巡る。

その時だった。

重く、それでいて耳をつんざくような破壊音が鳴り響く。

「後ろ!?!」

破壊されたのはポケモン協会から貸し出された仮基地。

その爆炎を突き破って飛んできたのは、一匹のポケモン——グラエナだ。

「ミロカロス！ アクアテール！」

喉笛を噛みちぎらんと、目を赤く光らせ正気を感じさせない目で飛びかかるグラエナ。だがそれよりも早く、的確に繰り出されたミロカロスがアクアテールでグラエナの横っ腹を叩き、建物の壁にめり込ませる。誰がどう見ても綺麗に入った一撃でグラエナの意識は落とされた。

「ニューリーダーの言ったとおりだ。まずは頭を潰す」

「あなた、マグマ団の幹部ね……」

「如何にも。やはり情報が漏れていたようだな」

ドンメルとエアームドを引き連れて、実行部隊の幹部の男がシロナ

の目の前に躍り出た。

「ミロカロス！」

「おっと、待ってもらいたい」

ハイドロポンプで一掃しようとした瞬間、シロナの目には信じがたいものが映る。それは、ユレイドルの触手で囚われたポケモン協会の職員たち。首には触手が絡まり、それを外そうともがいているがポケモンの力に人間が叶うはずもない。

今のところは締め上げられることはないようだが、それもこの男の指示次第だろう。

「見ての通りだ。君が動けば彼らは死ぬ。一人ずつな」

「なっ……あなたそれでもトレーナー!?」

「犯罪者だ。客観的にも、主観的にも。だからこそ使える手は使おう。我らの悲願、正義の前に、数多の命が失われようと必要な犠牲に過ぎない。その犠牲が増えるというのは、貴様とて好まんだろう?」

「この……」

怒気を孕んだ視線を投げかけるが、ピクリと動いたシロナに反応してユレイドルが職員の一人をきつく締め上げる。蒼白な表情になり、抵抗する手も空を切って意味なく指を動かすことしか出来ない。

シロナが動きを止めれば、呼吸を確保できたのか酷く咳き込みながらぐったりと身を倒した。動くことすら、許されていないのだ。

「ふ、そ、そうだな……は、はは」

幹部の男はこらえきれないように、先程までの無感情な言葉の代わりに笑みを浮かべる。しかし——それだけではなかったのだ。この男の、本性は。

「ひ、ははははははははっ!!! 見たか! ああ、素晴らしい! 素晴らしいぞニューリーダー! やはり貴方は分かっている! 私の望みを存分に叶えてくれる! 強いと思っっているやつを踏みにじらせてくれる! 素晴らしい逝ってしまえばいいぞ!」

仮面だったのだろう。先程までの無感情に相手を制してみせた姿は。

これがこの男の下衆な本性。自分よりも強いもの、偉いものを地べ

たに這いつくばらせることに快感を覚え、自らより弱いものを甚振ることに快楽を感じる。漏れ出た声にならない嘲笑は、過呼吸を思わせる見苦しい感情に成り果てていた。

「さ、さあ……おまえも！ おまえも！ やれ！ やるんだ！ 食い尽してやる!!」

見るからに狂っている。そんな男に反応して、ビクリと体を震わせた無表情の部下たちはポチエナやドーミラー、他にも近くで見ようなありふれたポケモンを繰り出してきた。だが、その顔のいくつか……いや、全てにシロナは見覚えがある。

あれは自分の知り合いだ。感情の抜け落ちた表情で、生気を感じさせない目をしているが、知り合いが何人か紛れ込んでいるのは確かだった。近頃ギンガ団の過激派と手を組んだということもあり、そこから考えられるのは一つ。

一般人を洗脳して、手駒にしている。

しかもご丁寧に、こちらの感情を揺さぶるような人物ばかりを取り揃えてと来た。

「あんた……絶対に許さないわ!」

「喚け喚け! どうせ貴様には指一本動かす権利など無い!!!」

常人が受ければ怯むような気迫にも、狂人には何一つ通じない。完全に自分の喜色に呑み込まれた幹部の男が指示したとおり、動けないシロナへポケモンたちの技が殺到する。このままでは文字通りひき肉になってしまうだろう。

だが、それでもシロナは動くことは許されぬ。

そう、シロナは。

ポケモンの技が命中し、シロナのいる場所には爆炎が巻き起こった。

「ひいははは!! ザマアミロ! 何がチャンピオンだ! 偉ぶりやがってドグサれの売女がア!! これで俺がこの地方でさいきよ!」

言い終わる前に、彼の言葉が中断させられた。

代わりになったのは酷く鈍い打撃音。先程まで彼が居た場所の真

後ろに、一人の人間が拳を振り抜いた形で立っていたのだ。

「……まもる」

シロナの居た場所も、影が2つ増えている。

そして緑色の絶対防御を誇るエネルギーが彼女の周りを覆っていた。

「救出完了」

その言葉とともに、洗脳されていた人間が全て同時に倒れ伏した。何かを振り抜いたようなポーズのキリキザンが血糊を祓う仕事をすれば、ユレイドルもまた力を失ったように戦闘不能にさせられている。

「助かったわ、ダークトリニティ」

「契約者の守護も我らが務め……」

「次なる指示を……」

ダークトリニティ。3つの影。現状はシロナに忠実な、恐ろしさを感ずるほど優秀な人材である。その直後、街の方でも大きな爆発音が聞こえたがシロナを除いて三人は動じる様子を何ひとつ見せては居なかった。

「油断したわ……こっちは捨て駒ね。一人は被害者達を安全な場所へ、一人は街に向かって暴れてるマグマ団を制圧してちょうだい。そして一人はマグマ団のなかにいるニューリーダーとやらを見つけたら私を案内して。それまではとにかく幹部級の相手をしているから」

「御意に……」

瞬間、キリキザンを含めた6つの影が四方八方へと飛び散った。一つの影は驚異的なスピードで被害者を確認すると、予め手配してあったより安全な場所へ向かって救援を要請しに向かっている。

「ふう……」

プルートの確保から始まった、マグマ団との全面戦争。ここのところロクに休みを取れていない以上、コンディションは最悪の一言だろう。だが、自分はチャンピオンであり、シンオウ地方のガーディアンだ。人に味方してくれる、心強い神たちもバックについている。

だからこそ、最大限まで人の手で人の争いを収めなければならな

い。義務感と正義感、あとはよくわからない何かの後押しされて、シロナもまた騒乱の火種がちらつき始めた街へと向かう。
ここに、第一の戦いの火蓋が切って落とされた。

帳を捲る

ギンガ団の本社ビル。

宇宙に存在する新興エネルギーを採取するため、日々研究とその他の業務で忙しく回る成長中の企業の一つである。社長でもあり、凄腕のトレーナーのサターンは、社の信用のためか、時にはハウエン地方のラールースを訪れるなど社を離れることも多い。そしてこの日もまた、シンオウ地方に居るとは言えサターンは遙か北のキツサキシティを訪れていたのだが……。

「トバリが襲撃されているだ?!」

《は、はい。ですがシロナさんの支持もあり、我々を含めトバリの人間は多くが避難済みで——》

「馬鹿者！ 敵が誰かは知らんが、社の地下にはまだあの部屋が残っていることを忘れたか！」

《で、ですが、サターン社長。あの部屋の護りは万全を期しております》

「そんなもの破壊光線で一発だろう!」

苛立ち紛れに通信を切ったサターンは、すぐさま他の地方で譲り受けたポケモン——バルジーナへと飛び乗った。宵も深くなり始めた頃。キツサキシティへの道は決して遠くはないが、空路をたつた一体のポケモンが通る程度であればさほど時間はかからない。加えて、バルジーナは獲物を軽々と巣まで運ぶ習性のため、人を乗せて飛ぶ速度でいえば他のポケモンよりも勝っている。

共に鍛え上げられた自慢のポケモンの鼓動を感じながら、冷たくなった空気を裂いてゆく。暗闇に紛れて飛ぶ彼は、かつての悪の組織だった頃とは違う熱い心を煮えたぎらせているのだった。

「さあ、こんなモンだ」

パン、パンと手の埃を払うように打った男は、目の前に乱雑に倒れ込む大量のトレーナーやポケモンたちを尻目に悠々とギンガビルへと足を向けていた。

トレーナーたちの姿の多くは、避難よりもシロナへの協力を選んだ現ギンガ団の構成員、もとい社員たちである。特徴的なおかつぱ頭と、宇宙人のようなコスチュームは未だ健在ではあるが、その心はサターンと同じく正義に染まっていたのだ。

だが、その正義の心とて、強大な悪の前では倒れ伏すほか無かったのだろう。苦しげに、なおも立ち上がろうと腕に力を込めたその構成員の手をあえて踏み潰し、念入りに骨を砕いた「彼」は、鼻歌混じりで小枝を砕くように歩いていった。

その後続くマグマツグとマグカルゴは、圧倒的な熱量を放ち、倒れる者たちに決して浅くはない火傷を負わせていく。必要のない追い打ちや、徹底的なまでの痛めつける行為に意味など無い。ただ、彼がそうした方が楽しいからという理由でやっているのだ。——その犠牲者たちに目もくれない癖に。

「かえんほうしゃだ。ぶっ壊せ」

その男、マグマ団のニューリーダー。

容赦なくギンガ本社ビルの入り口を破壊した彼は、焼けただれて溶けた鉄の柱や、辺りに燃え移った炎を見て楽しそうに口元を歪ませる。観葉植物が形も残さないほど燃え尽きて、転がった鉢植えを蹴り飛ばす。中の土が地面に散らばり、必要以上に汚される。

「たあーのしいねえ。くくく」

口笛を吹きながら歩く彼の後ろでは、民家や施設が破壊される爆発音が鳴り響いた。東海する街の一角から燃え上がった炎は、景色を揺らめかせながら瞬く間に広がっていく。あやつられた人たちが命ぜられるままにポケモンを指示し、時には自ら爆発物を投げて家を破壊しているのだ。

ギンガビルが目標である彼らに、その破壊行為は何の意味があるのか。

その答えは、全くない、の一言に尽きる。

強いて言うなれば、このマグマ団のニューリーダーが楽しいからという理由である。他の幹部にしてみれば、他を破壊するのは物資の無駄であり、広がった洗脳部下が捕獲され、人手が減るという理由で反

対していたのだが、最も反対していた幹部がこのニューリーダーの手によって焼死体と化した以上反論の声はピタリと止んだ。

ダークトリニティが捕えたシロナを襲った男が居なくなり、もはや幹部の数は片手で数えられるほどでしか無い。だがこの作戦によって、彼らは目的のために最も役に立つものを得ることが出来るのだ。多少の損失も、また「補填」すればいいという結論に落ち着いている。「ここだねえ、オーバーヒートだ」

彼が辿り着いたのは地下の研究室。かつて忌まわしき研究がされていた本拠であり、立地の都合上、未だ完全な撤去が成されていない部屋。研究員でありながら、気分を害する程のおぞましい行為がされていた場所の入り口だ。

指示を受けたマグカルゴの体が一層肥大化し、その口から炎の光線が放たれた。それは厚さ30センチの合金の壁をいとも容易く貫通し、人ひとり程度なら通れる穴をどろりと赤熱した液が名残と言わんばかりに滴っている。

鼻歌交じりに穴をくぐり抜けた彼は、散らばった研究資料など、当時そのままに残されてしまった負の遺産が収められた部屋へと踏み入ってしまった。電源などは全て落とされ、電気の供給も完全にカットされているが、この男の前ではその程度の妨害など意味をなさない。

無言で投げられたボールから、シビルドンというポケモンが出現した。

「つないどけ」

それっきり、シビルドンを放置した彼はお目当ての装置を目指して研究室を歩く。すると、十秒もしないうちに研究室に電気の明かりが灯る。いち早く電力の供給源を見つけたシビルドンが、勝手知ったる我が家のように部屋のシステムを復旧させたのだ。

当然、その分シビルドンには重い負担が降りかかるが、ここで彼の機嫌を損ねれば待っているのはむごたらしい未来。死ぬ気で、いつものように「優秀」と言われるような結果を残す他無いのである。

「情報通りだ。残ってるじゃーん」

研究室の奥の奥。3つのポケモンが収まるほどの装置と、それに太いケーブルが繋がった巨大なコンソール。コンソールが在る装置の中心には、何か収められるための巨大なカプセル。割れてしまったカプセルだが、その底には埃をかぶった赤黒い何か、楕円状の輪のようなものが残っていた。

迷いなく、マグマ団のニューリーダーはそれを手に取りほくそ笑む。これで、作戦の大前提の根幹となるものが揃った。あとはゆつくりと、装置の完成を待ちながらジラーチを捉えればいい。所詮はタダの旅医者一人。殺してしまえばなんとでもなるというのがニューリーダーの考えである。

ハマゴの性格や凶悪さを知っていれば、それは甘いという人がいるかも知れない。だが、この男は彼などとは比べ物にならない暴力、知識、手段、悪意を持っている。本当に一捻りなのだ、ハマゴ程度では。「あー、聞こえてる？ 目標のブツはあっさりゲットおう。んじや帰るわ。足用意しとけ」

《了解しました。無事の帰か》

部下のセリフも遮って通信を切った彼は、おもむろに頭を横に動かした。

直後、頭があつた場所を一本のクナイが通過する。

「あー、なに？ あんたら。邪魔すんなよー」

ヘラヘラと笑いながら、大げさに両手を上げて言う。だが、彼のセリフに反して人の姿など見えない。いや、完全に空間と一体になっているせいで居るはずなのに気配を感じ取れないのだ。

そんなダークトリニティの隠形を見破ったこの男、言動はふざけているが、通信した上からですら後をつけられている事に気づくなど、ただならぬ能力を秘めているのは間違いない。こんな男が、何故過激派として離脱する前はただの団員に甘んじていたのだろうか。だが、今はその追求は置いておくでしょう。

身を隠しても、その方向へ視線を向けるこの男に無駄だと思ったのだろう。ダークトリニティの一人が、風景から描き出されるようにしてその身を表した。

「……マグマ団のリーダー、か」

「そんな感じのをやってるぜ。しっかしかけえなアンタ！ ニンジャってやつか。いいねえいいねえ、アンタみたいな有能なやつ、うちにもほしいんだよな。あ、今のやつ裏切ってこっち来るか？」

「きりさく」

トレーナーを狙って繰り出された、キリキザンの奇襲。だが相手は指をツイと動かすだけでマグカルゴに指示を出し、その堅牢な殻で防いで見せた。

「ひゅー！ 容赦ないねえアンタ。俺じゃなきや首がぶつ飛んでたぜ」

「……ジュペッタ」

ここは狭い研究室だ。キリキザン以外の手持ちの内、最適と言えるポケモンをこの地方で初めて出したダークトリニティ。ケケケケ、と特徴的な笑い声を上げながら飛び出してきたジュペッタは、既に体の周囲に怪しく揺らめく光をまとっていた。

「ノー指示であやしいひかり！ いいねえ、そんなこと出来るやつ中々いねえつてもんだ！ あつはははは！」

言いつつも、この男自身が指示を行うこと無くマグマツグがジュペッタに飛びかかった。直後、また少しだけ動かされた指の動きに合わせて、吐き出されたマグマツグの火炎放射がジュペッタを左右両方から襲う。信じられないが、火炎放射の炎が二股に分かれて挟み込んできたのである。

だがジュペッタはフツとその場から掻き消えると、マグマ団ニューリーダーの真後ろへと現れた。そして垂れた両手を思いつきり上に振り上げ――

「はたきおとす」

「つとおっ？」

男が手に持っていた赤黒い楕円の輪を奪取しようとするが、いとも容易く対処してみせる。その方向を振り向くこと無く回避行動を取ったと言えば、相手のわけがわからない対処能力がどれだけ高いか分かるだろう。

ダークトリニティは舌打ちする時間すら惜しいのか、ついに彼自身がその体で動き始めた。キリキザンとジユペツタにはマグマツグとマグカルゴを任せ、自分はその手に刃物を持ってトレーナーを狙う。その腕ごと証拠品を奪い取る腹つもりだが、影に生きる組織の手足として育てられた彼の技量ですら、何故かこの男を捉えることは難しかった。

手を伸ばそうとすれば、その場所に攻撃が来ることが分かっていたように避け、かといつてタツクルを仕掛ければ、完璧なタイミングでしゃがんでかわされる。相手はゼエゼエと呼吸を荒げてペースを乱しているにも関わらず、ありとあらゆるダークトリニティの仕掛けた攻撃は対処されてしまった。

その永遠の追いかけつこが続くかと思われた矢先、ふとダークトリニティの彼は気づいた。心なしか、先程よりも服がじつとりとしてきていると。

ありえない話だ。体の関節に始まり、汗腺や呼吸の制御まで、完璧にこなす彼らが文字通りの体調管理を違えることなどと。だが現実には、彼のピツチリと張り付いた服には、久しく感じていなかった汗のじつとりとした感触が滲み始めている。

まさか。目の前の脅威度は避ける以外に低いと判断し、キリキザンたちが戦っている方へと視線を向ければ驚きの光景が繰り広げられていた。

「キリキザン、ジユペツタ……」

「おっと、どうやら最後まで俺の仕掛けに気づかなかった見てえだな、哀れな負け犬の姿だ。なあ？」

男の戯言など無視して、彼はあの英雄以外には一度たりとも負けることのなかった精鋭たちが倒れ伏す姿を視界に収めることとなった。そして逆に、マグマツグたちには傷一つとして付いていない。何があつたかは分からないが、ジユペツタの布地の肌はひどく焦げ付き、キリキザンの鋼の刃はどろりと刃が潰される程度に融解させられている。

ずつと炎をその身に受けていたかのような、そんな傷つき方だ。

待て、ずっと、炎を受けていたのよう……？

ダークトリニティは己が流した汗と、手持ちの傷つけられ方を見てハッと目を見開いた。そして気づく。この光景は、この感覚は、実際の状態と少しばかり認識がずれていると。

「貴様……ぐっ」

「お？」

グッ、と血が滲むほど舌を噛んだダークトリニティの彼は、次に目を開いた時、その光景に衝撃を受ける。なぜなら、彼が先程まで戦っていた明るい研究室の姿はひどく様変わりしていたのだ。

炎が燃え盛り、復旧させていた電力も既に落ちていいる。ただただ、暗闇の中を部屋中に広がった炎が照らすだけの息苦しい場所に変わり果てている。つまり、先程まで見ていた光景は——魅せられていた、幻覚。

「気づくやつが居るなんてなあ。やっぱ、アンタまともじゃないや」

ぱち、ぱち、ぱち、と拍手をする音は遙か遠くの研究室入り口だ。

さきほどまで自分が戦っていたのは、あの男が赤黒い輪を手に入れた部屋のすぐ出口だったはず。だということにコレほど距離が空いているということは、この部屋で仕掛けたときから既に、自分はその幻覚に陥っていたということだろうか。

「せつかくだし教えてやるよ。マグマツグが作り出してた幻覚を破つたアンタへの報酬だ」

部屋の入り口によりかかりながら、ふぎけた調子で言ってくる男。だがダークトリニティの彼は、脳がようやく認識した現実と、薄くなる空気、炎で炙られ消耗した体力が重なり、近くの机に手をついてよろめいている状態だ。

「俺の名はホカゲ。火が見せる影の化身。まあ、生きてれば覚えてくれや！ ばっはははは」

彼の後ろに控えていたマグマツグが、マグマの液体を扉に吹きかける。そして溶け落ちた扉のあった場所の穴は完全にふさがり、先程よりも急速にこの部屋の中の酸素を奪い取っていく。

ふらつく頭で、だがしっかりとホカゲの名を記憶したダーク。腰の

道具袋を探り、簡易的な酸素マスクを装着した彼は、肌が灼けていく感覚を覚えながらも三体目のポケモンを繰り出した。

「あぶ……そる……」

薄れ行く景色。だが、白い体毛のポケモンの姿を見届けて、ダークトリニティの一人は完全に意識を手放した。

「なんなんだ、これは……トバリが火の海ではないか！」

場所は代わり、トバリの上空。

バルジーナの背中からこの街を見下ろしていたのはサターンだ。

彼はすぐさま近くの放火している人間たちを打ちのめすと、それがポケモン協会に言われていた洗脳された一般人でしか無いことに気がつく。くつ、と悔しげに拳を握りしめ、腰から一匹のポケモンを繰り出した。

「フーデイン、これから一般人の戦闘員がいれば気絶させ、ポケモン協会の施設に送ってくれ。今倒れている奴らの分も頼んだぞ！」

手に持ったスプーンをサツと振って答えたフーデインはその瞬間にレポートして消え失せた。サターンは彼女が役目を果たしていることを確認して、急ぎもう一度バルジーナの背中に乗り、自分の会社——ギンガトバリビルへと足先を向けた。

炎に包まれ、家屋が焼け落ちていくひどい光景が彼の網膜に焼き付いていく中、その炎の中を走る一陣の黒い風を捉えた。忘れもしない、あの特徴的な長い髪と、見ただけで分かる高い練度のポケモンの持ち主はただの一人しか居ない。

「チャンピオン！」

「あなた、サターンさん!? 戻ってきていたのね！」

「とにかく、こっちに乗るんだ！」

近づいてきたバルジーナに気づいた彼女は、サターンの提案通りルカリオに投げてもらってバルジーナの足をつかむ。バルジーナは器用に彼女を放り投げ、サターンもいる背中へとシロナを移動させた。

互いに切迫した状況だ。いささか早口になったまま、彼らは情報交

換を始めた。

「何が起きているんだ。このまちの有様は一体……」

「ごめんなさい、あなたとは連絡がつかなかったから伝えられなかったわ。今、この街はホウエンからきた狂気の集団、マグマ団に襲われています。ついさつき判明したんだけど、敵のリーダーはあなたの会社の地下へと潜っていったそうよ」

「地下……奴らの目的は、赤い鎖の残骸か……!」

というよりも、ポケモンを使った犯罪集団がギンガトバリビルを襲う利点などそこしかない。理由にすぐさま思い当たった彼の言葉に、シロナは想像外の出来事だと言わんばかりの表情で驚いてみせる。

「な、それはもう処理したんじゃないの!？」

「悔しいが、あれほどのエネルギーだ。施設ごと完全に密閉封印して、エネルギーが外気に溶けていくのを待つしか無かったのだ。赤い鎖を下手に刺激した時、待っているのはあの三湖が消し飛ぶほどの爆発だったからな……だが、もう襲う輩などシンオウに居るはずもないと高をくくった私の責任だ」

「…わかったわ、責任に関しては後にしましょう。それよりも、貴方も力を貸してもらいます」

「もちろんだ。そのマグマ団とやら、この手で粉砕してみせよう」

彼らの会話が終わると同時、ギンガトバリビルが見えてきた。

その破壊されたエントランスから、一人の男——ホカゲが余裕綽々といった様子で歩いてきている。ビルの周りにはマグマ団と思わしき集団もおり、脱出用の飛行機や車両が辺りの炎を物ともせず鎮座している。

「そんな、ダークさんがやられたって言うの……?」

途中から、研究室の都合上通信が途絶えたとは言え、手段を選ばなければ自分を上回るかもしれない実力の持ち主であるダークトリニティ、その一人が退けられた事実には、相手の脅威度の認識を改める。

とはいえ、バルジーナを駆るサターンがそんな事を知る由もない。先程までの間に決めていた打ち合わせ通り、上空からバルジーナが一気に急降下し始めた。

「いけ、チャンピオン！ 頭目は任せたぞ！」

「ええ、行くわよガブリアス！」

バルジーナから飛び降りたシロナは、空中でガブリアスを出しながら一直線にビルから出てきたホカゲを狙う。

「ドラゴンダイブ！」

ガブリアスの体から恐ろしい殺気が放たれ、それにピクリと反応するホカゲ。だが、そこは既にガブリアスの射程圏内だ。人間の足でどう逃れようとも威力の範囲内から逃れることは出来ない。

ガブリアスが階段ごと破壊しながら突っ込むと同時、無傷で着地したシロナは新たなボールを構えて二体のポケモンを呼び出した。その手から現れたのは、トゲキッスとトリトドンだ。

集まっていたマグマ団を蹴散らして、すぐさまガブリアスが着弾した敵の頭目の方を見る。手傷くらいは負わせることが出来ただろうか。しかし、そんな考えは甘かったのだとすぐさま思い知るようになった。

煙の中から現れたホカゲは、完全に無傷だったのだ。目立った被害と言えば、多少の巻き上げた砂埃や砂利を服につけている程度でしかない。

「まったく服が汚れちゃった。つつうか、あんたチャンピオンじゃね？

やべえ！ 強いやつがこうも現れるとか、ホンっとこんな事してなけりや素直に喜べたのによお。まあ、あれだ。俺も立場つつうか？

ちよっとした目的のために動いてるワケでして？ ちよっと今は素直によるこべな——」

よく回る口を横合いから封じるように、ガブリアスのドラゴンクローが彼に付き従っていたマグカルゴを襲う。鍛え上げられたドラゴンクローの淡い翡翠色の双爪が、マグカルゴの堅牢な殻をいとも容易く抉り取る。えぐられた箇所から炎を吹き出しながら、たまらずマグカルゴは地面を擦りながら吹き飛ばされてしまった。

「……あんた人の話くらい聞こうよ。コミュ障じゃねえの？ くっだんねえ」

「くだらないのはあなた達よ。さあ、説得の時間なんて無いわ。この

「まま肩をつけさせてもらうから」

「くっ、へへへへ…：だけどよ、俺みたいに一応トップしてるやつがこうして出てきてる理由、わかんたろ？」

「わかってるわ。それにあのドラゴンダイブで無傷だったことから、相当に強いってこともね」

「その通り！ そうとなりや話は早いよおっ!!」

ホカゲがバツと腕を振り抜き、そして叫ぶ。

「かえんほうしゃア！」

「まもる！」

燃えるものはや無い。だと言うのに、コンクリートの地面の上に吐き出された炎は消えること無く延々と揺らめき続けている。そして守るで直撃こそ防げたものの、辺りに残った炎の熱気は、容赦なくシロナの体力を奪い始めていった。

そんな時だ。彼女らの背後の音が途端に小さくなり、戦闘音の代わりに航空機のエンジン音や、クラクシオンをかき鳴らす車の走行音ばかりが聞こえてくるようになった。

「済まない、やはり一人では大半を逃してしまった」

「いいえ、この男さえ捉えればこちらの勝ちよ」

この一瞬で多くのマグマ団員を倒し、追い払ったというのだろうか。サターンが申し訳なさそうに誤りつつも、シロナの隣にボールを構えて立ってみせる。

「あーちら……」

逃げていくマグマ団員を見つめながら、ホカゲは危機感よりも倦怠感を感じさせる態度で、ケツと吐き捨てた。所詮は有象無象の集まりだ。幹部などと言う連中も、人数が少ないため相対的にその中からバトルが強い人間が選出されただけ。

だがホカゲにしてみれば、幹部だろうが平団員だろうが、実力の程はどنگりの背比べだ。むしろ幹部は使い捨てが聞かないくせに扱いつらい駒であると認識していた。

「しゃーねえ、お兄さんちよつとだけ本気出しちまうか」

「返してもらおうぞ、赤い鎖の輪を」

「抵抗しても、その上から押さえ込んであげる」

まったく違う心持ちながら、その場にある未来は同じだ。両雄激突。ぶつかり合う視線の火花に引火するように、炎はひとときわ高く揺らめいてみせる。

マグカルゴはまだ戦闘可能。だが、チャンピオンと元悪の幹部が本気で攻め立てればマグマツグ共々塵殺されるのは目に見えている。それに、シビルドンは想像以上に電気を消費したのか、疲労困憊ときた次第だ。

だから、4つ目のボールにホカゲは手を掛けた。

「んー、まあどうせあの男も生きてるだろうし、先に言っといてもいいだろ。おっと、これを聞いてカツコよさに腰抜かすんじゃないやあねえぜ」
モンスターボールをポンポンと弄びながら、階段から二人を見下ろすホカゲ。

「俺はホカゲだ。火の影を体現するもの。この名前をしつかりと覚えて——死にな」

おちやらけた態度が一変。

濃密に凝縮された殺気がシロナとサターンの体を駆け抜け、まともわり付く。

未だ謎多き男ホカゲ——彼の「戦闘」がここに、幕を開けた。

熱冷めやらす

シロナは苦戦していた。マグマ団のニューリーダー、ホカゲといったか。前髪で片目を隠し、調子に乗った若者のような言葉遣いの男だ。彼が繰り出したマグマツグとマグカルゴは多少傷ついている様子はあれど、長時間の戦いの中、戦闘不能まで疲弊することは無かった。

なにより戦っているシロナ、サターンは共に違和感を感じていた。まずは手数を減らすのが先決。そうして優先的にマグマツグの方を狙っている事が多いのだが、その鈍重な速さと進化前の耐久度にしても、妙におかしい。

確実に技が直撃したと思えば、まるで技が効いていないかのよう。マグマツグが爆炎の中から姿を現す。かといってマグカルゴ共々狙った技では、たしかに多少のダメージは入っているのだが、ミロカロスの「なみのり」で生じた津波の全てを受けているとは言いがたい。「おいおいどーした？ 俺様はさっさと部下共の粛清にいかなきやならないんだけどな。てかこんなに時間かけても良いのか？ アツハハー！ 俺やっぱ最強じゃね？」

どこまでも軽い口調で挑発してくるホカゲを無視し、シロナはガブリアスに迫る溶岩の飛沫をミロカロスによって払いのけさせる。次いで、すぐさまトゲキツスの「めざめるパワー」が跳ね飛ばされた溶岩諸共巻き込みマグマツグへ飛来。しかし、やはり着弾した爆風の中から現れたマグマツグは傷一つ負っていないかった。

「フリーデイン、サイコキネシス！ 辺りの瓦礫を存分に使いえ！」

サターンの整った声が炎の街に響き、目をつむっていたフリーデインが開眼する。

スプーンを持つ両腕が掲げられ、フリーデインの見つめる視界の中で瓦礫がひとりでに中を舞う。そして狙いを付けられたのはマグマツグ、マグカルゴ——そしてトレーナーのホカゲ。元々ギンガ団の幹部として名を馳せていた経験故、人間を諸共巻き込むことに躊躇はない。

そもそも、この程度でくたばるような輩ではない、と感じているものもあるが。

「マグカルゴォー！」

大小様々な瓦礫が高速で回転をしながら飛んでいくさまは、受ける側にしては堪ったものではない。一声を掛けられたマグカルゴは仲間を守るため、その殻の隙間から火柱を放ちながら自分の体——マグマの温度に達するソレを地面に広げ、一気に立たせることでマグマの壁を作り出す。

所詮は粘性がある薄い膜だ、などという常識は通用しない。彼はポケモンだ。故にこのあと繰り出されるのは、常識を疑うような光景であることが確約されている。

「オーバーヒートオオオッ！」

口や火種から放たれることの多い決死の熱線。しかしそれは、マグカルゴの広げた体——つまりはマグマの壁から一斉に放たれた。こんな一介のポケモンが出せるような出力ではないのだが、それを成し遂げるのがポケモンと人間がもたらす強さ。

3メートル大の直径を持つ膨大な熱量の熱線は瓦礫の全てを蒸発させ、辺り一面を肌を灼き尽くすような熱気に包み込んだ。もはや伝説や幻と言われるポケモンと謙遜のない災害規模の攻撃である。

だが、一介のポケモンがそのような攻撃をして耐えきれぬのだろうか。いや、耐えられるはずもない。ぐらりとその体を大きく崩したマグカルゴは、広げた自分の体をもとの大きさに縮小しながら、糸が切れたかのようにベチャリと倒れ込んだ。

瞬間、上から伸びた赤い光線がマグカルゴを包み込み、彼の戦闘で傷ついた体を回収していく。シロナたちが気づいたときにはもう遅い。いつのまにか、ギンガビルの壁を登って頂上まで行っていたホカゲは余裕の笑顔で彼らを見下ろしていた。

「しま——待ちなさい！」

「バルジーナー！ つばめがえしで撃ち落とせ！」

サターンの手元から繰り出されたバルジーナ。豪速球の勢いで一つの弾丸としての役目を果たそうとするが、バルジーナの攻撃はいと

も容易く避けられてしまった。……いや、避けられたという表現は少しばかり語弊がある。

正しくはすり抜けた、だ。ホカゲの体を貫通して、バルジーナはつばめがえしの一撃を外してしまった。直後、長いムチのようなもので打ち据えられてバルジーナは撃墜される。完全に混乱していた不意をついた一撃だ。相性や耐久力に関わらず、頭を打ち据えた一撃はバルジーナの意識を奪い、墜落仕掛けたところをサターンが咄嗟の判断でボールに戻した。

「ここで待つのにはよほどのバカだね。ま、実力はわかった。それじゃバイチャー！」

手にしていた4つ目のモンスターボール。それは戦闘用ではなく逃走用だったのだろう。闇に紛れて現れたポケモンの全容は、残念ながら下^燃が明^えかり^た街^街になっていく関係上うかがい知ることとはできなかつたが、まるで溶けていくように姿を隠すホカゲの姿とともに気配が遠のいていく。

「戦う前に死ねつつあったけどよー！ マジで戦うわけねえじゃんバーカッ！」

姿は見えないが、街に響く大声で罵倒を残していくホカゲ。

サターンはバルジーナのボールをベルトに掛け、クツと毒づいた。

「逃げられた……ダークさん！」

「フリーデイン、探れないか？」

どこに控えていたのだろうか。だが、確信を持って叫んだシロナに反応し、一瞬彼女の前に現れたダークトリニティの一人は頷いてから夜の帳の向こう側へと消えていった。

対してポケモンに語りかけたサターンは、フリーデインが元々持つサイコパワーに期待して遠見を頼む。だが、フリーデインとてあれほどの実力を持つものの隠形を見破るにはいささか力不足だったらしい。しばらくしてサターンたちに返ってきたのは、残念そうに額を寄せたフリーデインの首が横に振られた、というものだった。

「とんでもないことをしてくれたわ、マグマ団。絶対に許せない……！」

あの首領はともかく、部下ですら取り逃がした自分が情けなくて仕

方がない。いついかなるときも対応できるよう、分かっていたはずの襲撃に対して今回は被害が広まるばかりだった。最初のポケモン協会支部が襲撃されたこともそう。チャンピオンの名前が泣くような失態ばかりで、シロナは拳を血が滲むまで握り込むことしかできなかった。

だからこそ誓う。これまで通り追うばかりではダメだ。現状の實力に満足せず、高みを目指し続けながらマグマ団を捕まえる。忙しいから、と鍛錬を怠っていた自分に喝を入れると誓って、彼女はサターンの方に振り向いた。

サターンは、分かっていたかのように笑みを浮かべてシロナに顔を向ける。

「トバリも、酷い有様になったものだな……だが我々の手で必ず復興させる。元通りどころか、発展させてみせよう。だからチャンピオン、案ずるな。どうせ新エネルギーも見つかっていないんだ、我がギンガコーポレーションの暇な社員を総動員させよう。なに、こつちのことは任せておけ」

暇な、というのは嘘だろう。かつてのギンガ団がもたらした惨状は社会的に最も必要な「信用」を著しく欠いていた。そのために社長自ら地方をも越えて四方八方へと奔走し、社員たちは新しいエネルギーを見つける傍らで信用のための活動と、本業以外の資金繰りのための活動に忙しいはず。

だが街が破壊されてしまった以上、結果論だが需要が生まれた。ひとつの企業として、全面的にその需要に乗っかるしかない。たとえ——この破壊活動にギンガコーポレーションが一枚噛んでいた、などという根も葉もない噂を建てられたとしても、だ。

全ての気苦労がどれほど心にかかると分らない。カビゴンのそれよりも重いのは確実だろう。だが笑って言ってみせた彼に、シロナは任せるしか無かった。首領を取り逃してしまい、ポケモンの一匹もダウンさせられなかった不甲斐ない自分には、この汚名を返上するためマグマ団の問題に当たるしか無い。

「ありがとう、サターンさん。あなたが味方になってくれて心強いわ」

「チャンピオンにそう言われるとは光栄だな。さあ、まずは事の全てを説明せねばなるまい。私も会談先のキツサキに戻るなりと仕事がある。ある程度落ち着いた時、また会うことにしよう」

ギンガコーポレーションの社員(団員)や、ポケモン協会のエージェントが集まってくる中、サターンとシロナは連絡先を交換してそれぞれの部下の元に戻っていく。街一つがまるごと壊滅するような一大事件は、こうして巨悪が野放しにされたまま終わりを迎える。

相手の謎は謎のまま。攻撃がすり抜けたのはなぜか、倒しきれなかった理由は何か。とにかくマグマ団対策を本格的に練り始めようとするシロナは、赤い鎖の輪が収められていたというビルの地下を思って視線を移す。すると、なにやら蠢くものが。

「……あれは、ダークさん!?!」

急ぎ近寄ってみれば、連絡がつかなくなっていたダークトリニティの一人が全身にひどい火傷を負いつつも、近づくシロナを見て気が抜けたのか一気に倒れ込むところだった。その前にトゲキツスが近づいて、その柔らかな体で彼の体を受け止める。細くも強靱に引き締まったその体を横たえる彼は、隣に駆けつけ救護班を呼ぶシロナへ何かを伝えようとしていた。

「ダークさん、とにかく今は」

「……3時間だ」

喉まで焼けたような掠れた声。炎とともに閉じ込められ、一時的に酸素を失い全身を焼かれた彼がまだ意識を保って……いや、生きているのは奇跡に近い。だが、責務を果たすことこそがダークトリニティの本懐。それが忠義を捧げた真の主でなくとも、役割は変わらない。

「ヤツのカラクリを、話す」

「……わかったわ。担架を急いで! 誰か『タマゴうみ』のできるポケモンを!」

赤いランプの光がくるくると回って、別の騒がしさがトバリシティを包み込む。轟々と燃え盛る炎には、水ポケモンのみずでっぼうやハイドロポンプが発射される。人間の消防隊もゴリーキーたちを始めとする格闘ポケモンと瓦礫の撤去や傷つけられたポケモン協会の

エージェントを救出していった。

傷つくものがばかりが生み出されたマグマ団のトバリ襲撃事件。幹部の男は捕えることが出来たが、その翌日、隔離していた部屋で死亡されているのが確認された。内臓が高熱の何かで焼き尽くされ、溶かされていたらしい。間違いなく、あの男が繰り出したマグマツグの仕業であろう。

こうしてまた、夜は更けていく。

傷に呻くものを生み出したままに。

ところかわってカンナギタウン。少しばかりは時間も巻き戻ったころ。

我らが青の不良医師、ハマゴは食い入るように目の前に現れた存在を観察していた。時折目を細めたときは、防御が最下段まで下がりそうな睨みをきかせているようにしか見えなかったが。

ともかくジロジロとみられる側——それはミミロル。そう、ハクタイの森から仲間の後押しされたはいいが、その後のタイミングを逃し続けてずっとストーカーを張っていたミミロルである。

彼女のハマゴを追う冒険は中々に苦しいものだった。

ハマゴ一行の足取りと言えば、珍しい植物やマーズの興味を示した場所への寄り道が多い。地図にしてみれば真っ直ぐな一本道であれば、ハクタイの森しか知らなかったミミロルにとって険しく環境の違う場所、その奥深くを遠慮なく突っ込んでいくハマゴたちを追うのは簡単なことではない。

時には谷底で冷たい空気に晒されながら眠り、時には洞窟でゴルバットに攫われて食われそうになる、と。ともかく戦闘能力に秀でているわけでもなく、単に仲間内で少しだけ器用なのが取り柄な彼女にとって試練のようなものであった。

だが、それらを試練というのなら、今は、

「ほおーっ。おまえ、あん時の立ちふさがったミミロルか」

普通なら野生のポケモンの見分けなど無いが、ハマゴは違う。この

ミミロル、ピンと伸ばした右耳の真ん中あたりが少しばかり凹んでいるのだ。だがそれも近くで見なければ判別がつかないほど些細なもの。気に留めるようなことでもなければ、覚えていられるほどの違いでもない。カビゴンの重量が500グラム違うだけで別のカビゴンだ！ と主張するようなものだ。

まるで問い詰められて尋問に掛けられているような思いだった。乱獲する悪意のある人間や、カワイイから箔がつくという浅ましい理由で嫌がる仲間を連れていく人間に出会ったときのように。いや、このミミロルもストーキングしてきた以上、ハマゴがそんな人間ではないことは分かっているのだが。

「しっかしまあ、随分と遠くまで来たもんだ。なんだ、そういうことだと受け取ってもいいのか？　ありがてえがな」

しやがみ込み、視線を合わせてくるハマゴの凶悪な笑顔だけではどうしても慣れない。悪人面というか、人を殺した家のような愉悅に浸った表情というか、とにかく恐怖に訴えかけてくるような顔面はどうにかならないのだろうか。泣く子も黙る鬼の形相、とはフエンタウンでの彼の異名である。

顔立ちはそれなり、ほどほどであるのだが、笑顔というのが完全な凶器だ。微笑みまではまだ普通なのに、どうしてこうなるのか。とにかく、ガタガタと足が震えて動けなくなるミミロルに、ハマゴは盛大なため息を付いてみせた。いつものことだ、と。

だからこそふざけるのはここまでにしよう、とハマゴはミミロルを抱え上げると、縁側の先に座らせ、自身もその隣りに腰を下ろす。座高だけでもそれなりにつく身長差から、見ろ押すような形。ハマゴはしっかりとミミロルの両目を見つめたままに言った。

「なんだ、俺と一緒に来るか？」

「……………」

ミミロルのそもそもの目的だ。

ハマゴ自身、ミミロルをゲットしようとしていた事もある。しかしハクタイのポケモンを狙う気はなかった。あれほど怯えた暮らしをしているのだ、本質的に優しさを持つハマゴが手を引くことに迷いは

ない。持っていたメガストーンとキーストーンも、次にナナカマドの元を訪れた時までミミロルが見つからなければ返却しても良いと思っていた所だ。

そんなタイミングで現れたこのミミロル。ハマゴと共に行けば、自分だけが出来ること、特別な自分を持てるのではないかという淡い直感を胸に抱いている。だが、こうして彼の前に出て、なおもあの時に出した勇氣は湧いてこない。

本当にこれでいいのか、という逃げ腰じみた考えがあるからだ。一度は決意したが、その決意も続くとは限らない。良く言えば思慮深く、悪く言えば優柔不断。だからこそ、一族の中でもあまり取り柄を發揮することができなかった。

「……」

視線を落とし、どうすればいいかわからない、と言ったように俯くミミロルを見る。ハマゴはこのままモンスターボールに入ってくれるなら、という思いを持っていないわけではない。だが、ここは彼女の判断に全てを委ねようと考えた。

ふと、何かを思いついたような仕草をするハマゴ。

彼は空のハイパーボールを取り出して、手の上で跳ねさせる。

「ッ!？」

「まあ、こういう選択肢もある。だけどな」

ミミロルがボールを見て体をビクリと震わせる。そんな姿を見て、彼は仕方ないように笑ってボールを荷物袋へしまった。

「ボールなんぞに入らない、そう言う選択肢もある」

「……………」

これが思慮のない子供や、そもそも自分のことしか考えない大人なら、ミミロルをすぐさま捕まえてしまっていただろう。ここまで一緒に来たんなら、いいよね、と言った具合にだ。だが彼は、まだミミロルを迷わせることにした。キュウゴン——ロコンを初めて自分のポケモンにしたときも同じ事をするつもりだったのだ。

「っし、そんじやしばらく付いてきな。俺は、俺のところで何をするのか教えてやる。そしてお前がそれを持ち帰ってあの集落のために使

うのか、それとも俺の元に一緒に来るのか。決めるためのトライアルってやつだ」

だがな、と続ける。

「トライアルであろうが、実際にやんのは相手の命がかかってる仕事だぜ。オマエにやらせる事に關しちや失敗しようが、成功しようが、そりや経験だ。それでいい。だがな、音を上げるだの、諦めるだの、放棄しはじめりや俺はテメエをすぐに送り返す。俺が必要なのは、最低限有能なやつだけだ」

事実、彼は医師だ。ドクターだ。

どれだけ普段がふざけていようと、凶悪な犯罪者のようなツラ構えをしていようと、暴力を迷いなく振るう人間であろうと、彼が「仕事」に取り掛かる時は必ず命が掛かる。ただの風邪も悪化すれば人を死に至らしめ、小さな裂傷であろうと傷口から入ったものによっては即、死へ繋がる。故にそれらを万が一にでも起こさせないのが彼の仕事だ。

ジラーチの時と同じ、不可能だと分かっている可能性にすぎり、危険度がわからなくとも自分がコレだと思っただ行為を行わなければならぬ場面もある。それが医療ミスに繋がった時、彼は初めて己の首を掻きむしろうと凶行に走ったこともある。

だが、しかし、そうなのだ。命に妥協は許されない。

彼が初めて失敗した時、自分の喉を掻き切ろうとしたのも妥協であり、それ以降はある言葉をもらって決して前進を止めないと誓った。彼に付いていくポケモンも、所詮は人間ではないのだから、という言葉で妥協することは許さない。

「元々自然で生きていたテメエが、おそらくぬるま湯で仲間を守られてたテメエが」

ミミロルは、彼の言葉で思い起こす。

そのとおりだと。仲間たちの優しさで、無能の自分は食べ物にありついていた。寝床を提供されていた。子供だったからという理由で、一人前になる前はずっと可愛がられていた。送り出してくれたあの瞬間まで、きつと。

「本当に、ポケモンドクターの道に踏み込む勇氣はあるか？ あの時みてえに、命を前にして勇氣と一步を踏み出せるか？ オマエの覚悟は、どうなんだ」

「……」

偽りのひとかけらすら許さない。

真摯なまでに命と向き合い、己が助けると誓った患者は全てを賭して治療する。その患者だけは、絶対に裏切らない。齡18の若きドクター、されど若さを盾にしない経験に裏打ちされた氣迫。これが更年のドクターであれば、如何程の重圧となるだろうか。

「……ッ！」

ミミロルは立ち上がり、そして一步も引かなかった。

両目を覗き込んでくるハマゴを見つめ返す。奥底を、心の深淵を覗くハマゴの、瞳の奥の氣持ちを見返してやる。

「……よし」

「……………」

ゆつくりとした瞬きを返したハマゴ。彼の手はおもむろにミミロルの頭に乗せられ、暖かな体温を体毛越しにミミロルへ伝える。それは心の暖かさすら、伝播しているような。

「助手見習い、ミミロル。今後の仕事がどのくらいあるかはわからねえ。旅路だからな、そう都合よく怪我人・病人ばかりが居るわけじゃねえ。……だが、俺には何の因果か人が傷ついちまう未来ってもんが待ってやがるのは確かだ」

ゆつくりと語られたのは、彼の身の上だ。過激派ギンガ団……いや、新生マグマ団がこの先どのような動きをしてくるのかは皆目見当もつかないが、ジラーチを狙って騒動が引き起こされるだろう。町中であろが郊外であろが、森の中であろが、可能性として、悪意が引き起こす結果が未来に居座っている。

「その中で、その合間で、俺はオマエに知識を詰め込んでいく。俺が求めるポジションは、俺の相棒キュウコンともまた違った役割だ。先達はねえ、オマエだけがその役割の第一人者になる。覚悟はいいな？」

「ッ！」

ここまで聞かされて、そして選択肢を与えられたのだ。
ならば掴み取るまで。

ミミロルの中の迷いは消えていた。

代わりにあるのは、彼が如何に命に対して真剣であったか、に対する己の気持ち。またその場の空気に流されただけなのかもしれないだが——それで己が、自分にしか出来ないことが生まれるというのなら。

月明かりの再会。

輝かしいばかりに金色を放つ月光を半身に、覆い隠す闇を半身に。
小さな手と、大きな手は影をつなげるのであった。

水底をたゆたう 前

朝日が昇る。障子の隙間から一本の光の線が部屋の中にするりと入り込んでいた。久しぶりにぐっすりと眠った彼は、布団の脇に置いていたメガネを掛けなおしてのっそりと起き上がる。その場でさつと寝間着から、いつもの私服の上に白衣をまとった彼は、脇においてあるモンスタールポールへと手を伸ばした。

ひとつ、ふたつ。そして「毛玉」。

茶色と黄色のももこが彼の手に触れ、もっさりとしたその首根っこを引つ摺む。だが茶色の毛玉が起きる様子はなく、ハマゴはそれを小脇に抱えながら障子の戸を横へ引いた。

降りかかる日光が全身を照らし、彼の濃い青髪を輝かせる。

劇的な変化はない。ただそこに、彼の新しい一日が始まろうとしていた。

「お世話になりました。こっちは昨夜作つといた傷薬だ。シロナの妹さんに渡しといてやってくれ」

「お風呂も広くて楽しかったわ。あたしからは何もないけど、本当にありがとうございましたっ！」

「いいんだいいんだ。お若い人の活気を貰ったこっちこそ、お礼を言うべきだからなあ。それと、今朝のニュースだがトバリシティでは大層な事件があったらしい。気をつけていきなさい」

シロナの祖父に見守られた見送り。別れ際の言葉に、より一層気を引き締める一行。重ねて礼を言った彼らは、世話になったシロナの実家へ深く頭を下げながら、210番道路へと足を向けた。

神話を伝えるこの街で、アカギの残り滓を辿るジユピターに出会える可能性もあった。だが、ジユピターはおそらく、ここには来ないだろうとマーズは言う。むしろ現れるのであれば、彼が消えたテンガン山の「やりのはしら」。

だが、現状はこの地方については疎い新生マグマ団を名乗る者たち

がギンガ団残党を吸収してしまっている。この地には伝承しか残っていない。ギンガ団が知っているような事実であるのなら、すでに訪れる意味もない。

「気の向くままに旅してるけど、最近なーんにも起きないわね」

「平和が一番だっつのドアホウ。俺だって怪我人増やしたくはねえさ」

「でもそのままだとあたしがジュピターに会えないんだけど？」

頭の後ろで手を組むマーズに、呆れたようにハマゴが息をついた。

「それこそ知るかってんだ」

「うわひっど」

軽口の叩き合いは暇な証拠である。

さて、カンナギタウンから東に行けば、深い霧と広い雑木林が広がる峡谷が見えてくる。この辺りは視界の悪さに加えて足場も悪く、いくつも作られた橋や階段を行き来することで、ようやく進むことが出来る旅の難所だ。

しかし険しい環境であるからこそ、ポケモントレーナーや野生のポケモンは強い。その上、霧に紛れて珍しいポケモンも目撃されることもある。

前も見づらい霧の中、彼らがえつちらおつちらと歩く先々で、川や草むらを利用した荒々しいバトルが繰り広げられていたのか、霧の中から突然飛んでくる火の粉や水飛沫が降りかかる度に、ハマゴのリュック上という高い位置に居たジラーチは被害を被っているが、まあいつものことだ。

いつもと違うのは、彼らの一步後ろの毛玉である。

おっかなびっくり。まだまだハマゴたち人間が近くにいることに慣れないのであろう。ひよこひよここと辺りを伺いながら、時折ちらりと安否を確認するハマゴの視線にビビりながら、ミニロールが彼らの後ろを歩いているのだ。

「ちよつとちよつと、朝からあの子どもどうしたの？」

「仕事の仮助手だ。まあ、まずは知識と基本的な道具を覚えてもらうがな」

懐かしいものだど、目を細めて彼は言う。

ハマゴもまだ目つき…はともかく、ピツカピカのドクター研修生であつたころは、ああやって周りを伺いながら自分がすることを探していたものだ。もつとも、目付きの悪さからガンつけられるヤンキーだと勘違いされ、周囲に避けられていたエピソードもあるが、今はいいだろう。

「そうだ、この後どっち行くの?」

「ん、トバリは絶賛工事中らしいからな。朝にはシロナからも、こつちは手が足りているから無理に手伝いに来なくていい」なんて仕事させる気無さそうなメールも飛んできやがった」

「つてことはズイタウンね。そうそう、途中にあるカフェのモーモーミルク、中々美味しいからおすすすめよ」

「やつぱごつちにもあんのな。あれは地方ごとに微妙に効果が違つてな、中々楽しみだ」

とはいえ、「きりばらい」も持つていない以上、彼らに日が落ちてきた道を進む危険を犯す理由はない。まだまだ夜も遠いが、そこは氣候の關係上日が落ちるのもそれなりに早いシンオウ。溪谷という環境も相まつて、ハマゴ一行は早々にテントの準備を整えていた。

時刻は夕方にすら差し掛かつていないが、じつとりと体を濡らす霧は異様な気持ちの悪さと寒さによる体力の浪費を迫ってくる。じつとりと濡れてよれた白衣やマーズの服をテントの中で干しながら、キュウコンがじんつうりきで近場の霧が来れないように固定化させている。

「あんたのキュウコンほんとに器用ねえ」

「ドクターの相棒だ。器用じゃなきや務まらねえさ」

と言いつつ、服と一緒にジラーチを吊るしたハマゴはジラーチの抗議を無視しながらその場にどっかりと座つた。

彼らが拠点のテントを張つたのは、苔むした大岩と小石が敷き詰められた滝壺の近くだ。川の流れも周りに比べて穏やかで、この深い霧さえなければ中々の景観だったと言えるだろう。

「……」

「キュウコンもおつかれさん、ほらよ」

じんつうりきによる霧の固定化が終わったのか、顔を近づけて来るキュウコンをワシヤワシヤと撫でくり回したハマゴは彼女の口元にポケモンフーズを近づける。優雅に頬張るキュウコンだったが、その尻尾は揺れている。如何に慈愛に満ちた彼女とて、主から褒められるのは嬉しいということだろう。

「デメエも、ンなとこで突っ立ってないでこっち来やがれ。無くなっちゃまうぞ」

洗濯バサミで羽衣が吊るされ動けないジラーチを眺めていたミミロルも、流石に食欲には勝てない。あつさりど助けを求めるジラーチを見捨ててハマゴの用意した更に近づき、フーズを一つ口へ放って目尻を下げた。

大粒のナミダを滝のように流すジラーチも、そろそろ弄りが過ぎたと感じたハマゴによって食卓に引つ張られ、ようやく美味しいポケモンフーズにありつくことが出来た。栄養・味・形ともにハマゴ考案のフーズは、彼ら一行のポケモンにとって大絶賛である。

ぎこちなかったミミロルも、ジラーチやキュウコンに囲まれて次第に笑顔を見せるようになってきた。

「ほら、あんたたちも出てきなさい」

マーズがおもむろに取り出したボールからクロバット、ブニヤット、ドータクン。そしてロトムが飛び出して、各々のポケモンフーズにありつきはじめる。人間たちはそれを眺めるばかりだが、忘れてはいけないのは今の時刻。ポケモンたちにとっておやつ時間にすぎないため、彼らは別に食事を取る必要も無いのだ。

小さな折りたたみ椅子に座って、笑顔のポケモンたちを見つめるハマゴ。いつものしかめっ面だが、視線は優しいものだ。口元に浮かべる笑みは、彼らの楽しい時間を共有している証である。

反対に、手元は忙しそうに揺れている。右手のペンは左手で持つ手帳へスラスラと文字を記していった。

「やっぱモモンよりオボンベースにしたほうが全体的な受けは良いっぽいな。ま、あの馬鹿はモモンよりカイス使ったポロツクのが好みっ

「ほいが」

「ほんとダメねえ、あんた」

「自分らのポケモンの好みぐらい把握できなくてどうするってんだ」

「あたしは把握してるからいいの」

ひらひらと片手を振って余裕を見せるマーズに、深いため気を付けてみせる。

「おまえのドータクン、ああ見えて甘党だ。シラーチ以上にな」

「……え？ でもあの子、ポフィンはいつも苦いの食べて」

「5種類のポロック3つずつで試したが、甘いのは完食、苦いのは一個だけだったな。好きっつうか、ありや口の中リセットするために食ってたらしい。ポフィンのあと、なんか別のモン食ってなかったか？」

「……そうね、ほんとそうね」

負けた、と肩を落とすマーズに対して、彼はまたため息を落とし、パタンとメモ帳を閉じた。案外こんなものが現状だ。トレーナーといっても資金は有限だし、偶然に買ってきたものを美味しそうにポケモンが食べるのを見て、それが好物だと勘違いするトレーナーも多い。

ドクターとしてはこうして餌付けすることで、診療を受けるポケモンをリラックスを促す事もあるためポロックについてよく学んだが、まあ所詮はマーズも普通の女の子○だ。

「知識が足りないなら多少なりとも学べ。活字からしか得られない知識も、バトルに役立つもんだ」

例えば、ハイドロポンプにだいもんじを当てる。するとだいもんじはかき消されるが、その際に発生した水蒸気は一瞬目くらましになる。炎ポケモンであれば高い熱への耐性があるため、その水蒸気の中で攻撃を交わし、霧を内側から裂いて現れ相手に一泡吹かせることも可能だ。

バトルをしていく内に身につく知識かもしれないが、事前に「原理」の方を知っていれば咄嗟の判断の選択肢として使い物になる。思い出すという0.1秒のタイムロス無くすのは、目まぐるしく状況が変わるポケモンバトルにおいて非常に有益だ。

「ハツハツハ、テメエの頭で理解できるかどうかは知らねえがな」

「あんたね…！ 上等じゃない！ 喧嘩売ってんの!？」

「こないだみたいなの身体能力を当てにした脳筋バトル見てりや、誰でも思うだろうよ」

ぐぬぬぬ、と怒りのボルテージを上げる人型ポケモンはさておいて、ハマゴはポケモンたちの方が騒がしいことに気がついた。ジラーチに続いてマーズ弄りも楽しいが、それにばかり時間を裂いているわけにもいかない。

「どうしたオマエら…?？」

彼らの方に歩いていけば、見覚えのないポケモンが一匹増えていた。

「何だこいつ、ブイゼル?？」

二の足で地面を踏みしめるのは、ブイゼルというポケモンだった。片手には、ポケモンたちに与えたはずのポケモンフーズが握られている。そしてブイゼルは、見せつけるようにそれを口の中に放り込むと、いかにも美味しそうに頬張り始めた。

作ったハマゴとしては野生のポケモンにも好評なのは嬉しいのだが、ぎやーぎやーと騒ぎ立て始めたのは我らがアイドル流れ星のジラーチである。

片手を振り上げて抗議を示すジラーチに、しかしブイゼルは挑発的な笑顔を浮かべてちよいちよい、と指を立てた。つまり、先程ブイゼルが食べたのはジラーチの皿にあったおやつだということか。

「〜ツッ!」

わかりやすい挑発に見事に引っかけたジラーチは、怒り心頭のままブイゼルに向かって猛ダツシュ。頭部にエネルギーを集め、流星のように「しねんのずつき」を繰り出したのだが……。

「ツッ!」

「!？」

ひらりと躲され、川の中に突っ込んだ。威力はそのまま、凄まじい水飛沫を上げる辺りは寝腐っても幻のポケモンと言ったところだろうか。秘められたポテンシャルが、かわいそうな光り方をした一幕で

ある。

そんなジラーチの攻撃力に流石に恐れをなしたのか、これはたまたまんと必死に逃げようとして同じく川の中に飛び込んだ。上流に向かい川の流れを物ともせず泳ぐ姿は……泳ぐ姿は……？

「ッ!? ッ!？」

「……おいしい、水タイプ。つかこれタダの遊びだな。帰るか」

ハマゴは背を向けてテントに戻る。

彼をそうさせたのは、目の前の光景だ。

ブイゼルというポケモンは、首のうきを膨らませたり萎めたりして、尻尾をスクリューのようにすることで推進をつける泳ぎ方をするポケモンだ。だがこのブイゼル、川の流れはそれほど早くないにも関わらず、上流に向かって尻尾を回して踏ん張るが、むしろ流される始末であった。

これには流石のジラーチも唾然として、次の瞬間には挑発したブイゼルが呆気なさ過ぎて笑い飛ばす始末。ジラーチの嘲りを受けてブチ切れたブイゼルは、すぐさま陸地に手をつけて這い上がり、青筋を立てながら笑い転げるジラーチにアクアテールをぶちかました。

綺麗に顔面に決まり、ジラーチの顔が一瞬完璧な変顔を晒す。

直後、一回。二回。三回。水面で跳ねた後に滝がある壁に激突。

綺麗な水切りをして飛んでいったジラーチは笑った罰か、はたまた生来の運の悪さか、非常にシユールな跳び方で反撃を受けて一撃ノックダウンである。数秒後、滝壺からプカ〜と、土左衛門状態で浮かび上がったその後頭部には巨大なたんこぶがこしらえてあった。傍目は完全に水死体である。

そこを逆に笑い飛ばすブイゼルも、ジラーチに似たお調子ものであったのだろう。そして似たものであったからこそ、気づくことができなかつた。

「……」

無言で背後に迫っていた、無表情で緑の極光を放つキュウコンの存在に。

鼻をツンとつくような強い香りが、ポケモンたちに一步距離を取らせている。

その円の中心には、特徴的な青髪が忙しなく揺れていた。

「つたく、俺に仕事させるんじゃないやねえつつの。キュウゴン、オマエもやりすぎなのはわかってるよな？」

彼の言葉に、プイツと顔を背けたキュウゴン。

だがそんな態度を許すはずもなかった。

「こんのドアホ」

ペシツ、と鼻先にデコピンを食らったキュウゴンはその場で鼻を押えて丸まってしまった。鍛えられたデコピンは地味に痛い上に、指の先にはマトマの汁が付けられているのだから、堪ったものではない。

そうしてキュウゴンに絶大なダメージを与えつつ、ジラーチのたんこぶがあつた場所にしっかりと「刺激の強い」塗り薬を処方し終わったハマゴは、わさびが目に入った時のようなツーンとした感覚のせいで飛び跳ねるジラーチを無視してブイゼルの方に向き直る。

こちらはキュウゴンの放つたお仕置きのソーラービームのせいでも、見事に黒焦げである。大の字に倒れてピクリとも動かない様子は死んでいるのではないかと思わせられるが、面倒くさそうに粉末を取り出したハマゴは、ブイゼルの腹をキュツと押し込んで口に水を溜めさせる。水タイプのパokemonが多く持つ「水袋」を刺激したことで口に溜まったのだ。

そして粉末を口の中の水と一緒に一気に呑み込ませた。すると、

「~~~~ツ★□?・■◆☆?!?」

「漢方屋のふっかつそう!、ちからのねっこを擦り潰してカゴのみを混ぜたとびつきりの気付け薬だ。味覚もぶっ飛ぶが、代わりに一気に回復するみてえだな」

釣り上げられたコイキングのように、口を抑えてビツタンビツタンとその場で苦しむブイゼルは、とてもじゃないがそのまま寝かせていた方が慈悲があつたのではないかと言わんばかりの姿である。

この光景を見てブリヤットを始めとするマーズの手持ちは、下手に

戦闘不能にならないよう、より精進せねばと心に誓っていたが、まあ今は深く語ることもあるまい。

「そんじゃまた馬鹿なことすんなよ。……まあ今日は大丈夫か。日が落ちる前には戻ってこい」

いつものリーダーや、キュウコンが無防備を晒している姿から今日は完全に大丈夫だと確信を得たハマゴは、たまには羽根を伸ばしてゆっくり遊べとポケモンたちを頼ってテントの中に戻っていった。

取り残されたのは無様に跳ねるジラーチと、ようやく嗅覚の辛味に打ち勝ったキュウコン。そして壮絶な名状しがたい味覚へのダメージを受けて、ピクピクと死にかけの虫ポケモンのように足を引きつらせるブイゼルだ。

ある程度打ち解けたミミロルが大丈夫か、とジラーチに歩み寄れば、また大粒の涙を流してハマゴがいじめてくるんだああああ、とミミロルにジラーチが泣きついた。今回珍しく罰を受けたキュウコンも、ジラーチにお願いしてブイゼルへ「いやしのねがい」をするように持ち掛けていた。

それからようやく、ハマゴの治療という名の制裁の効力が切れた頃。ブイゼルはジラーチらに向かって、グランプリに出れば入賞は確実であろう土下座をかましていた。

曰く、仲間内でも泳げないことから馬鹿にされ、更には中々食べ物にありつけない所、ジラーチらが能天気な美味しそうなお菓子を食べていたものだから、つつい取ってしまったのだという。その後の態度は単に空腹と嫉妬でわからなくなっていたらしい。

「……？」

「……っ！」

仲間内でも劣るといふ点から同情を覚え、許してやろうと諭すミミロルに対し、ジラーチは許してなるものかと威嚇するような声を上げていた。だが一度ソーラービームで身も心も焼き尽くされたブイゼルからすれば、その下手人であるキュウコンがいる陣営に向かってこれ以上逆らう気が起きるはずもない。

とりあえず、これ以上何かしてしまう前に消えてしまおう。ブイゼ

ルがそう思つて背を向けた時だった。

「グルルツ」

待て、とキュウコンが濟まなそうにブイゼルを引き止める。そしてキュウコンは何を思つたのか、自ら川の中へと向かい、ジラーチやブイゼルに向かつて見せつけるように、鮮やかな動作で向こう岸まで渡つてみせた。

「……う？」

「ツ！」

真似てみる、とキュウコンは軽く首を振る。

キュウコン直伝、ポケモン水泳の授業がここに幕を開けたのであつた――

水底をたゆたう 後

深い深いため息が、優美な白毛よりのぞく肉と鋭い歯の隙間から漏れ出ていく。正直な所、キュウコンが教えようとしたのは泳ぎの基礎の基礎。まずは水に浮いてゆったりと動くことだ。そのため、滝壺のある広い場所で石の生け垣を作って流れのない場所を練習場にしたのだが……。

ブイゼルは、なぜだろうか。根源的に水への恐怖心が拭えていない。そしてジラーチは鋼タイプだからだろうか。根本的にカナヅチだった。いや、それにしたってエンペルトという水鋼のポケモンもいる。タイプは泳げないことへの理由にはならないだろう。とりあえず、未だにバシヤバシヤと泳げない謎に永遠の疑問符を掲げるジラーチはこの際無視することにしよう。

ふいつ、とブイゼルのほうに顔を向けたキュウコンは、彼の泳ぐ姿をじっくりと観察し始める。すると、水に顔をつけて、自分の体よりも深いところへ潜ろうとした時だ。ブイゼルの顔は急速に強張り、手足や尻尾の動きは鈍っている。

「…？」

「ッ！」

過去に何があったのだろうか。前に何かあったのかと、訪ねようとした。しかし、その瞬間ブイゼルはヤケを起こしたように「みずでっぽう」をキュウコンに向かって放ち、苦し紛れのそれを「じんつうりき」でやんわりと捻じ曲げるキュウコン。曲げられた水の本流はジラーチの頭の上で勢いを失い、一休みしていたその頭をびしょ濡れにした。

冷たいそれを被って飛び跳ねるジラーチを尻目に、とにかくキュウコンは水の底を見つめないよう目をつむって下を向きながら浮かんでみるとブイゼルに促す。しばらくは迷っていたブイゼルだが、せっかく親切に克服を手伝ってくれようとしているキュウコンの、熱心な視線に負けたのか「わかったよ」と言わんばかりの眼差しを送り、渋々従ってみることにした。

ちやぶん、と波紋を立てる水面。慣れ親しみ、己の中にも流れるその水は、しかしブイゼルの背中をゾクリと凍えさせる。一步進むごとに全身を包む水の感覚は、確かにみずタイプであるブイゼルにとって心地の良いものであった。だが、その奥深くは。見えているはずの足元は、奈落の穴でもあいたかのように、真っ暗で真っ黒な幻影をブイゼルに見せていた。

ぎゅっ、と強く目を伏せるブイゼル。底冷えする闇のような幻影に代わって、寝る時にも似た暖かな暗がり、全身をつつむ水の心地よさだけが広がっていく。

ぎこちないが、ブイゼルはそのまま少しずつ水深を下げていった。前に進むようにするのはなく、深く、深くへと。浮袋はしぼませたまま、少しずつ強くなる水圧によって深さを感じていく。

キュウコンは水面ごしに、たしかに震えること無くしつかりと水底へと向かって泳ぐブイゼルの姿を観察する。そして、ひときわ大きな泡が水の中のオレンジ色のそれから出てきたのを確認した途端、尻尾の先を水の中に突き入れ一気に引き上げた。

顔を蒼白にしつつも、どこかほんやりとしたブイゼルが引き上げられる。大丈夫か、鼻先を近づけて目を開けたブイゼルに問いかければ、ブイゼルは行けるかもしれない、と決意に満ちた目でキュウコンを見上げていた。

一方、頭から水をかぶったジラーチはブルブルと頭を振って水を払っていた。タオルを持ったミミロールが近づいて、濡れ鼠になったジラーチをゴシゴシと拭いていく。いつも変な目にあわされるのは何でだろう。ハマゴと旅をしてから、それなりの時間が経っている。暴走仕掛けたエネルギー。それを散らすことで命を助けられ、破顔してみせた彼に気を許したのが始まりだったのだろうか。段々と雑になる扱いと、降りかかる不幸についてウンウンとうなり始めるジラーチ。

そして、ミミロールがジラーチを吹き終えて一汗ぬぐったところで、まあいいやと突然に立ち上がった。ちょうどそこに立っていたミミ

ロルは顎下からの強烈な一撃に悶絶し、ジラーチはバランスを崩して前のめりに倒れ込む。

そのまま二匹は、目を回したままその場でノックアウトされたのであった。

滝壺の大きな水場。少しばかり流れの早い底を、オレンジ色の影が通り抜ける。ひゅっ、と目の前を横切るようなそれではなく、たしかに泳いでいると分かる程度の遅さだ。とてもではないが、水タイプのポケモンにしては失笑ものの速度だろう。

だが、ブイゼルは自らの尻尾をスクリューのように回し、目をつむつたまま、水と感覚を頼りにしつかりと水流の中をまっすぐ泳ぐ事に成功していた。

上を向き、ぐんぐんと水面を目指して泳いだブイゼルは水しぶきを上げて岸へと着地。全身に含んだ水を滴らせながらも、キラキラとした目でキュウコンを見上げ、深く頭を下げた。

気にするな。ふんつと鼻を鳴らしてキュウコンも、成長した生徒に思うところはあるようだ。口の端を歪めて小さく笑うと、尻尾の一本でブイゼルの小さな頭を優しく撫で回す。吸水性抜群のキューティクルを持つ尻尾が水浸しになるが、そんなことでいちいち嫌悪感を覚えるキュウコンではない。優秀な生徒はしつかりと褒めるのは、痛いのを我慢した幼いポケモンをあやすときの常套手段だ。

このブイゼル、わかりにくいだろうが、キュウコンが幼く見る程度には幼いものだった。卵から孵って間もないのだろう。だからこそ、目覚めている期間があまりにも短いジラーチと同じ程度のレベルの争いを繰り広げていたのだろう。感情の発露の仕方はかなり幼稚なそれであった。

こうして撫でられている時も、素直に感謝の念を抱きながら嬉しそうにしている。これがもう少し成長した野生ポケモンであれば、悪意がない相手には、撫でられつつも多少の警戒心や心の壁は感じられるはずだ。

なにせよとキュウコンは、溢れる母性を惜しみなくブイゼルに注

ぎ込む。子供は好きだ。それが人間であれ、ポケモンであれ。素直で、憎らしくとも憎みきれない子供は可能性の塊だ。どんなふう成長するのか、こうして触れ合った子供がどういった道を選ぶのか。ロコンの頃に長く生き、ハマゴと共にキュウコンとして生きた年月は彼女に達観した目線を与えていた。

ふと思い出す。ハマゴと一緒に、進化したてで駆け出しのサポートポケモンだった頃だ。最初の患者だったコータスとそのトレーナーは、フエンで時折行われる大会でよく名前を見るようになった。ハマゴが一人前になって、フアウンスで初めて出会った死にかけのナツクラーは、最後に見た時は立派なビブラーバとなって、ホームセンターのお手伝いをしていた。時折フアウンスのフライゴンに会っている姿もよく見かける。

さて、このブイゼルはどうなるのだろうか。

楽しみだ、と未来を見るようにブイゼルの頭上から尻尾をどかす。タイプも形も、そして野生と所有されるポケモンとしての差。色んなものはあるが、泳ぎの技術というよりは、ブイゼルの心の治療がキュウコンにとつての精一杯。目をつむる、つまり不格好なタマゴの中から、次はどうやって殻を破るのか。その瞬間を見られないことに惜しさを感じるが、今はこれで十分だ。

あとは自分で頑張ってみろ。微笑んでみせたキュウコンの眼差しに、快活に頷くブイゼルは早速水の中へと飛び込んだ。ちょうど目を覚ましたジラーチも、事情は知らないが負けてたまるかとブイゼルの居る方へと飛び込む。せつかく拭いたのに、と肩を落とすミミロルに水飛沫を跳ねさせながら、ジラーチは必死にブイゼルを追いかけた。その差はぐんぐんと離れていき、ジラーチが水場の半分より少し前に居る頃には、ブイゼルはすでに反対の縁まで辿り着いている。ここまでおいで、というブイゼルの挑発に、バカにされた事で沸点を切ったジラーチが襲いかかる。

繰り広げられるのは、ブイゼルが捕まることのないイタチごっこ。追いついたと思ったら、それはブイゼルがジラーチに合わせて遅くするか待っていただけ。次の瞬間には凄まじい速さで差を広げ、負けじ

と羽衣を波打たせて泳ぐジラーチはただただ疲労していく。

ビシヨビシヨの自分の体を吹き終えたミミロルが、疲れたようにキュウコンの隣へ座ってみせる。キュウコンはゆっくりと上体を下ろして、リラックスしたように身を伏せた。

元気だな、と吐き出された小さな吐息はミミロルから。キュウコンはくつと笑って、霧の向こうの赤くなり始めた空を見上げる。そのまま小さなポケモンを丸呑みにできそうな口を大きく広げて、あくびを一つ。こんな、まつたりとした日が続けばいいのね。欠伸でつられた涙を拭い、キュウコンはゆったりと昼寝を始めるのであった。

ぴよこんと揺れる黄色い耳が、もふもふの黄色い毛皮と共に上下する。

「いいか、この道具はな……」

ジラーチが水辺でブイゼルたちを遊んでいるのを横目に、巨大なバックパックから一つ一つの道具を取り出して説明をするハマゴ。真剣な表情で、ふむふむと頷きながらたどたどしい手つきで道具を手に取り、ミミロルはそれらがどのような使い方をされるのかを学んでいる所だった。

「とりあえず、まずオマエに任せられるのはすべての基本になるノーマルタイプのポケモンについてだ。といっても、実際には俺が手を離せねえ時バックパックから持ってくるだけの雑用だな。そのためにも、まず簡単なものの使い方を一通り教えたってわけだ」

目の前にずらりと並ぶ幾つかの器具。数としては少ないが、我々によく知る「きずぐすり」「シリーズに始まり、何に使うか分からない器具や、すり鉢のようなものも並んでいる。

「ここまで理解したことを示すため、ミミロルは一つ頷いてみせる。『よし、そんじやテメエに任せられんのは簡単なバトルの怪我だな。『きずぐすり』や『すごいきずぐすり』でどうとでもなるやつだ。使い方は習ったとおり、発射はしなくていいから開けるトコまでやってみせろ』」

ミミロルはトリガーの近くにあるタブを横に倒し、ノズルを患部と

書かれた紙の一点に向ける。片手で支え、少しだけトリガーを押し込むような仕草をしてハマゴを見た。

ポケモンに道具を持たせても使えないものの理由の一つだ。手や触手があるポケモンならともかく、こうして工程を挟んで使用するようなものをバトル中に使っているヒマなど無い。「だつしゆつボタン」のように押させることで発動させるものとはともかく、ポケモンが扱えない道具には幾つかのアクションを挟む必要があるときが多い。

だが、実際にバトルも関係なく別の行為のためだけならば。ポケモンでも道具を使うことが出来るのはよく知られた事実だ。ホウキを持ったバリヤード、ピンポンをするエテボース。ポケモンレンジャーに付き従うパートナーポケモン。その姿は日常から見ることが出来る。

「そうだ、焦らずしつかりとセーフティは切り替えしろよ」

彼は鞆の中が薬液濡れなのは簡便だからな、続けてと座り直す。

「んで、問題なのはソレ以上の怪我だ。原理はわからんが、殺すつもりで放った“わざ”ってのは洒落にならねえ傷を残す。そういう怪我の対処の時は、俺の出番だ。オマエにはほんとに簡単な、熱い湯の入ったボウルや調合済みの薬なんぞを持ってきてもらおう。タイプ別にマークでラベルが張つてあるが、こいつについてはまた今度にすつぞ。まずはテメエのわざの確認するからな」

そう言つて、ポケツチを向けるハマゴ。やがてそこに、ミミロルのパーソナルデータの他、使える技の構成やミミロルの健康状態についてのパロメータやグラフが絶えず変化するデータが浮かんでくる。

雑多な情報を払い、ハマゴは技の一覧をじらりと見つめる。

「“ほのおのパンチ”、”れいとうパンチ”か」

ノーマルタイプの特権のようなものだが、何かと物理・特殊には別れるものの、ノーマルは使える技の種類が豊富なことに定評がある。中でも炎、水、電気タイプの技は覚えられやすく、多くのノーマルタイプのポケモンが冷凍ビームやほのおのパンチと言った技を覚えている事がある。

このミミロルも例に漏れず、その身に秘めるものを持っていたよう

だ。

「軽くでいい。れいとうパンチを繰り出さずにここで出せるか？」

炎に関しては後でいい。まずはミミロルに「自分だけ」の役割を作ってもらおうよう、ハマゴはキュウコンに出来ない氷の技について訪ねた。

一瞬迷ったようだが、ミミロルは右拳をブルリと震わせる。やがて漂ってきた、外の霧ともまた違う背筋を震わせるような冷気がミミロルの拳にまとわり付き、周囲の空気を凍らせ、それを明かりが照らすことでキラキラとした氷の力を宿した拳が浮かび上がった。

「……強すぎるか？ とりあえず、こいつにれいとうパンチを打ってみろ」

ジラーチたちがいる滝壺あたりから掬ってきた水を入れた水桶とぷんと揺れる水面に向かって、ハマゴが求めているであろう現象に当たりをつけたミミロルは不安げに、しかし手を突き入れる。

結果は案の定である。桶の中の水は完全に凍りつき、ミミロルが拳を突き入れた衝撃で飛び跳ねた形のままに氷結してしまっていた。

「そうだな、キュウコンを見てりやわかると思うが、とにかく技の威力つてのは抑えつつ器用に使ってもらわねえとだな。理想はほのおのパンチで体温を温めるためだけに留める、とかよ」

極寒の地で風邪を引いてしまったポケモン、しかし場所は洞窟で、不幸にも焚き火くらいしか使える熱源が無い。そんなときこそ、ミミロルのような役目を持つポケモンが寄り添って温めることが求められる事もある。

もちろんそんな状況にならないのが一番だが、何があるのかわからないのがこの世界の常だ。ソレ以外にも、医療中の様々な用途に使える以上、ミミロルには器用さを身に着けてもらわねばならない。

「当面はわざの威力調整、んで道具の名前と用途を覚えるトコからだな」

「……」

のっけから上手くいくはずがないと分かっているても、せっかくのアイデンティティが得られるチャンスの第一回目だ。これまでソレに

飢えていたミミロルとしては、肩を落とす他に感情の表現が出来なかった。

しかし、ハマゴは項垂れるミミロルを笑い飛ばし、言ってみせる。「懐かしいぜ、キュウコンも最初は俺を黒焦げにしてきやがったんだ。それに比べりや、下手に強すぎるよりはオマエみたいなのがちよūdいいいんだよ。ゆっくり伸ばしていきな。どうせ、ジラーチを預けるなんて目標も無くなっちゃった以上、俺の旅路は長いんだ。それまでに教えられる時間もたっぷりある。それに、俺もまだまだ勉強中だ。お互い様つつうやつだな」

いつもより、圧倒的に饒舌に。しかし教える立場の者として、ハマゴは語る。偉そうに語っているのも今だけで、殆どは教わったことをそのまま受け売りで話しているに過ぎないが、と。

スタートが遅れている以上、すでに遠い場所に立っているのだから、このような言葉を言ったところで下のものが満足することは少ないだろう。だが、それでもほんのちよūぴりでも伝わることがあるのなら、こうして言葉に乗せるだけで良い。知識とはそうやって伝わっていくものだ。

「かったりい話はここまでだ。遊んできな、あの馬鹿^{ジラーチ}も待つてるぜ」
「……」

「遠慮すんな。良く食べ、よく遊び、よく学ぶ。どこぞの漫画にあった言葉だが、全部楽しんでこそ身につくもんだ」

ハマゴはどっこらせと、辺りに並べた道具をバツクパツクの中に仕舞い込んでいく。本当に今日の授業はこれでおしまいようだ。ぼうつと見上げるミミロルに、小さく口元を釣り上げて、仕方無さそうにハマゴが息を吐く。

「つたくよ、貪欲なのはいいが、詰め込みすぎちまえば覚えきれねえこともあるだろ。ほら、いつちま——えッ、とお！」

ミミロルを抱え上げ、ジラーチがいる方向へとぶん投げるハマゴ。突然の事に目を白黒させるミミロルは、そのまま放物線を描いてジラーチたちが居る水場へと着水。小さくはない水柱を立てて川の中に沈んでいった。

かと思いきや、再び水飛沫がジラーチとブイゼルの顔を濡らす。自慢の毛並みもぐしょぐしょになったミミロルを見て、突然笑い始めた両者にミミロルはほのおのパンチとれいとうパンチを同時に繰り出し、呑気なお調子者共に制裁を加えてみせた。

「おーおー、器用なことできるじゃねえか。十分によ」

「相変わらず扱い雑ねえ。はい、あとはあそこの馬鹿三匹よ。夕飯前にはさっさと呼びなさい」

「あいよ」

片手を額のあたりに垂直に当て、遠くを見通すハマゴ。ワックスや櫛を手に、ポケモンたちのコンディションを整えていたマーズへ軽く左手を上げて返事を示す。だが、来いといって、すぐに戻ってくるような輩でもないだろう、とマーズは当たりを付けていた。

実際に呼びかけては見たが、ゲームをやめられない子供のようになるとちょっと、と言わんばかりに鳴き声を上げて遊びに戻る始末。はしやぐのもいいが、夕飯その他の予定がある以上は生活リズムにちゃんと従って欲しいものである。

「ダメだわこれ」

「ま、人間サマのご都合なんざ知ったこつちやねえのがポケモンだ」

バックバックに道具を詰め直し、自由気ままな姿こそが真実だと言い放つ。手際よく元あつた位置に説明用の器具と、絵を書いた紙を分別しながらゴミ籠へ入れる。こんなもんか、そう呟いた眼前の景色は、何も置かれていないテントの床が広がっていた。

「さつて、過激にバトル始めたな」

いつしか水遊びは、水のフィールドを利用したバトルフィールドになっていた。ジラーチがサイコキネシスで水流弾をぶつけ、それをアクアテールで切り裂きながらアクアジェットで突っ込むのは水底への恐怖を克服したブイゼル。最初の剣幕で優位に立てていたミミロルだったが、次第に激化する両者のバトルに巻き込まれて半べそを書きながら逃げ帰ってきていた。

マーズの胸に飛び込んでおいおいと泣くミミロルをからかって、ボールから抜け出したロトムがウケケケ、と笑い飛ばす。

「平和なもんだな。続きやいいが」

そう長くはないことを知っているからこそ、ハマゴは自分で吐いた言葉に重みを感じる。ジラーチが起きていられるのは後どれ位先なのだろうか。願いの力だったとしても、ポケモンの持つ習性がそう簡単に変わるとも思えない。ましてや伝説のポケモン。生きたデータは日々集まっただけでも、わからないことのほうが多い。

不意にポケツチの、ジラーチについて収集したデータにちらりと目を通す。最初になんとかせき止めた莫大なエネルギーは、安定させただけで未だに中で燻り続けている。おかげで眼前の喧嘩のなんとダインミックなことか。通常ではありえない出力のサイコキネシス。半減どころか、ほぼ攻撃をシャットダウンするリフレクター。深い毒を受けたポケモンを復帰させるリフレッシュ。ここ最近、それが顕著になって来た気がする。

「マーズ」

「あによ?」

「今度、アイツとバトルしてやってくれ。文字通りガス抜きしなけりゃ危ねえかもな」

「……はあ、突然シリアスするのやめてくんない? せっかく献立考えてたつてのに、頭のなかで作ってた雰囲気台無しよ。慰謝料よこせ」

「はいはい、わあーったわあーった」

間延びしたように応えて、腰を上げる。そのまま袖を捲くったハマゴは、調理台へと歩いていく。彼らを包む濃い霧の向こう、燦然とした星々が、澄んだ空に輝き始めようとした頃のことであった。

霧を突き抜けたまばゆい日光が、バシヤツと弾ける水滴を煌めかせている。尻尾を勢い良く回し、止まる時はキュウコンがやっていたように体全体でブレーキを掛け——加速のし過ぎで止まりきれず、その体は岸へと放り出された。

「……」

やれやれ、調子に乗りすぎだと目を伏せ首を振るのはキュウコン。

一方打ち上げられたブイゼルは、嬉しそうに笑って手を振り、キュウコンへとアピールを欠かさない。完全に親のように思われているが、こんな事も前には何度もあったなど。キュウコンは口の端から歯茎を見せてにやりと笑う。

またあえる日まで。一期一会に終わったとしても、この大切な時間を忘れずに。のっそりと歩いてきたキュウコンは、周囲に放っていた「じんつうりき」の波動を打ち消した。途端、周囲から真っ白な霧が迫ってきて、ハマゴらが拠点にしていた場所へとなだれ込む。

「もういいのか」

「……クツ」

キュウコンへ問いかけるハマゴ。しかし、彼女は笑って後ろを顎で示した。すでにブイゼルの姿はない。別れたとしても大丈夫だと分かっていたのだろうか、どちらにせよ、いつまでも足を止めている必要もない。

またあった時には立派なフローゼルになっているかもしれない。いざ本気を出してみれば、ジラーチを張り合えるほど積極的なブイゼルだった。だとしたら、その時にまた成長した姿を見せてくれれば、キュウコンにとって十分なのである。

「わかったよ、なら行くぞ」

キュウコンをボールに戻し、バックパックを背負い直すハマゴ。ジラーチの「しんぴのまもり」で体を薄く多い、霧の湿気を完全に克服した彼らは己の旅路の歩みを再開する。宛もなく彷徨うが、ひとまずの目標は今朝あったシロナからの言葉に従うことだろうか。

マーズは神妙な表情で、ポケッチが受信したニュース画面を眺めていた。

「トバリ襲撃。この地方を脅かす新たな組織、その名は『マグマ団』。行方不明者増加の一方、各地のジムリーダーやポケモン協会は……物騒な記事が出てきたわね」

今朝、シロナから連絡があった通りだ。

トバリシテイを襲ったマグマ団がシンオウを揺るがす大事件として表に出た。だが、その巨悪も、シロナの言葉を信じるなら糸口は見

えるはずだ。

「こうなっちゃまった以上、隠し通せるようなもんでもねえだろ。未だに洗脳された使い捨ての戦闘員もいるだろうしな。ったく、俺もなんでこんな事件に手を貸しちゃったんだらうな。こちとら密猟者の一個師団がせいぜいだったのに」

「それも大概だと思っわよー？ それより、すぐにズイタウンに向かいましょ」

足のストレッチをして、彼女は言う。

「プルトのじいさんが運び込まれたんだっていうんだから、あんたの面倒も終わりの手がかかりが見つかるかもよ？」

ロトムについて聞きたいこともあるし。と続けようとして、彼女は言葉を断ち切った。こつちに関しては個人的な事情だ。

「厄介ごとの切符を買いに行く、の間違いだろ」

いつの間にか流れ、流れて行き着いたポジション。そんな経緯はあるにせよ、ハマゴもマグマ団やギンガ団の野望を阻止する第一線の人物として数えられているのは間違えようのない事実である。どちらにせよ、早期に解決せねば傷つくポケモンが増えることも確かだ。

「とりあえずは目指せズイタウンだ。トバリのときに怪我した奴らも運び込まれたみてえだし、今回ばかりは急ぐぞ」

「そうね……」

砂利が靴裏に挟まれ音を立て、蹴り飛ばされた。

彼らが目指すはズイタウン。

放牧と遺跡が名所の、ゆるやかな空気の町。

陰り明るい放牧の空

ガサガサと背の高い草が揺れ、真つ白なバタバタとしたものが風を起こす。撒き散らされた土砂が苔むした岩を汚し、そこに集まっていたムツクルの群れが飛び立った。霧に隠れた大自然の溪谷に立ち込める霧。その水気を十分に吸い取った草木が他の土地よりも大きく長く育っていくのだ。

乾き始めた地面を、多少泥っぽい靴が踏みしめる。じわりと滲む地面が黄土色から焦げ茶色に変わる。ザリザリと足を動かして泥つぽさを払ったハマゴは、草にくっついてた露に濡れた体を拭きはじめた。

「ここがズイタウン、か」

巨大な放牧地に囲まれ、側の崖には遺跡のようなものに続く道もあった。しかし今は、どこかのどかで、のんびりとした空気の中に人間特有の焦ったような気配が感じられる。とはいっても、そんな気配を感じているのは彼らの手持ちのポケモンの方なのだが。

一つ遅れて、また茂みが揺れる。ハイビスカスの花卉にも負けない情熱的な赤色が、葉で覆い隠された道からがさりと這い出てきた。彼らの旅の道連れマーズその人だ。

彼女は唐突に投げ渡されたタオルを受け取り彼の横に並び立った。ここに、あのプルートのいる。そしてトバリの事件の負傷者たちも。

彼は後者が目的で、彼女は前者が目的だ。本当なら彼とて当事者であるのだから話を聞くべきであるが、他の場所にその腕を振るわねばならない場面である。当然というべきか、癒し手となる人材の多くも、このシンオウを騒がせる失踪事件——つまりは洗脳された手先となつている事が多い。

ハマゴの視線に無言でマーズが頷き、町の十字架を目指して歩き出す。

バックパックに伝説の星を乗せて、彼もマーズの後ろを追い始めるのだった。

「チャンピオンからの紹介データ、んでポケモンドクターのハマゴだ」
「助かったわ。近くの市外センターの子にも呼びかけてたけど全然足りなくって…とにかく、あなたに任せたい子たちはこっちよー」

ズイタウン総合病院の中はあっちだ、こっちだと、人手の足りないスタッフが走り回る戦場と化している。当然通常業務の方にも対応する必要があり、日々病院を利用する人間が一人も居ないなんてことはありえない。よって、ポケッチのマップデータと自動ドアの前には「臨時休業」の張り紙を起き、ズイタウン近くの旅人の中継地点にもなるポケモンセンターからもジョーイさんや、ドクターがかき集められる事態になっていた。

猫の手も借りたいとはこの事だろう。早速仕事を押し付けられたハマゴは手に持ったカルテに目を通しながら、ポケっと突っ立っているマーズに告げる。

「あー、見ての通りだ。しばらく本業に専念するんでな、テメエはテメエで爺さんの話聞きに行きな。流石に元犯罪者つてのもあつて個人病棟だよ」

「わ、わかったわ。それじゃ一段落着いたら連絡お願い。落ち合う場所を送るわ」

言葉は返さず、白衣を翻し片手を上げて答えたハマゴの背中中は、人だかりの中に埋もれていった。タブンネが乗せられた台車がマーズの視界を埋め尽くした頃には、曲がり角にでも言ったのか彼の姿は見えなくなる。

気を持ち直し、ポケッチのメールに目を通したマーズは、再度プリントが眠っている病室を確認。そちらに向かって歩み始めた。

「D309号室……こっちじゃないわね」

病室のナンバーを見ながら進むほど、人気も少なくなり、なにやら病室では無さそうな部屋をいくつも通過し始める。変な作りだ、こっちで合ってるんだらうか？ そんな疑問を浮かべつつも、すぐさま疑問は氷解する。棟を分けて渡り廊下の前に立っていた黒服の人物。

彼らがマーズに話しかけ、人物照会を行ったからだ。彼らのいる場所を通り、渡り廊下の向こう側、そのまた更に一番奥の部屋で彼女の靴がカツンと音を立てて止まった。

静かなものだ。ロビーに比べて、無音が支配する。

コン、コン、ノックを二回。

半透明のすりガラスの向こうで、特徴的な黄色い何かが動くのが見える。

「どうぞいらっしやい。待ってたわ」

聞き覚えのある声だ。先に待っていたということだろう。

「失礼するわ」

扉を開けると、点滴のチューブが目を引いた。その先に繋がれているのは、薄目を開けて此方を覗き込む静かな視線。真っ白で汚れのない病室は、なんだか自分がふさわしくないような錯覚を覚えさせる。病院に来る前に、しっかりと体も服も、旅の汚れを落としてきたはずだが。

いや、そうじゃない。きっとこれは精神的なものだろう。

今はそんなことより、話を聞くほうが先決。先程の考えを振り払って、ベッドの横に座る金沙のような長い髪を持つ美女……シロナの隣にあった椅子に座らせてもらった。

「ハマゴ君は？」

「あいつは本業よ。後で話しておくから、問題ないわ」

「わかったわ。あと、プルートさんもそこまで回復してるわけじゃないから、労ってあげてね」

「チャンピオン、あんたはもう訊いたの？」

「いえ、まだよ。あなた達を待ってたから。それに、個人的に聞きたいこと……あるんでしよう？」

シロナの問いに、当然だと頷くマーズ。

真剣味を帯びた瞳は、会うことにかつてのギンガ団時代とは違う輝きを増している。少なくとも、シロナはそう感じてフツと小さく笑ってみせた。

「姦しいものじゃな……」

息も絶え絶えに、彼女らの交流にプルートの口を挟んだ。

軟禁状態から、今度はそれこそ死ぬ寸前まで働かされる職場へ、そしてようやく病室という場所で平穩を手に入れた彼は、どこまでもくたびれた様子で眩くことしか出来ない。身じろぎ一つが骨に響いてくるのだろうか。小さな声は、しかしはつきりと二人の女性の耳を打つ。

「騒がしくしてごめんなさい。早速だけど、プルートさん。あなたに訪ねたいことがあるわ」

「ふん、約定を違えたあやつらに義理もない。話せるだけのことは全部話してやるわ。ワシも疲れきったのじやろうな、何の意欲も沸かん老いぼれよ……」

バツが悪そうにいい切った彼に、嘘はないだろう。

一度目を伏せて、マーズは少しだけ身を乗り出した。

「それじゃあたしから。ねえ、ジュピターが今何をしているのか、あんたは分かる？」

ジュピター。その名を聞いて、プルートはわずかに目を閉じる。ほんの僅かな沈黙と、掠れるような声が老人の喉から吐き出されるまで、それほどに差はなかった。

「あのアバズレであれば、未だに何やら喚いておったよ。じゃが、アレも限界じやろうて。マグマ団に吸収されてからは妙に言葉の上手い若造に騙され、三文芝居を繰り広げてはどこかへと出撃しておった。もはや己が何をしておるのか、それすらも認識できておらぬやもしれぬ」

ジュピターは幹部の中でマーズよりも、誰よりもアカギに心酔していた。その分、目の前でアカギが消えたことと、ギラティナを呼び出すべが見つかからないこと、その状態が何年も続いていること。すべてが重なり、精神は限界に近いのだろう。そこでジラーチやマグマ団が転がり込んできて、出てきた可能性を前にして理性は弾け飛んでいる。

「催眠術……暗示、もあるじやろうな。スリーパーがその若造の隣に付き従っておるのを見たことがあったわ。何れにせよ、ワシらがまだ

単独で活動しておった頃よりまともな精神状態ではなかったのは確か。なんじゃ、同僚のよしみというやつか？」

だが、正気を失ってなお、戦闘となれば実力を発揮するような人物だ。マグマ団としては大いに利用する価値がある。話術に長けた者が相手をすれば、洗脳装置を使わずとも、自己判断の可能な戦闘人形の出来上がりと言ったところか。

「そっか……アイツを止めなきゃっていう目標、変えるしか無いみたいね」

もともと、森の洋館で聞いていた内容で薄々思っていたことだった。ジュピターという女性は、もはや救わなければならぬ側になっってしまったているのだろう。少なくともマーズはそう認識し、プルートの言われたとおり「同じ幹部のよしみだったから」と。……本当にソレだけだろうか？ いや、それよりもジュピターをどうすれば救えるのだろうか？と頭の隅で考え始めようとして、

「勇ましいことじゃの」

「…あんたは耄碌したわね。ギラギラした目つきが懐かしいわ」

「ふひやひや！ そうじゃの、あの時が最後だったかもしれない」

「まあいいわ。チャンピオン、あんたから言うことはないの？」

しかし、今は個人的な話もそうだがこのシンオウに関わる事件についても重要だ。自分からは以上で終わりだと目配せしたマーズに代わり、シロナが質問を始める。

「プルートさん、マグマ団は何をしようとしているのか、分かりますか。赤い鎖の欠片が盗まれたこと、そしてあなたの研究が利用されたこと。そして膨大なエネルギーを宿したジラーチが狙われていること。私は、それがどうにも——」

彼女の言葉を遮って、プルートが言う。

「伝説のポケモンを操り、何かをしようとしている、かの？」

「……そうとしか、思えなくて」

「さてな、ワシも死にたくなければああしろ、こうしろ、と従わざるをえんかったわ。老いぼれだとして、ワシも命は惜しい。ソレに関して苦情は受け付けんぞ」

協力する位なら命を絶つ、などと。そんな選択肢が出来る人間は極僅かに限られる。シロナですら、多少は迷いを見せるだろう。だが、迷うということはつまり、自分が助かりたいという願望を僅かでも持っているということ。生殺与奪を握られている中で、迫られる選択肢。責めることなど、できはしない。

「じゃが、ワシの頭脳があつてこそ研究も進んだんじやろうな。詳しく分解しようものならマグマ団配下の輩に止められたが……分解せんでもわかる。アレはポケモンの制御装置じゃ。とびっきりのな」
「やつぱり……となるとマグマ団の狙いは」

「さて、シンオウの神々がまた狙われるのか……はたまた奴らがマグマ団と名乗っているままであることに意味があるのか。詳しくはわからんが、方向性はそれで決まりじやろう」

ここでシロナは、ハマゴ経由で伝えられたバトラーという人物のことを思い出す。

「メタグラードン、という名前に聞き覚えはありますか？」

「……ふうむ、どうじやったかな」

老人の眉がぴくりとはね、メタグラードン、グラードンとしきりに呟き出す。

彼の知識の蔵書がまた一冊と並べられて、凄まじい勢いで捲くられていく中、やがて小さく首を振ることで彼女への答えを示した。

「覚えはない、な。ワシも所詮は使い捨てじゃが、こうして奪還されることは想定しておったはずじゃ。故にあの基地には碌な輩は残っておらんかったじやろ」

「知られても問題のない所しか知らせてないってワケね。はあ、相手してみると相当に厄介じゃない、犯罪組織ってのは」

それをお前が言うのかと視線が老人から突き刺さるが、途端、プルートが咳き込み始める。もともと鞭打っていた体で、今は落ち着いた所で面会が許されたに過ぎない。体力の回復のため、何より彼自身のためにもこれ以上の質問は控えるべきだろう。

シロナはナースコールを押しながら、伝わるようにゆっくりと言葉を伝えた。

「プルートさん、また落ち着いた頃に来るわ」

「ゴホッ、ワシからもまだ伝えることはある……じゃが、また、後での……」

近くの部屋に控えていたナースに介抱されながら、その言葉を最後にゆっくりと眠りに落ちるプルート。途端、ぽんと頓狂な音が病室に響き、マーズのモンスターボールからロトムが飛び出してきた。

「……！」

「落ち着きなさい」

心配そうに、せわしなく飛び回るロトムを裏手で叩いたマーズ。痛みで動きを止め、講義するように涙目で見上げるロトムを落ち着かせよう、彼女は膝を折って目線を合わせて言った。

「また会わせてあげるわよ。その時、しっかりお話すればいいでしょ」
「……」

流石に今は無理があるのは分かっているのだろう。だが、感情が優先してしまっただけのこと。それに、ロトムという電気タイプのポケモンが感情を露わにして飛び回れば周囲の電子機器に異常が生じるのも時間の問題だ。かつてプルートという研究者のもとにいたからこそ、その危険に関しては十分に承知している。家電に取り付き姿を変える性質を持っているため、なおさらだ。

それでもすぐれない表情で目元を下げるロトムを、仕方ないと一息ついてマーズがボールの中に戻した。一旦頭を冷やせば、勘定の整理もつくだろうと思つてのことだ。今生の別れではないのだから。

「これ以上は悪いわね。近くのお店にでも寄りましょうか」

「あの子にもごちそうしてもらつてもいい？ ちよつと、手持ちが無くてね」

「もちろん。手を借りているのはこつちですもの」

シロナの提案に乗つかるマーズ。そのまま両者は、病院をあとにしたのだった。

横たわるポケモン、ボスゴドラの地肌の部分を観察する。黒ずんだ

石のような肌は、一分の鋼の部分に至るまでに大きな焦げ目を残していた。野太い鳴き声がボスゴドラの口から漏れ出るが、それは泣き言ではなく我慢の虚勢だ。

「落ち着け。下手に力むな」

「ウウウ……」

よく見ればこのボスゴドラ、バトル一回程度ではつかないような傷も多い。戦闘不能に追い込まれてなお、相手が容赦なく攻撃を浴びせた結果がこれだろう。喉の奥から湧き上がる怒りを抑えつけて、あくまで冷静にハマゴは処置を始める。

診断の結果。この程度なら痕が残ったり、後遺症も心配はないとの結論に達した。人間であれば一生ものだが、あいにくと彼らはポケモンだ。生命力の強さはポケモンが登場し始めた頃の医療関係者が匙をへし折るほどに高い。

目の前で息を荒げながら、今もなおその身を蝕む痛みには抗うボスゴドラ。そんな彼にハマゴは語り聞かせるように言った。

「テメエはリーダー格か。よくやった、テメエのおかげでコイツラは軽く済んでるんだ。……だがその前に、一回耐えろよッ！」

見れば、このボスゴドラの周りにはコドラやクチートなど、同じトレーナーのポケモンと思しき面々が並んでいる。意識を失っているわけではないが、それでも痛みにあえぐ彼らの前で泣き言を漏らしたくないのがこのボスゴドラのできる最後の抵抗だったのだろう。

それに免じて、今からそれなりに「しみる」ことがあると宣言したハマゴは、ボスゴドラの火傷部分にチーゴとラムを粉末にし、その後特別な薬液で溶かした半液状の塗り薬を火傷の部分に塗り始めた。

「ッ!? アアア……!」

「耐えろ、今だけだ。歯ア食いしばってりやいい! ハイドロポンプよりはマシだ」

あの巨体の腹部から、肩口に至るまでの大きな火傷だ。何度も手を握っては開きながら、目を見開いて暴れないように我慢に我慢を重ねる。そんな「しみる」津波が訪れたのもほんの数秒。先程までジユクジユクと痛んでいた患部から、砂に染み込んでいく水のように痛みが

消えていく。

脂汗を浮かべつつも、感謝の念を込めてボスゴドラがハマゴを見据えた。

「おうよ、テメエもよく頑張った。今は寝ていいぞ」

頭を撫で、優しい口調で語りかける悪人面の医師。安堵を感じたボスゴドラは、これまで張り詰めていた分があったのだろう。気絶するように深い眠りへと意識を沈めていく。だが、その寝顔に苦しさというものは感じられない。

「そっちも終わったか、キュウゴン、ジラーチ」

ボスゴドラを含めた鋼パーティ以外にもハマゴの担当は多い。その中でも特に重症だった彼らをハマゴが担当し、その他軽度のもはキュウゴンが担当する。そしてジラーチは部屋の中心で「いやしのねがい」を発動させることでポケモンたちの治癒力を活性化させる。中には細胞が再生するむず痒さを覚えるポケモンも何匹か居たようだが、完治する未来に比べれば些細なものだろう。

キュウゴンは腰につけた薬液パックの中身を、じんつうりきを用いて塗りたい、ご自慢の「おにび」で消毒などを担当。他にも溢れ出る母性で「トレーナーや親からしか受け付けないポケモン」などに安心させて栄養食を食べさせたりと、仕事は多い。

そして当然、あのポケモンも初仕事を始めている。

「ミミロル、緑のラベル持ってきたらそっちの食器交換頼む」
「ッー」

慌ただしく、おっかなびつくりと言った様子で動く体に合わせて揺れる2つの長い耳。そう、ミミロルである。今のところは物を運んだり食事を持ってきたり、本当に軽度のバトルでしかつかないような傷に習ったばかりの傷薬を吹きかけたりと。その程度のことしか出来ていないが、だからこそハマゴやキュウゴンは効率よくポケモンたちを診る事ができていた。

「ジラーチ、そっちもお疲れだ。あいつらと落ち合った時に好きなパフェ買ってやるよ」

やがて深緑の波動を放っていたジラーチが部屋の中心からフラフ

ラとした様子で飛んできて、ハマゴの腕の中にすっぱりと落下する。使えば戦闘不能となる技「いやしのねがい」。正確に言えば、戦闘どころではなくなるほど、疲弊してしまう技。それを長時間行っていたのは何かと技の威力が高すぎるエネルギーを秘めているからこそか、どちらにせよ、今回の功労賞はジラーチでもいいほどの働きを見せてくれた。

「……もう夜だな。ひとまずこの部屋は落ち着いたってところか？」

カルテにガリガリと書きこみながら、全体を見渡すハマゴ。

もともと、トバリ事件からここまでの移動に数日掛かっていたこともあって、ポケモンの処置も大部分は終わっていたのだろう。それでも彼が即戦力として重宝されたのはスタツフも負担が限界だったからこそだろうか。とにかく、現状他の部屋も仕事はある程度落ち着いたのか、昼ほど慌ただしい様子は感じられない。

幸いこの部屋には居なかったが、しばらくはバトルも出来ないほどに傷つけられたポケモンもいるはずだ。そうしたポケモンたちを含めて、経過観察と治療を続けていくしかないだろう。そしてそれは——もうハマゴが居なくても出来ることだ。

「ハマゴさん、急遽駆けつけてくれてありがとうございます。あとは私たちに任せてください！」

「ジョーイさん。いや、これも俺らの仕事だ。傷ついたコイツラにはわりいが、俺もいい経験になった。こんだけの大所帯をやったのは初めてだったからな」

ファウンスは襲われたとしても、捕縛と鎮圧の速さも相まってポケモンたちが大多数傷つくということは無かった。マグマ団とアクア団もとを正せば行き過ぎた環境保護団体だ。街を破壊するような暴拳に出るような組織ではない。今の過激派を除いて、ではあるが。

「ああそうだ、俺のやり方で治療した奴らのメモだ。多分シンオウこつちとは違うところも多いだろうし目を通していてくれ」

「ありがとうございます。そういえばハウエンのドクターでしたね。よろしければ此方からも資料を出しましょうか？」

「是非にもだ。いいのか？」

「はい、チャンピオンのお墨付きですし、安心して渡せますから」

紙の資料ではこれ以上はかさばるため、後日ポケッチに送るとのことと話はまとまった。業務(医療)用の試作ポケッチの物珍しさと、興味を引き立てることで徐々に宣伝の目的も果たしつつ、ハマゴはそのまま病院を出て、ポケモンセンターに向かうことにした。

満天の夜空が広がる広い道。土を踏みしめて歩けば、青白い月光をハマゴの白衣が受けてうっすら青く染まる。夜のズイタウンは、都会だったコトブキシテイなどに比べて人の往来は少なかった。当然病院ではまだ働いているジョーイさんや医師もいるだろうが、外に出て仕事をする人々は太陽と生活をともにしているのだろう。

「っはあ……焦ったぜ」

牧場の柵に両腕を置いてもたれかかり、初めて本音を漏らした彼の後ろにキュウコンが歩み寄る。ここまでの大所帯、そしてポケモン一匹一匹に語りかけて堅実に治療を施していった中で、彼の精神はガリガリと削られていった。

これまでの旅路で見たこともないシンオウのポケモンも多かった。マサゴタウンでナナカマド博士から貰った資料を横目にしながら、割れやすいガラスの彫刻を扱うように慎重に選択肢を上げ、選び取っていく。幸い命に関わるような火傷や怪我は無かったが、それでも「初めて」という経験の中では、彼の心を容易に蝕んでいった。

そんなハマゴを労るでもなく、キュウコンはゆったりと首を振った。

「ああ、そうだな。この程度で音を上げちゃったらダメだ」

いまはボールの中ですやすやと眠るジラーチの時もそうだった。あの時は、自分の命を含めた最大の危機のなか、今のよう資料すら手元にはなく、ぶっつけ本番で反応した星のかけらに頼らざるを得ないという状況だった。

思い返してみれば、あれのどこが治療だと鼻で笑う。あんなもの、そこらのトレーナーにだって出来る。医師としての技量は全く関係ない。

「まだまだ、遠いもんだ。どんなポケモンだって治してやりてえ。だ

けど知識も経験も、なあんも足りねえ。集中したいが、だからといって人間も見逃せねえ。わっつけわかんねえな、人生つてのは」
「……」

ハマゴも18歳の未成年に過ぎない。

彼が教えを受けた先生の技量にすら届いていないだろう。今日、ズイタウンにいたのがハマゴの先生なら、もっと上手く立ち回ったに違いない。そんな考えが浮かんでは消える。

キュウコンも何も言わず、彼の隣に移動する。

ちらりと一度だけ見たのは、どういう意味を込めた視線だろうか。彼はキュウコンの頭に手を乗せ、首まで手を下ろしてから耳元をくすぐるように撫で回す。片目を細めて、抵抗せずにその手を受け入れたキュウコン。彼はそちらに目をやらず、ひたすらに空に浮かぶ星々を見つめている。

ハマゴに触れられていない方の右側の目をあけて、キュウコンも空を見上げる。

星々は何を意味しているか。ジラーチ？ ギンガ団？ それとも、別の願いかもしれない。見上げる彼らに言葉も表情も何も無い。ただ、その目はまっすぐと空を向いて、やがてゆったりと閉じられる。

「センター行くか。戻れきゆう……ったく、エスパーかつての」

言葉の途中、腰につけたボールの開閉スイッチに鼻先を押し付けて、自ずからボールの中に入るキュウコン。多少呆れを帯びたため息を吐きながら、ハマゴは静かな牧場の横を歩き始めた。

ポケモンセンターの小さな光を目指して、靴音だけが夜に響く。朝日はまだ、見えない。

休息とは必須なもの

「こんな朝からいきなりどうしたつつうんだよ」

「ごめんなさい、でも貴方にしか頼めないの」

朝方、シロナに叩き起こされたハマゴは彼女に連れられズイタウンから遠ざかる景色を眺めることになっていった。眠りこけるジラーチをボールに戻し、渋々ついていった先で彼はジープに乗せられドライブと洒落込んだというわけである。

やがて車を止め、なおも奥へと進んでようやく彼女の足は止まる。つられて足を止めた彼は、目を見開いたかと思えば次の瞬間には額にシワを寄せた。

訝しむように、ハマゴが訪ねた。

「おい、ただの廃屋じゃねえか」

石造りの遺跡だろうか。ズイの南に位置する塔の残骸がある辺りは、シロナの考古学者としての能力が発揮されそうな遺物がゴロゴロと転がる歴史の集積所だ。中でも原型が残っていて、かつ雨風は凌げそうな場所へと案内された彼は疑問を浮かばずにはいられなかった。

ちなみに、その両肩には旅路でいつも背負っているバックパックが掛けられている。必要だからと言われて案内され、たどり着いたのは廃墟の一角。ここまでくれば、流石の彼でも検討はつく。

「変わった患者か」

「正解よ。……ダークさん、入ります」

廃屋の入り口に手を掛けて、近くのランプを灯すシロナ。

明るくなった地面には一人の男が寝転がされている。時折苦しそうに呻き、脂汗を垂らす姿はあまりにも痛々しいの一言に尽きる。乱雑に巻かれた包帯は見るからにベトベトで、環境もそうだが適切な処置だとは到底思えない状態だった。

「ああ、たしかに診れるぜ、だが専門じゃねえってことは忘れてねえだろうな？」

「私もつい最近までは知らなかったわ。でも、彼は……いいえ、彼らはポケモンドクターのハマゴくんだからこそ任せられるの。きつと、す

ぐにわかると思う」

どう見ても人間なのに、ポケモンドクターだからこそ呼ばれたという。しかも、病院に搬送せず、わざわざこんなところで看させるというのは……相当な訳ありであるというのは、嫌というほど理解させられた。

ハマゴは眉間のシワを何度も寄せながら、十秒ほど思案した後には頷いた。

「わあつたよ。どつちにしろ見過ごせねえ」

バックパックを弄りながら、彼はそう返した。

「どう？」

「こいつは驚いた。ああ、そんでジョーイさんじゃなく俺に任せた理由もハッキリわかつちまった。デンジャーゾーンに全身ダイブさせられちまったみてえだнатてのものな」

「ごめんなさい、でも、彼らのことを公にする訳にはいかないわ。無事に、彼らの主の元に戻らせなくちゃならないのもあるけどね」

いくらか楽になったのだろう。息を落ち着けたダークトリニティの一人は、先程よりもずっと落ち着いていた。その場に散らばるシートと、その上に乗せた道具の数々を回収しながらハマゴは内心で大きな息を吐く。

ダークトリニティ、といったか。

これまでシロナが頼りにし、独自に雇った相手であるというのは聞いている。だが、こうして診察、治療したことで人間離れたその活躍の正体がようやくわかった。すでに包帯の下にあった火傷も、いくらかザラザラはしているだろうが爛れはなくなった綺麗な肌になっているだろう。

回復力がまるでポケモンじみている……いや、ポケモンそのものと変わりないのである。人間のくせに、ポケモンと動揺の回復力を見せる細胞。真つ当な素性の持ち主ではないことはすぐにわかった。ポケッチに記録されているデータも、外部へ出すことは避けねばなるま

い。このようなことが表沙汰になれば下手な混乱では済まないだろうから。

「詳しくは聞かねえぞ、聞きたくもねえ」

「私もわからないわ。それに、いざとなれば彼ら自身が口封じに来る。だからこそ、秘密にしてほしいの」

「俺も自分の命は惜しいさ。あつたりまえだ。クソツ」

ただのポケモンドクターだったはずが、なんでこうなってしまうのか。ハマゴの心の中を占めるその考えは、ここにきて急速に強まっていく。ジラーチを拾ったことに後悔はない。眠りを全うすることが出来ないのだから、悪の組織の手から守りつつシロナの解決を手伝うことに異存もない。だが、それでも同時に明かされる厄介な事実や、この後につきまとう展開のいくつかを想定するだけでも相当まずい位置にいることはしつかりと理解していた。

ポケモン相手ならこれでいいだろうと、オボンをベースに、シンオウの葉草を混ぜて作ったポケモンの体力を全快させるとも苦い液体を鉄製の筒に詰めて並べておく。患部にふりかけることで「かいふくのくすり」とほぼ同様の効果を発揮する謹製の一品である。

「こいつなら後はこれだけで十分だろ。どうするんだ?」

ことりと、筒を簡易な台の上に置き、シロナに問いかけるがその返事は彼の真後ろから帰ってきた。

「……我らがついている」

「っ!」

振り返れば、いつの間に現れたのだろうか。黒い装束に身を包む銀髪の間人。ダークトリニティの2人が入り口を固めていた。いや、先程からここに居たのかもしれない。相も変わらず人離れた隠形であると思いつつながら、シロナは冷たい汗が背中を伝うのを感じた。

「それから、あなた達のポケモンよ。ジョーイさんと彼のおかげでしつかり回復してるわ」

「確かに受け取った」

言葉少なくモンスターボールを受け取り、懐に入れる三人衆の一人。

ちらりと倒れ伏した同胞を見た彼は、短く「去れ」とだけ呟いた。

「このことは他言無用。忘れるな」

「……ああ、俺もそっちの世界に関わるつもりはねえよ」

「ならばいい」

ハマゴの言葉に嘘が含まれているのかどうか。それすらも理解できてしまうのだろうか。もしかすれば虚偽でしかないかもしれない。その台詞にも疑いを見せず、ダークトリニティはハマゴとシロナを追い出した。

また少し歩き、ジープに戻ってきたシロナたちは特に何をするでもなくジープに乗り込み、エンジンを吹かせもと来た道に戻っていく。帰り道、シロナと先日のプロトから得た情報を教えてもらいつつ、彼は手元のポケッチを操作する。投影ディスプレイの廃棄のボタンを押し、ダークトリニティの医療データは削除された。

昼前の人がまばらなズイタウンの飲食店。ここに集まっている面々はマーズ、シロナ、そしてハマゴ。いつもの異変解決に向けて活動する面々である。久々に出会ったこともあり、これまでの道中にあった事を面白おかしく話しながら、着実にコップの中のドリンクを減らしていく。

和気あいあいとした歓談も一息ついた頃、おもむろにマーズから一つの言葉が飛び出した。

「で、あんたはこれからどうするの?」

「どうにもこうにも、でかい都市一つを襲って、チャンピオンや実力者を同時に相手取って大立ち回りができるやつがリーダーだっただろ? 中でも一番バトルの弱い俺が、とやかに言える立場なんかじゃねえのは分かってるだろうが」

「そうね、これまでではバラバラに動くことで何か情報が集まらないか期待してたけど、例の鎖も敵の手の中。あとはジラーチを保護してるハマゴくんに合流したいと思うが対抗しやすいでしょうしね」

真剣な表情で言い切るシロナ。

「どうやら、このまま話が進めばシロナと足並みを揃える事になりそうだ。」

「旅も一旦中止か。しゃあねえな」

「ごめんなさい。貴方は巻き込まれただけなのに」

「ジラーチ助けた時点で、自分から首突っ込んでるんだ。今更んなこと言われても仕方ねえや」

「あーあ、と背もたれに寄りかかって彼は言う。」

「とりあえず、この後どこに向かうか宛はあんのか？」

「ええ、マグマ団の中でも幹部だと思われる一人を捕まえたわ。以前に捕まえたメンバーは殺されていたけど、今度はダークさんたちが直々に取り調べを行うらしいから、期待できるはず」

「殺されてたって、あの事件ね……」

道中、ポケツチのニュース欄に書かれていた。完全に出入りも制限されたはずの牢の中で、世間を賑わせている組織の犯罪者が殺されていた事件。ニュースの報道番組などでも口封じだと騒がれていたのは記憶に新しい。それもすぐさま、雑多なニュースに押し流されていったが。

「ともかく、ダークさんの一人が回復しきったら私達も行動を始めるわ。それまでズイタウンを中心に過ごしててもらいたいんだけど、大丈夫かしら？」

「俺は問題ねえぜ。ついでに牧場やアンノーンの遺跡も見に行くつもりだからな」

「ちゃんと進めるなら、あたしも大丈夫よ。仕方がない同僚について、ちよつと考えたいこともあるからね」

「……随分しおらしいな、ジユピターの話でなんかあったのか？」

「そんなとこよ」

「そうかい」

マーズの様子を見て、今は触れないほうが良いだろうとハマゴが席を立つ。20000円をシロナの手に握らせた彼は言った。

「それで飯でも食っててくれ。ああ、ここは安全なんだよな？」

「きつとダークさんの一人が見てくれてるわ」

「なら安心だ。俺は牧場の方いってくるぜ」

じゃあな、と手を振って彼は店を後にした。

一連のやり取りを見ていた店員も、とくに咎めず彼を見送りに行く。

「…ジュピターさんのこと、ね」

「あいつ、流されやすいったらありやしないわ。いつまでも過去に縋り付いて…そりゃさ、あたしもちよつと前まで一緒だったわよ。でも、そこまで堕ちたって聞いちやうと、やっぱりさ、思うところあんのよね。何にモヤモヤしてるか分かんないけど、とにかく胸の中でな〜んかつつかえてるわ」

ごまかすようにストローに口をつけるが、すでにジュースはなくなっていた。バツが悪そうに顔を背け、彼女は己の悩みの一分を少しだけ吐き出してみる。だからといってジュピターを巡る問題が片付くわけではないのだが、今はちよつとした休憩時間。

ふわふわとした思いを抱え、ハマゴと旅を続けられるわけでもなくなつたのだ。それが分かっているからこそ、シロナはまだまだ己よりも若いこの二人に重荷を背負わせてしまっている事に心をいためた。本来ならポケモン協会、そしてチャンピオンたる自分や、大人たちの間で済ませなければならぬ問題だ。それを成り行きとは言え、因縁があるとはいえ、大人にはまだ届いていない子供らが協力してくれている。

トバリで敵のリーダーを捕まえきれなかったことも含め、シロナは力不足を痛感する。だからといって、自分ひとりでは何も出来ないのは確かだ。

自分も強くなり、そしてマーズも因縁の相手を前にした時動けるようにするには…？　そこまで考えて、やはりこれしかないだろうと思いつく。ポケモンリーグのチャンピオン。この地方において最強に近い称号を持つ自分だからこそだろうかと、漏れた苦笑を隠しながら彼女も立ち上がった。

「マーズさん、バトルの特訓をしましょう」

「へっ？」

「いえ、特訓よりも実力の確認……全力でバトルしましょ。形式は一對一で」

「……ああ、そういうことね」

聡いものだ。もう、この言葉の真意に近づいたのだろう。

それでも笑ってみせたマーズはなんと評価すればいいのだろうか。

好戦的な笑みを浮かべて、望むところだとマーズは答えた。

「……あんまりギャラリー居ないほうがいいのは分かるけど、案外気づかれないものね」

「そうかしら」

「つてか印象変わりすぎだもの。そりや気づかないわ」

ポケモンセンターのバトルフィールド。

そこで相對するのはおなじみマーズとシロナ……だが、知っているものなら少しその言葉を疑うであろう光景が広がっていた。

シロナは、この地方で殆どの人間が知っているビッグネーム。当然容姿も知れ渡っており、人の前に姿を表そうものなら人だから出来ることうけあいだ。だが、シロナも何らかの心変わりがあったのだろうか。ここに来るまでに我々の印象を大きく覆すような七変化をして訪れていた。

動きやすいラフな格好、ここまではいいだろう。

問題はその髪だ。長い髪は一つに後ろでまとめられたポニーテール。いつもの髪飾りは髪を縛るためなのか、側頭部ではなくポニーテールの付け根に括られている。いつも髪の毛で隠れている左目は露出し、普段のミステリアスさよりも快活な印象を受ける容姿であった。

「ま、なんだって良いわ」

眩くマーズの言葉に偽りは無い。

容姿がどう変わろうと、本質はこの地方でも有数の実力者、歴代より強いからこそ君臨できるチャンピオンの座に腰を下ろす者。相手にとって不足はないどころか、今の自分の実力を試すいい機会だと割

り切った。

今はとにかく、ジュピターのことよりシロナの考えに乗っていたほうがいいだろう、という考えもあったことだ。腰に手をやり、モンスターボールの一つを手のひらに収めて構えを取る。

「準備はOKよ！」

「ルールを確認するわ。互いに一対一でポケモンを出し合うシングル戦！ タイプ相性が悪くとも、最初に選んだポケモンを変えることは出来ない。これでいいわね」

対するシロナもまた、ひとつのモンスターボールを構えていた。

互いの手持ちは知れ渡っていても、何が出てくるのかがわからない。

なにより、悪と正義という立場から対等となった今、マーズの心を占める戦闘意欲は一時的に先程の悩みを心の片隅へと追いやるほどであった。

音もなく、静かなフィールド。

両者の手のなかで、開閉スイッチが押し込まれる。

同時に投げ放ち、回転したボールが空中で静止。

開いた中から現れた光は、ポケモンというデータを肉体に戻し――

「初陣よ！ ロトム!!」

「行きましょう、ガブリアス！」

方や空をせわしなく飛び回り、片や静かに爪を構える。

ポケモンごとの性格がよく出た動きだが、ロトムとてこれはバトルということは理解している。館に侵入してきた輩を追い払うときのように、これが彼の臨戦態勢であるのだろう。

「そのロトム、プルートさんのときの」

「細かいのは後、それでいいんでしょっ」

「ふふ、そうね。早速行かせてもらおうかしら！」

シロナの宣誓とともにガブリアスが距離を詰める。地面の土が飛び散ったかと思えば、次の瞬間にはロトムの眼前に移動するその脚力は驚きの一言に尽きる。ただのトレーナーならこの時点で間合いを

完全に取られ、敗北していただろうが――

「左に避けて！」

「ダブルチョップ！」

咄嗟の指示で一撃目を避けるロトム。しかしダブルチョップはもう一撃を残している。空中で身を捻り、確実に射程圏内へ捉えたガブリアスは右の翼を勢い良く切り払った。

「おどろかしてやんなさい！」

技の名を聞いたマーズは既に次の指示を決定していた。当たる直前、弾ける電気がガブリアスの聴覚と視覚に強い刺激を与えて攻撃を中断させる。スツと逃げ出したロトムはのけぞったかと思うと、引き絞られた弓で打ち出されたようにガブリアスへ向かった。

攻撃を中断させられたガブリアスも、既に着地し反撃の体勢が整っている。両者が向かい、今度こそ技が激突する。

「あやしいかぜよ！」

「ドラゴンクローで切り裂いて！」

全身を打ち付けるべく遅い来る闇色の突風。浅葱色の爪を伸ばしたガブリアスは正面から立ち向かい、腕を交差させてロトムにむかって突き進む。この距離では避けようのない技ではあるが、防御して突き進めばダメージは格段に抑えられる故の進撃だろう。

とにかくガブリアスは距離をつめ、ドラゴンの強靱な肉体を駆使して戦うパワーファイターだ。時には手を付けられず、ただ暴れさせるに過ぎないトレーナーも多いが、シロナは当然それらのちからを全て十全に扱いこなす技量を持っている。

大きく伸ばされたドラゴンクローが一時的なバリアとなり、ガブリアスをあやしいかぜから守りながら道を切り開いていく。ロトムも正面から突破されるとは思わなかったのか、やがて風の奔流を抜けたガブリアスからの一撃をモロに受けて地面に叩きつけられた。

「追撃にシャドークロー！」

「ツ！」

このままではまずいと判断したマーズ。だが、この状況だからこそ作戦を思いつく。

咄嗟の彼女の叫びは、シャドークローがクレーターを生み出す音にかき消されシロナの耳には届かなかつた。えぐり取られた地面には土埃が舞うが、ガブリアスは確かに手応えを感じている。このままバトルもあつけなく終了、などというつもりはシロナにはなかった。

手応えはあつた。だが、浅い！

「ッ！ 上よガブリアス！」

砂煙が晴れ、そこには何も居ない。

その事実を確認した瞬間、シロナが叫ぶがガブリアスの振り下ろした手はロトムの「みがわり」を貫通した地面に深く突き刺さっている。引き抜くのはほんの一瞬だが、その一瞬こそがバトルにおいては十分な隙だった。

「ハイドロポンプ!!」

いつのまにか姿を変えていたロトム——ウオツシユロトムが一体化した洗濯機の蓋を開き、激流の一撃を空から降らせた。タイプは水。抜群といまひとつがかき消されてはいるものの、ロトムが持つ攻撃力はガブリアスの体力を削り取ることだろう。

ギリギリで回避が間に合ったように見えたが、方向を変えながらロトムがハイドロポンプを撃つたことでガブリアスの体は水とともにフィールドの端へと押し流された。地面にガブリアスの体を擦り付けながら押し飛ばした一撃は強烈である。

水を滴らせながらガブリアスは立ち上がるが、その体には決して小さくはないダメージが刻まれている。現状、有利なのはロトムといったところだろうか。

「初陣だつていうのに、大したものね」

「……手を抜かれてそんな事言われても嬉しくないわよ。チャンピオン、あんた全然指示出してないじゃない」

シロナの称賛に、しかしマーズは厳しい目で言葉を返した。

本当のチャンピオンの実力はこんなものではない。一撃は岩をも破壊し、動きは雨をも避ける……というのは言いすぎかもしれないが、それでも恐ろしい程の実力者であることは確かだ。そんなマーズの態度に、シロナは微笑みを返す。

「なら、私も本気を出していくわ」

「それは……」

シロナがポケットから取り出した七色の宝玉。

キーストーン。ポケモンをもう一つ、上のシンカに押し上げる事ができるポケモンたちの新たなる可能性だった。

「ガブリアス！」

ガブリアスにメガストーンが投げ渡される。

キャッチしたそれを掲げ、シロナはキーストーンをガブリアスへと翳す。

紡がれるのは遙か彼方の地方より伝わりし……

「メガ、シンカッ！」

iは○○○だから

「メガシンカー！」

キーストーンから伸びる光が、ガブリアスの持つメガストーンと繋がった。ゆつくりと姿形を変えていくガブリアス。まとった光を弾き飛ばし、よりより攻撃的にフィンが変形した両手を持つメガシンカ形態を露わにする。

気合十分、脅威十全。放たれるプレッシャーは先程の比ではない。ロトムとマーズは同時に固唾をのみこみ、ただガブリアスの威容に圧倒されかけていた。

「本気、とは言ったけど私も慣らしておきたいの。この子がどこまでやれるか…付き合ってもらおうわ、マーズさん！」

「ッ、望むところよ！」

「ガブリアス！」

呼びかければ、ガブリアスは地面を蹴った。ウオツシユロトムもその様子を見たままではいるわけではない。ガブリアスの動きを目に捉え、いつでも動き出せるように体制を整えた。

ガブリアスが地を蹴り、シロナの指示が続く。

「ドラゴンクロー！」

「避けなさい！」

振りかぶったドラゴンクローを紙一重で避けるロトム。

一撃、二撃。そうしてガブリアスの猛攻はなおも続くが、次第にロトムの動きに精細がなくなってきた。空を自在に飛べるアドバンテージはあれど、このまま直撃をもらえばKOもありうる耐久力の低さがネック。だが、マーズはある瞬間を狙っている。彼女が鋭い視線を猛攻の様子に向けているあいだ、シロナもまたトレーナーの動向をも見ている。

ガブリアスが一步を踏み込み、避けたロトムの移動地点に淡い光の龍爪を振り下ろす。——こころ！

「後退してガブリアス！」

ロトムが立ち止まった瞬間、シロナの一喝がフィールドに響いた。

「あやしいひかり！……くっ!?!」

混乱の状態異常を狙った瞬間、ガブリアスは一気に距離を取る。ロトムの眼前で炸裂した光の玉は、当たること無く虚しく中空に溶けていった。一手を完全に読まれていた。いや、流石にわかり易すぎたのかも知れない。だが挽回はまだまだ可能であると、これまで見てきたガブリアスの動きを考慮した上で、マーズはその結論を出す。

だが仕切り直しも兼ねて、まずは無防備な現状をどうにかせねば。先程の攻防からほんの1秒にも満たない時間で思考を済ませて、再度動き始める。

「距離を取ってロトム！」

嫌な予感を感じたマーズが、続けざまにガブリアスと同じく後退を指示したのだが。襲い掛かってきたのは翡翠の龍を身にまとったガブリアスの突撃。指示よりも早く、再びロトムに接近したガブリアスの一撃がロトムに牙を剥いた。

バックステップを刻んだ分、余裕はある。だが、現状のウオツシユロトムの体の面積では避けられない。体を伝う嫌な汗が、ドラゴンダイブ以上の危機感を彼女に知らせている。

「ハイドロポンプ！」

だからここは、避けることよりも迎撃と防御を選択。ウオツシユロトムの胸部のマドが開き、凝縮された水の力が一直線の奔流になって放たれ、接触寸前だったドラゴンダイブと真正面からぶつかり合う。

ドラゴンダイブが生み出す推進力と、ハイドロポンプの押し出す力。技同士のぶつかり合いは拮抗しているようにも見えたが、ロトムはハイドロポンプを放出しながら後退しているため技の威力はガブリアスのほうが上。

このままではジリ貧。ふりを悟ったロトムが退避した瞬間、動きを読み、身を振ったガブリアスが水流を切り裂き回避方向へと現れた。勢いを弱めるハイドロポンプがただの水となってフィールドに染み込んでいく。その間にガブリアスはフィンを翻して鋭い一撃をロトムに刻み込む。

ドラゴンクロード。その一撃はロトムの同化を解除して余りある

ほどの衝撃を持っていったのか。マーズの手元にストラップサイズになった洗濯機が戻ってくると同時、マーズ側のフィールドに吹き飛ばされたロトムが転がってきた。

「立っっちゃダメー！」

イナズマのような手を使って跳ね起きようとしていたロトムは、咄嗟に力を抜くことで追撃に来ていたドラゴンクローの下をくぐり抜ける。アレが当たっていれば戦闘不能になっていただろう、と。内心ひやりと汗を垂らす。いつもの陽気な笑みの口元も苦笑いに見えるほどだ。

避けられたことで不発に終わったドラゴンクローが地面を砕き、爆炎が舞い上がってポケモンたちの姿を覆い隠していく。その様子を見ながら、マーズは頭の回転を早めていった。

現状マーズ側が不利であるせいか、先程からシロナの指示がほとんど聞き取れないためか、ロクに攻勢に出られていない。メガシンカと本気が組み合わさった瞬間、間違いないくシロナはチャンピオンと呼ばれるだけの実力が在るのだということが分かる。

だからといって、まだまだ互いの時間が浅いマーズとロトムが絶対に負ける、などという事は無い。ポケモンバトルとは一進一退の攻防の末、ジャイアントキリングを成し遂げ、勝利し、新たなステージへと立つ事が可能なのだ。

たとえレベル差があろうが、伝説のポケモン相手にノズパスのおせんぼが有効であるように、必ず相手に通用する技がある。故に、最後まで諦めない者には必ずや勝利への道筋を作り出すことが出来る。

そのための手段を学び、勝機のために道具を使う。そしてガブリアスはメガストーンという道具に恵まれている。ならばロトムは？

そう、彼の恵まれているものと言えは――

「そこよー、ドラゴンダイブ！」

マーズの思考が終点に到達した瞬間、シロナの鋭い声とともに砂煙が切り裂かれた。もともとじめんタイプが混ざっていることもあって、ガブリアスの攻撃は正確にロトムが退避していた方向へと吸い込まれていく。

先程の光景から、ハイドロポンプを撃つてもこのガブリアスには通
用しない。故に、一度完全に回避してから反撃に出るかどうかといっ
たところ。少なくとも、シロナはそう考えて次の一手を用意してい
た。

それは先程と同じく追撃のドラゴンクロードだ。これまで巧みに避
けてきてはいたが、そろそろロトムスタミナも限界に近いはず。何
より、ガブリアスの技から技へと繋げる上手さは彼女自身が熟知して
いる。そんなシロナの考えを裏付けるように、一手目であるドラゴン
ダイブは予想通りに外れた。

次だ。次の手でよりこのバトルの勝敗は確実なものになるはず。
油断も慢心もなく、しかしこれまで多くのバトルで感じてきた確信を
持って振り上げられた手は、ガブリアスのフィンと同じ動きでロトム
のいるであろう場所に右の切っ先が振り下ろされた。

だが感じたのはロトムを打ち据えたそれではなかった。

「凍っている!？」

暴風によつてガブリアスの全身が吹き飛ばされた。いや、それだけ
ではない。ガブリアスの右手を起点として体の方まで、雪のように
白くなった氷がへばりついている。水ときて、次は氷。ロトムの形態
変化にはまだ他があるのかとシロナが答えにたどり着いた瞬間、完全
に砂煙を吹き飛ばしながら、体と一体化した「扉」を開いたロトムが
飛び出してきた。

「追撃しなさいー! ふぶき!」

一点に力を込められ突破されるなら、その腕だけでは防御仕切れな
い広い攻撃に移し替えればいい。冷蔵庫と一体化したロトムはギリ
ギリのところまで受け渡されたそれにより、ハイドロポンプをふぶきに
変えて反撃の一手を打ったのだ。

しかし相手はチャンピオンとそのポケモン。黙ってやられている
はずもなく、張り付いた白い霜を振り払ったガブリアスは、ダメージ
こそ負っているもののそれを感じさせない素早い動きでその場を離
脱する。

不発に終わった吹雪が地面の一部を雪で白く染め上げた。漂う冷

気は、しかしガブリアスを侵すほどではない。キュツと片足を軸に方向転換し、反対の足で地面を蹴ってガブリアスがロトムに迫る。初速から一気に最高速に達したガブリアスの周りには、龍の気がまとわれていく。

「ドラゴンダイブ！」

「ふぶきー！」

衝突し合う二体の技。霧散した冷気がシロナとマーズの立つフィールド端にまで届き、柔肌にぞわりと寒気を与えていく。

至近距離による咄嗟の判断だったが、カウンターじみて当てた吹雪は確かに直撃した。ドラゴンクローならともかく、ドラゴンダイブだったのが幸いだらう。だが、マーズはこの時点でバトルの行く末を感じ始めていた。

数秒が立ち、煙が薄くなってきた頃に、ドサつと倒れ込む音が聞こえてくる。

フィールドで目を回しているのは——とても小さな影。

「戦闘不能……あたしの負け、ね」

悠々と聳え立つ壁のようだ。

未だ健在のガブリアスを見て、心からそう感じる。

登りきるのか、それとも壊してしまふのか。いまいち雑念が振り切れなかった結果の敗北であるというのは、マーズ自身にもよく分かっていた。

「けど、少し吹っ切れた。ありがとチャンピオン」

ロトムにボールの光線を当てながらに言う。バトル前の、迷っているような空気を少しだけ払うことが出来ているような微笑。悩みの全てが吹き飛んだなんてことはないのだろう。けれど、今この時点では前に歩く踏ん切りがついた。そんな雰囲気から感じられる。

シロナもまたガブリアスを労り、モンスターボールに戻してマーズの方へと歩みよる。そのまま無言で差し出された右手を、マーズは少し驚いたような表情で見つめた後、しっかりと握り返した。

「あなた達、中々いいパートナーになれるわ」

「ありがと。チャンピオンのお墨付きなら安心ね」

「さつきから買い被りすぎよマーズさん。私もひとりのポケモントレーナーに過ぎないんですからね」

そんなシロナの言葉に苦笑する。

あんたがタダのトレーナーなら、そこらにいるトレーナーはどうなんだと。

「うん、実力も確認したことだから、ダークさんが復帰するまで、特訓と行きましようか」

「いくらでも！ あたしたち、強くなるって決めたからね。いずれはその足元掬ってひっくり返してやるから、覚悟しときなさい」

そしていずれは、あの「英雄」も超えてやる。なんて事も心のなかで付け足しながら、はるか高みを目指して、在るき続ける意志を抱いたマーズ。そんな二人の影はポケモンセンターの中に消えていった。

それから数日間、ズイのポケモンセンター横にあるバトルフィールドは、大いに盛り上がりを見せるのであった。なんせ、かのチャンピオンとそれに食らいつく凄腕トレーナーがいたのだから。

白熱したバトルが始まろうとする同時刻、マーズたちと別れたハマゴはズイの牧場の方へと足を運び、牧場主の許可をもらって広大な野原をアチラコチラへと歩き回っていた。

自分の興味も当然あるが、彼は腐ってもポケモンドクター。そうした情報への取引材料として、自分のドクターとしての腕を提示したというわけである。そうして数多のポケモンの診察と、同時にデータの収集。久々に緊張もなく、のどかに本職としての仕事に充実した時間を送ることができていた。

「特に病気もねえし、元気そのものだけ」

カルテを片手にメガネの位置を治した彼は、握っていたペンにキヤップをかぶせた。

場所は牧場主の住む家のリビング。温かい搾りたてのモーモーミルクが目の前に差し出され、一言感謝を返してハマゴはコップを口に運ぶ。

「ありがたいなあ。でもほら、最近物騒じゃあないかい。うちの子も攫われないか心配だよ」

「マグマ団、って奴らだな。一つ言えるのは、あいつら馬鹿馬鹿しいほど狂ってるってことだけだ。過剰だと思っちまうくらいに備えたほうがいいぜ。……なんせ、ニュースの通りだからな」

「ちらりと近くの新聞に目をやれば、たたまれた新聞の一面には「一家失踪、マグマ団の影あり!」というテロップがでかど書かれています。読み込んでみれば、彼らの手口がいかなるものかを綿密に聞き取った上で対策を呼びかけているような文面だ。もはや、新聞の一面記事として見るには別物だろう。」

ポケモン協会としても、彼らの存在を隠す方が混乱を招く事態になったと観念したらしい。ここ最近では、メディアなどをフル活用しマグマ団残党を明確な悪に、敵に仕立て上げようとする動きが盛んになっている。注意にはとどまらず、各地のジムリーダーも率先して街を守る、もしくは街のトレーナーを強くする取り組みも始まっているらしい。

記事から目を離れたハマゴは、鋭い目を更に細くして額にシワを寄せる。

もしかしなくとも、ここまで話を大きくしたのは自分が原因ではないだろうか。普段はまず考えないであろう弱気な言葉が、彼の頭に浮かび上がってきていた。

「マグマ団はマークのついた腕章があるからな、新聞のあれを牧場のポケモンに覚えさせて、見つけ次第攻撃したほうが手っ取り早いかもしれねえな」

「物騒だねえ。でもまあ、そうするしか無いのかねえ。……ともかく、ありがとうね。お医者さんの言ってみたとおりにしてみるよ。育て屋さんもほとんどのポケモンが引き取られてるって言うし、うちも協力しておこうかね」

「育て屋か……そうだな、物騒な時期だ。孤立すると危ねえのは確かだ」

ギンガ団の残党が居たときからの話だが、マグマ団の凶行が進むに

つれてここ、ズイの「育て屋」の活気は日ごとに静かになってきているらしい。ポケモンが囚われ、道具のように使われる。そんな団体が居る以上、自分の手の届かない場所にポケモンを置いておくわけには行かないという精神だろうか。

他にも、急速に活気を削がれていった施設や企業は多い。このシンオウ全体に悪影響を及ぼしているマグマ団には、その分さらにヘイトが向けられるようになっていく。

彼らが出現してから随分と時間も経った。怯えるばかりではなく、殺気立つ人も増えてきている。更にはトバリシティの事変だ。あれからズイに避難した人の中でも、マグマ団を見つけ次第殴りかかりそうなほど気が立っているというのも少なくない。

だが安易な考えで手を出そうものなら、相手は立派な力を持った組織だ。トバリも然り、街ひとつ簡単に壊滅させる暴力の一旦は、民間人に向けられるには過ぎたもの。

「考え過ぎか。まったく、わかんなくなってきた」

重苦しい考えを振り払うように、検診を終えたハマゴは道具を引き上げて牧場を後にすることにした。

「ここが、アンノーンの遺跡か」

牧場から離れる途中、ズイの遺跡のことを思い出した彼は気のおもむくままにアンノーンたちが静かに眠る遺跡の方へと足を向けていた。道中、ダークトリニティの一人が木に背中を預けて此方の視界に入るよう立っていたため、一人で活動する危険性については現状、問題ないといえるだろう。

それはともかく、遺跡である。気分転換も兼ね、観光でもして心を落ち着けようと入り口を抜けたハマゴを待っていたのは、背筋を凍えさせるような薄ら寒さと、どこまでも静かな薄暗い空間。

上を見てみれば、音もなくサイコパワーで飛び回るアンノーンが黒色の体を闇に溶け込ませて宛もなく飛び回っている。僅かに光が反射して見える、大きな一つ目だけが浮かび上がる様はいつそホラーにも近い感覚だろうか。

「ありとあらゆる地方に存在するアンノーン、不思議なもんだな」

ジョウトの石版があるとある旅のトレーナーに動かされてからというもの。各地方に存在するアンノーンの遺跡が次々と見つかった。カントーはナナシマに、ここシンオウはズイに、そしてハウエンはマボロシじまと同じように消えたり現れたりする洞窟に。

アンノーンの体は文字にもなるようで、それぞれが象る姿に対応して26文字と、自分たちもよく使う「!・?」を含めて28文字。組み合わせで自分たちの言語に対応させることも出来るし、この文字は実際に各地の遺跡の壁や地面に描かれている。

古代文明の人間は、アンノーンから文字を見出したのか、それともその文明で使われていた共通の文字があったから、各地のアンノーンも同じ姿をしているのか。はたまた、文字が同じという事は遙か昔はこの広大な世界を一つの部族が治めていたのか……。

ポケモンとしての性質は変わらないが、形ひとつとっても延々と研究が続けられる不可思議なポケモン。そして、実際にパートナーにしているトレーナーは皆無とっていい。そんな不思議なポケモンが昔と変わらぬ姿で悠々と、天井近くを浮遊している。

「……考え過ぎだな」

無心で治療し、無我夢中で助けられる人を、ポケモンを助ける。

シンオウに始めてきた頃は、そんな今まで通りの気ままな旅を続けられていた。自分の手は狭くない。だけど、目に見えた範囲は必ず救ってみせる。自分勝手ながらも、芯の通った決意はたしかにあったはずだった。

今となつてはどうだろうか。なりゆきで、しかしドクターとして傷つくものたちが増えるのが許せず、この大きな事件に協力を申し出た。ジラーチが全ての始まりとは言え、いてもいなくても、前までの生き方を出来ていた瞬間は確かにあった。

戦う事が増えた。襲われることが増えた。……自ら、傷つける相手が増えた。

これでいいのだろうか？

襲ってくる輩には容赦をするつもりはない。それはファウンスの

密猟者にもそうであつたし、厳しい大自然の中で身につけた考えだ。人と触れ合うことは多くとも、社会に触れて生きてきたわけではないのが仇になったのだろうか。ドクターという身分ながらも、コネや人づては多くとも、基本はソロ活動がこれまでの歩み方だ。

今回はほぼ全てがシロナを通じてとはいえ、組織ぐるみの問題解決に取り組むような身の上になった。ダークトリニティのように、知らなくても良い情報を握りつぶさなければならぬ場面も出てきた。

歩く方向は間違つて居ないのだろうか…？

これまではマーズのことも含め、歩き続けていたから気にならなかつた考えが、回りに回つて頭の中を埋め尽くしていく。ズイというのどかな街とは裏腹に、ズイを含むシンオウ全体を覆い尽くす嫌な空気が邪魔してきているのがわかる。

所詮、自分は成人もしていない18歳のガキに過ぎない。ドクターという身分があらうと、まだまだ人生経験が足りていないのは確かだ。

「ああ、くっそ」

ガシガシと頭をかきむしるハマゴ。

その様子をアンノーンが一瞥して、しかし何をするでもなく去っていく。

今更ながら、その重さというものを認識してしまったのだろうか。普段は絶対に見せない弱々しい姿だ。他人にこんな姿を見せず、気丈に振る舞い、その中で少しずつ溜め込んでいき……最後は倒れてしまふいそうな。

完璧な隠形で微塵も気配が察知できていないからだろう。ダークトリニティが監視しているだろうという考えも抜け落ちているようだ。もちろん、彼らも悩む若者に手を差し伸ばすような感情はない。だから、今ハマゴは誰からも離れた場所だからこそ、ようやく覆い尽くしていた見栄を剥がしたのだろうか。

あれだこれだ、だからこうだ、そんなとりとめもなく浮かび上がってくる頭の中の考えを振り払うように、ハマゴの足は遺跡の奥へと向かつていった。

そして、何故か、彼のあとを追うようにアンノーンの群れが音もなく暗闇の天井を通り抜けていく。

右上、左下、右上、左上、左下、壁面の言葉を読んでいないにも関わらず、フラフラと彼の足はズイの遺跡の最奥を目指して進まされていく。

最後の階段を下り終えた先には、数人が入ればもう一杯になりそうなほど、小さな小さな部屋。整備された階段も途中で途切れ、岩の坂を無理やり降りていった彼は、目の前に見えた行き止まりの壁を見て、ようやく自分の意識を取り戻す。

しばらくはここで頭を休ませよう。壁にもたれかかり、右腕で顔を覆った彼は上を見上げながら、ずるずると背中を擦って地面に座り込んだ。

ひんやりと冷え切った岸壁の冷たさが、徐々に白衣を通してシャツをつたい、背中に押し付けられてくる。知らず上がっていた息は深呼吸とともに吸い込まれた冷たい空気と共に、ゆっくりとした息遣いに戻っていった。

まどろむ意識が落ちきる前に、ポケッチのアンテナが一本だけ立っているのを見たハマゴは、夜まで戻らない旨を書いたメールをマーズに送る。

今日はここで、何もかも忘れて眠ってしまったても良いかもしれない。落ち着いた意識がダークトリニティに守られている事を思い出させて、彼の思考はそんなふうに着いていく。

「……アンノーン文字の文章」

ちよつとした縁から、アンノーン文字を使った文章の解読方法を知っているハマゴは、まどろみつつある意識の中で、遺跡最奥部の壁に書かれた短い文面を視界に収めた。

無意識が知識を活用して、彼の唇から解読されたその分を読み上げる声が溢れる。

「すべての、いのちは、べつの、いのちとであい、なにかをうみだす」
それは子だろうか。知識だろうか。差異だろうか。

自分、だろうか。

考えを最後に、彼の意識はぷつりと切れた。

彼の姿は、遺跡から消えた。

君とともに

張り付いた汗の気持ち悪さよりも、疲労による動悸なんかよりも、圧倒的な焦燥感が胸を突いて痛みを訴えかけてくる。底冷えした鳥肌が背筋からせり上がるような恐怖。ごまかすように、声帯から出てきたのは幼く声変わりもしていない子供らしい叫び声。

「ロコン!!! どこだよー 返事してくれよ!!!」

洞窟の中に反響する幼い声。

溜まった疲れを吐き出すように、膝に両手をつけてその子は立ち止まった。

懐かしい。そして、何故だろうか。

あの感覚が蘇ってくる。

記憶の中に埋もれていった、今そのときにしか味わえない感覚。匂いが、湿気が、痛みが、土を踏む感触が。

だけどそれらは自分のものでありながら、自分が今感じているものではない。

目の前に見せられているから、思い出したのだ。

忘れるはずもない大切な記憶の中に、仕舞い込んでいた感情を。

『……俺?』

つぶやきは響いていかなかった。

自分の中に消えて行って、踏んだはずの岩の尖りは靴を通して伝わってこない。

当然、目の前の子には彼の声は届かない。彼の姿も見えていない。当たり前だ。なんたってこれは、紛れもなく彼の記憶なのだから。けれども、おかしいことが在る。これが記憶というのなら、こうして第三者の視点から見れるはずがないのだ。人間は、前についた2つの眼球からでしか、光の情報を読み解けない。幼い自分の後頭部を見ることが、たとえ昨日の真新しい記憶を引っ張り出していたとしてもできないはずのことなのだ。

『アンノーン……そういうことか』

「ロコン！ クソツ、マグマ団め!!!」

駆け出した少年。反対に、壁により掛かるように座り込む青年。

そして座っているはずの青年はスルスルと滑り出した。再び駆け出した少年こそが世界の中心で、彼はそれを固定されたカメラ越しに見ているかのように。

だが、おかしなことに、カメラを通して見るわけではない。まるで過去の世界に来てしまったかのように、彼は記憶のその中に存在しているのだ。

『ロコンがいなくなったんだ。俺が目を離しているすきに。その時、マグマ団って奴らが噂になり始めてた。フエンでも街頭演説をしていた、過激な自然保護団体。反対意見を言う奴らには、特別乱暴そうなやつが殴りかかって黙らせてた。組織としてまとまりきって無かった頃のことだ』

——こーん

「ロコン！ そっちか!!」

『一日たっても見つからなかった俺はマグマ団を疑った。だからこうして、俺は探しに来た。マグマ団を追いかけて、木の上を移動して、野生の鳥ポケモンに協力してもらって、気づかれないように。奴らのアジトの一つを突き止めた。…貧相な道具を持ってヒーローにでもなった気分だ』

視点が切り替わる。

洞窟のような場所から、人工的な壁やテーブルなんかが見受けられる部屋。

何よりも目を引いたのは数多のポケモンが雑多に入れられた幾つもの檻だ。

小さいポケモンは鉄網の小さい箱に押し込められて、大きめのポケモンは丈夫な鉄格子に押し込められ、グラエナなんかは口を開けないよう拘束具をつけられている。

その中に一匹、箱のような機械から伸びる拘束アームに捕らえられているポケモン……少年のロコンがいる。

顔色を変えて、少年はその眉間にシワを寄せた。溢れ出る憤怒を握り込む拳の中に押さえ込んだ少年は、ポーチからスカーフとゴーグル

を引つ張り出して、自分の顔に装着した。

そして机の影から機会を伺つて、研究者らしい大人と、文句を言っている女の会話を、気づかれないよう呼吸を抑えながらに聞き続けた。

「……それで、できたんでしょうね」

「まだだ。大体貴様らが捕まえてくるポケモンは統一性がなさすぎる。データを取ろうにも一つのパターンしか記録できないのだ。対照実験もなにもあつたもんじゃない!」

「アタシ達に文句言ってるの? あんたごときが凶に乗るんじゃないわよ!!」

「平団員程度が舐めた口をきいたものだな! いいか! 貴様は指示通りに私たちに必要な実験体を連れてくればいいのだ! それを自分の興味本位で適当なポケモンを連れてきたところで、研究が進むはずがないだろう!」

「団長には内緒だからってビビってるの!」

「時間をかけるだけヤツの耳に届く可能性があるんだ! わからんのか!」

「この……ッ!」

至極まつとうな正論に激昂した女が腕を振り上げた途端、視線は女一人に集まつた。

少年は今だと思つたのだろう。ポーチに入れていた透明感のある玉を投げつける。

もうもうと立ち込める煙がこの小さな部屋の中に充満していく。

「なんだ!」

「けむり玉だ! こんなところで誰が投げたんだ!! 機器に余計な染みがついたらどうする!」

「のんきなこと言ってる場合か! 侵入者だろう!」

部屋にいたのは、研究者と女を含めて4人。

最初は侵入者を伝える内線電話を取ろうとしていたが、煙が顔の方にまで立ち上ってきた瞬間、彼らは全員が目を剥いて苦しみ始めた。記憶の中のハマゴは思い出す。この時に使ったけむり玉の正体を。

『フィラの実をけむり玉に混ぜ込んだ、いたずら爆弾だったか。漢方屋に忍び込んだ時に、もらったきのみを使ったんだったな。そして人に使うのは初めてだっつうのに、俺も随分とヒデエ選択をしたもんだ』

フィラの実は確かに人の粘膜には恐ろしい影響を与えるが、記憶の中の少年はポケモンたちはこの程度では怯むくらいだろうということを知っていた。そして、助けるべき相手を最初から決めていたこともあって、ロコンの救出は難なく終わる。

『だけど——こっからだったな』

少年の腕の中には、ぐったりとして呼吸以外は動こうともしない、ロコンの弱りきった姿があった。真っ先に浮かぶのはジョーイさんのいるポケモンセンター。あとは帰り道を全力で駆け抜けて、このアジトを抜けるだけ。

ある程度聡明な少年は、しかし少年らしい発想を抜けることはできなかった。

また、場面が切り替わる。

景色はロコンを探して叫んでいた時の洞窟だ。

少年は前後をポチエナとズバット、そしてトレーナーであるマグマ団員の2人に挟まれている。

青年ハマゴは、そうだな、と頷いて過去の映像をつとめて冷静に見ていた。

彼が壁に背中を預けた瞬間、指示を受けたポチエナが少年めがけて噛み付こうと口を開けて飛びかかった。

「っこのお!!!」

近くにあった石を手にとって、ポチエナの口に突っ込ませる。

勢いまでは押し殺せず、ロコンを抱えたまま少年は転がるが、開いたまま石が引つかかって顎が閉じられなくなったことで同様するポチエナの姿があった。

「ガキが!」

「ぐあっ!?!」

だが、これは人を襲うだけあって純粋なポケモンバトルなんかでは

ない。自分のポケモンが無様な姿にされて怒りを見せたマグマ団員が、走り出した勢いのまま少年の背中を蹴り上げたのだ。

大人の力と堅い靴が組み合わさった蹴撃が、少年をかつて無い痛みの中に入れて込む。

「ちようおんぱー！」

「ぐ、あああああああああああああ!!!」

次いで放たれるズバットの超音波攻撃。だが狙いはロコンではなく、これまた少年自身。超音波は普段人間の耳には聞き取れないものでしか無いが、ポケモンのそれは使いようによっては相手に多大な不快感と頭の割れそうな痛みを与えるのに適した攻撃となる。

人間、いや生物に使うにはあまりにも非道な技。だからこそそれらを「バトル」という形に落とし込み、白熱する競い合いに発展させたのがポケモンバトルというルール。

それらを見せしめ、バトルの名を借りた原始的な暴力は、少年という力のない存在の命を確実に蝕んで行くこうとしていた。

その場にうずくまった少年に、再び襲ってくるマグマ団員の鋭いやクザキック。靴の裏が少年の頬にぶち当たり、彼の口の中には血の味が広がっていった。乳歯が2本ほど折れ、口の中が切れたのだろう。溢れ出した血流が口の端から垂れている。

まっとうな感性の持ち主なら、ここで切り上げたかもしれない。だが相手は過激派という名を借りた、相手をいたぶることに快感を覚え、自分よりも弱いものを手ずから痛めつけることを至上とする。更にはソレを実行してしまうような救いようのない連中だった。

ついに少年の腕を離れたロコンには見向きもせず、大人たちは地面に這いつくばる少年を足でこちらに向けさせ、その腹に遠慮のない蹴りを叩き込んだ。

胃の底から湧き上がってくる胃液が、ゲロになって少年の口から溢れ出てくる。

血混じりの胃液は口の中の傷口を酸で痛めつけ、もはや形容し難い痛みが彼の全身に襲いかかっていた。

「つはははははははー、こりやいこぜー」

「おいどけ、俺にもやらせろ！ さっきの煙がまだ目にきてやがんだ……よっ!!」

少年の脇腹に、下衆な男のかかと落としがめり込んだ。

目が飛び出そうなほどに見開いた少年は、再び嘔吐と共に血混じりのゲロを吐き出し、洞窟の地面を汚していく。ズレた洋服からは痛々しい傷跡が見えている。

『……ここで思ったんだ。暴力には暴力で応えてやればいい。ああ、そうだ。気に食わねえやつは見下して、殴り倒して更生させる。しなかったらそういうやつも居るってことだ。そう思うようになった。……こいつらの顔、改めて覚えたぜ』

あくまで冷静に、この光景を眺める青年ハマゴ。

よろよろと立ち上がろうとする少年の手ごと、立派な黒い靴が踏み潰す。

「があああああああああああー!」

瞬間、獣の唸り声が洞窟に響いた。

気づけばロコンが立ち上がっている。だが、もはや死に体だ。

あの実験で何が行われていたのか、今となってはハマゴは知る由もない。だが、ほんの1日見ないだけで立ち上がる気力すら奪われるほどの過酷な状態にされたというのは分かる。

……それでも、ロコンは立ち上がったのだ。

「ぐるぐる……」

「ん？ おやおや、お目覚めだぜ」

「やれ、ズバット!」

決死の努力を無駄にするかのように、「遊び」に興じていた主人を眺めていたズバットが、その命令により無情な攻撃を仕掛けようとする。

だが、ロコンは黒い瞳の中にドロドロとした憎しみを混ぜ込んだまま、獐猛な衝動に任せていた。痛めつけられ、ボロ雑巾となったそれは、たしかに主人の青い髪をしていたのだ。確かにあの、エネルギーを感じさせる声をしていたのだ。

目覚めたこの時まで、守られていた借りを返さなければならぬの

だ。

それが彼女の……ハマゴの祖母からの約束だったから。

「るるるるああああああ!!」

飛びかかってきた無防備なズバットの翼に噛みつき、勢いを殺さずに振り回して投げつけた。その先は当然、主人を痛めつけていた男たちの方。

限界を超えた膂力が生み出した力と、飛んできた速度がそのまま加わって、まるでカイリキーが砲丸を投げたときのような凄まじい速度でズバットがきりもみして男に当たる。

全くもって狙い通りの顔面にズバットが叩きつけられ、突っ立っていた男は顔面に加わった衝撃を殺せない。当然、そのまま後頭部から地面に倒れ込み、ピクリとも動かなくなった。

「こ、このド畜生……ときがよお!!」

ポチエナは未だに戦闘不能だ。所詮少数派の、しかも下っ端でしかない男にはポチエナ一匹しか手持ちが渡されていなかった。故に、この男はポケモン——しかも憎しみと怒りに燃えたぎる復讐の鬼となっている相手——に殴り掛かるといふ、あまりにも愚かしい選択を取ってしまった。

その返礼がこうだった。

ロコンの憎しみとともに燃えたぎった「ひのこ」が男の全身に着弾。もはや火の粉を超えた火炎とも似つかぬそれが男を圧倒的な熱の地獄に叩き込んだ。

少年や、これまで痛めつけてきた相手の痛みなど知らず、のうのうと生きてきた男はこの瞬間、傷つけてきた誰よりも深い傷を全身に負うことになる。死にはしなかったが、全身を大火傷にさせられた男がこれ以上立ち上がることは無かった。

『ロコンは、もともとそんなに懐いてたわけじゃなかった』

ロコンが傷だらけの少年——過去のハマゴの元に擦り寄った。

ただただ、主人を案じるその瞳には、憎しみに代わり、慈しみの色が浮かんでいる。

「ロコン……う、じで……よが……」

このままだと、少年ハマゴの命も危ないだろう。

だが、非力な自分では主人を引きずって行くことしか出来ない。そして今ソレをするというのは、消耗させて命の危険を増やすだけだ。出来ることが、そばにいる以外何も無い。

『だけど、この瞬間にこいつは俺を認めた。そして俺も、こいつが守ってくれて心残りは無いなんて馬鹿なことを考えてたな』

ズバツトを叩きつけられた男が、壁からずるりと倒れ込んで地面に伏す。

その瞬間、大きな一つの石が転がってきた。

『だけど案外——この世界にや奇跡も報いもあるらしい』

燃えたぎる炎を閉じ込めたような石。

火山の洞窟だ。埋まっていけないほうがおかしい。

一部のポケモンに反応し、奇跡を生み出すその石を、

人間たちは「炎の石」と呼んでいる。

『……そして俺は、傷に対して深く学んだ。命つてもんがどんだけ安いかを知った。その上で、その道を行こうとした。何よりも命を預けあつたこいつと一緒に』

ハマゴは、記憶もなにもない、真っ暗な空間に一人で立っていた。

自分の口から溢れる言葉は、もはや半分以上が彼の意思に反して出てきていることに気がついていて、逆らうつもりも何もない。

嗚呼、そうだった。

自分の始まりは、こうして行われたんだな、と。

片時も忘れるはずがなかったのに、毎晩思い出していたはずなのに。

それでも色褪せてしまっていた。

あの時の誓いを今一度見たことで、蘇ってきた炎が揺らめいた。

『俺は、ポケモンドクターになる。誰かを、何かを傷つけちゃったとしても、その先で何もかもを“治す”事ができるドクターに。一人じや

ねえ、当然、俺はあいつと一緒だ」

暗闇の中に生み出されたのは、彼を囲う6つの炎。

『目に見えた範囲を治療する、無心で癒やしを提供する……その程度じゃあ、満足できねえよなあ』

炎がやがて分かたれて、9つの青い炎となつて旋回していた。ハマゴを追い詰めるようにゆっくりと、近づいてきたそれを、彼は両手を開いて受け止める。

「なあよお」

ズイの遺跡の最奥で、似つかわしくない真っ白な毛並みと真っ白な衣が揺れていた。

「そうだったな。迷ってる暇なんざ、なーんもねえよなあ」

ぽん、ぽん。

彼が抱く首元の毛並みを叩けば、心地の良さそうな唸り声。

「キュウゴン。俺はやるぜ。シンオウだろうがハウエンだろうがやることは一つだ。途中で何かがあったとしても、そこだけは変えちやいけねえよな」

頬を伝う一筋の光。

毛並みに溶けていったそれは、涙と言われるものだった。

「くだらねえこと言っちゃまったな。さ、帰ろうぜ」

分岐点の手前で

落ち着きを取り戻してきた、ズイタウンの総合病院。包帯の面積も減ってきたポケモンたちも寝静まった個室の前を、足音がみつつ、通り過ぎていく。片目を開いたボスゴドラは一度鼻を鳴らすと、何事もなかったかのように再び眠りについた。

白衣が風を受けてなびく。先頭を行くのは青髪のドクターらしき青年。その両脇には短くラフな格好の赤髪の女性と、全身を黒一色の衣装にした金髪の女性。ずかずかと勝手知ったる我が家のように練り歩く姿からは想像もできないが、彼らはズイタウンの人間ではない。

「にしても焦ったわよ。ポケッチからいきなり信号が途切れたと思ったら、今度はなーんにも無かった！ って感じに戻ってくるんだもの」

「アンノーンの神隠しだったつってるだろうが。何回掘り返すつもりだ、テメエはよお」

「あたっ、ぶつこと無いじゃないの！」

しつこい追求を打ち切るように手の甲を額にぶつけるハマゴ。痛みがりながらいつか絶対ぶちのめしてやると復讐の炎を燃やすマーズ。両者の何気ないやり取りは、ここ数日の彼らの様子を知っているシロナからしてみれば、なんというか、吹っ切れたようにも感じられた。

彼女からくすりと零れた笑みにハマゴは視線を向かわせたが、なにもないわよと、大人らしい余裕の表情で流される。鼻から短く息が吐き出される。そんなこんなで、彼らは総合病院の別棟に向かって足を向けていた。

目指す先はそう、プルートの入院している病室だ。

まだ話すことが在る、と言い残して再び眠りについた老人もしつかりと眠ったことで元来の丈夫な体の調子が戻ってきたのだろう。体調は少なくとも、ギンガ団が壊滅した直後程度には回復しているとのことだ。

「Dの309。ここにプルートって爺さんがいるのか」

「ええ。それじゃ入りませうか」

ノックをすれば、構わんぞという力強い声が聞こえてきた。

「お邪魔するわ、プルートさん」

病室にいたプルートは、今は栄養補給の点滴を受けては居ないらしい。それどころか、見えたのは元氣だというのがまるわかりな光景だ。誰かから送られたかは知らないが、剥かれた梨を爪楊枝で指して口に含んでいた所。

もごもごと口を動かし、しゃく、と爽快な音を立てて咀嚼する老人に、以前の弱々しさは見当たらない。もつとも、これこそポケモンという超常的な存在と一緒に暮らす、人間たちの標準的な回復力なのだろうか。

「ん？ なんじゃそやつは」

「なりゆきで協力してんだがよ。現ジラーチの保護者でポケモンドクターのハマゴだ。よろしく」

「ほう、おぬしが……ワシはプルート。しがなジジイじゃ。しかし……ふむ」

品定めするようにつめる老人、プルートの目が細められる。

やがて眩しいものを見るように笑みを浮かべ、彼は口を開いた。

「なるほど、なるほど……ワシらに歯向かったあの子供……あやつを思い出す真っ直ぐな目をしておるわい。だが、あやつよりは鋭い。なるほどのう」

「あら、プルートさんもそう思う？」

「納得してるとこ悪いが、俺らもアンタから話を聞きたくて来たんだ。以前こいつらに伝えようとしたコト、その続きを教えちゃくれねえか」

話を切って、これ以上逸れるのも時間の無駄だと判断したハマゴが間に入る。マーズも同意するように頷き、プルートからの情報について興味を示す姿勢を見せている。

同行者は随分とせっかちなようだ、シロナに皮肉を言ったプルートは、やがて老獪な笑顔をひっこめて、硬い表情を作り始めた。

「ワシが回復するまで、というのがあるが、入院の片手間に作ったこ

の盗聴防止のマシンの完成も兼ねておつたのじゃ。さて」

スライド式の電源をカチツ、と入れる。

低く唸るモーターの音が静かな病室に響くと、プルートの近くに添えられていた花瓶の近くから小さな煙が上がった。

「やはりの」

「盗聴器?! 一体いつの間にかこんなもん仕掛けてたのよ」

「さてな、あの新リーダーは本当に、いつの間にか厄介な手を使う。間近で見えてきたが故に対処は容易かったが、明日には新しいものが設置されるじやろうな。……まあ、そんなことはどうでもいい」

ハマゴらに向き合い、プルートは視線を上げる。

「まず伝えておきたいことは、奴らの本拠地についてじやよ。使い捨てのアジトで研究させられておつたとはいえ、このワシが通信先を逆探知できん道理もあるまい。…その、ハマゴといったか。ポケッチを貸してもらえんか」

「おう」

差し出した左手のポケッチから空間投影された画面。それらをタッチした老人は、手元のメモリーからハマゴのポケッチにデータを流していった。

やがてダウンロードされたデータはタウンマップアプリの追加データとして適用される。立体型になったマップデータ。その中心にあるテンガン山の一部に赤い光点が発生。そこをズームするように画面がスライドし、光点を中心としてマップがゆっくりと回転しはじめる。

「やりのはしら。そこに近い岩場をくり抜き、地下へと下つていった先が、奴らの本拠地じゃ」

「テンガン山ですって? テンガン山の磁場は生半可な通信機器を狂わせるうえ、不可思議な力によって直接上空からの移動は不可能な場所よ。ギンガ団ですらあそこを占拠したとき、赤い鎖以外は持つていかなかったのに」

「さて、な。理由は知らんが、あやつらはそこに拠点を置き、ワシに専用の機材の設計図を書かせた。今頃はマグマの隣でパーティーでも

開いておる頃か？ まあ、1つめはこんなもんかのう」

ひげをなぞりながら、クツクツとプルートの笑う。表情に生気が戻ってきた彼は、いかにも悪どくそう言つてのけた。だが彼とて分かつているのだろうか。今行つたところで抜け殻でしか無いだろう、と。

それはシロナであつても同じ。厳しい顔のまま、プルートへと頭を下げた。

「……貴重な情報、感謝しますプルートさん。ハマゴくん、後で私のポケッチにもコピーしてもらおうわ」

敵拠点の一つが判明したが、果たしてあのマグマ団の新首領がどれだけ予測してくるのか。既に拠点も移され、テンガン山ですべきことを果たしている可能性もあるが、ともかく今は手に入れた情報に頼るしか無い。

たとえ新首領が抜け目のない完璧超人だとしても、相手は組織だ。末端までが優秀ではない。ならば、その「ほつれ」から僅かな糸をたどるだけ。以前の英雄がしていたように、そうして巨悪を討つのだ。

プルートはそれから幾つかの情報をシロナに与え、再び咳き込みベッドに伏せた。回復してきているとはいえ、相手は本当にくたびれてしまった老人だ。ナースコールをかけ、シロナはポケモン協会に連絡を入れるとプルートに何人かの護衛をつけた。尤も、ほんの一瞬対峙しただけで分かつた新生マグマ団首領の性格からすれば、プルートを再び襲うこともなさそうだが。

それからというもの。プルートの病室を後にしたハマゴたちは、ズイタウンをまっすぐ一本に分ける大きな街道沿いにある駐車場へ向かつていた。そこには、シロナが乗っているジープが駐車されているからだ。

道すがら、シロナは表情を固くしながら、ポツリとつぶやいた。

「私はダークトリニティと一緒に、テンガン山のほうを当たってみるわ」

「そうか」

シロナの決心したような声に、彼はぞんざいに返す。

キョトンと目を見開いたシロナは、すぐに笑みを浮かべて言う。

「あら、止めないのね？」

「さてな、オレもオレで本懐を思い出したただけだ。ヨスガシティに向かってからは別行動ってことで」

「ちよ、ちよちよつとハマゴ!?」

「んだよマーズ、耳元で声あげんなイテエだろ」

ハマゴに掴みかかるマーズは事情を飲み込めていないのか、声を荒げて詰め寄った。

その衝撃でハマゴの商売道具であるバックパックの一番上に乗っていたジラーチが顔面から地面にダイブする。それでもまだ寝ていたが。

「アンタ、あたしの行動理念わかってて言ってるのよね!？」

「ああ」

「ジュピターはどうすんの!」

「行ったところで、本当にいると思うか？」

「だって、〃やりのはしら〃はアカギが消えたところで、だったらジュピターも、残ってるかもしれない」

「はあく………ったく、又聞きの俺ですら分かってんのにまだ言うか。またヒートアップしてんのか知らねえが判断能力落ちてんぜ」

ガシガシと側頭部をかき上げたハマゴが、ずれたメガネの位置を直して言う。

彼を補足するように、シロナが一步踏み出て口を開いた。

「プルートさんから聞いたでしょう、ジュピターは、洗脳されてるって」

「あ………そっか、だったら洗脳してるやつに連れてかれてる、か」

「戦ってみたところ、ジュピターはトレーナーとしての能力は高いほうだ。それを洗脳って手段にしる、言い聞かせられる便利な駒に出来るのなら、新生とかいいつつ残党に変わりねえマグマ団共にとっちや、貴重な戦力でもある。そう安々と手放すワケのねえだろうよ」

「彼の言う通り。私達はあくまで抜け殻を調べに行くつもりよ。ジュピターさんの手がかりなら同じところで探すより、むしろ、何かとあ

こちらの接触がありそうなジラーチがいるハマゴくと一緒に居たほうが多いと思うけど」

「俺についてきたときのまんまの理由だろ。自分で忘れてりや世話ねえぜ」

シロナもどこか楽しんでいるのだろうか。微笑みを携えてマーズを諭す。その横ではニタリと意地の悪い笑みを浮かべたハマゴが、わざとらしく肩をすくめて首を振っていた。

彼らを交互に見たマーズが、顔を真赤にさせながら叫ぶ。

「あー、えっと。もう、わかったわよ!! この話はこれで終わり!」
ムキになって言う彼女の姿は、年相応の女性といった可愛らしさがある。

「つぶぶ」

「こんのー!」

「おっとジラーチガード」

耐えきれずに吹き出したハマゴに、理不尽を嘆く平手打ちが襲うも、人の情すら忘れたか、ハマゴがとつた手段はジラーチを盾に取ることであった。はがねタイプが入っていることもあって、ジラーチは攻撃に対しては中々の防御力を誇る。

まるで「めざましビンタ」のようにマーズの張り手を受けさせられたジラーチは、芽を丸くしながらバタバタともがいた。もちろん、ぞんざいに羽衣を引っ掴んだハマゴにぶら下げられながら。

怪我が決して出ないと分かっているからだろうか。あの遺跡から返ってきてから、どこかまた吹っ切れたように見えるハマゴは、良くも悪くも落ち着いた雰囲気少し和らいでいる。まるで悪ガキのような部分が、少し大きくなっているようだった。

「あの、ハマゴくん? 流石にポケモンを盾にするのは褒められた行為じゃないわ。シンオウチャンピオンの前でそんなことをするなんて度胸があるのね」

「さあてな、今更その肩書が効く相手でもねえって知ってるだろ?」

「それもそうね。それじゃ、行きましようか」

「え、そこスルーすんの!? って待って待ってふたりとも足速い!」

愉しみを覚えたのだろうか。合流してからこのかた、すっかり意気投合したらしいシロナとハマゴ。その感情表現が共通して、マーズいじりというのだから、マーズの受難は計り知れない。

さて、そんなふぎけたやり取りをしながらもたどり着いたのは、シロナが個人的に所有するジープであつた。シロナの服装からは想像もつかないほどの無骨さだが、彼女の考古学者という兼業を知っているなら納得の安定した走破能力を持つ車は、それなりに広い。

「後ろに乗って」

「あいよ」

「シートベルトはしっかりね。ズイからだと舗装されてないところも通るから」

「ジラーチも、ちよつと窮屈だけど我慢しなさいよね」

シロナの忠告通り、後部座席でハマゴとマーズが並んで座り、マーズの膝の上にジラーチが座つた。シロナがエンジンキーを回すと、豪快な音を立ててエンジンが振動する。ハンドルを握つたシロナがアクセルを踏み込むと同時に、荒々しくも清涼な風が彼らに吹きかかる。

シロナのジープはオープンカータイプ。後ろに積まれた屋根を展開してないため、自然そのままの風が搭乗者に吹くのだ。

「ここからヨスガとなると、ジープでも半日かかるわ。途中、知り合いの宿屋に寄るからそのつもりでね」

「あいよ、また騒動起きなきやいいがな」

「あんたねえ。そういう事言うからまた面倒おこんのよ」

「仲がいいわね二人共。キスのひとつでもしたの？」

「ベトベトンのがマシだ」

「どういう意味だゴルア！」

「ばっか揺らすな！ ただでさえ路面悪いんだぞボケ！」

シロナのからかい一つで起きる後部座席の仁義なき戦い。そして振動の主な犠牲者となって顔の青いジラーチ。シロナは後ろの騒動を、微笑みを携えながら眺めていた。思いつめていた表情、後悔した表情、決心した表情。それもマーズの絵になる表情だったが、いまの感情をむき出しにした素直な姿は、かつて宣言した「ふつうの女の子」

にほど近い。

(ホントやるわねー、ハマゴくん。ドクターってよりカウンセラーも兼ねたらいいんじゃないかしら)

まだまだ呪縛にとらわれていたであろうマーズを、あそこまで心開かせる。かつてのシンオウを旅した英雄ですら、成し遂げるには難しいであろうそれを、ハマゴは自然に行った。

実のところ、シロナはあまりマーズに動いてほしくはない。なぜなら、もう彼女は人生を左右されるに足る理由はないのだ。たとえ巨悪の一端だったとして、今はもうその絡みつく悪意の蔭を外してしまっても、誰も文句をいうやつは居ない。

シロナの祖父と同じく、マーズには一般人として生きてほしかった。できるなら、こんな騒動に二度と巻き込またくない。

(まあでも、そんな一般人の彼女の要望を叶えようって。想いを汲んじやったのはポケモンチャンピオンとしては失格かしらね)

自虐を心の中にしまい込み、シロナは再び微笑んだ。

様々な思いを乗せたジープは、そのままどつぷりと太陽が浸かった地平線の彼方へと溶けていく。やがて街頭が灯り、大地の反対側から浴びせられる光を反射し、月が地表を照らす頃。

彼らは中継地点である宿へと到着し、その足で再び大地を踏みしめるのであった。

休息？

のどかな放牧地が遠ざかり、ジープのエンジンは停止した。

すでに陽は暮れている。きらめく夜空が登っているというのに、流れ星のようなポケモンのジラーチはすでに睡眠モードへと移行済みであった。呆れた視線を送るもムニャムニャと呑気な寝言を漏らすジラーチには効果は今ひとつ。むんずと羽衣を掴んだハマゴは、当然のようにマーズへと投げ渡した。

「あいっかわらず扱い酷いわよねえ。保護してる対象なんでしょ？」

「大丈夫だとわかりやこんなもんだろ。んなことよりこっちは大荷物だ。一つくらい持て」

彼の背負うカバンは相変わらず巨大であった。ジープの荷台に入っていたそれが顔を覗かせれば月夜の影が面積を増やす。事もなげに背負ったハマゴをみやり、やはり肉体派で男らしいものなんだなあと言う思考を一瞬浮かべてしまった彼女は、その想像を追いやるように首を振った。

「マーズさん！ ハマゴくん！ 話がついたわ、こっちに来て！」

「あいよー……なにしてんだ？」

「な、なんでもないわよっ」

一足先に宿屋へと話を通していたシロナからの呼びかけだ。ハマゴの怪訝な問いを誤魔化すように超えを上ずらせたマーズは、両手でジラーチを抱えてひときわ明るい宿屋の入り口へと歩を進めた。

するとだ、土地柄もあつて、すつかり冷え切った空気から一変、宿屋の中は暖気で満ち溢れている。ほっと息をついたハマゴたちの前に、深々と頭を下げる女将さんが現れた。

「ようこそいらっしやいました。ここの女将をさせていただいております、ヤエと申します。シロナちゃんのお知り合いだそうで。どうぞ、ゆっくりしてってください」

ニコリと営業スマイルを崩さない、老齢の女性だった。顔にはシワが目立つが、そこから老いを感じさせぬ儂さと快活さを兼ね備えた不思議な雰囲気でもある。

「早速お部屋へどうぞ。部屋はどこでも空いてるけど、いいところに案内するわ」

そんな彼女は、丁寧な自己紹介から一転、口調を軽く切り替えた。親戚の大人、という表現がしつくり来るだろうか。田舎経営の店員にありがちな、親しみやすいスタイルである。

「シロナちゃん、ね」

「古い知り合いよ。それこそ、私がこーんな小さい頃からのね」

ハマゴのつぶやきを拾ったシロナは、自分の胸元あたりで、手のひらを水平に行き来させる。その会話を聞いていたのか、先導する女将のヤエが補足するように説明を始めた。

「ここは歴史ある石の塔が建っていた場所ということもあって、学者さんたちがよく寝泊まりしているの。シロナちゃんはご両親の隊についてきて、よく知ってるってわけ」

「へえー、あのチャンピオンの小さい頃かあ。ぜんっぜん想像つかないんだけど」

「あんまり変わらないわよ。もっとお転婆だったくらいかしら」

「そ、そう?」

「それから大人びて取り繕うところも」

クスクスと笑うヤエに、どこか居心地が悪そうに視線をそらすシロナ。ありとあらゆる場所に優れたチャンピオンにも、勝てない人というのは存外に多いようだ。

そうしているうちに、長い廊下を歩いた先でヤエはピタリと足を止める。どうやらここが彼らの部屋になるらしい。

「ささ、こちらでおくつろぎくださいな。ご用事があればそちらの電話でフロントにかけてくれれば繋がりますから」

「ごゆっくり、と締めくくられてピシヤリと戸を閉め居なくなるヤエ。」

静かな和装の部屋は、シロナの実家にも似たつくりの立派な部屋であった。

「ここは露天風呂もあるから、案内板も読んでおいて。それじゃあ私は少し出てるわね」

「ん、まあ遅くならないうちに戻れよチャンピオン。今くらいゆつくりしとかないとだいたい疲れが溜まっちゃまってるぜ」

「あらそう？　そうね、お医者さんの言葉には素直に従っておこうかしら。早く戻るわ」

続いてシロナも退室する。町から町へと移動するだけでも、各所への連絡やチャンピオンとしての責務が彼女の予定を圧迫しているということだろうか。ポケモンリーグともなれば、一体どれだけの業務が襲いかかってくるのか、計り知れない。

シロナがいなくなつて、どこか緊張が緩んだこともあるのだろう。マーズは大きなあくびと共に軽いストレッチをする。

ハマゴは白衣をハンガーに通して備え付けの上着掛けに並べると、中央のテーブルに座つて茶菓子を頬張り始めた。

「うっわ、勝手知つたる我が家のようにくつろいでる」

「知らねえのか？　旅館とか宿屋に老いてあるお茶と菓子は美味えんだ。大体が地元の土産物サンプルだしな」

「それは流石に知ってるけどさ、あんたは遠慮なさすぎだつて言つてんの」

「遠慮せず食つとけ。じゃねえと食い尽くしちゃうぜ」

そう、悪人面で笑うハマゴの態度にも愛想が尽きたか、肩を竦ませマーズは荷解きを始めた。

彼女の荷物から取り出されるのは風呂用具。こういうところは「普通の女の子」らしく、マイシャンプーやボディソープなどを注いだ旅支度用の小さなボトルと、可愛らしいエネコの絵柄のタオルなどが彼女の手の中に収まった。

着替えの下着とそれを隠すように小さな着替え入れの袋にしまい込むと、彼女は部屋の出入り口へと足を向ける。

「先にお風呂してくるわ。ジープで砂埃ついちゃったのがねー」

「おう。こっちはくつろいでるからゆっくりしてきやがれ」

「うっわ、おっさんか」

マーズが形容する通り、ひらひらと手を振つて、備え付きの窓際のソファにどっしりと座り直したハマゴの姿があった。そんな光景を

閉まる扉の向こう側へとシャットアウトしつつ、マーズは廊下を出て近くの案内板に目を通した。顎に手を当てうんとうなずく。どうやら、ここから露天風呂はほど近いところにあるらしい。

はてさて、こうしたしつかりとした旅館に泊まるのは一体いつぶりだろうか。ポケモンセンターの寝泊まりや野宿、そして他人の家を間借りして泊まっていたココ最近を思い出しても、そうした記憶は見当たらない。マーズは年相応の可愛らしい笑みを浮かべると、湧き上がる高揚感を隠すこともせず、るんるん気分以至福のひとつときに思いを馳せるのであった。

もうもうと立ち上る真っ白な湯気。しつとりと肌を濡らし、その出処は体を芯から温める。ほう、とついた息が何度も何度も出てくるのは仕方のないことだろう。ポケモンたちはポケモン用に効用があるらしい湯に浸かったため一緒ではなかったが、人間用のこの露天風呂は、それはもう見事な造りであった。来るときはどこか殺風景に感じた、茶色い岩肌に石塔が散財するこの景色も、黄金の月明かりが降り注ぐ夜天と組み合わせ、この露天風呂から覗いてみれば情緒的に早変わり。ひやりとした北の地の空気と温泉の相乗効果は、彼女の思考を白く染め上げるほどに気持ちの良い開放感があった。

心も体もほっこりと、もくもくと。ごまかしきれない旅の疲れが溜まりに溜まっていた体をいたわりながら、マーズはこのひとときを十分に堪能していた。

「でも、そうよねえ」

心と体が休まり、余裕ができる。すると、思考が回った。

脳裏に浮かべるのは同期のジュピター、その意地悪そうな「いつも自分と比べると濃い目の化粧に高飛車な性格。だけど同じ男に恋い焦がれた身としては、やはり共感と、なによりも同情が大きな相手だ。同じ組織の幹部級として何度も衝突しては、何度も作戦をこなしてきた共犯者。湯船を口まで浸からせて、吐き出した息の泡の数ほど思い

出はあった。

「今頃どこで何してんのかしら、あのバカ。ぶくぶくぶくぶく……」
ついに鼻まで使ってぶくぶくと。溜まった不満がそれだけで解消されるはずもないが、こっ恥ずかしいながらも自分ひとりしか居ないことで出来た小さな達成感がほんのりと熱を持つ。

「あら、もう入ってたのね」
「あら、もう入ってたのね」
「ぶー」

恥ずかしいとき、嫌なときほど人は来るといってお約束だろうか。

悪戯な笑みを携えたシロナが、一糸まとわぬ姿で室内風呂を仕切る扉を開いて来た。

「あら、あらあら？　もしかしてマーズさん遊んでた？」

「そ、そうよ。悪い!？」

「そういうわけじゃないんだけど……私、お邪魔だったかしら」

「もういいわよ、入るなら入りなさいよもう！」

「ふふ、そうね。失礼するわ」

タオルごしだが、たわわに実った母性の塊を揺らす姿は、人並みにあるだろうマーズをしてすら大きいと言わせしめる。シロナも普段は厚手の服に身をまとっているが、着痩せしているともいうのか、いや確かに脂肪の塊ではあるものの。

みっともない胸への対抗心をなんとか飲み込んだマーズは、髪色に負けず真っ赤になった頬を隠すように深く湯船へと体を沈み込ませる。対し、シロナは風呂に訪れたばかり。金砂の髪にシャワーをかけ、風呂椅子の上でワシャワシャと泡を立てている。

「ここのいいでしょー？　私の昔からのお気に入りなの」

「そうね、いろいろと考えるにはいいところだわ。バトルとかどう殴るかとか」

シユシユツと構えをとってみれば、からからとシロナが笑う。

「あら物騒。せっかく戦いとは無縁なところにいるんだから」

「わかってるけど……さあ」

「あと下手なごまかしもね」

「んっ！」

自分が昔から世話になっっている場所だからか、シロナはいつもよりもずっと饒舌なようだ。その証拠に、シャワーの音にまぎれて何らかの鼻歌が聞こえてくる。フレーズを拾ってみれば、少し前に流行った歌手のデビュー曲か。マーズも知っている曲調だ。

おだやかな旋律にしばし耳を傾けていると、中途半端なところでシロナは鼻歌を区切り、洗った髪を水で流しはじめた。彼女もまたジープの上に巻き上げられた砂埃を一身に受けていた身。洗い落とされた汚れがなくなり、金色はさらなる輝きを取り戻している。

「人は色々悩んだりするけど、マーズさんは人一倍ね」

入浴のため、くるくると髪を巻き上げシロナがつぶやいた。怪訝な表情でマーズが応じる。

「なによ藪から棒に」

「考えることが多い立場っていうのは分かるわ。でもね、私たちもいるのよ。あんまり一人で抱えすぎないで、ハマゴくんにもしつかりと話してあげたら…」

「巻き込めないわよ。だってあいつ、ほんとの一般人じゃない」

「……そうよね、そのはず」

「チャンピオン？」

「ハマゴくんも、いっぱいいっぱいのはズなのにね」

言われてみれば、はつとする。

ハマゴは確かに密漁団に対して幾度となく衝突もしているとはいえ、実態は他の地方から流れてきたただのポケモンドクターであり、そしてただジラーチの目覚めと騒動に巻き込まれたに過ぎないのだ。昼の行動方針について言い合ったときも言っていたが、彼の本分……つまり、彼のシンオウ地方での旅路はドクターとしての修行の一貫。ジラーチがきっかけだったとはいえ、本来なら彼はもつとのびのびとその修業を行う機会があってもいいはずだ。

だが、実際のところはシロナやマーズという同行者が増えるたびに、彼の本来あるべき姿は霞み、ほぼ強制的に今の、事件に対する一般協力者としての立ち位置に据えてしまっている。確かにドクター

としての腕は振るわれているのだろう。だが知見を得るのではなく、その場で引き起こされた事態に対応する医者業としての域を出ない。様々なポケモンを見るという意味ではそうでは在るのだが、以前の薬草探しのような事は、本当に事件の隙間にしか行えていなかった。

「そうよね、言ってみようかしら」

「……めんなさい」

いつのまにか隣に来ていたシロナ。チャンピオンとしての姿に似つかわしくない、裸一貫の素顔は申し訳無さそうに歪んでいた。

だがマーズは逆に笑い飛ばして言う。そうじゃないだろうと。

「言うべきはあいつに対してのはずでしょ。いくらシンオウに再び危機が訪れてるからって、あいつを巻き込んでいい理由にはならないし。それは多分、あの生意気な英雄がきんちよにも言えたことだけど」

「……そうよね。いくら強いからって、本当なら責任ある私達だけで終わらせなきゃいけないこと」

英雄、チャンピオンとしては着任しなかったが、殿堂入りを成したあのトレーナー。フタバタウンのトレーナーは、圧倒的なまでに強すぎた。天才的なセンスと屈強なポケモンたち。その名が地方に響き始めた頃には、基本的にバトルは負け無し、悪を振りかざす相手であつてもバトル以外の危害を加えないトレーナーの鑑。そしてどんなにプレッシャーを掛けても、相手がどれだけの本気を出しても、ギンガ団を壊滅させ、伝説のポケモンに邂逅し、その最後にはシロナをも打ち破り、トレーナーとしての頂点、その栄冠を戴いた。

あまりにも早くに事を成し遂げてしまった。されど、その頃はただの一般人としての枠を出ない彼がいたからこそ、いまの甘い認識が生まれたのかもしれない。強いトレーナーだからと。地方の危機には、誰であろうと徴用すべきだと。

「最悪、ヨスガでジラーチ引き取って完全に別れたほうがいいのかもね」

「本来なら、それが一番……そのはずだけど」

「あの頑固者がうなづくかなあ！」

マーズは両手を投げ出し、温泉の縁に背中を預ける。

どんどん増えていく悩みがぐるぐると頭の中を巡ったまま、マーズは露天風呂に声を響かせた。

そう、あの男はたったそれだけの理由でこの旅の路線を変えるわけがないだろう、と。確信のようなものが、マーズの中で生まれていた。

「はあ、何いってんだオマエ？」

翌日、朝食の場におけるハマゴの第一声であった。

部屋に戻ったときには、すでに部屋に備え付けのバスタブで済ませてしまっていたらしく、床について眠っていたため、マーズは風呂場で話し合っていたことを聞けなかったのだ。それに対するハマゴの返答が、この心底バカにしたような返事である。辛辣すぎる。

「やっぱりそういうと思ったわよ」

だが返答は在る意味わかりきっていたようなもの。箸で和食をつまみながら、ぶすつとした表情を隠さずマーズがひとりごちた。

「今更にすぎるだろ、バカじゃねえのか」

「バカ言うなし」

「いや、もう奴らにや顔も割れてるしよ。このままぶちのめしたほうがいいだろ」

ど正論を正面から投げつけられて、マーズはこおり状態になってしまった。

言われてみればそのとおりである。そして明確に敵意を持ち、ジラーチの情報を持っているハマゴを新生マグマ団が狙わないはずもない。保護するにしても、結局彼の望む旅に送り出すのは、現状不可能なのである。

「シロナさんよ、風呂場でなんか変な会議でもしてたのか？」

「流石に鋭いわねハマゴくん」

「随分前に結論出たような話を蒸し返されちゃあなあ。にしてもマーズもずいぶんおかしなことを言う、そう思っただけだ」

青い短髪をガシガシと掻きむしって、辟易したように彼は言った。

だが、と続けたのは彼の本心である。

「まあ確かにオレもイライラしてるところはあるぜ。でもなあ、これも含めてすつきりできるいい機会だ。ある意味でのチャンスを、逃すつもりはねえぜ」

「アンタ……その発言あたしよりよっぽど危険人物じゃない?」

「と、とりあえず支障は無いようね……はあ、やっぱりあの英雄さんのせいで常識もずいぶんかき回されちゃったか」

「また英雄か、そいつ、何者だ?」

そう言われてみれば、シロナとマーズは顔を見合わせる。

英雄。その事件について深く知っているのは彼女らのような存在ばかりで、一般的には知られていない。だが成し遂げた実績は確かに英雄と呼ぶに相応しい所業。今はどこにいるかは分からないが、さらなる強さを求めて別の地方に言ったとも言われている件の人物。

「そうね、話しておこうかしら」

シロナはかいつまんで、英雄と呼んでいた伝説のトレーナーのことを話した。

無敗神話をもち、またギンガ団を壊滅せしめた一人のトレーナーの功績を。そしてまたたく間にすべてのジムリーダーを打倒し、最終的にはシロナというチャンピオンも軽々乗り越えていった者の話。冗談のような、しかし冗談ではなくすべて事実。されど今は行方知れずとなったその逸話を耳にしたハマゴはといえば、眉をピクリと動かし一度うなずいたただけであった。

「……ふうん?」

「いまもどこで何をしているかもわからない。でも、私達は確かに、彼のおかげでシンオウを救われたの」

「英雄っていうか、バトルマシーンさながらだな。まあただのバトル野郎じゃチャンピオンなんて倒せるはずもねえ。よっぽどポケモンを大事にしてるんだろうが」

聴衆が一度は間違うであろう認識に惑わされず、彼はそういった。そう、バトルのため強さだけを追い求めたものは確かに強い。だが試験の意味合いを兼ねたジムリーダーは倒せても、本気で倒しにくる断

崖絶壁の四天王はそうはいかない。まして、チャンピオンをその程度の一側面しか持たない人間が倒せるわけがない。ポケモンと共にその志を打ち砕かれたものは、名も知れず多いのだ。

だからシロナは彼の発言に大いに同意をもつてうなずいた。付け足すようにマーズが、彼の前に立ちはだかつた最後の戦いを思い返す。

「そうね、まさに一心同体、硬い絆で結ばれた姿だったわ。私なんてジュピターと二人がかりで挑んだのにコテンパンにされちゃったもの」

「さらなる闘争を求めてどっかいつちまったのかねえ」

「好戦的などころはあるけど、意外とミーハーよ、彼。他の地方の新しいバトル施設を制覇しに行ったのかもね」

「気ままで羨ましいもんだな。なんて言うガラじゃねえか」

他の二人よりいち早く朝食を食べ終え、両手を合わせたハマゴが立ち上がった。

「あら、早いわね」

「ちよいと朝風呂に浸かってくらあ。キュウコンたちは任せませ」

「はいはい。あ、護衛にクロバットつけとくから」

そう言つてマーズから手渡されたモンスターボールを片手に、ハマゴは食事場をあとにした。

「ふう〜、あー」

マーズのクロバットをボールから出し、警戒態勢に移らせて、先日味わえなかった温泉を存分に堪能するハマゴ。堪能する間抜けな声とは裏腹に、やはり彼の目つきは鋭いままであった。

温泉といえば思い返すのは、アスナがジムリーダーを務める、フアウンスからもほど近いフエンタウン。温泉を名物とし、活火山を観光名所とする山間の街は、ポケモンセンターに無料のポケモンとの混浴が楽しめる温泉が設置されている。そして、ほど近い故郷への郷愁が彼の中を渦巻いている。朝日が差し込む露天風呂は、まさにフエンのそれと雰囲気酷似していた。マーズから提案された原点回帰の話

も合わさって、あのアンノーン遺跡での出来事や思い出が彼の頭を埋め尽くす。

湯をすくい上げた手のひらを見て思う。やはり、自分の決めた道に一切の迷いはないのだと。救わねばならない人が、ポケモンが、目の前にある強大な悪意のもと傷つけられようとしているのなら。

「ぶっ殺してでも、救ってやるさ」

どんよりと暗い光が瞳に灯っている。それは幼少期から今まで、備え続けてきた彼の側面。暴力的な見た目に沿った、医者と同時に磨いてきた技術だ。パートナーであるキュウコンもまた、彼と同じ怨嗟の狐火を称えている。それでいて、医療という救いを齎すのだ。

ジラーチには、見せていないこの側面。されど手持ちとなった以上、いつかミミロルは知るだろう。彼のこうした、道を塞ぐ障害を避けるのではなく、粉々に砕いてしまうような暴力性を。

どこかの地方の破壊という言葉を体現した男とは、さぞや感性が合うだろう。彼らが出会う日は、それなりの未来の話では在るのだが。